
魔法少女リリカルなのは～風を纏う最強～

バラランシャ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは風を纏う最強

【Nコード】

N8770L

【作者名】

バラランシャ

【あらすじ】

主人公は目が覚めると、神の使い（死神）と言う男が目の前に立っていた。

話を聞くと、鉄骨が落下して潰されたと言う。

さらにはそれが神様の手違いだと言われ、軽くショックを受けそうになった主人公だったが、その代償として異世界へ転生ができること。

主人公は迷うことなく魔法少女リリカルなのはA・Sの世界への転生を希望した。

はてしなく、いなかやうになつてやう・・・

ブログ・・・的な？

「・・・・・・・・・・はっ！？ お、俺は？」

「あ、やつと起きたっすね」

「・・・・・・・・・・誰だ？」

えっと、俺はどうしたんだっけ？

なんか得体のしれぬ「ひどい言われようだなあ」・・・・・・・・心読むなよ。

「てかホントに誰だよ、あんた」

「僕はね、神の使い（死神）なんだよ」

「・・・・・・・・・・」

「あれ？ どうしたのかな？ 黙り込んでやって」

ダメだこいつ、きつと頭のねじが2、3本抜けてるに違いない。

「ちなみに君は死んでるんだよ」

「・・・・・・・・・・は？」

待て、こいつ何て言った？

「だから、君はもう死んだ」「もういい、分かった」ならいいけど」

・・・・・・・・こいつに言われて思い出した。

俺はついさっき、トラックに轢かれて「あ、君は上から落ちてきた鉄骨に潰されて死んだんだよ」・・・・ああ、そうだそうだ。

なんかまだ記憶が曖昧だな。

「君はね、ゲマズ本店から帰つてるときに工事現場の前で遊戯王の

限定カードが落ちているのを見つけて拾おうとした時に落ちてきた鉄骨に潰されちゃったんだよ」

「なんか空しいなそれ!？」

「うん、ただ・・・実を言つと、本当ならそこで人が死ぬことは無いはずだったんだよ」

「・・・はい？」

・・・こいつ、もしかして言った？

「鉄骨が落ちてきても、本当なら死ぬ人はいないはずだったんですけどね。ちよつとした手違いで、今回あなたが死んじゃったんですよ」

「手違いで死んだのかよ、俺!？」

「ぶつちやけ、そうですね」

おおう、ぶつちやけられたよ。

ちよつと泣きそうだよ、俺。

「予定通りの死なら、天国に連れて行けるんだけどね。手違いの場合、天国には送れないんですよ」

「じゃあ俺どうなるんだよ？」

「んつとね、2つあるけど、聞く？」

「一応な」

すると、神の使い（死神）は人差し指を立てる。

「まず一つ」

「・・・うん」

「地獄に行く」

「一発殴らせろ!」

こいつ、笑顔でなんてこと言うんだよ。

「ま、こっちの案はちよつとした冗談だから気にしないで」

「・・・案としては入ってんのか」

もうその案は無くていいような・・・

「ま、もう一つの案が本題になるのかな」

「で、その案ってなんだ？」

「とりあえず転生しましょう」

「唐突だなおい」

「仕方ないですよ。それで転生についてなんですが、あなたの好きな世界に好きな容姿や能力で転生できます」

「・・・まじか？」

「マジですよ」

・・・何この展開？

「あ、そうそう。そろそろ時間が無いのでチャチャッと決めちゃってください」

「や、ちょっと待て。そんな急に言われても」

名前：巫 玲央

身長：130cm

体重：29kg

性格：生前と変化なし（気分屋ですロリコンこし変わった嗜好だが、人当たりは良く無意識にフラグを立てる）

能力：聖王の財宝（ゲート・オラ・パピリム全ての漫画・アニメや自身が記憶・想像した道具全てを生成することのできる能力）

・・・その他多数

デバイス：転生時点では無し

転生世界：魔法少女リリカルなのはシリーズ

転生日時：A's 第1話の1ヶ月前

「意外に早く決まりましたね」

「・・・だな。けどなんで俺口リk「それじゃあ早速！」って聞けよ！」

神の使い（死神）は指をパチンと鳴らすと、突然後ろからの強い衝撃により吹っ飛ばされる。

「ちよつ!？」

「それじゃあ、新しい人生を楽しんで来てくださいね」

こうして俺は、なのはたちのいる世界へと転生した。

プロローグ・・・的な？（後書き）

作者「どうも、初めまして。作者のバラランシャです」

玲央「ども、主人公の玲央だ」

作者「やゝ、始めましたね・・・俺の駄文」

玲央「自分で駄文と言うか」

作者「や、だってそうじゃね？」

玲央「・・・・・・・・」

作者「とりあえず、暫くは自己満足で書いていきますか」

玲央「・・・・・・・・」

作者「・・・何でさっきから無言なのさ」

玲央「・・・何でも無い」

作者「・・・・・・・・まあいいか。それでは次回をお楽しみに！」

第1話：「経験」不足を「イメージ」で補っている（前書き）

玲央「・・・なんだこのサブタイ？」

作者「とりあえず、適当にその辺の漫画からセリフ引っ張ってきただけ」

玲央「おい、まさか」

作者「ちなみに小説とは関係ないかもしれませんが」

玲央「そんなんでもいいのかよ」

第1話：「経験」不足を「イメージ」で補っている

「くそ、あんにやろう・・・今度会ったらぶっ飛ばしてやる」

現在、俺は海鳴市の町を散策している。

アニメでも多少は知ってるけど、詳しい場所までは分からないからな。

しかしあの神の使い（死神）、用意が良いよな。

俺が飛ばされた時には、すでにこっちでの住居と戸籍が用意されてたんだから、驚いた。

「住居つつつてもマンションだけだな」

すでに数年分の家賃が支払われてると思っただけだな。

あ、あそこにコンビニがあんのか。マンションから近いから便利だな。

んゝ、でもなんだか、この辺見たことが・・・あるわけだな。

「こっつて・・・なのはの家だよな」

なんてこった。ということは、あのマンションには何れフェイトが来るのか・・・

「や、やりづれえ」

どうしたものか、と俺がなのはの家を見ながらそんなことを思っていると

「あの・・・うちに何かようですか？」
「へ？」

不意に後ろから声を掛けられ、振り返る。
そこには、あの懐かしい・・・いや、こつちの世界じゃ初めてになるのか。

可愛いツインテールのなのは嬢の姿があった。

「あ、あの・・・どうかしましたか？」

「や、ごめんごめん。最近、あそこのマンションに引っ越してきた巫玲央、よろしくな」

「あ、そうなんだ。私は高町なのは、こちらこそよろしくね」

くう・・・なんて輝かしい笑顔なんだ！

だけど、ここで怪しまれちゃ元も子もない。

「まだこの辺には馴れてなくて、その辺を散策してたんだよ。それで大きな家だなんて見てただけ」

「そっか。でもそんなに大きいかな？」

「ああ、十分でかいって・・・それより、家に入んなくて良いのか？」

「あ、そうだね」

そう言って、なのはは俺の前を通り過ぎて家に入ろうとする。
が、その前に一度振り返る。

「それじゃあね」

「ああ、また会った時はよろしくな」

そう言うと、なのはは家に入って行った。

それを確認して、俺もまた歩き出す。

暫くして、ちょうどよさげな空き地を見つけた。

「ここで少しスキルの確認するか」

『その方がいいですね』

「のわぁ!？」

突如背後から声がしたため、驚き飛びのいた。

慌てて声のした方を確認すると、見たことのある男が立っていた。

『や、どもども。ご機嫌いかがですか?』

「お前のせいで不機嫌だよ!」

『あらら、それは残念』

神の使いの男はそう言いながら、指をパチンと鳴らす。

「おい、何をした」

『やだなあ、ちよつと結界を張っただけですよ』

「大丈夫かよ」

『それでも私は神の仲間ですよ? この世界の人物に感知できない結界を張るなんて朝飯前です』

・・・もう、ホントに何でもありだな、神様は。

「ま、とりあえず確認するか・・・まずは、ゲイト・オフ・バビリム 聖王の財宝、ゲイト・オフ・バビロン 目録」

俺の1つ目のスキル、聖王の財宝。

元ネタはもちろん Fate ですよ?

ただ、あのギル公の王の財宝は奴自身の宝物庫に保管してある宝具

の原典を空間から自由に取り出して使う能力。

けど、俺の場合、『取り出す』のではなく『作り出す』から、同じ能力名つてのもなあってことで名前を変えてみた。

ちなみにバビリムの意味は「神の門」って言って、バビロンの語源らしい。

「っと、そんな無駄知識は良いか」

俺は聖王の財宝の目録を脳内で見ていく。しかし、ほんと色々あるよな。

普通に質量兵器はもちろん、Fate系の宝具もあるな。

うわ、どこぞの半妖の持つてる刀もあんのかよ。

しかも絶刀・斬刀・千刀・薄刀・賊刀・双刀・悪刀・微刀・王刀・誠刀・毒刀・炎刀って全種あんのかよ。

どっかの奇策士も驚きだな、おい。

まだまだあるなあ・・・まあ、とりあえず把握できたからいいか。

『どうですか』

「ああ、聖王の財宝は問題ないな・・・次はこっちか」

『そっちは名前あるんですか？』

「一応な・・・能力、狂った理想郷、マッシュ・クリムリン目録」

これが俺の第2の能力、狂った理想郷。

聖王の財宝が道具なら、こちらは全ての術系統を引き出すことができる。

ただし、あくまで能力を理解するだけで、魔力などのエネルギーは自分から消費される。

えっと・・・うわ、さすが全アニメや漫画の術があるだけのことはある。

・・・あれ、なんか魔力使わないものまであんのかよ・・・

まあいいか。

俺はその後、自分の能力を確認していく。

思った以上にすごい能力だった。

ホント、チートだよな。

第1話：「経験」不足を「イメージ」で補っている（後書き）

作者「更新完了っ」と

玲央「つかホントチート能力だよなあ。他にもあるっぽいし」

作者「ま、それは追々」

玲央「・・・まあいいか」

第2話：お前が悪いんだからな

オッス、お「『そのネタは古くないですか？』うるせえ！
人の勝手だろうが！

『これからどうするんですか？』

「とりあえず、なのはたちとヴォルケンズが会合の場面まで待たないとな。それまで」「ちよっと、離しなさいよ！」「……………」
『行かなくていいんですか？』

「……………」「いや、行くけどさ」

あの2人とも合うことになるのか……………
……………まあいいか。

俺と神の使いは声のした公園の方へと行ってみる。

まあ、そこには案の定というか、やっぱりというか。

「ああ、やっぱりあの2人か」
『ですねえ』

不良っぽい男共に絡まれているツンデレお嬢様ことアリサと慌てふためいて怯えているお嬢様すずかの姿があった。
とりあえず、2人を助けるか。

「ちよつと、その辺でやめてあげたら？」
「「えっ？」」

他の絡んでいる男共はもちろん、アリサとすずかの2人もこつちを向いた。

・・・おいおい、半泣きじゃねえか。

「ああん？ 何だガキ、なんk「汚い手を離せって言ってるんだよ！」
ブホウ！」

「て、てめえ！ なにすn「ちよつと黙ってくれ！」ゲボラウ！」

こんな雑魚ごときが神にチートパワーを授かった俺に勝てるわけが無い。

ものの数秒で伸してやったわ。

去り際に「お、覚えてるよ」とかまさに悪役っぽいセリフを吐きながら走り去ってった。

「ふう・・・大丈夫か？」

「は、はい、ありがとうございました！」

「あ、ありがと。一応礼を言っわ」

「いや、礼を言われるほどじゃないさ」

ぐう、やばい。瞳を潤ませたままでの笑顔も可愛い！

と、とりあえず怪しまれると今後会った時とかにやり辛いk「あ、アリサちゃん、すずかちゃん！」ってここでのなのはさん登場っすか！？

「なのはちゃん！」

「どうしたのよ、なのは」

「なんかさつき誰かの叫び声が聞こえたから見に来ただけ・・・って、玲央くん？」

「ああ、また会ったな」

まあここで会うとは思ってなかったから正直ビックリだ。しかもいきなり下の名前かよ・・・嬉しいぜ！

「なのはちゃん、知り合い？」

「うん。最近うちの近くのマンションに引っ越してきた巫玲央くん」

「珍しい名前ね」

「よく言われる」

とりあえず、なのはが来てくれて助かった。

あのままだと2人の可愛さに倒れるところだった。

『このロリコン』

『てめえが勝手に設定したんだろが！』

あんにやろっ、後で殴り飛ばす！

「ところでさつき何があったの？」

「こいつが男たちに絡まれてるところを助けてくれたのよ」

「ええ！？ 大丈夫なの！？」

なのは「怪我は無い？」と俺の身体をぺたぺたと触ってくる。くう！ きつい、きつすぎる！ あのバカが無駄にロリコンなんて設定を付けるからやばいじゃないか！

「だ、大丈夫だ。俺の身体は丈夫だからな」

「ん、確かに怪我はなさそうだけど。ホントに大丈夫？」

「本当に大丈夫だから心配すんな」

そう言いながらなのはの頭を撫でてやる。

・・・気のせいか、なのはの顔がちよつと赤らんでいるような。・・・まあいいか。それよりもずは。

「そうそう、そっちの2人・・・えつと」

ここで名前出したりしたら怪しまれるからな。知らない振りをしとかないと。

「私、月村すずか。よろしくね、玲央くん」

「アリサ・バニングスよ。よろしく、玲央」

「アリサにすずかね、よろしく」

「！？／／／」

ニコツと微笑みながら言うと、2人とも頬が赤くなる。・・・いや、まさかな。

『おお、早速3人とフラグを立てましたか。やりm』やかましいから少し消えてろ！』仕方ないですね、分かりましたよ』

渋々と言った感じでその場から消える神の使い。

そういえばこいつの名前も聞いてねえな。

・・・後で聞いてみるか。

「あ、あの！」

「ん？」

俺が色々（神の使いと念話でやり取り）していると、さすがが俺の方へと近寄る。

やば、マジ可愛い。

「あの、さっき助けてくれたお礼がしたいんですけど！」

「お礼って・・・たとえば？」

と、冷静に対応したものの、心の中では発狂しそうなほどに悶えています。

まさか軽く上目遣い＋無意識で手を掴むというコンボを繰り出してくるとは思わなかった。

俺の心ライフにクリーンヒットしました。

「えっと・・・そうだ、町の案内なんてどうかな？」

「案内か・・・」

さすがさん、そろそろ手を離してもらいたい。

あなたの後ろの2人もなんか睨んだ「だったら！ あ、あたしも助けてもらったんだから一緒に行くわよ！」ちょ！？ アリサさんも何故に俺の手を掴むんだ「わ、私も一緒に行きたいな」ってなのはさん！ その服を掴みながらの上目遣いはやめて！ 悶え死にそうになる！

「わ、分かったから。お願いするから、とりあえず離れてくれ」
「「「え？・・・っ！？／／／／」」」

どうやらマジで無意識だったらしい。

3人は慌てて俺の手と服を離す。

・・・周りからの微笑ましいものを見るような視線が気になったが
取り合えず無視することにした。

「じゃあ、行くか」

「そ、そうだね／／／」

「行くつか、アリサちゃん／／／」

「そうね、行きましよう／／／」

3人の顔は未だ赤いままだったが、取り合えず気にしないことにした俺。

というか、気にしたら俺がやばいかもしれない。

あの後、なのは・アリサ・すずかの3人はおすすめの店や景色のいい場所を案内してくれた。

そして現在、俺はある場所に連れてこられた。その場所はどこかって？ もちろん、あそこ。

「喫茶翠屋、ねえ」

「ここね、なのはちゃんの両親がやってる喫茶店なんだよ」

「ここのケーキはすごく美味しいんだから！」

うん、それはアニメで見てるから大体分かる。

ただ、さっきから2つの痛いほど突き刺さる視線……というか殺気が気になる。

大体誰の殺気かは分かってるんだけど……

「どうかした、玲央くん？」

「あ、いや、なんでもない」

まさかあなたが原因とは言えないもんなあ。

そうこうしていると、綺麗で美人なお姉さんがケーキを運んでくる……ってこの人。

「あ、ママー！」

「「なのは(ちゃん)のお母さん、こんにちは」」

「こんにちは、アリサちゃん、すずかちゃん……えっと、そつちの子は初めましてかな？」

「あ、どうも初めまして。最近この町に引っ越してきた巫玲央です。」

よろしくお願いします」

「あら、礼儀正しいわね。初めまして、私はなのはの母で高町桃子よ。よろしくね」

ああ、やっぱり桃子さんだったか。

・・・実際見るとやっぱり若いなあ。

「あら、何か顔に付いてる？」

「あ、いえ。なのはのお母さんって聞いてビックリしただけです。最初お姉さんかと思ったんで」

「あらまあ、上手ねえ」

うん、やっぱりお母さんには見えないよな。

と、俺と桃子さんが談笑していると、俺に突き刺さるきつい視線がさらに3つ増えた。

「「「・・・・・・・・・・」」」

やばい、機嫌が悪くなってる。

どうやら桃子さんもそれに気付いたらしい。

さらにちよつど良く店内から桃子さんと呼ぶ声がする。

「そろそろ戻らなきゃね。玲央くん、3人のこと、よろしくね」

「はい、任せてください」

「うん、よろしい。あ、あとね」

と、桃子さんが顔を近付け耳打ちしてくる。

「3人を泣かせちゃダメだからね」

「も、もちろんです」

桃子さんはそう言つと、にこやかな笑顔で店内に戻っていく。

・・・桃子さん、あなたも地味に怖いですね。

「さて、それじゃあケーキ食べるか」

「「「・・・」」」

・・・やべえ、3人ともかなり不機嫌でらっしやる。

何とかして機嫌直してもらわないと・・・あれしかないか。

俺は手元にあるフォークで自分のケーキを一口サイズに切つて、それをなのはへと差し出す。

「「「えっ？」」」

それを見て、一瞬なんなのか分からなかったのか、3人ともポカンとしている。

く、このセリフは言いたくなかったが、仕方ないか。

「あ・・・あゝん」

「えっ！？／＼／」

「「「なっ！？」」」

くそ、自分で顔が真っ赤になつてるのが分かるぞ。

やってみて気付く、かなり恥ずかしいな、これ。

なのはは驚きと恥ずかしさからか顔が耳まで真っ赤になる。

それを見たアリサとすずかは、驚きとしつゝ・・・げふんげふん！
驚きでわなわなと震えていた。

そんな中、なのははゆっくりと差し出されたケーキに近付き、パクツと食べる。

それを確認すると、俺はそれをアリサとすずかにもやる。

もちろん2人とも顔を真っ赤に染めながらも、ケーキを食べてくれた。

「き、機嫌直ったか？」

「うん、うん……／＼」

「そ、そうか。ならさっさとケーキ食べるか」

そう言うものの、3人は顔を真っ赤にして俯いたままだ。

かく言う俺も……正直かなりハズい。

『うわ、知り合って1日で3人の心^{ハート}を射止めちゃったよ、この人』

ぐっ、反論できん。

自分でもここまでするとは思ってなかったんだがな。

その後、俺となのはたちは一先ずケーキを食べてから、解散した。

『お疲れ様ですね』

「ホントだつての・・・ああ、そういえば気になることが1つ」

『はい、なんですか？』

「あんたの名前、なんて言うんだ？」

俺は今日ふと思ったことを聞いてみた。

『私の名前ですか・・・神塚ノイとでも呼んでk「それ『神の使い』を漢字とひらがなで分けただけじゃねえか』いや、だって実際私に名前なんてありませんからね』

「・・・じゃあ、とりあえずノイってことでいいか」

『はい、それをお願いします』

まさか神の使いに名前が無いなんてな・・・驚きだ。

そんなことを思いながら、俺はマンションへと帰る。

『あ、ちなみに今日がA・S第1話の日ですよ』

「ちよつと待て！ 俺が転生してからまだ2日目だぞ！？」

『いやあ、ちよつと手が滑っちゃって』

「手が滑って転送日時間違えんなよ！？」

第2話：お前が悪いんだからな（後書き）

作者「はい、段々と作者の文才の無さが現れてきましたね」

玲央「今更だろ」

作者「さて、次回の玲央くんは？」

???「マオです。玲央くんはどうやら戦っている結界に突っ込むみたいだ。大丈夫かな？」

玲央「今の誰だよ!？」

主人公設「今更か」別にいいじゃん

玲央「もう一度言うが、今更かよ」

作者「いや、ホントはプロローグのだけで良いかなって思ったんだけど・・・なんかネタに詰まってきたから気分転換で」

玲央「ネタ詰まったって・・・早えよ」

作者「まあ気にするな。俺は気にしないから」

玲央「お前は気にしろよ！」

作者「とりあえず、設定は次の通りです」

名前：巫^{かんなぎ} 玲央^{れお}

性別：男

年齢：9歳

身長：130cm

体重：29kg

性格：気分屋です^{ロリコン}こし変わった嗜好だが、人当たりは良く無意識にフラグを立てる。

能力：聖王の財宝^{ゲート・オブ・バビリム}

狂った理想郷^{メッシュ・ユートピア}

???

???

???

作者「まあ、ざっとこんな感じです」

玲央「俺ってまだ能力あったんだな、そういや」

作者「まあ、それは追々出していきますか」

玲央「・・・まあいいか」

作者「それじゃあ、次の話のネタでも・・・ってああ、次はなのはとヴォルケンズの邂逅回か」

玲央「ってことは、武力介入か!？」

作者「・・・いや、間違っちゃないが・・・そこで00か」

玲央「それじゃあ・・・O H A N A S H I のほうがいいか？」

作者「んゝ、それじゃあまんまだしな」

玲央「だったら・・・斬るんだ、 斬れ!!! 後ろだ!!!
とか？」

作者「そのネタ分かる人いるか？」

玲央「公平な戦いにはジャッジが必要だと思ってさ・・・参上したよ?」

作者「絶対ネタ分かんないだろ、それ」

玲央「一人で盛り上がってんじゃねーよ、俺の縄張^{しず}で暴れやがって」

作者「分かんねえと思うぞ。それに一人じゃねえしな」

玲央「……………ネタ切れた」

作者「いや、別に無理になんか言えって言った覚えはないが」

玲央「……………とりあえずなんかそれっぽいのを言わなきゃいけないのかと」

作者「とりあえず、前回グダグダっばくなった次回予告でもするか」

玲央「次はヴォルケNZとの邂逅回だったよな」

作者「さうで、次回の玲央k「そのネタはもういいからな」チツ」

玲央「次回は、俺のチート能力大爆発s「しないかもな」させてくれよ!？」」

第3話：俺、参」』そのネタは古いですよ』いいじゃねえか！？

『いや、すみませんね。ちよつとよそ見してたら手が滑っちゃつてたんですよ』

「ええい、黙れ！ そんなことは今はいい！」

チツ、そうなるそろそろ結界g『あ、結界張られましたね』おう、ちよつと黙って欲しいわ、こいつ。

「くそ、本当だったら1ヶ月の間にデバイス作ったり、色々道具の扱いを覚えたかったんだがなあ！」

『頑張ってくださいな』

「ゼッテーあとでぶっ飛ばす！」

くそ、とりあえず原作介入するからまずは服装を変えないとな。何かいい服あったかな・・・ってこれは。

『あ、夜笠ですね』

「おお、そっぴやあつたなあ」

服はこれでいいか。

後は顔んだけど・・・何だこれ？

『あ、バタフライマスクですね』

「？か！？ ？なのか！？」

『あらくれマスクにぎんかめんなんてのm「バタフライでいい！」そうですか、他にもあるんですがねえ？』

く、不本意だが今回は仕方ない。

・・・てかこれさ。

「華蝶仮面っぽくね？」

・・・登場のセリフ言ったほうがいいだろうか？

さて、結界のトコまで来たのはいいが・・・どうやって中に入るか・・・

『どこでもドアでも出せば?』

「・・・いや、それはちよつと」

確かに昨日見たときにあつたけどさ・・・それはどうn『あ、なのはちゃんぶつ飛ばされましたよ』おい、中見えてんのかよ。

『まあ、神の使いですから!』

・・・しょうがない、空間のすり抜けを使うか。

えつと、確か結界とかの波長に同調・・・するんだっけか?

あんま覚えてないから適当につと。

すると、段々と身体が結界に溶け込むように中に入り始めた。

「いい感じに中に入りだしたな。あともうちょいつと!」

よし、進入成功・・・つとお!?

あ、あぶねえ。いきなり何か飛んできたぞ?

流れ弾かよ、危ねえな。

ここはいつちよ、O S H I O K Iをしないt『あ、バタフライマスク壊れちゃいましたよ』ノオオオオオオオオオオオオオオオオ
—————。

『どうします?』

「ええい、もういい! 別に正体ばれても気にするな!」

そつだ、どうせいつか正体を明かすときがくるんだ。

それが早いか遅いかの違いだ!

あゝ、もうやけくそだ!!

「くっ！・・・仲間か」
「・・・友達だ」

おーおー。

フェイト登場シーンですか。

・・・しかし、なんでフェイトのBJはあんなのなんだろうか？
成長したら少しは自重したみたいだけど、最後には戻るしさあ。

・・・ゲイト・オラ・バビリム・・・考えても仕方ない、そろそろ暴れるか。

俺は聖王の財宝からひとつの妖刀を取り出すと、フェイトとヴィー
タの間に割って入る。

「ちょっと待ってもらおうか」

なのは s i d e

「ちょっと待ってもらおうか」

どこかで聞いたことのある声。

それも、つい最近きいたような・・・

私は倒れた身体を起こしながら、突然現れた声の主の顔を見る。
そこには

「玲央くん!？」

「よ、なのは。大丈夫か？」

一昨日知り合ったばかりの、とてもやさしい男の子が立っていた。

なのは side out

「なのはの知り合いですか？」

「おめえは誰だ？」

おおう、いきなりフェイトとヴィータに質問された。

「……とりあえず、普通に名乗っとくか。」

「俺は巫玲央。そこで倒れてるのはの知り合いだ」「じゃあ敵ってことでいいんだな」あゝ、まあ知り合いっちゃあ知り合いだけど、今日は戦いを止めに来ただけだ」

「はっ！ あたしらを止められると思ってんのかよ！」

はあ、やっぱりヴィータに説得は無駄か。

俺は手に持った妖刀・鉄碎牙を振りかぶり、とある半妖の代名詞とも言える攻撃を放つ。

「風の傷！」

「「「なっ!？」」「」」

鉄砕牙から放たれた強烈かつ広範囲の衝撃波、風の傷がヴィータへと直撃……してないな。

「油断するな、ヴィータ」

「シグナム!？」

おお、シグナム登場。さすがは烈火の将、あれぐらいのスピードなら簡単に避けられますか。

「さすが、ヴォルケンリッターの将だけのことはあるな」

「っ!？ 貴様、我らのことを知っているのか!？」

「ああ、あんたが烈火の将、シグナム。それでそっちが鉄槌の騎士、ヴィータ」

「なんであたしらのこと知ってたんだよ!」

「さあな、それは言えない。もし聞きたいなら

」

俺は2人に向けそう言いながら、鉄砕牙を戻し、新たに歪な形の刀、双刀・鎚を取り出す。

「俺を倒してからにしな!」

「やってやらあ!！」

予想通り、真っ先にヴィータが突っ込んでくる。が、瞬時に攻撃を回避し、鎚を振り下ろす。

「ぐああ!？」

「ヴィータ!」

ヴィータが吹っ飛ばされたのを見たシグナムが援護に向かおうとす

るが、それをフェイトが阻止する。

ナイス、フェイト。そしてこのアングル……いいん」やつぱりコンですね」うるせえ！！

「く、そお……なんだよあれ。めちゃくちゃ一撃が重いぞ」

「当たり前だ。俺が魔力で威力を上げてるしな。それにもととの重量が重すぎんだよ、この刀」

ん、そろそろなのはがリンカーコアの魔力蒐集されながらスターライト・ブレイカー撃つ頃か。

助けに行きたいが、面倒なことになる前に逃げるか。

「悪いが、俺はこの辺で逃げるわ」

「な、なんだと？」

未だ俺から受けたダメージが残っているのか、ヴィータはふらつきながら立ち上がる。

そんな状態でも俺を睨みつけるヴィータ。さすがと言つべきか、なんとと言つべきか。

「そんじゃ、またな」

「おい、待て！」

待てと言われて待つわけ無いだろ。とか思いながら、俺はその場から姿を消す。

『あ、お疲れ様。どうでした？』
「ん、まあまあかな？」

俺はあの後、スターライト・ブレイカーで結界が破壊されたのを確認してからマンションに戻ってきた。
普通に部屋に入浸ってるノイを一発殴りたいと思ったのは何故だろう？

「さて、とりあえず寝るか」
『あ、じゃあ自分はちよつと1度神様の所に行つて来ますね』
「あつそ、さつさで行け」

ノイは『冷たいですねえ』と言いながら、スウツと消えた。
・・・幽霊みたいじゃねえか。
そんなことを思いながら、俺は部屋の電気を消して寝る事にした。

第3話：俺、参」』そのネタは古いですよ』いいじゃねえか！？（後書き）

作者「あとがきの場」

玲央「とりあえず、ヴォルケンス邂逅篇は終わったな」

作者「ああ、滅茶苦茶疲れたぜ」

玲央「そんなにか？」

作者「何を言うか！ これ話考えて地道に書いた結果、その間に色々あったものの6時間以上は考えたんだ！」

玲央「それでこの低クオリティですか」

作者「ぐふう！ い、言うなよ、地味に・・・気にしてんだから・・・」

玲央「・・・まあいいか」

作者「くそう、こうなったら・・・さて、来週の玲央k』それも古いですね』って邪魔するなよ！！」

玲央「ってか、ノイ。お前いつからいた？」

ノイ「『つい先程からですが？』」

玲央「そ、そうか」

作者「くそう、全部……全部、俺の文才の無さが悪いんだ!!」

玲央・ノイ「『今更か（ですか）』」

第4話：今日の試合は、一生忘れないだろうな。

「・・・・・・・・・・なんでこんなことに？」

「玲央、本気でやるよ！」

「玲央くん、手加減しないからね！」

「君にはもっと聞きたいことがあるんだ。だから勝たせてもらう！」

「・・・・・・・・・・帰らせてくれえ」

よう、みんなの愛しの玲央くんd『自分で言ってて恥ずかしくないですか？』てめえ、マジ黙れや！！

・・・・・・・・とりあえず、現状を説明するには数日前にまで戻らないといけないな。

それでは・・・・・・・・VTR　ごらんください。

「ふわぁ〜・・・よく寝たなぁ」

俺となのは達とヴォルケンスの邂逅から数日が経った日だった。俺は昼前までぐっすりと爆睡してた気持ちいい日だ。

起きた俺は、とりあえず何かを食べようと思って、適当に料理を作った。ちよつと早い昼飯を食べてた時だった。

突然、玄関の呼び鈴が鳴ったんだ。ピンポーンってな。

「ん、どちらさまですかぁ？」

「あ、すみません。今日隣に引越してきたものですが」

「ああ、ちよつと待ってください。今そっちに行きます」

そう、これが俺の間違いだったんだ。

何も知らない俺は、何の躊躇いもなく玄関の扉を開けたんだ。するとそこには、某次元航行艦艦長が立っているではないか。

「あら、あなたこの間、人違いです！」ちよつと待ってください？」

く、俺が扉を閉めようとする、即座に足と手でそれを阻止してきた。

「君は一体何者？　なのはさんとは知り合いだったみたいだけど」
「き、気のせいだ」あ、玲央くん！「人違いです！」

「あ、玲央じゃない。あんたここに住んでたのね」
「ホント、すごい偶然！」

くそ、こっちの気も知らない一般人2人が！
ここで逃げないと絶対にアースラへ連行さ」『頑張ってくださいねえ』だー！ うぜえ！！

「なのはにアリサにすずか、どうしたの？『話なら後でいいだろ。今は一般人がいるんだ』」

「3人は私の娘に会いに来たのよ・・・逃げないって約束できる？」

「ああ、そうなんですか？『ああ、なんだったらなのはにでも見張らせる』」

「そうなのよ。あとでまた挨拶に来るわ・・・分かったわ。またあとで』」

念話で話をつけると、すぐにリンディさんは扉から手と足を退ける。

「それじゃあ引越の荷物、片付けちゃいましょうか『なのはさん、今の念話聞いてたわね？』」

「はい！」

「はい『聞いてました』」

「行きましようか『ならお願いね』」

そう言い、リンディとアリサ、すずかは隣へと戻っていった。

「・・・えと」

「あ・・・とりあえず、中入るか」

「う、うん」

『では皆さん、リンディ・フェイト・クロノ・ユーノが玲央の部屋へ来たところからどうぞ』

現在、俺はなのは、フェイト、クロノ、ユーノ、リンディに囲まれている。

俺が本気を出せばこの場からの脱出なんて楽なだけだな。

それだとさすがになのはとフェイトに悪い気がしてならない。

……え、他の奴？ どうでもいいんじゃないか？

「それで、君は一体何者なんだ？」

「ん、見ての通り？」

「それが分からないから聞いているんだが」

「……まあ、強いて言うなら……最強だな」

……おい、なんだその反応。

クロノとユーノは「こいつ大丈夫か？」的な目で見てくるし、なのは俺をずっと見てきて話聞いてないような気がする。

フェイトは……微妙だな。今のところは何とも言えない。

それで、リンディさんと言うと……あれえ？ あの人どこに連絡してるんだろう？

「あなたがそこまで言うなら模擬戦で試しましょう。ただし、なのはさん達のデバイスの修理が終わってからね」

「……あ、まあいいですよ」

うん、連絡してる辺りからなんとなくは気付いてたさ。
でも、俺相手だと1対1は相手に悪いしな。なら……

「模擬戦はいいですが、1対3ってことで」

「……えっ!?」……」

「あ、もちろん1は俺ね。そっちは3人でかかって来てくれ」

そう言った俺に、クロノが「生意気なことを言うな! だったら僕が相手してやる!」とか1人で盛り上がっちゃってさ。

そんで、あとの2人は、まあ順当に強いやつってことでなのはとフエイトに決定。

そして数日後、修理が済んだということで呼び出され、現在に至るんです。

うん、めちゃくちや帰りたいさ。本当は。
でも……なのはとフェイトのBJ姿が見たかったんだもん！

『やっぱりロリコンでs』『マジ黙れ、エクスカリバー約束された勝利の剣で消すぞ』
すみません、調子に乗ってました』

よし、これで暫くは大丈夫だろう。
つつても、俺とノイの力関係って微妙に分かんないよな。
まあ、大抵はノイの方が上だけどさ。

「それでは、準備はいいですか？」

と、リンディさんが確認してきた。

「私は大丈夫です」

「私も、大丈夫」

「僕はいつでもOKだ」

「俺はとつくにできてる」

リンディは全員の準備が完了したのを確認し、模擬戦開始の宣言をする。

「それでは模擬戦、スタート！」

戦闘開始の合図が出された瞬間、俺は即座に虚刀流一の奥義である『鏡花水月』を発動し、クロノへと攻撃を仕掛ける。

「なっ!？」

「悪いけど、あんたにはさっさとリタイアしてもらっぜ!」

クロノは反応しきれずに、もろに攻撃を受けてしまう。

・・・え？　なんで一番初めにクロノを倒したかって？

決まってるじゃないですか、ウザいから！

・・・と、まあそれもあるんですが、もう1つ。

こいつは確かになのはとフェイトよりは弱い。だけど、怖いのはこいつ自体じゃない。

怖いのは、こいつの経験だ。

こいつはなのは達に比べ、執務官だから戦闘経験が豊富だ。

つまり、自分より強い相手との戦闘方法も大体は頭に入ってるはずだ。

俺も手加減するが、それでもやっぱ経験は無いからな。
経験持つてる人間は気をつけるに越したことは無い。

「クロノ（くん）！？」「」

「まず、1人脱落だ」

なのはとフェイトは、一瞬のうちに吹っ飛ばされたクロノを見たま
まこちらを見ない。

あゝあゝ、そんなに隙だらけでいいのか？

俺は聖王の財宝を展開し、俺の魔力に耐えられるように改良した双
刀・鎚を取り出す。

「2人とも、油断大敵だ」

「「っ！？」」

俺の言葉を聞いたなのは達は、すぐにこちらに向き直る。

しかし、俺はすでにフェイトの目の前まで来て、鎚を振り上げてい
た。

「2人目・・・かな？」

「くっ!？」

『Defensor Plus』

俺の攻撃に対し、バルディッシュが自動的にバリアを展開する。

しかし、元々の重量がかなりあることに加え、振り下ろされるとき
の遠心力+重力+俺の魔力による威力上昇によって、いとも簡単に
割られてしまい、フェイトが吹っ飛ばされる。

・・・もちろん、フェイトに当たる寸前で力を1/10以下に
しましたよ？

「フェイトちゃん！」

「2人目、アウトっ」と

さて、あと1人。

魔法・・・じゃなくて、魔砲少女で悪魔で魔王こと、高町なのは
だけだ。

「どうする、なのは？ やめるか？」

「やめないよ。私が勝って、お話、聞かせてよね！」

わお、生O H A N A S H Iが聞けたぜ！

やべえ、めっちゃ感激したぞ！

「デイベイイイン！」

「あ、やば」

「バスタアアアー！！！」

おう、マジ油断した。何時の間にかカートリッジをロードしたなの
は自身の十八番、デイベインバスターを放ってくる。

ん、でもこれって・・・斬撃だけで2つに割れねえか？

俺は鎚に込めれるだけ魔力を込め、なのはディバインバスターに斬撃を繰り出す。

・・・うん、俺の予想以上だった。

鎚の斬撃で起きた風圧だけで、ディバインバスターを消し飛ばした。

「ふええ！？」

「悪いな、そろそろ終わらせる！」

俺は鎚を戻し、天之尾羽張あめのおはばりを取り出す。

「いくぞ、なのは」

「えっ！？」

俺の魔力を最大限に込めながら、天之尾羽張を居合いの型で構える。

「牙電・・・一閃！」

「っ！？」

『Protection Powered』

うん、レイジング・ハートよ。その判断は正しい。

正しいが・・・そんなので防げるわけがないだろう。

案の定、プロテクションはすぐに消し飛び、なのはに直撃する。

・・・や、こちらもちゃんと直撃する前に威力軽減しましたよ？

「はい、終了っ」と

とりあえず、終わったのでリンディさんの方を見ると、啞然としていた。

そりゃそうか。まさかここまで一方的とは思って無かったんだろうな。

「それじゃ、リンディさん。俺は帰らせてもらいます。後のことはよろしく願います」

「え、ちよつと待ちなさい！」

とりあえず答えを聞く気は無かったのでさっさと転移でマンションに戻る。

戻った時にノイが俺のベッドで寝てたので、とりあえず聖王の財宝エルキドゥから天の鎖を取り出して部屋に宙吊りにしといた。

・・・もちろん、次の日になのはとフェイトがうちに押し掛けてきたのは言っまでもない。

第4話：今日の試合は、一生忘れないだろうな。（後書き）

作者・玲央「あとがきかな？　あとがきだね！」

作者「さて、とりあえず、書いたは良いが……頭痛え」

玲央「知らねえよ」

作者「よって、今回のあとがきはここまで」

玲央「次回予告は！？」

作者「とりあえず、玲央がハーレムっぽくなる……かは分かりません」

玲央「どういうことd」やっぱリロリコンでしたね」てめ、何度も言ってるが俺はロリコンじゃn「まあそれはノイが設定したから仕方ないって」って俺のセリフの邪魔すr「まあ良いじゃないですか。そっちの方が面白いですし」だk「だな。ナイスだ、ノイ！」だあああああああーーーーー!!! もう黙れお前ら!!!」

作者・ノイ「まあ、気にするな」

玲央「なんだこの扱いは!？」

作者・ノイ「『いつものことだ』」

玲央「ノ才才才才才才才才才才――！！！！！」

第5話：もつと腕にシルバー巻くt『そのセリフもどうかと』ウゼエなあ！

「ほら、玲央くん。あつちに可愛いぬいぐるみがあるよ！」

「玲央、向こうに洋服が展示してある。見に行こう」

「玲央くん。私あそこのアクセサリーが見てみたいな」

「ちよつと玲央、私に似合う帽子を一緒に探さないよ！」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。俺は一人しかいないんだから順番で頼む」

・・・はい、巫玲央です。

え？ 今の状況ですか？

・・・・・・見ての通りですよ。

なのはたち4人の買い物に付き合ってるだけです。

なんでこうなったか・・・下に表記しましたのでご覧ください。

なのはたちが昨日の模擬戦のことで俺の部屋に押し付けてきた。

逃げようとするも、先に多重結界＋バインド＋ノイの悪戯により逃走不可。

とりあえず、すぐに謝る＋頭を撫でるでなのはとフェイトの機嫌を直してもらおうとする（その時、何故かフェイトの顔が赤くなっていたが気にしないことにした）

だが、それだけじゃ許してもらえなかったので今日一日買い物に付き合つと言つことになった。

そして店の中に入った瞬間、アリサとすずかに遭遇。

現在に至る。

と言った感じです。

分かってもらえたd「」「」「玲央(くん)！」「」と、4人が呼んでる。

「どうかした？」

「どうかした、じゃないわよ。あんたはどうしたいのって聞いてんのよ」

おお、俺に聞くなんて思ってもみなかつたぜ。

もちろん、俺は帰らせてm「ちなみに『帰る』って選択肢は無いからね、玲央くん」ちよつとなのはさん、人の心読まないでほしいなあ。

「読むも何も、さつきからずっと声に出してたよ？」

「・・・マジで？」

「う、うん。俺に聞くなんてって辺りからずっと」

おおぅ・・・ほぼ最初からじゃねえか。

「あゝ・・・それでみんなはどこ行きたいんだ？」

そうだ、とりあえずみんなの意見を聞けばいいんだ。

その中で一番危険度の低いところを選べばOKなんだよ。

「えっとね、私はお洋服を見たいなあ」

「あ、私も見たい」

「私もそれでいいわ」

「わ、私も」

・・・それって俺に聞く意味無くないか？

それと・・・なんかいやな予感がしたのは気のせいだろうか？

「ふう、疲れる」

現在、なのはたちは試着室で選んだ洋服を着ているところだ。
・・・ちなみに全部俺に選ばせやがった。
危うくすずかには下着まで選ばれそうになったし・・・恥ずかしいのか？

「れ、玲央くん」

「ん、どうした？」

と、俺を呼ぶ声がある。

この声は・・・すずか？

「あ、あのね。間違えて1つ小さいサイズのお洋服持って来ちゃったみたい」

「あゝ、了解。ちょっと待ってる、今取ってくる。ついでに今持ってるの戻しといてやる」

「う、うん、お願い・・・キャッ!？」

俺がすずかから洋服を受け取ると同時に、試着室からこけ出るすずか。

・・・俺は、そこで見てはいけないものを見てしまった。

こけ出たすずかの姿は、今俺が持つてる洋服を脱いだばかりなのだろう。

すずかは・・・下着姿だった。

「あ……」

うん、すずかの顔がみるみるうちに真っ赤になっていく。
ってこのパターンは、もしかして!?

「きゃs「ちよつと待った」むぐぐ!？」

叫びそうになったすずかの口をすぐに塞ぐ。

しかし、それでも少し聞こえたようで、隣の試着室に入っていたのはたちが中からすずかに声をかける。

「すずか? どうかしたの?」

「すずかちゃん?」

「すずか?」

すると、なのはたちが試着室から出てきそうになったので、俺はすずかを抱きかかえ、すぐに試着室に入った。

「……」

うん、ミスったね。

別に俺まで入ること無いんじゃないか?

……これ、なのはたちに見つかったらやばいよな?

『完全に終わりですね』

ちょ、ノイてめ! ちよつと黙ってる!!

「すずかちゃん、大丈夫?」

やばい、本格的にやばい！

ど、どうやってこの場面を乗り切ろうか。

そんなことを思っていると、すずかが口を塞いでいる手をポンポンと軽く叩いてくる。

「ボソボソ・・・（大丈夫か？）」

俺がそう聞くと、すずかはコクコクと頷く。

それを確認して俺は手を離す。

すずかはすぐに顔だけを外に出した。

「だ、大丈夫。ちょっとこけただけだから」

「そっか、良かった」

「もうびっくりしたわよ。なかなか返事しないんだから」

「ごめんね、心配かけて」

「ううん、すずかは気にしなくていいよ」

そう言い、なのはたちは試着室へと戻っていった。

「「・・・」」

あゝ、とりあえず、他の奴らも戻ったことだし、俺も出るかな。

そう思ったので俺は「じゃあ、俺出てるから」と言ってお出ようとする。

「ちょっと待って」

「・・・なんでしょう？」

まあ、そうは問屋が卸さないわけでありまして。

さすがが俺の服の後ろをちょこんと摘んでくる。

「わ・・・わたし、もうお嫁に行けないかも」

「・・・そ、そんなことは無いと思うがな」

えつと、なんでしょうか、この展開。

ものすごくいやな予感がしますが・・・。

「じゃ、じゃあ、玲央くんは・・・私みたいな人がお嫁さんでもいいの？」

「え、えつと・・・ほ、ほら、早くしないと時間g」誤魔化さないで」はい・・・」

えつとですね・・・俺ら小学生ですよね？

いや、俺の場合中身はそうじゃないけどさ。

身体的にはそうだよな？

・・・誰かそうだと言ってくれ！！

『そ〜でっすね！』

だから黙れって言ってんだろぅが！！！！

「わ・・・私じゃ嫌かな？」

「っ！？」

やば、涙の溜まった瞳で上目遣いされた。

あ、これまじ逝けるわ。

「・・・そ、そんなことないぞ」

「じゃ、じゃじゃじゃじゃあ、わ、私のこと・・・・・・好き、

かな？」

「……すみません、私いつフラグを立ててましたっけ？
……え、2話ぐらい？
……マジでか？」

「えつとだな……とりあえず、好きは好きだけど、今はまだ『友達』として……だな」

「……そっか」

「で、でもな……もし、すずかに他に好きな人が出来なかったときは……考えとくよ」

「っ！？……う、うん、分かった／＼」

と、それを聞いて満足したのか、すずかは俺の服を話す。

「じゃあ、新しい服持ってくるからな」

「うん／＼」

俺はそう言って試着室から出ると、すぐにサイズの合う服を持ってくる。

その後、何故か機嫌の良いずかを見て、なのはたちは何かに感づいたらしく、みんなにアイスを奢らされた。

・ ・ ・ ・ ・ 俺、何か悪いことしたか？

・ ・ ・ ・ ・ 俺の生活費があ！？

第6話：物語は永遠に続く「待てい！まだ終わらんわ！」いや、なんとなく

「さて・・・そろそろあいつともエンカウトしとこうかな」

俺は今、海鳴図書館に來ています。

目的はもちろん、はやてとの遭遇。

すでになのはたちはヴォルケンスとの2回目のエンカウトを済ませているからな。

そろそろ、はやてとも出会っておいた方がいいかと思って。

さてと、どこにい「ん」！ふう、やっぱ届かへんのかな？」・

・うん、またベタに高いところの本を取ろうとしてるよ。

これはあれか？ 神様の悪戯k『あ、それは自分がやっときました』
おお、この人何してんだよ。

・・・まあ、今回は一応心の片隅の片隅あたりで感謝しておこうか。

「よつと」

「あつ・・・」

はやては自分の取ろうとしていた本を俺に取られ、俺のほうを見るとりあえず、本のタイトルとかを確認してから、はやてに渡す。

「ほら、これが取りたかったんだろ？」

「あ、ありがとあな」

「気にすんな。当然のことをしただけだしな」

言いながら俺ははやての頭を無意識に撫でる。

・・・なんだろう？ 妙にはやての顔が赤いんだが。

「あ、うちは八神はやて言うんよ。君は？」
「俺は巫玲央。よろしくな、はやて」

そんな感じで雑談をしていると、入口付近からシグナムがやってくるのが見えた。

はやてもそれに気付いたのか、シグナムの名前を呼ぶ。

「あ、シグナムや。シグナムー！」

「すみません、お待たせしました・・・っ!？」

「はやて、この人は？」
「よう、また会ったな」

やはりかなり驚いてらっしゃる。

シグナムはすぐに俺を睨んでいたが、はやてがいる事を考えてすぐに表情だけは戻した。

・・・うおう、殺気がビンビン皮膚に突き刺さるようだ。

「この人はシグナムって言ってな、うちの親戚みたいなもんや」

「シグナムと言います。『貴様、何をしている』」

「あ、俺は巫玲央。よろしく。『別に、あんたらの主に会いに来ただけだ』」

「ああ、よろしく頼む。『なぜ主のことを知っている!?!?』」

「じゃあ、はやて。俺は帰るから。『知りたかったら後であんたらの家に行つてやるけど?』」

「うん、またなあ」

「・・・何でもお見通しと言うことか」

「ああ、知ってるぜ。あんたらのやってることから、あんたらの知らない闇の書についてのことかな」

「・・・わかった。今日の夜に来い。主が寝た後で話を聞かせてもらおう」

『了解。じゃあな』

ここで、俺とシグナムは念話を切る。

さて、どこまで話そうか。

俺としては、原作12話のフルボッコシーンは外したくないからなあゝ・・・もういつそのこと核心の部分はまだ隠しておくか。

俺は原作介入がしたいのであって、原作ブレイクはあんましたくないし。

・・・とりあえず、今日の夜行くしかないか。

はい、時間が飛んで今日の夜です。

はやての家の庭に降り立つと、シグナムが出迎えてきた。

「本当に来るとはな」

「言っただろ、俺は闇の書について知っているって」

そんなやりとりをしていると、部屋の中からジッと睨みつけるヴィータを発見した。

・・・うん、敵意剥き出しだな、おい。

「一応、他のものにも言っておいたが、お前のことを信用したわけではないからな」

「分かってるさ。誰もすぐに信用してくれるとは思ってない」

とりあえず中に入るか、とシグナムに言われ、俺たちは家の中へ入る。

そこにはすでに守護騎士が揃っていた。

「ん、全員いるみたいだな」

「当たり前えだ。てめえが闇の書の知らないことを教えてやるっつーからみんな集まってるんだ。本当なら、はやてのために蒐集にいくヴィータちゃん！」っと、わりい」

「あゝ、気にすんな。どうせあんたらの目的も知ってるからな」

「「「「なっ!?!」「」「」」

おゝおゝ、驚いてるなあ。こんなことで驚かれてもなんだかなあって感じだけだな。

「あんたらの目的は・・・はやてを助けたいからだろ？」

「貴様、何故それを知っている!」

「まあ色々な。その辺は話せないが他の情報なら話してやる」

それから俺は闇の書の事に関して、原作ブレイクしない限りの話をした。

闇の書が以前は夜天の魔導書だったと言うこと。

そして今までの所有者の何人かがプログラムの改変を行った為、現在のような状態になったこと。

その他多数……

「まあこんなところだ」

「……俄かには信じられんが、嘘とも思えんしな」

「まあ、信じるも信じないもあんたら次第さ」

そう言いながら、俺は庭へと出る。

「巫、最後に1つ聞きたい」

「……なんだ？」

「お前は……我らの敵か？ 味方か？」

「あゝ、それはな」

俺は転移の準備をしながら、シグナムを見据えて呟く。

「……どつちでもねーよ」

シグナムは俺の答えを聞いて何か言ってきたが、すぐにその場を去る。

さて、順当にいけば来週に覚醒イベントのはずだ

『あれから数日が経ったある日のことです』

「ノイ、お前誰に向かって言ってるんだ？」

『気にしないでください』

「・・・まあいいが」

俺は今、マンションの一室（大家に内緒で改造して造った研究室）でデバイスの制作、その最終段階を行っていた。

ぶっちゃけ、俺にデバイスはいらんんじゃないかって思ったけど、模擬戦の後でクロノたちにデバイスのことを聞かれたからな。暇なときに作っておかないとな。

「さて、後はAIを組み込んで・・・これで起動すれば大丈夫の

はず」

とりあえずは完成した。

机の上に置いてあるデバイスは待機状態で、今はボールペンの状態だ。

俺はすぐに起動してみる。

少しして、デバイスに起動の文字が浮かび上がる。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

は、反応が・・・無い・・・だと・・・!?

「・・・・・・・・・・・・・・・・おい、起動してるんだろ」

『ああ、あなたがマスターだったのですね。どこかの変態かと思いましたが「よし、火山の噴火口にでも捨ててくるか」すいません、冗談ですから捨てないでください!』

「いや、まあいいけどな」

あつれ??

俺、こんな風なAI組んだっけなあ?

『あ、それは自分がやっときました』

「てめえか!」

とりあえず、後で双刀でフルボッコにしとくか。

『あの、マスター』

「ん? どうした?」

『そろそろ私の名称設定をして欲しいのですが』

「あゝ、OK。今からやる」

とりあえずノイのことは後回しだ。
今はこいつのことを優先しないと。

『ではマスター、私に名前を』

「ああ・・・名称設定・シルフ。所有者名、巫玲央」

『名称・シルフ、承認。所有者・巫玲央、承認。以上で設定を終了します』

よし、とりあえずこれで大丈夫だな。

これから魔導士戦ではシルフメインで使わないと。

『それではマスター、まずは私の望遠機能であそこの女湯をのぞく
「へし折るぞ？」や、やだなあ、マスターのことを思っ t 「ほう、
そんなに消えたいのか？」すみません、冗談です』

はあ・・・こんなデバイスで大丈夫だろうか？

第6話：物語は永遠に続くん「待てい！まだ終わらんわー！」いや、なんとなく

玲央・作者・シルフ「「『あとがきだよね？　あとがきだ！』」」

玲央「ってシルフ！？　いつの間に」

シルフ『マスターになら何処へでも付いて行きますよ！』

玲央「あ、そう・・・」

作者「いや、仲がよろしい事ですな」

シルフ『はい！　私、マスターの願いならどんなことでもしてあげます！』

玲央「ちょ、シルフ、何言ってるん「へえ、じゃあ例えば？」ってあんたも何聞いてんだよ！？」

シルフ『そうですねえ。マスターが私にユニゾンデバイスのような身体を作ってくれたら夜のお相手も・・・／／／』

作者「幸せ者だな、お前も」

玲央「ちょっと待て！　なんでデバイスに夜のあいも「幸せになつてくれよ、シルフ」って聞けよ「もちろんです！」だから人の話を聞いてくれって！！」

作者「さて、次回ははやて覚醒の回です！」

シルフ『私とマスターのラブラブシーンをとくところご覧ください!』

玲央「ちょ、おま! 皆さん、絶対にそんなシーンありませんからね!」

第7話：俺はもう昔の俺じゃない

『Diabolic Emission』

「デアボリック・エミッション」

「っ!？」

「空間攻撃!」

「闇に、染まれ」

『Round shield』

なのはは、覚醒した闇の書の意味の放つ広域空間魔法、デアボリック・エミッションの魔力波を、フェイトの前に出てラウンド・シールドを展開し防ぐ。

「んう、ん!」

あゝ、なのは辛そうだな。

・・・え、助けないのかって？

えつとだね、結論から言うと・・・手が離せません。

『マスター、どうして魔力波の真ただ中にいるんでしょうか?』

「いや・・・なんでだろうな?」

そう、俺は今、デアボリック・エミッションの魔力波を浴びているところですよ。

なぜかって? はやての変s『マスターってやっぱりロリなんですか?』うん、ちょっと黙ってくれ。

「それにしても、長いなあ」

『とか言って、全く辛そうじゃないですよね』

「だって、これぐらいの威力なら簡単に防げるじゃん。俺、チートだし」

そんなことを話していると、段々と威力が弱まってくる。

「お、治まってきたな」

『マスター、どうしますか？』

「そうだな・・・シルフ、モード『鎚』」

『OK、モード『鎚』！』

シルフのモード『鎚』。

双刀・鎚と同じ形状・重量でさらに本物の鎚よりも魔力を格段に込めることができるようになり、さらに属性付与も可能になった、シルフの第一形態。

「とりあえず、なのはたちの援護に行くか」

『了解です、マスター』

俺はシルフと共に、なのはたちの元へと急ぐ。

??? side

「咎人達に、滅びの光を」

闇の書の意味が、魔力の残滓を収束し始めた。

「まさか・・・」

「あれは!?!」

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

「スターライト・・・ブレイカー・・・」

闇の書の意味は段々と魔力をチャージしていく。
それを見たフェイトは、すぐにアルフとユーノの名を呼ぶ。

「アルフ、ユーノ!」

「あいよ!」

「うん!」

アルフとユーノはすぐに行動を起こす。

その間にも着実に魔力はチャージされていく。

「貫け、閃光！」

闇の書の意味がチャージしている間に、なのはたちは回避距離をとる。

そんなとき、バルディッシュから結界内に一般人がいると言われる。

「やっぱり誰もいないよ。急に人がいなくなっちゃった」

そこにいたのは、なのはたちの友人であるアリサとすずかだった。

「辺りは暗くなるし、なんか光ってるし、一体何が起きてるの!？」
「うん」

アリサは軽く混乱しており、すずかはさっきから言葉を発していない。

「とりあえず、逃げよう。なるべく遠くへ」
「う、うん」

アリサとすずかはそう言い、その場を走り出す。

なのはとフェイトは一般人のいる場所まで素早く移動する。

『Distance: seventy, sixty, fifty...』

「なのは、ここで」

「うん」

一般人が来ると予想される付近に、なのはとフェイトは降り立つ。

『Twenty, eighteen...』

「えっ?」

なのはとフェイトは近づいてくる一般人を探すため辺りを見回す。すると、なのはが路地裏から出てくる2つの人影を確認する。

「あの、すみません! 危ないですから、そこでじっとしててください!」

なのはの声を聞いた人影は、なのはたちの方を向く。

「え?」

「今の声って・・・」

段々と、その場を包んでいた土埃が晴れていく。そして、その人影が誰なのかがはっきりと分かった。

「なのは？」

「フェイトちゃん？」

そこにいたのは、なのはとフェイトの友人、アリサとすずかの姿があった。

しかし、そんなことお構いなしに、闇の書の意味はなのはたちに向け、集束した魔力を放つ。

「スターライト・ブレイカー・・・」

無情にも・・・滅びの光が放たれる。

??? side out

『マスター、スターライト・ブレイカーが放たれました!!』

「チイ! シルフ、属性付与『電撃』」

『了解! 属性『電撃』追加。いつでもいけます!』

「OK・・・いくぜえ! 電光石火!」

く、後チヨイなんだがな。

今ぐらいだと、なのはとフェイトが防御魔法を張ってるところだろう。

待ってるよ・・・今俺が、

「そっちに行くからな!」

『なのは！　なのは、大丈夫！？』
『フェイト！？』

『大丈夫では、あるんだけど』
『アリサとすずかが・・・結界内に取り残されてるんだ！』

「なんだって！？」

それを聞いたユーノは、すぐにエイミィに連絡を入れる。
エイミィは余波が治まり次第転送をするとのこと。

それまで持ちこたえてくれとエイミィは言った。

ああ、原作ならその余波は耐えきるはずだ。

・・・だけど、俺が見た限り、原作より威力が高くなってる気がする。

あと、少し・・・頑張ってくれ！

??? side

「んう！？『フェイトちゃん、大丈夫？』」

「くっ！？『私は大丈夫。だけどなのはの方は』」

『私の方は大丈夫！』

『でも！？』

フェイトは気付いていた。なのはの張っているプロテクションに段々細かな罅が入り始めているのを。

このままだとあと少しでなのはの防御は破られる。かと言って、フェイトはフェイトで手が離せない。

『どうしたらいいの・・・どうしたら』

そう思った時、フェイトは1人の男の子の顔を思い浮かべた。

『助けて、玲央！』

『呼んだか？』

『『玲央（くん）』』

そう、彼女たちの前に降り立った一人の少年こそ、彼女たちが待ち望んだ彼、巫玲央だった

??? side out

『マスター、間に合いましたね』

「ああ、だけど実際今の俺の状況って結構危ないんだよな」

俺は今、なのはが張っている防御魔法の前に多重防御を張りながら降り立ったところだ。

・・・さて、この余波を散らすか。

「シルフ、カートリッジロード。あと属性変更『風』」

『了解です。ロードカートリッジ。属性変更『風』』

シルフからカートリッジが2つ排出され、さらに風を纏い始める。

「『斬撃烈波・・・』」

俺はシルフを居合いの型のように持つ。

そして、俺が張っていた多重防御を全て解除する。

直後、俺が抑えていた余波が、俺目掛けて迫ってくる。

だが、俺はその余波が俺の身体に直撃する前に、シルフを振り抜く。

「『剣風……一閃!!』」

剣風一閃……シルフの鎚形態での最強魔法。

斬撃でできた風圧を魔力と属性付与『風』によりさらに強大にし、
どんなものでも吹き飛ばす魔法。

今の斬撃で起きた風圧により、今まで襲いかかって来ていた余波が
一瞬にして吹き飛ぶ。

「っ!？」

闇の書の意味は、突然現れた俺を見て驚いているようだな。

だけどな……俺は今、地味に頭にきてんだよ。

やっぱり実際に体験してみないと分からねえな。

……アリサとすずかを巻き込みやがって!

「お前は俺を……怒らせた!」

はやては助けるさ……だけど、まずはてめえをぶっ飛ばす!!

そうだ……昔の俺とは違うんだ!

第7話：俺はもう昔の俺じゃない（後書き）

作者・玲央・シルフ「『あとがきでいいんだよね？ あとがきでいいんだよ！』」

玲央「つてか今回、最初の方は全部原作のまんまじゃねえか？」

作者「あゝ……まあ原作ブレイクはあんましたく無いじゃん。
° A'sが終わるまでは」

シルフ『なら終わった後にブレイクするんですか？』

作者「おう、色々とブレイクするが？」

玲央「……いいのかよ」

シルフ『そういえば……今回私たちのラブラブシーン無かったですね』

作者「安心しろ、色々考えてるから」

玲央「……もう何も言っまい」

作者「それでは次回」

シルフ『今回の続きですね。闇の書の闇と分離するところまでいけそうですね？』

作者「んゝ、厳しいけど頑張ってみるさ」

玲央「……そういやノイの奴、最近見ないな」

番外編：死ぬ前に・・・守りたい！

『すいません、玲央くん』

「ん？ どうした、ノイ？」

ある日、ノイが少し真剣な顔をして俺に声を掛けてくる。

いつもと雰囲気違ったのに気付き、俺も真剣な表情になる。

『実はですね・・・最初あなたに言った、あなたの死んだ時の状況なんです』

「ああ、あれな。何とも情けな」『あれ、嘘なんですよ』おい待て、嘘ってどういうことだよ」

『・・・今のあなたなら・・・言っても大丈夫でしょうね』

「なんだよ、一体」

『お教えしましょう、あなたの死んだ状況を』

俺は昔、1人の少女とある約束をした。

『ぼ、ぼくがゆりを守るよ!』

『ほんと?』

『うん、守る!』

『ありがとう!』

そう、子供の頃その他愛ない約束。

でも、俺はその約束をずっと守っていた。

『君はいつも私を守ってくれるね』

『当たり前だろ、約束したんだからな』

『もう・・・ありがとう／＼／＼／』

『おう、気にすんな』

彼女が男に絡まれていると、すぐに助けに入る。

彼女が病気になった時は、治るまでずっと看病をする。

彼女が事故にあいそうになった時は、俺がすぐに助ける。

彼女が・・・彼女が・・・

そう、俺は彼女の為に生きてきた。

でも・・・ある日、その約束は破られた。

『ゆり！？ 大丈夫か？』

ある日、彼女が誘拐された。

それを聞いた俺は、すぐに走り回ったさ。

繁華街の路地裏から、港の倉庫の中まで。

そして、ある情報から彼女がいるかもしれないビルへ、俺は助けに入った。

『てめえ、どこから入ってk』『黙れえ！！』『ぐはあ！？』

『おめえら、ぜってー逃がすなよ！！』

そこは、どこぞのヤクザのアジトだった。

ヤクザ自体はそこまで強くない。

俺は、時間が掛かったものの、その場にいた全員をぶっ飛ばした。

すると、奥の部屋からゴトツと音がしたので、恐る恐る、俺はその扉を開けた。

するとそこには、俺が守りたかった彼女が・・・・・・・・・・
・・・一糸纏わぬ姿で横たわっていた。

とても口にはできないその状況を見た俺は、叫び、嘆き、泣き狂った。

それから彼女は、男を見ると怯えるようになった。

それには例外はなく……俺を見ても怯えるようになっていた。

それからだっけか、俺が二次元にしか興味を持たなくなったのは。

そして……彼女に会わなくなって1年半が過ぎた頃だったかな？

俺が高層ビルの工事現場の近くを歩いていた時だった。

前方を彼女が歩いていた。

俺は、それを見て彼女にばれないように道を変えようとした。

その時だった。

彼女の頭上から、高層ビルの鉄骨が落ちてきているのに気付いた。

『なっ！？ くそぉ！』

俺は気付くと、何時の間にか走り出していた。

彼女が危ない。

彼女が危ない。

そう思うと、なぜか昔のことが頭に浮かぶ。

『くんは、私の王子様だね』

『あ？ そんなことねーよ』

『うっん、そうだって。だって、私との約束・・・ずっと守ってくれてるでしょ？』

『・・・憶えてんのかよ』

『うん・・・でもね、きつと　くんが守れない時もきつとあると思う。だから　』

なんでだろう。なんでその時の彼女の言葉を・・・今になって思い出すんだろうか？

『　　１度だけなら助けられなくてもいいよ。でも・・・それ以外は助けてね？』

そう、それを思い出したからこそ、俺は彼女へと追いつき・・・突き飛ばす。

同時に、俺の上に鉄骨が降り注ぐ。

『きゃっ！？』

彼女はいきなり突き飛ばされたためこけてしまった。

はは、守ると言っておきながら、俺が怪我させてるよ。

でも、もう良いかな？

『いったく、一体……えっ？』

『だ……大丈夫か、ゆり』

『……くん？』

『は、はは……おぼ、えてて……くれた……のか？』

はは、俺のことなんてもう忘れてると思ってたんだけどな。

まさか憶えてるなんて思ってた。無かった。

『な、んで？』

『約束……したじゃ、ねえか……』

『やくそく？』

『……お、れが……まもって、やる……てよ』

『っ！？』

……ああ、そろそろ本格的にヤバいな。

まあ鉄骨だからなあ。

体中の骨が折れてるだろうし、それに加え内臓も破裂してそうだ。

ああ、そろそろ痛みも感じないや。

『くん……ごめん、ごめんね』

『な……にが、だよ？』

『私……くんが病院に来なくなってからわかったの。君が私の為に、どんなに苦労してたのか……私を助けるために……どんなに……辛い思いしてたのか』

『何……言ってる……だよ』

『私ね．．．今はもう男の人が来ても大丈夫なんだよ？』

『お．．．それは．．．良か．．．たな』

『うん．．．でもね、それ．．．くんのおかげなの』

『お．．．れ？』

何言っただよ、俺は何もしてないって。

『私は気付いてたよ。君がずっと．．．病院の入口まできて、お供えの品を渡してたんだよね？』

『なん．．．で？』

『だって．．．私の病室から、病院の入口って丸見えだもん』

『はは、は．．．それじゃあ、ばれちまうわな』

『それを見て．．．私は勇気付けられたんだよ？ 君がいつも応援してくれてるんだって思ったから』

『そ．．．か．．．よか．．．たな』

あゝ、そろそろ確実にヤバイ。

俺の意識も朦朧としてきたし、上手く喋れなくなってきた。

『 くん、死んじゃ．．．ヤダよお』

泣くなよ。折角お前を助けたのに．．．最後が泣き顔なんて．．．いやだって。

『な．．．くなよ．．．お、れは．．．おま、え．．．の、笑顔．．．が．．．好き、な、ん．．．だから』

『っ！？』

彼女はそれを聞いて．．．涙でぐちゃぐちゃになった顔で笑ってくれた。

『はは・・・や、ぱり・・・えが・・・お、が・・・に、あう・・・』

そつだ・・・俺は、彼女のこの笑顔を、守りたかったんだ。

『・・・よか・・・た・・・さい、ご・・・に・・・その・・・え、がおが・・・まも・・・れて』

『くん？・・・くん！　　くん！！　嫌だよ・・・死

んじゃ、嫌だよ！！』

そこで・・・俺は、動かなくなった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『えっと・・・大丈夫ですか?』

「・・・・・・・・ああ、大丈夫だ」

そういえば・・・そんなこともあったなあ。

「んで、どうして今になってそれを言っただんだ?」

『いえ、なんとなく』

「なんとなくかよ」

まあいいか。

『あ、そうだ。1つ聞いていいですか?』

「なんだよ?」

『あなたは・・・あの時満足しましたか?』

・・・・・・・・

「ここに居る時点でわかんねえか?」

『・・・・・・・・そうですか』

それを聞いたノイは、どっかに消えた。

・・・・・・・・そうさ、俺はまだ・・・やることがある。

・・・彼女たちを・・・助けるんだ!

今の俺には・・・そのための力がある!

番外編：死ぬ前に・・・守りたい！（後書き）

玲央「さて・・・何か言うことがあるだろう？」

作者「はい、今回は玲央くんの生前の話というわけで、番外編にしていたきました」

玲央「いやいや、俺が聞きたいのはそういうことじゃなくて・・・
どうして前回の次回予告（？）通りに書かなかった？」

作者「・・・・・・・・次回！ 今度こそ続きます！」

玲央「・・・・・・・・まあいいか」

第8話：だったら俺が、その幻想をぶちk『もういいですって』・・・消して

「フェイトちゃん!？」

現在、俺となのは、フェイトは闇の書の意味と戦っていた。

そんなとき、フェイトが闇の書に吸収されてしまった。

原作で知っていたけど・・・実際現場にいと、結構焦るな。

「シルフ、モードチェンジ『鈍』」

「・・・いいですね?」

「ああ・・・加減はするさ」

「了解。モード『鈍』」

今の鎚だと相手の多重防御がなかなか破れない。

攻撃の当たる部分に魔力を集中・増幅させているだけだけど、それでも俺の攻撃をギリギリで防いでいる。

なら・・・こつちも一点突破だ!

「シルフ、属性『風』で限界まで魔力を込めるぞ」

「了解! 魔力チャージ・・・5・・・10・・・」

俺はシルフを居合いの状態に構えるため、鞘に納める。

そして、辺りに散らばっている魔力の残滓を、シルフの刃に集束させていく。

「なのは、聞こえるか?」

「どうしたの?」

「俺があいつの多重防御を破る。それまでのあいつの相手と、俺が防御を破ったあとででかい一撃を入れてくれ!」

『うん、分かった!』

なのはの返事を確認すると、俺は魔力チャージに専念する。

『・・・35・・・40・・・45・・・50』

「くそ、時間がかかるな・・・なら!」

『ちょ、マスター!? そんなことしたらあなたが!?』

「いいから! チャージ充填率はいくつだ!」

『・・・85・・・90・・・95・・・100』

こういう場面にきて、つくづく思う。

なんで転生前に、魔力無尽蔵って言うておかなかったんだろうと。

普通の状態でもほぼ無尽蔵に近いほど魔力を持っている。

だけど・・・今回はちよつと無理すぎた。

属性付与のやり過ぎに加え、鎚を使いすぎた。

あれは威力は高いが、代わりに魔力消費が早すぎる。

なのはぐらいの魔導士でも、もって2時間が良いところだろう。

保つだけでそれぐらいに加え、さらに肉体強化もしなければならな

いから余計に減る。

俺の魔力も・・・正直後1時間もつかどうかだ。

だからこそ、ここであいつの防御を・・・斬り裂く!

「玲央くん、危ない!」

『マスター!』

「っ!?!」

と、上空から闇の書の意味が放ったと思われるブラッディ・ダガーが俺の腕をかすめる。

くそ、腕が少し切れたか・・・だが、好都合だ。

「シルフ、やるぞ」
『・・・了解です』

闇の書の意味が俺に向け砲撃を放つ。

「・・・集束斬撃」

『一刀両断』

「『斬刀狩り!』」

斬刀狩り・・・自身の血を鈍の刃を濡らすことで、鞘との摩擦係数を減らして光速を超える居合いを繰り出す斬撃。

斬刀『鈍』の限定奥義。

シルフの『鈍』形態で使用した場合、光速を超えるの居合いから集束された魔力斬撃を放つ魔法。

どんなものでも一撃で真つ二つに割る様は、まさに一刀両断。

シルフから放たれた魔力斬撃は、闇の書の意味が放った砲撃など、いとも容易く切り裂いていく。

そして同時に、彼女の多重防御をも切り裂いた。

「今だ!」

「うん!アクセルチャージャー起動、ストライクフレーム!」
『Open』

レイジングハートはなのはの指示を聞き、ストライクフレームを展開する。

「エクセリオンバスター・A・C・S・・・ドライブ!」

なのははエクセリオンモードとなったレイジングハートで闇の書の意味に突っ込む。

しかし、闇の書の意味は紙一重のところでバリアを展開した。

「くっ！ 届いて！」

なのはの願いが届いたのか、展開されたストライクフレームの先端がバリアを抜け、内側へと入る。

「ブレイク！」

バリア内部に侵入したレイジングハートの先端に魔力がチャージされていく。

「まさか！？」

「シューウウウウー！ー！トッ！！」

直後、ゼロ距離でのエクセリオンバスターが放たれる。

「だが・・・これでも・・・」

そう、原作なら、ほとんど効き目は無かったはずだ。

・・・案の定、何事も無かったかのように闇の書の意味は上空で佇んでいる。

すると、突然闇の書の意味が苦しみだす。

『外の方！ えと、管理局の方！ こちら、えと、そこにいる娘の保護者。八神はやてです！』

「「はやて（ちゃん）！？」「」

そう言えば、ここでははやてが念話を飛ばしてくるんだっとな。

『なのはちゃん、玲央君！？ ホンマに？』

「うん、なのはだよ。色々あって、今闇の書さんと戦ってるの！」

「俺もなのと同じだ！」

『・・・ごめんなのはちゃん、玲央くん。なんとかそこ娘、止めた
げてくれる？』

「っ！？」

『魔導書本体とのコントロールは切り離れたんやけど、その娘が発
してると管理者権限が使えへん。今そっちに出てるのは自動行動の
防御プログラムだけやから！』

なのはは突然のことに啞然としている。

俺はとりあえず、一度シルフを待機状態に戻す。

これ以上の魔力消費は、この後に響いてくるからな。

と、そこで原作通り、ユーノから念話が入る。

『二人とも、分かりやすく伝えるよ。今から言うことをできれば、
はやてちゃんもフェイトも外に出られる！』

ああ、分かってるさ。この後のセリフもちゃんと記憶にある。

・・・今度こそ・・・俺はやるんだ！

『どんな方法でもいい。目の前の娘を魔力ダメージでぶっ飛ばして
全力全開！ 手加減なしで！』

「っ！？ さつすがユーノくん！ わっかかりやすい！」

『It's so. (まったくです)』

「だな！」

なのははすぐに魔法陣を展開し、砲撃の準備に入る。

「エクセリオンバスター、バレル展開！ 中距離砲撃モード！」

『All right・Barrel shot』

レイジングハートが魔力をチャージしていく。
さて、そろそろやるか。

「シルフ・・・モード『アーチャー』」
『モード『アーチャー』・・・起動します』

シルフの形状を待機状態から弓へと変化させる。
それに伴い、俺もBJを纏う。

赤原礼装・・・ある聖人の聖骸布から作られた概念武装。
俺の今のBJはその状態だ。

「さあ、やるぞ、シルフ！」
『了解！ チャージ開始！』

俺は弓を弾いた状態で構えると、そこに段々と矢の状態で魔力が溜まっていく。

顕現されるは赤原を駆ける赤き獵犬。

なのはを見ると、丁度チャージが終わったところだった。

「エクセリオンバスター、フォースバースト！」
「シルフ・・・属性付与『雷・風・水』合成！」
『了解。属性『嵐』付与！』

そつだ・・・今やるべきことは、はやてとフェイトをあいっから出すこと。

その時、眼下の海から何か触手の様なものが出てくる。

なのははまだ、砲撃を撃てる状態じゃない。

なら俺がやるしかないか・・・さあ・・・やつらを狩れ！

フルンディング
「赤原獵犬！」

シルフから放たれた真紅の矢は、矢とは思えない軌道を描きながら、触手を全て狩っていく。

その軌跡は、まるで嵐が去ったようなほど、荒れていた。

「今だ、なのは！」

「うん！・・・ブレイク、シュウウウウト！！」

レイジングハートがチャージした魔力を、一気に放つ。

防御プログラムに直撃した直後、一筋の黄色い閃光が上空へと伸び上がる。

エクセリオンバスターの余波が段々治まってきた。

「フェイト！」

アルフが上を見上げながらそう叫ぶ。

俺と俺となのはもそれを確認し、安心する。

はやて side

「防御プログラムの暴走は止まりません。管理から切り離された膨大な力が、じき暴れだします」
「ん、まあ何とかしょ」

そう、うちには責任がある。
うちの為に罪を犯してしまったあの娘たちの為にも。
そやから・・・うちはリインフォースと一緒に、行くんや！

「行こか、リインフォース」
『はい、我が主』

はやて side out

『みんな、気をつけて！ 闇の書の反応、まだ消えてないよ！』

エイミーから通信が入った・・・てことは、今クロノはこっちに向かって来るところか。

さて・・・ここからが踏ん張りどころだな。

すると、海の沖合いに黒いよどみが出現する。

あれは確か・・・

『みんな、下の黒い澱みが暴走が始まる場所になる。クロノくんが着くまで、無闇に手を出しちゃダメだよ!』

「「はい!」」

さあ、そろそろはやて復活の頃か・・・ならあそこらへんに・・・いた。

「悪い、ちょっと行ってくる」

「ふえ!?! どこに」すぐ戻るさ」ってちょっと!?!」

俺はそう言っで、ある人物のもとへと転移する。

「……………」

「よう、高みの見物か？」

「…………君か」

俺が転移した先にいたのは、こっちに向かっていたクロノだった。

「どうした。なのは達のとこに行かないのか？」

「…………僕もそこまでKYじゃないさ」

「…………そうか」

クロノとそんな話をしていると、白銀の閃光が一筋、海と天を繋ぐように輝く。

すると、その光の周りに、守護騎士たちが転移してくる。

さらに光が治まると、中からはやてがBJ姿で現れ、すぐにリインフォースとのユニゾン状態へと変化する。

「…………クロノ、そろそろ行くか」

「…………ああ、そうするか」

「はやて！ はやて！ はやてえ！」

ヴィータがはやてに抱きつき、泣き叫ぶ。

それを見ているなのは、フェイトに他の守護騎士たちの瞳もやさしいものだった。

なのはとフェイトははやてたちのところへ降り立つ。

「なのはちゃんもフェイトちゃんもごめんなあ。うちの子たちが色々迷惑かけてもって」

「ううん」

「平気」

うん、とっても微笑ましい状況なんだけど……まあ状況が状況な

だけにそうも言ってられない。

「すまないな。水を差してしまうんだが・・・時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

「あと、非公認ではあるが、民間協力の巫玲央だ」
「時間が無いので簡潔に説明する」

そう言い、クロノは全員に状況の説明をする。
そして、闇の書の防衛プログラムの停止プランを2つ言うが、どちらも無理だという。

そんなとき、アルフがふと言った言葉を聞き、なのは・フェイト・はやてはあることを思いつく。

・・・よくあんな言葉だけで思いつくよな。
原作知らなかったら、絶対分らないって。

「ほんと、なのはたちはすごいよな」

「えっ!?!」

・・・あれ?　なんで顔が赤くなってるんでしょうか?

「・・・こいつ、天然だな」

何でかわからんが、ウィータ達が俺を睨んでくる。

・・・どうして?

そんなとき、防衛プログラムが動き始める。

さて、原作のフルボッコシーンもいいけど……そろそろ原作
ブレイクといきますか。

俺は、^{ゲイト・オラ・バビラム}聖王の財宝から、1つの指輪と本を取り出す。

「玲央くん？ 何をしてるの？」

「玲央？」

「玲央くん、何やのそれ？」

なのは・フェイト・はやての3人が俺の取り出したものを見る。

「これか？ これはな」

俺は、その指輪を嵌めながら、その指輪の名を告げる。

「……………『皇帝ゲルギラの指輪』だ」

瞬間、俺を除いた全世界の時間が止まった。

第8話：だったら俺が、その幻想をぶちk『もういいですって』・・・消して

作者・玲央「あとがき・・・だよね？　あとがき・・・..
だな！」

玲央「どうして原作ブレイク宣言？」

作者「うん、ぶつちやけ俺の文才の無さが出てきたね」

玲央「・・・つまり？」

作者「ちよつと原作のままだと・・・俺の文才がついて行きません
！」

玲央「よしそこに直れ。今すぐ約束された勝利の剣^{エクスカリバー}ぶつ放してやる」

作者「・・・好きなように」

玲央「・・・調子狂うな、おい」

作者「とりあえず・・・次回予告、頼むわ」

玲央「お、おう。今回はA's 篇終了話です。ただ、フルボッコシ
ーンはありません。オリジナル展開です・・・多分」

作者「さぁ・・・さつさと俺を消し飛ばしてくれ！」

玲央「そこまでのことか！？」

番外編：お風呂って危険だよね（前書き）

玲央「またかよ」

作者「いや、あれ書いた後に思いついただけです、はい」

シルフ『ダメダメですね、作者』

ノイ『ホントですね』

作者「面目ない」

番外編：お風呂って危険だよ

「ふう、こんなもんか」

『マスター、結構汗かいてますね』

「あゝ、ずっと部屋の整理してたからな」

現在、俺は部屋の荷物なんかを整理している。
え、なぜかって？

・・・まあ、色々あるんだよ。

「んじゃ、ちよつくらシャワーでもあゝ」あ、でも今日って水道管
工事やってませんでした？』あ、そーいやそーだ」

『どうします？』

「んゝ・・・ああ、だったら近くに出来たって言う銭湯にでも行っ
てみるか」

『そうですか。それなら私m「お前は置いていく」何ですか!？」』

いや、なんでって・・・

「持っていく必要無いじゃん」

『えゝ・・・』

と言うわけで、今回シルフはお留守番です。
さて、どんなところだろうか？

・ ・ ・ ・ ・

「ここはテーマパークか？」

どう見ても銭湯っぽくないよな？

「・・・ま、まあとりあえず中に入」あ、玲央じゃない」・・・
・ ヒトチガイデス」

「なんで片言なのよ」

・・・嫌な予感がヒシヒシと俺の背中に迫って来ている気がする。
・・・と言うか・・・この場面ってまさか。

「・・・ここで何をしていらっしゃるんでしょうか、皆さん」

俺が後ろを向くと、そこにはなのは、フェイト、アリサ、すずか、エイミィ、そしてなのはのお姉さんの高町美由希さんがいた。おお、これはまさかのサウンドステージ01ですか・・・

「玲央くんは何してたの？」

「いや、ちよつとこの辺を散歩して」あ、それって着替え？」・・・

「ってことは、玲央もここに来たのね？」

・・・皆さん、なんだかすごく嫌な予感がするんですが？

「そうなの、玲央くん？」

「・・・アリサのおっしやる通りです」

「偶然だね。私たちも入りに来たんだよ」

「へ、へえ、奇遇だね」

知ってます。知ってますとも。

生前にサウンドシリーズ全部聞きましたからね。

「じゃあ玲央くん、一緒に」じゃあ俺行くから！」ってちよつと玲央くん！？」

俺は速攻でその場を離れる。

あのままだと、一緒に入ろうって言われるのが目に見えてるからな。とりあえず、男湯に入ればOKだ。

「ふう、露天風呂なんてのもあるんだな．．．．．気持ちいい」

俺は男湯の奥にある露天風呂に来ている。

いや、満月がきれいに輝いてるなあ。

そう思っている時だった。

露天風呂に続く扉がガチャリと開いていく。

だが、その扉は男湯に繋がっているものではなかった。

俺は、従業員用のか？　と思いつつ見ていると。

「もう、なのはとフェイトはなんか良い感じだし、すずかはすずかでどっか行っちゃうし、もうなんなの、よ．．．って、玲央じゃない。あんだここに居たの？」

そこから入ってきたのは、女湯に入っているはずのアリサが入って

きた。

おお、少しは恥じらいつてもんはないのか？

「な、何でアリサがここに？」

「何言つてんのよ。ここ子供用の混浴露天風呂でしょ？」

・・・ああ、だからアリサは気にしてないのか。

そう言うことだと分かって来たから恥じらってないのか。

「もしかして・・・あんた知らなかったの？」

「・・・その通りです」

「はあ、あんたって地味に抜けてんのね」

そう言いながらアリサが俺の方に近づいてくる。

「ちょ、アリサ！？ 何して」「悪い？」「いえ、そんなことはないですが」

すみません・・・真面目にこの状況はきついんですが・・・

「そつえば、あんた誰と暮らしてんのよ？」

「唐突だな・・・俺と兄さんだけだよ」

うん、間違つて無いよな。

ノイは今の俺の状態からだと言った方が自然だ。

「えっ？ じゃあ親はどうしてるのよ？」

・・・うん、ここは勘違いされそうだけど、こう言っしかないよなあ。

「あゝ、親は・・・いないんだよ」

「え・・・ごめん、こんなこと聞いて」

やっぱそう言う反応だよねえ・・・

「はあ・・・気にすんな。もうずっと前からだしな」

「ちよっ!?!?!?!?!」

俺はアリサの頭を撫でながらそう言う。

・・・なんか顔が赤くなってるかい？

「それじゃあ、俺は上がるかな」

そう言いながら俺が男湯の方へと戻ろうとすると、「ちよっと待ちなさいよ!」と言って勢いよくアリサが俺の腕を掴みながら立ちあがる。

直後、ツルっという擬音が合う感じに、俺とアリサが同時に滑る。

「キャッ!?!」

「うおっ!?!」

俺とアリサは思いつきりお湯目掛けてダイブする形になった。
しよ、正直・・・めっちゃいてえ。

「いてて・・・アリサ、大丈夫か?」

「え、ええ、大丈夫、よ・・・」

「・・・・・・・・」

・・・うん、俺が不用意に起こしたのが悪いのは分かります。

・・・皆さん、今の状況、お分かりですよ？

俺は、倒れていたアリサの手を掴み、立ちあがらせた。

そして、起こしたアリサは・・・・・・着けていたバスタオルが湯の中に沈んでいる状態だった。

「~~~~~っ！？／／／／／」

「う、ごめん！！／／／」

俺はすぐにお湯の中に沈んでいたタオルを拾い、アリサに渡す。

・・・・・・もちろん、視線は逸らした状態です。

「「・・・・・・」」

やべえ、やべえよ。

すっごく出て行きづらいよ。

どうすっかなあ・・・・俺、謝ったよね？

『謝ったって言うか・・・・誤った？』

『黙れノイ！』

『はいはい』

くそ、ノイのやつ・・・・後でぶちのめしてやる。

「・・・・れ、玲央」

「な、なんだ？」

すっげえやりづれえよ。

どうしたらいいんだよ・・・・神様。

・・・・あ、神様じゃダメか。

「あ、あんたどうしてくれるのよ」

「な、何g「私がお嫁に行けなくなったら」え、えっと・・・」

ちよつと待つてほしい。

なんか嫌な予感がするのだが？

「も、もし、私がお嫁に行けなかったら・・・あんた責任取りなさ
いよ／／／／」

「えっと・・・それって・・・」

「・・・ど、どうなのよ／／／／」

アリサが顔を赤く染めながら聞いてくる。

・・・うん、軽く昇天しそうだわ。

「あゝ・・・わ、分かりました／／／／」

「そ、そう／／／／」

「あ、ああ・・・そ、それじゃあ俺、上がるからな／／／／」

「うん・・・／／／／」

俺は真赤になりながら露天風呂から男湯に戻る。

最後にチラッとアリサの顔を見ると、のぼせてるんじゃないかって
思うほどに真っ赤になっていた。

それを見て、俺も自分で分かるほど、顔が真っ赤になっていく。

・・・神様・・・はダメだから、仏様、俺は一体何をした
んでしょうか？

『仏じゃないけど来ましt「今すぐ消えろ」わ、分かりましたから
鋤下ろしてください！』

番外編：お風呂って危険だよね（後書き）

作者・シルフ「『あとがきです。あとがきなんです』」

作者「ってあれ？ 玲央は？」

シルフ「マスターならどこか行っちゃいましたよ？」

作者「・・・どこにだよ？」

シルフ「さあ？」

作者「・・・まあいいか」

シルフ「さて、次回予告なのですが・・・投票形式にするって聞きましたか？」

作者「ああ、選択肢は下の2つですね」

1：玲央となのはの甘話

2：玲央とフェイトの甘話

作者「の2つから選んでください。票の多い方から書きます」

シルフ「とか言ってますが、今まで感想書かれたこと無いじゃないですか」

作者「言うな・・・分かってるから」

シルフ『ああ、誰も投票してくれないのを覚悟でやってるんですね、
わかります』

番外編：惹かれる風、輝く雷

「……………はて、どうしてこうなったんだっけ？」

「どうしたの、玲央？」

「ああ、なんでもない」

俺、巫玲央は、フェイトと一緒に繁華街に来ている。

そして現在進行形でフェイトがスプーンに乗せたアイスを俺に差し出している。

……………なぜこうなったかは、下を見てくれ。

「・・・さて、どうしたもんか」

『どうかしましたか、マスター?』

「いや、そろそろ買いだめしておいた食材やら何やらが切れそう買いに行こうかと思ったんだが」

『行けばいいじゃないですか』

「いや・・・まあ分からんでもないがな・・・量がちょっと」

『多いと?』

「その通り」

『あ、だったらちようどいい人がいるじゃないですか』

「は? ちようどいい人? 誰だよ?」

『ほら、隣n「待て、それ以上言うな。嫌な予感g」玲央、いるかな?」ってマジでヤバス」ちようど来たじゃないですが』

そんなことを言っていると、玄関の呼び鈴が鳴らされる。

・・・うん、まあ誰か分かってるけどさ。

「・・・なにか御用でしょうか、フェイトさん」

「?? 玲央、どうかしたの? 言葉遣いがちよつといつもと違うよ?」

「・・・いや、なんでもない」

「そう?」

フェイトよ。どうして君はタイミング悪k『ナイスタイミングですね』黙れやクサレデバイス!

「・・・ところで、何の用だ?」

「あ、うん・・・ちよつと買い物に付き合っで欲しいなあって思っで」

「あゝ．．．まあいいか」

「え？」

「いや、こつちの話。OK、買い物行くか」

それを聞いたフェイトの顔は、すっごく綻んだ。

．．．．．かわいいじゃねえか。

「じゃ、じゃあちよつと準備してくるね？」

「いいつて、すぐ行くぞ」

「え、でm「いいから」う、うん／＼／」

とりあえず、頭を撫でてみたが．．．何でみんな顔を赤くする？

．．．．．まあとりあえず、買い物に行くか。

「悪いなフェイト。先に俺の買い物しちゃって」
「うっん、気にしないで」

繁華街に来た俺達。

フェイトに何を買いに来たのか聞くと、俺も何か買いたいものがあるんじゃないかと聞いてきた。

もちろん断ったのだが、フェイトは中々引き下らない。
仕方ないので、先に俺の買い物をした、と言うわけです。

「そんじゃあ、次はフェイトの買い物・・・ってこの荷物じゃ行けないか」

「あはは、そうだね」

俺達の両手には大きな買い物袋が握られていた。
正直、どうしてここまでになってちよくちよく買いに行かなかったのかと思う。

・・・まあいいか。

「それよりも、フェイトにはなんかお礼しなきゃな」

「え、そんな、気にしなくも」いいから行くぞ」ってどこに？」

「あそこ」

と、俺は指差しながら言う。

フェイトがその方向を見ると、そこにはアイスクリームの売店があった。

そして、現在に至るのです。

「・・・なあ、フェイト。これやらなきゃダメk」あゝん／／／
あ・・・あゝん／／／」

く、自分でやったこともあるから分かるけど、やっぱりハズイ。
俺はチラッとフェイトの顔を見ると、ちょうどフェイトも俺の方に
目をやる。

「「あ・・・／／／」」

・・・フェイトの顔がどんどん赤くなっていく。
フェイトよ。恥ずかしいならやらなくて良かったのでは？

そして周りの人たちよ……そんな微笑ましいものを見るような目で俺を見ないでくれ！

「さ、さて、そろそろ行くか」

「う……うん」

そう言いながら、俺達は席を立とうとする。

と、俺はあることに気が付き、フェイトに近付く。

「ど、どうしたの？」

「ちよつといいか？」

俺はフェイトの口の近くに付いたアイスを手で拭う。

「ん……何？」

「アイスが付いてただけ」

「あ、ありがっ！？」

俺は、とりあえずそのアイスをペロリと舐める。

……あり、フェイトの顔がさっきよりも赤くなって無いか？

……気のせいだよね？

「と、とりあえず行くか」

「うん……／＼／＼」

俺とフェイトはそれから暫く、色々見て回った後、マンションまで戻った。

「今日は買い物に付き合わせて悪かったな。今度なんかお礼するかな」

「気にしないでいいよ」

フェイトは笑顔で俺に笑いかける。

やば、すぐに逝けるわ。

と、俺がそんなことを思っているとも知らないフェイトが俺に近づいてくる。

「ん、どうした？」

「うん、ちょっと耳貸して」

「ん、いいけど」

俺はフェイトに言われるまま、フェイトの方に耳を傾ける。

次の瞬間、頬に柔らかな感触がした。

目を向けると・・・フェイトが俺の頬にき、きききキスをしている
じゃないか!?

「ちよっ!?! / / / /」

「じゃ、じゃあね! / / / / /」

フェイトはそう言つて、自分の部屋へと戻つていった。

・・・ヤバい。マジで顔が赤くなつてゐる。

・・・とりあえず、部屋に入るくへ、玲央さんとフェイトちゃんつてそういう仲なんだあ」ってなのはさん!?

「い、いや・・・これはですね?」

「・・・玲央くんはフェイトちゃんのが好きなんだ」

なのはは涙を瞳に溜めながら呟く。

・・・まったく、こいつは。

俺はゆつくりとなのはに近付いていく。

「・・・今は誰かなんて決められないけどな、分かっていることもある」

「・・・何?」

俺は、なのはの頭を撫でながら、軽く抱きしめる。

「俺は・・・なのはも、フェイトも、アリサも、すずかも・・・みんな大好きだ」

「れ、玲央くん・・・ / / / /」

少しの間……なのはが落ち着くまで、俺はなのはを抱きしめたまま待つ。

「……もう、大丈夫だよ」
「……そうか」

暫くして、漸くなのはは落ち着いたらしいので、俺は抱きしめている腕を離す。

なのはの顔を見ると、ちょうど目が合った。

俺が軽く微笑むと、なのはも微笑み返してくれた。

「あ、そうだ！ 玲央くん、今日私の家に来ない？」
「えっ？」

なのはさん、時間を考えてください。

今、夕方ですよ？

今から行くと夕飯を「ごちそう」で「うちで夕御飯食べよ」「ってそのつもりだったんかい！

「い、いや、でも悪いって」「だめ・・・かな・・・？」「っ！？」

・・・上目遣いをお願いは反則だって。

・・・まあ断らないけどさ。

「・・・はあ、分かったよ」

「ホント！？」

「ああ・・・ならまず荷物置いてくるから、それから行くか」

「うん！」

俺となのはは、俺が荷物を置いてからすぐに、なのはの家へと向かう。

『マスター！私を忘れてますよ！？』
『……自分たち、完全に忘れられてますね』

番外編：惹かれる風／輝く雷（後書き）

作者・ノイ「あながきだと良いですが……ああ、あながきだつたんですね」

ノイ「……言うか今思ったんですが」

作者「なんだ？」

ノイ「このコーナーの名前って……決まって無いんですね」

作者「あ……特にコーナー名決める必要ないと思ってな」

ノイ「まあ別に気にしませんが」

作者「それでは今回の感謝コーナー！」

ノイ「今回ってか、初ですね」

作者「冬夜様、門倉甲様、応援ありがとうございます！とても励みになります！」

ノイ「ホント、奇跡ですよね」

作者「いや、本当にありがとうございます！」

ノイ「さて、次回ですが……今回の続きですか？」

作者「はい、なのはとの甘話です」

ノイ『ちなみに自分や玲央くん、シルフさんに質問のある方はどしどし聞いてください』

作者「……どんな質問が来ても知らねえぞ」

ノイ『心配ありません。ないと思っていますから』

作者「何気に酷いよな、お前」

番外編：惹かれる風／煌く星／

「玲央くん」

「な、なのは、ここでそれはやめと「嫌かな？」いえ、そんなことありません」

現在、俺は高町家で夕飯を御馳走になっている。

そして・・・現在進行形で、なのはに腕を掴まれている。

・・・食事中に、なのだ。

正直、めっちゃ食べ辛い。

「なのは、やっぱり食べ辛いから離しと」だったら私が食べさせてあげる」おお・・・」

やべ、俺地雷踏んじやったよ。

しかも・・・美由希さんと桃子さんは、俺となのはをやさしい笑顔で見つめ、恭也さんと土郎さんはなぜか睨みつけてくる。

・・・や、やりづれえよ。

「はい、玲央くん。あゝん」

「・・・あ、あゝん」

しかし、なのははそんなことお構いなしにおかずを摘んだ箸を俺の方へ突き出す。

もちろん断りたいが・・・満面の笑顔でされたら断れるわけがない。

俺はされるがままに、なのはの差し出してきたおかずを食べる。

・・・うん、おいしいね。

「なのは。それじゃあ玲央くんが食べにくいd」「お兄ちゃん黙ってて」「あ、ああ……」

恭也さん、お願いだから殺気を込めて俺を睨むのやめてください！！
士郎さんも地味にその視線がキツイです！

そんな視線を浴びながら、俺は高町家での夕食を終える。

「そ、それじゃあ俺、帰るk」「今日はもう遅いから泊っていったらどうかしら？」「い、いや、さすがにそれは悪いd」「いいじゃない、泊っていきなさいよ」……はい、お願いします」

「玲央くん泊るの!？」

「あ、ああ、そうだった」

なのはがその場で「やったあ!」と喜んでいるが、俺はそれどころじゃない。

家に置いてきたシルフとノイのことが心配……じゃないな。
あいつらなんかどうでもいいか。

「それじゃあ、部屋へ案内するわ」

「あ、はい、お願いします」

俺はそう言われ、桃子さんのあとをついて部屋を出ていく。

案内された部屋は、どうやら客間らしく、すでに布団が敷かれていた。

……つてちよつと待てえ！

「あの……なんですすでに布団が？」

「フフフ……内緒よ」

「はあ、そうですか」

いや、おかしいでしょ。

俺が来た時にはみんなリビングにいたし、それ以降部屋から出た人いなかったから……まさか俺、嵌められた！？

「それじゃあ、ゆつくりしていつてね」

「は、はい……」

普通に嫌な予感がするが……もういい、寝てしまえばいいんだ。

そう思い、俺はすぐに寝るために、部屋の電気を消して布団に入る。直後、部屋の外からドタドタとこちらに向かってくる足音が聞こえてきた。

「あれ、もう寝ちゃったのかな？」

「そうみたい。もっと玲央ちゃんと遊びたかったのになあ」

と、外から聞こえてきたのはなのはと美由希さんの声だった。やっぱり、そう言うことが。

俺は危なかったと思いつつ、外の会話に聞き耳を立てる。

「んゝ、どうするなの？」

「玲央くん、寝てるんだったら起こしちゃ悪いよ」

「そうだね……あ、良いこと思いついた」

「何？」

「あのね……」

とそこで声が聞きづらくなった。

どうやら美由希さんがなのはの耳元で何か言っているようだ。

「ふえ、ふええ!？」

「じゃ、頑張つてねえ」

と、そこで美由希さんが部屋の前から立ち去ったらしい。

なのはは・・・まだいるみたいだ。

少しして、俺の部屋になのはが入ってきた。

・・・嫌な予感がしますね。

「・・・お、お邪魔します」

そう言いながら、なのはは俺の寝ている布団へと入ってくる。

とりあえず、俺は寝たふりを続けることにした。

「・・・・・・・・玲央くん」

俺の名前を呟きながら、なのはは俺に抱きついてくる。

・・・・・・・・り、理性が・・・ヤバス。

さすがにヤバくなってきたので、俺はなのはの肩を掴んで引き離す。

「ふえ!？」

「わ、悪い・・・なのは」

「れ、玲央くん!？」

なのはも俺が寝ているものだと思っていたため、かなり動揺している。

ヤバイ、ちょっと顔見れないわ。

「あ、あのあの、えっと・・・・・・・・／／／／／」

「・・・・は、早く部屋に戻ったら?」

「え・・・・・・・・あ、あの、玲央くん!」

「な、何？」

俺はなのはの方を見ようとした時、なのはが俺の背中に抱きついてきた。

「な、なのは！？」

「お、お願い、玲央くん・・・今日だけ、一緒に寝て」
「っ！？」

俺は背中に抱きついたなのはの顔を見してみる。

と言っても、顔自体は背中では隠れているから、ちゃんとは見えないが、見た感じ顔がめちゃくちゃ赤くなっている。

しかもたまに俺の顔をチラチラ見てくるので、そのしぐさがものすごく可愛く思える。

・・・普通に逝けますね、これ。

「・・・きよ、今日だけだからな／＼／＼／＼」

「う、うん！／＼／」

・・・恥ずかしいならやめればいいのに。

・・・まあいいけどさ。

俺となのははまた布団に潜り込む。

なのはは俺の背中に抱きついたままだけど・・・

「ねえ、玲央くん」

「・・・何？」

ふと、なのはが俺の背中に抱きついたまま俺の名前を呼ぶ。

「私ね・・・玲央くんのが大好きだよ」

「・・・なのは、俺h「分かってる！・・・分かってるよ」なのは・・・」

なのはが背中に抱きついたまま、少し震えだす。
すると、俺の背中にひんやりとした感覚を感じる。
もしかしなくても・・・泣いてるよなあ。
・・・まったく、こいつは。

「・・・なのは」
「ふえ？」

俺はなのはの名前を言いながら、なのはの方を向き、やさしく包むように抱きつく。

なのははいきなりのに驚いていたが、すぐにまた俺に抱きついてきた。

「言っただろ、俺はみんなが大好きなんだ」
「・・・うん、分かってる」
「なのは・・・大好きだよ」
「私も・・・とっても大好き！」

俺となのははお互いの顔を見ながら、眠りに就く。
・・・え？ 他には何かしなかったのかって？
やだなあ、俺はペドでもロリでもないですって。
・・・まあ可愛いとは思いますが。
だからと言って何もしてませんよ！

『ねえ、ノイさん。私たち、どうしたらいいんでしょうか？』
『とりあえず、玲央くんを信じて待ちましよう』
『そうですね。マスターならきっと』
『玲央くんならきっと』

『『なのはちゃん(さん)に手を出しているはずですよ!』』

・・・・・なんか誰かに変なことを期待された気が・・・気のせいだよな。

番外編：惹かれる風／煌く星／（後書き）

作者・玲央「とりあえずのあとがきコーナー」

作者「早速ですが、今回の感謝コーナー」

玲央「門倉甲様、お早いコメント、ありがとうございます！」

作者「ホント、ありがとうございますよね」

玲央「そう言えば、他にも言いたいことがあるって？」

作者「その通り。なんと・・・PVが35000を超えました！さらにユニークは4500超です！」

玲央「・・・すごいんだよね？」

作者「俺にとってはとてもすごいことだ！」

玲央「確かに・・・こんな駄文を読んでもらっている皆様に俺も感謝しています」

作者「もちろん、私も感謝してもしきれません！！本当にありがとうございましたー！！」

玲央「まあその割には感想とかは書かれてないけどな」

作者「黙れ！皆さんが見てくれていることが重要なんだよ！それにこの小説をお気に入り登録してくれている方も46人いるん

だぞ！」

玲央「そ、そんなにいたんだな」

作者「もう皆さまには感謝感激です！」

玲央「……とりあえず、作者が軽く暴走気味になっているので、次回予告。次回は……今度こそA・S篇最終話です……多分」

作者「次回も皆さんに読んでいただけると嬉しいです！」

第9話：終わりは始まり

「アースラ内部」

アースラ内部は今、突如地球上で起きた事態に混乱していた。

「なのはさん！」

「な、なんで！？ 地球上の時間が全て停止しています！」

「どういうこと！？」

『悪いな、俺が止めさせてもらった』

「「玲央くん！？」」

そう、ここからが、俺の計画・・・

これ以上、はやてたちに負担を掛けるわけにはいかないからな。

『玲央くん、どう言うこと?』

俺に何をしたのか聞いてくるエイミィ。

リンディさんも、同様にどういいうことが気になるようだ。

・・・ま、当たり前か。

「俺が今指にはめている指輪、これは皇帝ゲルギラの指輪って言うてな。この指輪をはめている間だけ、俺以外の時間を止めることができるんだ」

『何ですって!?!』

『そんなのって・・・ロストログア級じゃない!』

「まあな・・・それでだな、リンディさん」

『何かしら?』

「これから俺がすることを記録しないでほしいんだ」

『・・・ごめんなさい。それはできないわ』

「まあ・・・だろうな」

そう言いながら、俺はまた聖王の財宝を展開し、手鏡ゲート・オブ・パピリムのようなものを生成する。

「本当は見られなくなかったんですが・・・まあいいでしょう」

『・・・玲央くん、それが何か聞いていいのかしら?』

「ええ、いいですよ」

リンディさんが俺に今出した手鏡のことを聞くので、それを見せな

から説明する。

「こいつの名前は『アルパトランの鏡』って言います。効力は……鏡に映った相手の存在を世界から消すんです」

「……またロストロギア級のものね」

「まあ……そうですね」

「その手にしてる本もそうなのかしら？」

「ああ、こいつは今は使いません。目の前の闇の書の闇を消した後で使います」

「……そう」

「良いんですか、艦長？」

「ええ、今は彼に任せましょう」

それ以降、リンディたちアースラとの連絡は切れた。

「……マスター。本当によろしいんですか？」

「ああ……さつさとこいつを消すか」

俺は手に持った手鏡を闇の書の闇に向け、呪文を唱える。

「……ルグドル」

瞬間、海上にあつた黒い澱みは一瞬で消えた。

今頃リンディさんたちは驚いているだろうけど……実際は完全に消滅したわけじゃないんだよな。

「……さて、最後の仕上げでもするか。」

「エルゼフの写本」

俺は、手に持っていたアルパトランの鏡を聖王の財宝に戻すと、手

に持っている本のページを開く。

『マスター……』

「言っただろ……こいつの後始末は、俺がつけるって」

開かれた本の中身は全て白紙だったが、俺はそうだと知っていたから驚きはしない。

この本の使用方法は簡単だ。

自分の心の中で、特定の事を思いながら唱える。

それだけだ。俺は自分のことを思いながら、この世界で出会った人々を思い出している。

「……みんな、元気でな」

特定の事を思いながら唱えたらどうなるかって？
それは、その特定の事を

「ラデル」

忘れるんだ。

なのは side

「・・・ふえ!？」

「なのは・・・大丈夫？」

「なのはちゃん、大丈夫かあ？」

「う、うん、大丈夫だよ。フェイトちゃん、はやてちゃん」

あれ、私、何してたんだろ？

・・・あ!？ そう言えば闇の書の防衛プログラムを破壊しなきゃ！

「フェイトちゃん！ 防衛プログラムは!？」

「うん、私たちもさつき気がついたんだけど、どこにも見当たらないの」

「えっ!？」

私が周りを見ると、クロノくんやヴィータちゃん達守護騎士の人も辺りを調べてる。

すると、突然エイミーさんから通信が入る。

『みんな、こつちでも調べてみたけど、完全に反応が消えてるの!』
「・・・一体どういうことだ?」

クロノくんたちが不思議に思いながら、考え込んでいる。
それを見ながら・・・私は何か心に引っかかるものがあるような気
になってくる。

そう、何か忘れてるような気が・・・

なのは side out

Ⅱ 第102管理外世界・現地惑星名称『メビウス』Ⅱ

「・・・シルフ、覚悟は良いな？」

『ええ、マスターが覚悟を決めて行動を起こしたのに、私が覚悟決
めないでどうするんですか』

「OK・・・ノイ、周囲の結界を頼む」

「わかりました・・・玲央くん」

「なんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・死なないでくださいね？」

「それ軽く死亡フラグ入ってるからな」

「あ、ばれました？」

「ばれるだろ・・・・・・・・」

俺とシルフ、ノイは今、地球とは違う次元世界へと来ている。

ちなみに現地惑星名称つてあるけど、実際は無人で、この星に昔住んでいた種族がそう呼んでたらしい。

どうして俺達がここに來たのか。それは・・・・・・・・

「行くぞ、シルフ！」

「はい、マスター！」

俺は聖王の財宝からアルパトランの鏡を取り出すと、それを空高く投げ上げる。

暫くしてから、手鏡が地面に落ち、割れ散る。

『いろいろgじよsrglkfじよみrwmfngじrneごあじえろ
fnsdじvmこえんじぎえ』

直後、何を言っているのか分からない雄叫びの様なものが聞こえてきた。

すると、鏡の割れ散った場所より、その鏡に取り込まれていた闇の書の闇が現れる。

「シルフ、モードW『鎚・鈍』」

『了解、モードW発動。『鎚・鈍』』

俺は闇の書の闇の出現を確認すると、シルフを鎚と鈍の2つの形態へと変化させる。

同時に、2つの刀に今ある俺の魔力全てを均等に込める。

『マスター、闇の書の闇のバリアは物理と魔法の複合4層式ですよ！バリアが張られる前に早く！』

「分かってるって。今のうちに……一瞬にして消し去ってやる！！」

今ならリンカーコアがむき出しで、再生していてもまだバリアが展開できるほどではないだろう。

だから今、俺が出しうる最大出力で……やつを消し去る！

「双刀『鎚』 限定奥義……双刀之犬！」

双刀之犬……双刀『鎚』を振るって敵に飛び掛り、寸前で持ち手を変えて剣の反対側をぶつける打突攻撃。

どちらが上か分かりにくい双刀『鎚』の構造を利用した技。

形状が双刀『鎚』が元になっているシルフのモード『鎚』だからこそできる技。

俺が放った攻撃をまともに受けた闇の書の闇は、近くの木に吹っ飛ぶ。

その瞬間、ショックでリンカーコアが丸出しになったのを見た俺は、瞬時に鈍を俺の血で濡らす。

「斬刀『鈍』 限定奥義……斬刀狩り！」

鈍が放つ光速の居合い斬りが、リンカーコアを真つ二つに叩き斬る。直後、そのリンカーコアは消滅し、闇の書の闇の残骸も消えていく

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」
お、終わ……。た」

『マスター！？ マスター！』

闇の書の闇が消滅したのを確認した俺は、直後……意識を失った。

ああ……何だろう……。なんだか気分がいいや。

ああ……何だろう……。なんだか気分がいいや。

「君にはまだ、消えてもらっては困る」

玲央「知らねえよ！」

作者「最後に・・・こんな小説でも毎回お読みになってくださる皆様に感謝感激です！」

玲央「これからも、お読みください。こんなどうでもいいやつの小説でも読んでくださると俺もうれしいです」

第10話：神々の審判

??? side

『……最高神ゼウス様、お連れいたしました』

『……うむ、下がれ』

『はっ!』

ここは神々の住まう居城、ヴァルハラの一室。

今、この場に世界のさまざまな神が一堂に会している。

『ゼウスよ。我らまで呼び出して何かと思えば……なんだこの人間は』

目の前に横たわっている人間を少し見下すように見ているのは、エジプト神話で有名な太陽神・ラー。

『あら、私は結構好みのタイプだから別にいいんだけどなあ』

横たわっている人間を興味津々と言った感じで見ているのは、ラーと同じで日本での太陽神と言われている、天照大神。

『と言うかゼウスさん。なぜこんなに太陽神が多いんだ?』

ゼウスに軽く不満を言っているのは、ローマ神話での太陽神・ソール。

『太陽神……まさかゼウスよ。その者を蘇らせる気が!?』

ゼウスの考えを1番に理解したのは、北欧神話の最高神・オーディン。

『ゼウス、今オーディンが言ったことは……本当かの?』

『……ああ、間違いではない』

『ゼウスよ、それがどのようなことか分かっておるのか!?』

『ラーにオーディン。ちよつとは落ち着きなさいよ。きつと何か考えがあるのよ』

『そうなんですか、ゼウスさん!?』

『そうじゃ……こやつには、まだ死なれては困るのじゃ』

そう言いながら、ゼウスは立ちあがり、人間の元へ行く。

『こやつには、今までいた世界で起きる異変を解決してもらわなくては困るのじゃ』

『どう言っことだ?』

『これより先、こやつが消えた世界で起きることを、皆に教えよう』

そう言いながらゼウスは、ある映像を流し始める。

それを見た他の神々は、全員驚愕していた。

『な、なんだこれは!?』

『ど、どうしてこんなことに!?』

『に、人間がほぼ全員……』

『滅んでおる……じゃと!?』

そう、その映像に映っていたのは、その世界の人類……人間と呼

ばれる生物がほぼ全て死滅している映像だった。

そして、その中心に佇む1つの影。

それは・・・まるで死神の如く漆黒のローブに身を包み、その手にはローブと同じ漆黒に輝く大鎌が携えられている。

『ゼウスよ。こやつは一体何なんじゃ？』

『・・・世界の咎人、悪の根源、ルシファーの力を得し者・・・名付けるなら、ルシフェリア』

『これって・・・なんとかならないのかしら？』

天照大神はゼウスにどうにかならないのか聞いてみる。

しかし、ゼウスは首を横に振る。

『無理じゃな。どの因果律を見ても、こやつはこの時代、この時間に現れ、人間達を次々に殺していきおる・・・ただ1つの因果律を除いての』

『ゼウスさん、その1つって言うのはもしかして』

『ああ、こやつがあの世界で生きていると仮定した因果律を見たとき、こやつがルシフェリアを抑えておった』

『ふん、我らが出向ければいいのだがな。太陽神故に、人間共が我らの発する熱に耐えられんからな』

『仕方ないわね。私とラーとソールの能力で、彼を蘇生させるしかないわね』

天照大神は横たわっている人間へと近付く。

ラーとソールも、天照大神同様、人間へと近付く。

3神は各々の掌を人間へと向け、蘇生の為の術を発動する。

『『蘇生の陽光』』』

3 神がそう言うと、各々の掌から淡い光を放つ球体の様なものが現れ、その光が人間の中に溶け込んでいく。

「・・・・・・・・ん、んん・・・・ここはどこだ？」

少しして、横たわっている人間が目を覚ます。

『・・・・・・・・目覚めたか、巫玲央』

「ん、あんたは誰だ？」

そう、目を覚ました、先程まで死んでいた人間こそ、闇の書の闇との戦闘で生命力をも魔力にし、使い果たし死んだ、巫玲央その人だ

第10話：神々の審判（後書き）

作者・玲央「あとがきコーナーです」

作者「早速感謝コーナー！」

玲央「門倉甲様、毎度ありがとうございます」

作者「そして、他の皆さまからの感想もお待ちしております！」

玲央「お願いってか、もう懇願っぽくなってるよなあ」

作者「まあ・・・頑張ります」

玲央「さて、次回は・・・今回の続きか？」

作者「そうだな。ゼウスから色々と説明を受ける話です」

玲央「ってか、俺死ぬの2回目だよな」

作者「・・・・・・・・・・気にするな」

玲央「よし、ちょっと裏行こうか」

作者「だが断る！（逃走）」

玲央「ちょ、待て！」

・・・マジで何故？

『お前、全く気付いてなかったのかよ』

「何が？」

『お主、自分の生命力をも魔力に変換しておったんじゃないぞ』

「・・・マジか！？」

『マジだ』

「そ、そうか」

うん、どうやら嘘じゃないらしい。

・・・あれ、てかなんで俺、ここに居るんだ？

「なあ、俺は何でここに居るんだ？」

『うむ、それをこれから話すところじゃ』

そっついながら、見た目滅茶苦茶威厳がある老人の姿をした神が俺に近付いてきた。

「あんたは？」

『わしはこの神たちを束ねる長、ゼウスじゃ』

「ゼウス・・・最高神か」

『ほう、やはり知っておるか』

「知らねえほうが少ないって」

『まあそれもそうじゃな。それより、今回お主をここに連れてきた訳じゃがな・・・』

それから、ゼウスは簡潔に俺へ説明をする。

これから現れる敵のことを・・・

「なるほどな。それで俺が生きてないとダメだと」
『そうじゃ。』

しかし驚いたな。

その敵が現れるのがS t Sの終了して1年後かよ。
ある意味、ご都合主義だよな。

『それでお主に生き返ってもらっんじやが、1つ能力を追加しておいた』

「能力を？ 一体何の能力だ？」

『決まっておろう。不老不死じゃ』

「あゝ・・・じゃあ俺年取らん」『いや、ちゃんと周りの者と同様、

成長はしていくぞ?」じゃあなんなんだよ?」

『正確には『半不老不死』ってところかしら?』

「半って・・・どゆこと?」

『寿命以外では死なないようにしただけですよ』

おお、分かりやすい。

・・・と言うか、結構有名な神様たちだよなあ。

ゼウスはもちろん、天照大神にラー、オーディンときたもんだ。

ソールは・・・確か道具とかモンスターの名前にソルって入ってるのが太陽と関係してるから、それか?

『あと、魔力やらなんやらのエネルギーは無尽蔵にしといたからね』

と言いながら、俺にウインクしてくる天照大神のお姉さん。

・・・ちよつと俺の中のイメージが壊れかけてるんだが、まあいいか。

「んで、俺はこれからそいつら倒すための仲間を集めりゃいいんだな?」

『その通りじゃ』

「だったら早いほうがいい。今すぐ戻してくれ」

『分かった・・・そうじゃ、こやつらも連れて行け』

そう言いながら、ゼウスは指を鳴らす。

その直後、俺の前に現れたのは、見覚えのある人物だった。

「ノイか!？」

『無事に蘇生できて良かったですね、玲央くん』

「ああ、本当に良かった・・・って、ん?」

ふと、ノイの後ろを見ると、そこに俺と同じぐらいの大きさの女の子が隠れていた。

誰だろうと思っていると、徐々にその女の子の瞳に涙が溜まってきた。

そして、次の瞬間……彼女は俺に抱きついてきた。

「マスター！ マスター！ 心配しましたよ！」

「そ、その声まさか……シルフ!?」

「はい！ マスターのことが大好きなシルフです！ マスターのことを誰よりも愛しているシルフです！」

一瞬、ふざけているのかと思ったが、シルフの顔を見ると涙で顔がぐちゃぐちゃになっていた。

……ホント、俺って……

「ダメなマスターだよな」

「そ、そんなことはありません！ マスターは世界で1番強くて、カッコよくて、素敵で……最高のマスターです！」

「……ありがとな、シルフ」

俺はシルフの頭を撫でながら、落ち着くのを待つ。

とりあえず、俺はアイコンタクトでゼウスに『お前がやったのか?』と聞くと、ゼウスもアイコンタクトで『どうじゃ、可愛いじゃろ?』と言ってきた。

俺は心の中で、ロリコンか!? と突っ込みを入れなくなっただが、とりあえずやめた。

そんなやり取りをしていると、いつの間にかシルフが泣き止んでいた。

それどころか笑顔になっており、それを見た瞬間、一瞬だけドキッとした。

やべえ、滅茶苦茶可愛い。

「………言っておくが、俺はそこまでロリコンじゃねえぞ！」

『そうじゃ。お主、他のものから記憶を奪っておったの』
「………ああ」

そりゃそうだ。

俺はもう、あいつらと会うつもり無かったんだからな。
StSのときは、気付かれないように手助けするつもりだったからな。

「それがどうかしたか？」

『うむ、その記憶なんじゃがの……しばらくしたら戻るようにし
といたからの』

「ちょ、待て！ 何かってn」『言っただじやろ、今度の敵はお主1人
だと抑えるだけで精一杯じゃと！』だ、だけど……」

これ以上、あいつらを巻き込みたくない。

そう、言おうとした……が、何かがそうさせなかった。

「マスター……無茶をしないでください」

「シルフ……」

「マスターが居なくなったら私、どうしたらいいんですか。私だけ
じゃありません、なのはさんにフェイトさん、アリサさんにずか
さんにはやてさんも、みんな悲しみますよ……」

そうかもしれない……そうかもしれないからこそ、記憶を消した
んだ。

だけど、それは……俺が間違ってたのかもしれない。

俺は、シルフをゆっくりと抱きしめた。

「ま、マスター！？／／／／」

「悪い、しばらくこうさせてくれ」

「・・・はい、マスター」

そう言うと、シルフも俺を抱きしめてくれた。

ありがとう、シルフ。お前のおかげで気付けたよ。

・・・俺はもう・・・無茶をしない。

俺のことを想ってくれる人がいるから。

『それでは行きますか、玲央くん』

「ああ、そうだな。行くぞ、シルフ」

「はい、マスター」

シルフは返事をする、すぐにデバイス待機モードのボールペンへと変わる。

あのあと聞いた話で、シルフは普通のデバイス状態とユニゾンデバイスの状態の両方へと変わることができるらしい。

正直、デバイスモードの鎚と鈍を使えなかったらどうしようかと思っただ。

『それでは、よろしく頼むぞ』

「任せとけて」

「行ってきます！」

『それでは失礼いたします、ゼウス様』

俺・シルフ・ノイは別れを告げながら、もとのなのはたちの世界へと戻る。

StSシリーズまで、まずは仲間を集めないとな。

第11話：巫玲央、完全復k『ネタです、はい』・・・もういいや（後書き）

玲央・シルフ「あとかきのコナ！」「」

玲央「ってか作者のやつ、まだ帰ってこないのかよ」

シルフ「マスターのせいですよね？」

玲央「気にするな。そんなことより感謝コーナー！」

シルフ「門倉甲様、毎回本当にありがとうございます。私も感謝です！」

玲央「と言うか、ほんとにいい人だと思う。こんな駄文に感想書いてくれるんだからな」

シルフ「さて、マスター、次回は？」

玲央「とりあえず、まだStSシリーズには入らないらしい」

シルフ「ってことは仲間集めですか？」

玲央「さあ、わからん。ってかさつきから気になってたんだが、あのベッドなんだ？」

シルフ「ああ。私とマスターでイチャイチャしていいってことです
ね、わかります！」

玲央「ってシルフ!? 何で俺をあのベッドへ引っ張っていいことと

してるんだ!？」

シルフ「さあ、折角人間のような身体になれたんですから、愉しみましようよ、マスター」

玲央「ちょ、待って! マジで待って! 待て待て待て」

作者「あ、映像切れちゃったよ。全く」

ノイ『あなたも楽しそうですね』

第12話：仲間1号・・・・・・・・えっ？

「さて、戻ってきたな」

『戻ってきましたね、マスター』

俺は神のいた場所から転移し、俺達が元々いた惑星メビウスへと戻って来ていた。

「さて、ノイ。ひとつ確認したいことがあるんだが」

『なんですか？』

「しばらくしたら記憶が戻るってゼウスが言ってたが、どのくらいだ？」

『えつとですねえ・・・・・・・・ああ、あと1年くらいしたら戻ります』

「・・・・・・・・そうか、分かった」

とりあえず、1年経つ前に一度地球に戻るか。

それまでに1人くらい仲間に出ればいいg『マスター、この先に生体反応が』て人の思考に入りこむほどの事か？

「それぐらいあるだろ。鳥や獣の類はいっぱいいるし」

『いや、それが・・・・・・・・』

何かを言い澀むシルフを見て、俺は怪訝に思った。
一体何があるんだよ。

「・・・・・・・・いいから言え」

『・・はい。この先から感じる生体反応ですが・・・・・・・・竜族のものなんです』

「……はい？」

「りゅうぞく？ リュウゾク？」

「……竜族！？？」

「ま、マジか？」

『はい。しかも、とてつもない魔力を有しています』

「おお、なんてこった」

まさか、こんな世界に竜がいるなんてな。

「……とりあえず、」

「行ってみるか」

『行くんですか！？』

「だってさ」

俺は不敵な笑みを浮かべながら、シルフに向かってこう言う。

「こいつを仲間にしたら、面白いじゃん！」

俺達はあの後、その竜の生体反応に向かって歩いていった。
そしてその反応の元は今

「で、でかい・・・」
『小さいなあ、主は^{ぬし}』

俺達と睨みあっていた。

『それで、主たちは何しに来たのだ？』
「ああ、ちよつと話を聞いてくれ」

俺は目の前の竜を見据えながら、これから起きうることの全てを話した。

竜は俺の話に、相づちを打ちながらちゃんと聞いてくれた。
・・・結構いいやつかもしれないな。
話をし終わると、竜は何かを考えるように、空を見つめていた。

「『・・・』」

俺とシルフは静かに竜の答えを待つ。

・・・と言うか、今の竜の状態が、結構絵になっている。
と、そんなことを思っていると、不意に竜がこちらを向く。

『うむ、仲間になるのは・・・まあよろう』

「ホントか!？」

『ただし、だ』

と、そこで俺は気付いた。

目の前の竜の魔力が、どんどん昂っていくことに。
そして、竜が大きく目を見開くと同時に。

『我を倒せればな!』

口から炎を吹き出す。

「ち、シルフ!」

『ソニック・テンペスト!』

竜の吹き出した炎が来る直前で、俺はシルフを起動し、瞬時に魔法を発動する。

発動した魔法は強力な水流をシルフから放出するというもの。

シルフから放出された水は、竜の炎と正面からぶつかり同時に、相殺していった。

「相殺か・・・それほどの熱量ってことか」

俺は炎と水の相殺で出来た水蒸気のせいで見えないが、そこにいるだろうと思われる竜を見据える。

『ふむ、やるな』

俺の予想通り、段々と晴れてきた水蒸気の中に、竜の姿を確認する。

「いや、結構危なかったぜ」

『何を言う。我が炎を吐いた瞬間には、その剣を出していたではないか』

そう言いながら、竜は俺が手に持っているシルフ・鎚状態を見やる。

『ふっ』

「ん？ どうした？」

竜が軽く微笑んでいるかのように感じてしまった。

・・・というか、マジで楽しんでないか？

『いや、なに。久しぶりにこのような強者と戦えると思うと、楽しくて仕方ないんだ』

「へ、そうか。だったら俺も・・・楽しませてもらうぜ！」

俺のその言葉と同時に、俺と竜はお互いの距離を縮めていく。

『火竜炎砲！』

「水撃烈波！」

竜は自身に炎を纏い、俺は身体に水を纏う。

突撃した俺と竜は、そのまま激突し、直後に爆散した。

激突による衝撃と爆風に耐えられず、俺は上空に吹っ飛ばされ、竜は地面に叩きつけられた。

『ぐおっ！？』

『これほどの実力を持つ者になら、我は従おう』
「・・・へ？」

一瞬、竜が何を言ったのか理解できなかった俺は、つい変な声が出てしまう。

それを聞いた竜が、軽く笑いながら、俺の高さまで飛び上がってくる。

『ハハ、我は主^{ぬし}に従うと言ったのだ』
「そ、そうか。良かったあ」

竜が再度言った言葉を聞き、俺はホツとする。
すると、俺にふと疑問が浮かんできた。

「そっぴや、お前名前は？」
『我の名か・・・主^{ぬし}が決めてくれ』
「俺が、か？」
『ああ』

そう言われ、俺は考え込む。

目の前の竜の名前ねえ・・・
ちなみに目の前に居る竜は身体が黒く、頭にはユニコーンの様な角が生えている。

さらに身体自体はそこまで大きくなく、俗に言う翼竜のようなものだった。

「・・・ユニカ」
『ほう、ユニカか・・・よかろう、承諾した』

ふと、なぜかそんな名前を思いつく。

その眩きが聞こえたのか、竜・・・ユニカは少し考え、その名を受け入れた。

『それでは主よ、行きますか』

「ああ、そうするか・・・あ」

『どうしました、マスター』

ユニカに言われ、俺はシルフを待機状態に戻しながら歩き出す。そんなとき、俺はある問題を思い出す。

「ユニカ、このままじゃ地球に連れて行けないな」

『あ、そう言えばそうですね』

俺とシルフはお互いに地球にいる間のユニカの事を考える。それを聞いたユニカが、俺達の元へと近寄ってくる。

『主たち、それなら心配ありません』

「『えっ?』」

ユニカはそう言うと、何かを唱え始めた。すると、突然ユニカの身体が光り輝く。

「な、なんだ!？」

暫くして、光が治まってくると、そこにはユニカの姿は無く、なぜか黒い長髪の女性が佇んでいた。

「だ、誰だ？」

「何を言っておる。我はユニカじゃ」

それを聞き、俺とシルフは啞然とした。

「……ユニカア!？」

「そうじゃが？」

『た、確かに生体反応はユニカさんと同じです!』

「し、信じられんぞ」

「それはそうじゃろうな。人間にこの姿を見せたのは初めてじゃしの」

俺は目の前の女性がユニカと言うことにあまり実感がない。

……と言うか、マジですげえ身体だな。

「そんなことより、主たちは行くところがあるのじゃろう？」

「あ、ああ、俺が以前住んでいたところに行くだけだ」

「なら早く言った方がええじゃろうの」

「え、なんでだ？」

「うむ、実はの」

と、ユニカが何かを言おうとした時、突然俺達のいた場所が揺れ始めた。

「な、なんだ!？」

「悪いの、我のせいじゃ」

「なんだって!？」

「我が魔力を供給して、この土地を維持しとったのじゃ。それで先程、その魔力供給を断ち切った」

『ああ、だからこの土地が崩れてきているのですね』

「落ち着いて言っただけじゃねえ! さっさと行くぞ!」

俺とユニカは、すぐにその場を立ち去る。

「あ、危なかったぞ、マジで」

「そうじゃの。我もこの姿で行動するのが久しぶりじゃったので疲れてしもったわ」

『2人とも大丈夫ですか？』

俺たちはあの場所から結構離れた場所へと来ていた。

最初俺達がいた場所も、ユニカの魔力が供給されていた場所らしく、今ではもう地の底へと沈んだことだろう。

「それで、主の住んでいた所とはどこなのじゃ？」

「ああ、こことは違う世界でな。地球って言う惑星だ」

「ほう、興味深いな。そこにはいつ行くのじゃ？」

「ああ、まずは1人、仲間を作ってから決めてたんだが・・・
もうできたからな、今から行こうと思う」

そう言いながら、俺は胸ポケットに入れているシルフとメモ帳を取り出すと、何かを書き始める。

ちなみにボールペン状態のシルフは、ペン先から俺のイメージした色のインクを出すことができる万能ペンだ。

「主よ、それはなんじゃ？」

「ん、これは転移魔法に用いる魔法陣を書いてるだけだ」

俺はメモ帳に4つの魔法陣を書くと、それを1つずつ、俺達を囲むように設置する。

「シルフ、座標設定は大丈夫だな」

『もちろんです！』

「ユニカもじつとしてろよ」

「分かっておるわ」

そう言いながらも、ユニカは俺にしがみついている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 煩惱退散。

そんなことを思いながら、俺は地球へと転移をする。

第12話：仲間1号・・・・・・・・えっ？（後書き）

ユニカ・シルフ「あとがきコーナーですよ！」

ユニカ「皆の者、我はユニカ。よろしゅうな」

シルフ「それにしてもビックリしましたよ。ユニカさんも人間モードになれるなんて」

ユニカ「わしもお主がそのような女子おなになれるとは思ってもみたらなかったわ」

シルフ「これからよろしくお願いしますね、ユニカさん！」

ユニカ「もちろんじゃ」

シルフ「それでは、今回の感謝コーナーです！」

ユニカ「門倉甲殿、ソラト殿、感想とてもありがたいのお」

シルフ「あゝ、でもソラトさんから戦闘描写の事、言われてますね」

ユニカ「まあそれは仕方あるまい。作者の文才が無いのじゃからの」

シルフ「と言うわけでソラトさん、その辺は多めに見てあげてください。お願いします」

ユニカ「我からもお願いいたす」

シルフ「それでは次回予告なんですが、次回は地球でのひと時です」

ユニカ「なにやらちょっとしたトラブルがあるらしいが？」

シルフ「みたいです。でもマスターなら大丈夫ですよ」

ユニカ「そうじゃの、我らの主ならどうと言うこと無かるもの」

シルフ「それでは最後に、皆さんに」

ユニカ「このような小説でも読んでいただき、感謝いたします！」

キャラ設定（12話現在）

玲央「……………なんだこれは？」

作者「いや、感想でユニカの詳細聞かれたからさ。だったら現状で出てきているオリキャラ全員のキャラ設定を紹介しようかと」

玲央「……………まあいいけどさ」

作者「さて、ではまずは玲央の詳細」

玲央「俺のは前にあつただろ？」

作者「だって君も成長してるだろ？」

玲央「まあ……………そうだな」

作者「つてことで、玲央の詳細です。どうぞ」

名前：巫^{かんなぎ} 玲央^{れお}

性別：男

年齢：9歳

身長：133cm

体重：33kg

性格：気分屋ですこし変わった嗜好^{ロリコン}だが、人当たりは良く無意識にフラグを立てる。

能力：^{ゲート・オブ・バビロム}聖王の財宝

狂った理想郷

不老不死で魔力無尽蔵

???

???

玲央「俺ってまだ隠してる能力あったんだな」

作者「まあ、この先出るかどうかは分からないけどな」

玲央「待て、じゃあ何のために？があるんだ」「それでは次はノイの詳細です」っておい！」

名前：ノイ（仮名）

性別：見た目は男

年齢：10,000,012歳

身長：172cm

体重：58kg

性格：接した感じは明るいでおちゃらけているが、ときどき何を考
えてるのか分からないことがある・・・かも。

能力：神々の居城であるヴァルハラとの通信・転移
絶対に感知されない結界魔法

玲央「ノイってあんなに生きてたのかよ」

作者「まあ、あんな感じでもやる時はやりますよ」

玲央「んで、次は誰だ」「私ですよ、マスター！」ってシルフか」

シルフ「次は私のデバイス状態と人間状態の詳細です！」

シルフ（デバイス時）

形状：待機・・・ボールペン

起動・・・双刀『鎚』・斬刀『鈍』・賊刀『鎧』・千刀『ツルギ』・

魔力弓 e t c

色：待機・・・緑

起動・・・それぞれの元になったものと同じ色。

魔力光：緑系統のグラデーションで、毎回変わる。

シルフ（人間時）

性別：女の子

年齢：推定9歳程度

身長：129cm

体j「ちょ、何やってるんですか!？」「ぐふお!？」

容姿：緑色の長髪で、淡いエメラルドグリーンのワンピースに身を包んでいる。

性格：とても明るい性格だが、玲央一筋で玲央命の主思い。

能力：玲央とのユニゾン（玲央自身はあまりやりたがらない）

デバイス状態の自分ができる形態の武器を使用可能。

玲央「シルフ、突然暴れるなよ」

シルフ「き、気にしないでください、マスター!」

作者「ぐ、ぐふう・・・し、しし死にかけたぜえ」

シルフ「し、知りませんよ!」

作者「ぐぐぐ・・・と、とりあえず次だ」

玲央「えっと、次は・・・ユニカか」

ユニカ「おお、我かえ?」

玲央「お前も来たのかよ」

ユニカ「うむ、何やら楽しそうだったの」

玲央「あ、そうですか」

ユニカ「うむ。ちなみにこれが私の詳細じゃ」

名前：ユニカ（玲央命名）

性別：女性（竜族）

年r「ああ、これは消しておかねばな」

身長：175cm

体j「こつちも消しておかねば」

スリーサイズ：B・92 W・70 H・94 Eカップ

容姿：黒い長髪で、結構露出度の高めの服を着ることが多い。髪型は気分によって変えるが、大抵はストレート。ちなみに髪は腰のあたりまで伸びている。

性格：少し堅めのイメージだが、話すと結構話しやすい。喋り方はちよつと昔の人の様な感じだ。

能力：体内で魔力を練り上げ、口から炎として吐き出す。

レアスキル
稀少技能・地形維持・・・自身の魔力をその土地に供給することで、その土地の成長から崩壊までの全てを現状のまま維持する能力。

玲央「お前のあれってレアスキルだったんだな」

ユニカ「分かん。何となくやったら出来ただけじゃからの」

玲央「そんな理由でレアスキル覚醒させるなよ……」

作者「さて、とりあえずはここまでかな？」

玲央「じゃないか？」

作者「まあ、これ以降に出てきたキャラがいくらか溜まったら、またやるか」

玲央「まだやるのか、やっぱ」

作者「さて、今回はこの辺で終わるので、その前に感謝コーナー！」

玲央「門倉甲様、凰呀様、本当にありがとうございます」

シルフ「門倉甲様には感謝しています」

ユニカ「凰呀殿は私の容姿が知リたかったようじゃの。これでよかったかの？」

作者「では次回。地球での一波乱をお楽しみに！」

玲央「……………嫌な予感がするのだが？」

第13話：時は過ぎ・・・

「・・・と、転移完了っ」と

「ふむ、ここが主の住んでおった町かの？」

『そうですよ。海鳴市って言います』

シルフはこの町のことをユニカに説明し始めた。

ユニカはそれを聞き、その都度色々な反応を示す。

そんな2人のやり取りを見て、俺自身も自然に笑顔が綻ぶ。

「さて、そろそろ行くか」

「おお、そうじゃったの」

『あ、ならマスター。私人間の姿になっていいですか？』

「んゝ・・・ま、誰も居ないし、大丈夫だろ」

『マスター、ありがとうございます！』

俺は胸ポケットに入れていたシルフを取り出し、上空へと投げる。

隣でユニカが「何やつとるのじゃ!？」と多少驚いていたが、とりあえず気にしない。

すると、空高く投げ上げられたシルフが光り輝き、その姿を変えていった。

そして、完全に人型に変わると同時に落下してきたが、うまく地面へと着地する。

「こっちに帰ってからは初めてですね、この姿になるの」

「ふむ、これは驚いたの。まさかお主も人型になれるとは思わなかった」

「まあなれるようになったのは最近だけだな。さて、そろそろ行くぞ」

「はい、マスター」
「うむ」

2人の返事を聞いた俺は、久しぶりに吸う海鳴の空気を堪能しながら、ゆっくりと歩き出す。

なのは side

私、高町なのは。

今私は、フェイトちゃん・はやてちゃん・アリサちゃん・すずかち

やんと一緒に図書館からフェイトちゃんの家に向かっている途中です。その道中、私たちは5人であることを話しています。

「それにしてもなんだろうね、この感覚」

「誰かが足りないような気がするよね」

「んー、そうなんだけど。絶対誰かもう1人いたと思うのよ!」

「あ、アリサちゃん。少し声抑えて」

「ほんま、なんなんやろなあ、この気持ち」

私たち5人は、みんな揃って誰かを忘れている気がすると言っ話をしています。

でも、みんな誰を忘れているのかわかりません。

それに、本当に忘れているのかも、正直曖昧なんです。

みんなも思い出そうとしますが、やっぱり思い出せないみたいです。

「えっと・・・こっちだな」

「ふむ、こっちじゃな」

「あ、待て。あっちだったかも」

「マスター、ちゃんと道ぐらい覚えておいてくださいよ」

「仕方がないだろ。こっちに居る間の移動は、大抵転移で済ましてたんだから」

私たちが考え事をしていると、前から誰かが歩いてきていた。

それに私が気付いたとき、不意にフェイトちゃんとはやてちゃんから念話が入ってきた。

『なのは、はやて。今、あの人たち『転移』って言ってなかった?』

『うん、うちもそう聞こえたで』

『私も聞こえた』

普通の一般人が普段、そんな単語を使うことはまず無い。

私とフェイトちゃんとはやてちゃんは、アリサちゃんとすずかちゃんに事情を話してから、その人たちに近付く。

私はその人たちを見て、綺麗だと思った。

黒髪が綺麗な女の人、その容姿もすごく綺麗で、私でも見とれてしまうほど。

それにその女の人と一緒に居る男の子と女の子も、その人と同じ様にすごく綺麗な顔立ちだった。

それはフェイトちゃんとはやてちゃんも感じたようで、少しの間、動こうとしなかった。

けど、流石にさっきの『転移』のことを聞かなくちゃいけない。そう思い、私はその人たちに近付いていく。

「あ、あの！」

私が声をかけると、3人が同時に私の方を見る。

一瞬ビクツとなってしまった。

だけど、私はすぐに気を取り直して、その人たちに向き直る。

「あの、さっき転移って言うの、ああ、ちょうど良かった。君たちに聞きたいんだけどさあ。この辺にマンションあるはずなんだけど知らない？」え、マンションですか？」

不意に質問された私は、後ろに居るフェイトちゃんとはやてちゃんの方を向いて、相談する。

『どうする、フェイトちゃん、はやてちゃん』

『見たところ特に敵意も感じられないし、今は放って置いてもいいと思うよ』

『うちもや』

2人はそう言っただけ。

私はそれを見てすぐに前を向き、さっき私に聞いてきた男の子に言う。

「それならちょうど今から行くんで、一緒に行きませんか？」

「悪いな、よろしく頼むよ」

そう言っただけ、男の子は微笑んだ。

それを見て、私はカッコいいと思ったのと同時に、何か懐かしいようなものを感じた。

でも、それ以上にも分からないから、とりあえずマンションへと向かうことにした。

なのは side out

『マスター、どうしましょう』

『どうしましうって言われてもなあ。どうしようもないし』

現在、俺たち3人は前に住んでいたマンションへと向かっているところだ。

………なぜかなのはたちとバツタリ会ってしまったが。

『主よ、この者たちを知っておるのか？』

『ん？ ああ、そういえばユニカには話してなかったな』

ここで俺は、ユニカに念話で今までの経緯を簡単に説明した。ちゃんと念話を盗聴できないように設定してな。

『ほほう、そのようなことが………と言うことは、この者たちは主のことを今は忘れておるのじゃな』

『ああ、そうだ』

『………良いのか？』

ふと、ユニカがそんなことを尋ねてくる。

俺だって、本当は嫌だよ。

だけど、今はまだダメなんだ。

今はまだ………

『………ああ、今はいい』

『………そうか、分かった。なら我は何も言っまい』

『………助かる』

そう言つと、ユニカが不意に頭を撫でてきた。

突然で一瞬驚きはしたが、それでも・・・嫌じゃなかった。

そうこうしているうちに、目的地のマンションへと到着した。

「ありがとう、ここまで案内してくれて」

「ううん、気にしないでいいよ」

俺たちはなのはたちに「それじゃあ」と言つた後、マンションの裏側へと回りこむ。

そこで、俺は魔導士に感知されにくい転移魔法を発動する。

俺たちが魔方陣の中に入った瞬間、すぐに俺が元々使っていた部屋へと転移する。

「ここが主たちが昔住んでいた場所かえ」

ユニカは珍しいものを見るかのように、部屋を見回す。

俺はなのはたちの記憶から俺を消したが、このマンションの管理人だけは消さずにおいた。

この部屋の荷物を後で取りに行く予定だったからな。

まあ、俺となのはたちが一緒にいる場面の記憶なんかは消したが、とりあえず、この部屋にはしばらく戻らないからなあ。

部屋の整理をしてから出て行くか。

「とりあえず、食器とか家具が埃被らないようにするか」

「了解です！」

「うむ、心得た！」

俺の指示を聞いたシルフとユニカは、言われたことをテキパキとこなし始める。

俺もやってはいるが、2人には敵わない。

しばらくすると、大体の整理が終わり、後は必要な荷物をまとめるだけとなった。

シルフやユニカに目をやると、2人とも結構汗をかいていた。

「2人とも汗かいたろ。シャワー浴びて来い」

「え、そんな、マスターは？」

「俺は2人が入った後d「そうかそうか、主も我と入りたいか。よし行きましようぞ」って人の話を聞いてくれえー!!」

俺が抵抗するも、ユニカの方が一枚上手で、振りほどこうにも振る解けず、いつの間にか服を剥がれ、風呂場に投げ入れられた。その後を妖艶な笑みを浮かべているユニカと、恥ずかしそうにしているシルフが入ってくる。

そして、その2人の姿を見ると・・・・・・・・・・

申し訳ありませんが、ここからは音声だけでお楽しみください。

「ちょー!? ふ、ふふ2人とも、タオル!」

「何を言っておるのじゃ、主よ。主はまだ童子^{わらし}ではないか。気にすることはあるまい」

「だ、だからといって何でシルフまで!?!」

「ま、マスターは・・・・イヤ、ですか？」

「っ!?!」

「ほれ、髪を洗^{あろ}うてやるからの。こっちへ来んか」

「ちょ、胸!」

「どうした主、胸がどうかしたかの？」

「てめえ、わざとやってるだろうが!」

「はて、なんのことじゃろうな？」

「ちょ、てめマジでぶつとb「マスター」ってシルフ!? 何してんだ!?!」

「わ、私も・・・マスターを洗つて待て！ 頼むからやめてくれ！」うう。ユニカさんはいいのに私はダメなんですネ」

「いや、そんなこと言ってる主よ、いくら将来を誓い合った仲と言えど「誓ってねえ！」そうじゃったのか？」そうだよ！」

「マスター・・・マスターはもう私を捨てるんですね」

「シルフ！？ お前何言ってるんだよ！？」

「だったら、私にも洗わせてくださいよ！」

「分かった！ 分かったから落ち着いてくれ！ あとユニカも何事も無いように髪を洗い続けるな！」

「いいじやろが、別に・・・ほれ、髪は洗い終わったからの。お主が主の背中を流してやるがよい」

「はい！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・もう、好きにしてくれ」

その後、数分してから俺は、逆上せ上がってしまった。

ちなみに、俺が目を覚ましたとき、2人の顔が綺麗になってたような気が・・・・・・・・・・気のせいだな。

「・・・さて、短い間だったけど、世話になったよな」

『マスター、何言ってるんですか。また戻ってくるんですよ?』

「ああ、そうだったな」

「それより主よ。今度はどの世界へ向かうのじゃ?」

「ああ、また管理外世界に居る魔力の多い奴でも見つけるさ」

「我見たな奴をか?」

「さあ、どうだろうな?」

俺たちは、談笑しながら転移の準備に取り掛かる。

といつても、そこまでのものじゃないからすぐできるんだけどね。

「さあ、次の仲間を探しに行くぞ!」

『はい、マスター!』

「了解じゃ!」

俺たち3人は、それと同時に他の世界へと転移した。

なのは side

〓 1年後 〓

「リンディさん、クロノくん！ 聞きたいことがあるの！」

闇の書事件から1年が経ったある日、私はあの日以降感じていた違和感の正体を思い出した。

それを聞きに、私がリンディさんとクロノくんのところに行くと、フェイトちゃんやはやてちゃん。それに守護騎士たちに、何故かアリサちゃんとすずかちゃんもそこに居た。

「ああ、君が聞きたいことは分かってる。とりあえず、好きなところに座ってくれ」

クロノくんにそう言われ、私は近くのイスに座る。

それを確認したリンディさんが、前に立って話し始める。

「今日、皆さんに集まってもらったのは他でもない……巫玲央くんのことについてです」

そう、私たちが今まで忘れていた……思い出すことの出来なかったこと、それは、巫玲央くんに関する全てのこと。

「この場にいる全員が、昨日の夕方頃まで彼のことを忘れていたみたいだ」

「それで、彼の消息なのだけど、誰か知らないかしら？」

リンディさんに言われて、私も思い出した記憶をたどってみたけど、手がかりは無かった。

他のみんなも同じみたいで、これといった手がかりは無い。ただ1つだけ覚えているのは、記憶を失っている間に、玲央くんが他人の振りをして私たちと出会ったことだ。

その時の玲央くんは、知らない女の人たちと一緒に居たから、彼も記憶をなくしているのかも知れない。

……そう、思いたい。

「……玲央（くん）」

私たちは、彼の顔を思い出しながら、深い溜息を吐く。

玲央くん……なんで？

なんで……私たちの前から消えたの？

なのは side out

??? side

あれから、10年近くの年月が過ぎようとしていた。

高町なのはの所属する時空管理局は、闇の書事件で多大な功績を残した巫玲央を管理局へと入局させようと、彼の捜索にあたったが、その健闘も虚しく彼の足取りさえも見えてこなかった。

そして、その捜索が打ち切られてから数年が経ったある日、時空管理局とは別の組織が、この次元世界へと現れた。

その組織の勢力は設立と共に拡大していき、今では各世界に分署が設置されるほどだ。

さらに民間からの支持も厚く、非営利ながらも民間からの募金や、各次元世界からの寄付金が多大なものになっているとのこと。

さらにさらに、その組織の最高責任者は、どんな人間でも見捨てないを心情にしており、責任者にも関わらず、自ら現場に出向き、民間人の救助などを行うとのこと。

今や、時空管理局と肩を並べるほどの組織へと発展した。

「なんや、ほんまにすごい組織やね」

その組織の情報を見た機動六課部隊長・八神はやては、感心の声を上げる。

「だね。それに民間からの支持も良いみたい」

「どんな人でも見捨てないって言うのは、私は好きかな？」

機動六課のスターズ隊長・高町なのはとライトニング隊長・フェイト・T・ハラオウンはその組織のビルを眺めながら言う。

「うちらも負けてられへんな！」

「うん！」

「だね」

3人はそういうと同時に、笑顔で笑い合う。

「そう言えばはやてちゃん。明日なんだよね、そこから協力のために何人か来るのって」

「そうや。しかもその中に最高責任者も居るらしいで？」

「そんな人もくるんだ。なんだか頼もしいね」

「せやけどうちらやって負けてられへんのはさっき言つたやろ」

「そうだね。そんな人が来るからこそ、気を引きしめなくっちゃ！」

なのはたちはしばらく外の景色を眺めている。

と、フェイトが「そういえば・・・」と言ってなのはたちを見る。

「その組織の名前ってなんだっけ？」

「えっと、確か・・・」

彼らの組織の名前。

それは、これから先に起こりうる事を阻止するもの。
その名は

「オラクル信託の盾騎士団」

第13話：時は過ぎ・・・（後書き）

作者・玲央「まあ、とりあえず、あとがきコーナー」

玲央「まさかのアビスネタですか」

作者「まあアニメ見た程度ですが、とりあえず・・・アッシュカッ
コよくな？」

玲央「分からんでもないが、だからといってこれは・・・」

作者「それでは今回の感謝コーナーです。門倉甲様、毎回ありがとう
ございます」

玲央「あと、なんか質問があるんだっけか？」

作者「ああ、これね」

『玲央くんは1人で管理局を潰せますか？ あ、シルフとユニカは
ありで』

作者「実際どうなの？」

玲央「まあ潰せますね。シルフ・ユニカありだと多分1ヶ月〜2カ
月半あれば完全制圧できるかと。1人だと半年はかかるかな？」

作者「さて、次回予告のお時間です。というかこの話を読めば分か
ると思いますが、すでにStS編に突入しております」

玲央「俺って出るよね？」

作者「・・・・・・・・・・・・・・・・」

玲央「なんで無言になるんだよ!？」

作者「とりあえず、これからもみなさん応援よろしくお願いします。
あと、感想のほうもどしどしお待ちしております」

玲央「そこは諦めろよ」

第14話：模擬戦「疲れるから次の話での」ちょ、姐さん!?

??? side

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

現在、オラクル神託の盾騎士団本部ビル屋上で、1人の男が眼下の景色を眺めている。

眺めていると言っても、その顔は真っ白な仮面で覆われている。

「・・・・・・・・・・フ、ユニカよ。何か用か？」

「・・・・・・・・分かっておったのか？」

男が、入口に向かい声をかけると、扉の影から黒髪の女性・ユニカがスツと出てくる。

208

「貴様の魔力が微かに漏れていたからな」

「さすがじゃの。それより、時間じゃぞ」

「・・・・ああ、そう言えば機動六課へ協力するにあたって、我ら師団長が出向くことになっていたか」

男はどうでもいいようなことを思い出したかのように呟くと、屋上の端からユニカの元へと跳躍する。

「それでは行くか・・・ユニカ、他の奴らの準備はどうなってる」

「みんな、もうとづくに出来ておるわ。後は主だけじゃよ」

「そうか・・・・シルフィード」

『はいはい、なんですか?』

男は廊下を歩きながら、誰かの名を呼ぶ。

すると、その男の肩に十数センチぐらいの緑色の髪が目立つ少女が現れる。

俗に言う、ユニゾンデバイスだ。

「ユニゾンするぞ」

『了解！ユニゾン、イン！』

シルフィードと呼ばれたユニゾンデバイスは、その掛け声とともに男の身体へと溶け込んでいった。

その直後、男の髪が深緑色に変化し、その仮面から見える瞳の色もエメラルドのような輝きへと変わった。

「行くぞ、ユニカ」

「うむ、了解した」

男とユニカは、すぐにヘリポートへと向かった。

場所は変わり、こちら機動六課部隊長室。

そこには、隊長陣とフォワードメンバー全員が招集されていた。

「みんなに集まってもらったんは、前から言っとった神託の盾騎士
団から師団長数名が、今日この機動六課に出向に来とる」

はやては「入って来てください」と入口の外に向け声掛ける。

すると、部隊長室の扉が開き、そこから7人の男女が入ってくる。

その中で、1番最後に入ってきた白い仮面をした男の人を見て、全員が少し驚く。

「そ、それじゃあ最初に入ってきた人から順に、自己紹介をお願いします」

はやてがそう言うと、燃えるように赤い短髪が目立つ男が一步前に出る。

「俺は神託の盾騎士団、特務師団長のアシュラ・ファールブルだ。
よろしく頼む」

アシュラは自己紹介を終えると、一步下がり元の位置に戻る。

次にアシュラの隣の顔に大きな傷痕のある黒髪の男が一步前に出て自己紹介をする。

「第一師団長のビラルゴ・ジェンキンスと言う者だ。まあ、よろしくな」

ビラルゴはそう言うと、近くにある椅子を見つけ、それに座る。その態度を見た六課メンバーは苦笑しながらも、気にしないことにした。

ビラルゴの隣にいた透き通るほどの蒼い長髪の女性が前に出る。

「私はサフィア・ネイビア。第二師団長よ！」
わたくし

とそれだけ言うと、すぐにビラルゴの元へと行き、「そこを退きなさい！」と怒鳴る。

しかし、ビラルゴは全く退く気配が無かったので、仕方なくビラルゴと同じく近くの椅子へ座る。

六課メンバーは、とりあえず気にしないようにした。

サフィアの隣の、小柄の女の子が少しだけ前に出ると、大きくその場でお辞儀する。

「あ、あのあの。わ、わわ私は、アリア・リリンです！ 第三師団団長です！」

自己紹介を終えると、アリアはすぐに仮面の男の後ろへと隠れた。すると、今度は黒髪ストレートの女性が前に出る。

「我はユニカ・ジゼルと言う。第四師団の団長をしておる。よろしゅうな」

ユニカは自己紹介をしてすぐに部屋を出ようとするが、即座に仮面の男に止められる。

仕方ないので、ユニカはいいやその場に残る。

そして、ユニカの隣にいた銀髪の男が六課メンバーを威圧しながら一歩出る。

「ふん。俺はレギンズ・シンクレア。第五師団長。以上だ」

そう言うのとレギンズは、窓際へと移動し、外を眺めている。

そして最後に残った仮面の男が、彼の後ろに隠れているアリアを宥めてから、一歩前に出る。

「俺は神託の盾騎士団最高責任者、首席総長のレオル・K・ヴァンデルだ。そちらからの協力要請により、本日より我らの力を貸すことを約束する」

それだけ言うと、仮面の男は元の立ち位置に戻り、一喝する。

「一堂、整列！」

その瞬間、窓際に立っていたレギンズに、椅子に座っていたピラルゴとサフィア、さらにレオルの後ろに隠れていたアリアでさえ、一斉にその場に一瞬のうちに整列する。

「全員、敬礼！」

「「「「「はっ！」「」「」「」

先程まで自分勝手に振る舞っていた人たちとは思えないほど、その敬礼はきれいにそろっていた。

「そんなに堅くならんでええよ」

「いや、これは我ら神託の盾騎士団のモットーでな。こればかりは仕方ないものと思ってくれ」

そして、はやてたち六課メンバーが自己紹介をしようとしたが、「しなくていい」「資料貰ってるから大体分かる」「聞く意味がない」などと言われたため、省略した。

その後、レオルは再度敬礼し、「それでは本日はこれで失礼します」と言って部屋を出ていく。

それに続くかのように、他の神託の盾騎士団のメンバーも部屋から続々と出ていった。

最後に出ようとしたレギンズが、ふと何かを思い出したのか、出る前にもう一度六課メンバーの方を向いて一言。

「明日模擬戦するからな」

それだけ言って、レギンズはさっさと部屋を出ていった。

六課メンバーは、まるで嵐が去ったかのような気持ちになりながらも、突然言われた模擬戦の事を考えてい。

「そつえばさあ。あそこの訓練ってかなりキツイらしいぜ？」

「噂を聞く限りでは1日寝る時間と食事の時間以外は全部訓練と模擬戦に充ててみたいですよ」

それを聞いた六課メンバーは、軽い鬱の気分になりかけた。

ただ、その中で、なのは、フェイト、はやては他の事を考えていた。先程のメンバーの中にいた、黒髪の女性の事を・・・

「……シルフィード、もう解除していいぞ」
『分かった』

レオルの身体が一瞬輝くと、彼の髪と瞳の色が元に戻り、彼の肩にシルフィードが現れる。
それを確認すると、再び歩き始める。

「……マスター」

「どうした、シルフィード」

「マスターは……本当にこれでよかったのですか？」

その言葉を聞いたレオルは、一瞬歩きを止めるが、また何事もなか

ったように歩き始める。

「いつも言っているだろう。気分次第だって」

「気分次第でマスターが我慢するなんて、おかしいです!」

シルフィードはレオルの肩に乗ったまま泣き始める。

俺はすぐにシルフィードが泣き止むまで頭をやさしく撫でる。

「……みんな、成長してたなあ」

レオルが不意にそんなことを感慨深く思いながら、呟く。

シルフィードをなだめながら、俺は窓から見える空を眺めていた

第14話：模擬戦「疲れるから次の話での」ちょ、姐さん！？（後書き）

作者「今回は眠いので感謝コーナーのみです」

ユ二カ「門倉甲殿、朱殿、本当にありがたいのお」

作者「それでは、これお読みになった全ての方たちに、感謝します」

特別編：過去、そして今・・・

ある崖の上で、1人の少年が眼下の研究施設を見下ろしている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『王よ、どうした？』

「・・・・・・何でもないさ」

少年は、手首に着けているブレスレット型のデバイス・スカブにそう言う。

そして次の瞬間、彼が崖から施設目掛けて飛び降りる。

「スカブ、セットアップ」

『Yes、king・standby ready』

少年は飛び降りながらスカブを起動させる。

そのスカブの形状は、まるで死神の持つ鈍色の鎌のようで、容易に死を連想できるほどのものだった。

スカブの起動が終わった直後、彼は研究施設の屋上に降り立つ。

直後、施設全体にサイレンが鳴り響く。

それと同時に、警備装置が作動し、彼へと襲いかかる。

「早く資料を運び出せ！」

「そっちじゃない、こっちが優先資料だ！」

「さっさとしろ！」

施設内では、研究員が次々に研究資料を運び出していた。

研究員たちが資料を運び出していると、遠くの方から何かが迫ってくる音が響いてきた。

「な、なんだこの音は！？」

「い、いいから急ぐんだ！」

責任者らしき老人が、研究員へと指示を出そうとするが、すでにそんな指示を聞くほどの余裕はない。

そして、先程の音の正体が、彼らへと降り注ぐ。

突如、彼らの頭上から、漆黒の色をした魔力波が現れ。研究員数名を吹っ飛ばす。

さらに、他の研究員も次々に気を失っていった。

「な、なんだ！？ 何が起きている！？」

「・・・あんたがここの責任者か？」

老人は、突然現れた少年を見て、呟く。

「そ、それは・・・無情の死神！？」

「知ってるのか。なら、この後お前がどうなるかも・・・分かってるよな？」

瞬間、彼は老人に向け凄まじいほどの殺気を放つ。

それだけで、老人は戦意を喪失し、腰を抜かして倒れこむ。しかし、少年はそんなことを気にせず、無情にも

「それじゃあな」

断罪の鎌が振り下ろされる。

その後、少年はスカブの生体サーチャーにより、生体反応を探索して、反応のあった場所へと来ていた。

彼は目の前の扉を、スカブで切り刻み、扉を破壊して中に入る。すると、奥にもう1つ部屋があり、その中の様子がガラス越しで見ることができた。

彼はそこまで行って、奥の部屋の中を覗くと、そこには数名の子供たちが服も着ずに鎖に繋がれていた。

「スカブ、ロック解除」
『了解した』

直後、奥の部屋に続く扉のロックが解除される。その扉をゆっくりと彼は開ける。ガラス越しでは分からなかったが、子供たちはかなり衰弱しており、入ってきた俺を見るのが精一杯のようだった。

「スカブ、頼む」
『ああ・・・リフレッシュ』

彼がスカブに魔法の発動を促す。すると、子供たちの容体が良くなっていき、段々と子供たちの意識が覚醒していく。

「さて、そろそろ逃げないとな」

そう言いながら、彼は魔法陣を展開する。
その魔法陣は、鎖で繋がれている子供たちも包み込み、次の瞬間には、その部屋から誰もいなくなっていた。

「……………」

「ビルゴ、そろそろ時間だ。ヘリポートに行くぞ」
「……………ああ、わかった」

ビルゴは、アシュラに言われ、ヘリポートへと向かう。

「それよりどうした。お前が考え事とは珍しいな」

「なに、昔の事を思い出してただけだ」

「昔・・・ああ、そう言えば奴が俺らを助けてからもう7年以上経ったのか」

「まあ懐かしくはあるな」

アシュラとビルゴは、ヘリポートに向かいながら話し続ける。

「というか、この騎士団のメンバーの全員は総長に助けてもらっているな」

「ああ、そしてその代償として、彼は自身の名と顔を隠した」

「アイツは俺達を助けるために尽力してくれた。そして、俺達はそんなアイツだからこそ信頼し、つき従うんだ」

そんな話をしていると、2人はヘリポートへとたどり着く。

そこにはすでに、サフィア・アリア・レギンスの3人が準備を済ませて立っていた。

「ちょっと、遅いじゃないの!」

「ど、どうか、しししましたか!？」

「・・・ふん」

アシュラとビルゴは、3人の元まで行く。

そこで、総長の姿がないことに気付いた。

「総長はどうした?」

「えとえと、今、ユニカさんが探しに行ってます」

「そうか」

そんな話をしていると、噂をすればなんとやらで、総長のレオルを連れてユニカが戻ってきた。

「悪い、遅くなったな。それではこれより、機動六課へと向かう！」
「「「「「はっ！」「」「」「」」

それと同時に、全員へりへと乗り込み、機動六課へと向かった。

特別編：過去、そして今……（後書き）

作者「あとがきコーナーです。早速感謝コーナー！」

ユニカ「門倉甲殿、朱殿、本当にありがとうなのじゃ」

作者「さて、今回は……今度こそ模擬戦書きます」

ユニカ「そう言えば、なぜ今回特別編を書いたのじゃ？」

作者「いや、他の場所で騎士団メンバーの設定考えたんだけど、その設定を家に持って帰るのを忘れてたと言う」

ユニカ「バカじゃな」

作者「おっしゃる通りです」

ユニカ「それでは、この小説を読んでくれる全ての人たちに感謝じや」

第15話：模擬戦へ交える拳

「それでは、これより、神託オラクルの盾騎士団VS機動六課前線メンバーでの模擬戦を開始する」

現在、機動六課の訓練スペースに、六課前線メンバーと騎士団師団長たちが集まっている。

そして、レオルが今言ったように、騎士団と六課での模擬戦をやるとのこと。

今回の模擬戦のルールを、レオルがいくつかあげていく。

- 1、対戦形式は基本1VS1
- 2、勝敗は相手をKOするまで。その場合、魔力ダメージでも物理ダメージでもどちらでもいい。
- 3、戦闘開始はお互いがBJを装着した直後から。
- 4、どんなに力の差があっても、最後まで全力で戦い抜くこと。

「以上が、今回の模擬戦のルールだ。ちなみに、相手がどんなに『参った』と言っても、それは勝じゃないから、そのつもりでな」

そういうと、レオルは後ろにモニターを出す。

そこには、騎士団メンバーと六課メンバーの名前が書いてあった。

「これって・・・模擬戦の組み合わせ？」

なのはの言葉に、他のメンバーもそのモニターに映し出されえた名前を見る。

1：スバル・ナカジマ VS レギンス・シンクレア
2：ティアナ・ランスター VS サファイア・ネイビア
3：エリオ・モンディアル VS アシュラ・ファーブニル
4：キャロ・ル・ルシエ VS アリア・リリン
5：シグナム VS ビラルゴ・ジェンキンス
6：ヴィータ VS ユニカ・ジゼル
7：高町なのは&フェイト・T・ハラオウン VS レオル・K・ヴァンデル

「私の相手って、あの（ちょっと怖い）人！？」

「私は・・・あの偉そうにしてる女の人ね」

「僕は赤髪の人ですね」

「私はあの小さい子と」

スバルはレギンスをチラ見しながら軽く震えだし、ティアナはサファイアに対し何故か敵対心むき出しだ。

エリオとキャロは、逆に何処まで自分たちの力が通じるかとかなんな話をしている。

そして、隊長陣はと言うと・・・

「ほう、私の相手はあの男か・・・おもしろい」

「あたしはあの黒髪の女かよ」

「私となのはで、あの人と戦うみたいだね」

「うん、そうみたい。それほどあの人が強いってことだね」

バトルマニアが1名、目を輝かせていたが、誰も気にせず自分の相手をジッと見ていた。

「それではまず一戦目。スバル・ナカジマとレギンス・シンクレア。

両名、配置に着け！」

「は、はい！」

イエス・マイ・キング
「了解だ、我が王よ」

レオルに言われ、スバルとレギンスはすぐに訓練場へと向かう。
2人が言われたとおり配置に着く。

「マツハキヤリバー！」

「スタンフィール！」

『Standby, ready』

お互い同時にデバイスを起動させ、B J 姿になる。

スバルは言わずもがな、右手にリボルバーナックルを、足にはローラーブーツ型デバイスのマツハキヤリバーが装着されていた。

対するレギンスだが、こちらの姿を見た六課メンバーは驚いていた。

「あれって!？」

「スバルさんと、似てる!？」

そう、レギンスの足にはマツハキヤリバーと同型デバイス、スタンフィールが、両拳には、まるで魔獣の手を模したかのような籠手型デバイス、ビーストレイジが装着されていた。
それを見たスバルは、少し驚いていた。

「油断するな」

「っ!？」

『Protection』

突然、マツハキヤリバーがプロテクションを展開する。

その直後、轟音と共に凄まじい衝撃が響いてくる。
スバルはその衝撃を防ぎきると、今攻撃してきたレギンスの方を見る。

「総長が言ってたよなあ、『戦闘開始はお互いがBJを装着した直後から』ってな！」

叫びながらスバルに殴りかかろうとしていレギンスだが、それをスバルは間一髪避けると、ウイングロードを発動し、レギンスと距離をとる。

しかし、それに反応したレギンスもウイングロードへと飛び乗ると、スバルの後を追いかけた。

「レギンスさんって、やっぱりちょっと怖いですね」
「ぼ、僕もそう思うよ」

現在、目の前でおきている擬似鬼ごっこを見ながら、そんなことを言うエリオとキャラ。

「しかし驚いたわね。スバルと同型のデバイスを使う人がいるなんて」

「それは違うわよ」

ティアナの独り言に、サファイアが後ろから突っ込んできた。

「違う・・・と言いますと?」

「あいつはね、あれを使ってるんじゃないで、あれしか使えないのよ」

「??? どういうことですか?」

「まあ、模擬戦が終わったら教えてあげるわよ。それより、そろそろ終わるわよ?」

「」「えっ!?!」「」「」

ティアナたちが少し目を話しているうちに、レギンスがスバルを追い詰めていた。

「はあ、はあ、はあ、つ、強い・・強すぎる」

「どうした、そんなものなのか」

「くっ、こうなったら！」

スバルは最後の力を振り絞り、レギンスの懷まで入ろうとする。

「スタンフィール」

Load cartridge

しかし、スバルが来る前に、レギンスはバリアを展開する。

「ウオオオオオオオオオオオオ——」

! ! ! ! !

しかし、スバルはそのままバリバリナックルで殴りかかる。

「ふん。無駄だ」

「それは、どうでしょうか！」

そう言いながら、スバルはカートリッジをロードし、リボルバーナツクルでバリアを破壊した。

「何？」

「一擊・必倒！」

レギンスは完全に油断していた。

その隙を突き、今度はスバルが、レギンスに一撃お見舞いする。

「デイベイイイン……バスタアアアア——！！！」

放たれる蒼い砲撃は、レギンスの身体を包み込んだ。

「はあ．．．はあ．．．これでダメなら．．．もう．．．」

スバルは自身の出せる最大出力の砲撃を相手にほぼゼロ距離で当てた。

倒すまではいかなくても、それなりにダメージが残ってるはず。そう思いながら、煙が晴れるのを待っている。

「まさか、こんな芸当ができるとはな。油断するなつて言った俺が油断してしまった」

煙の中から声が聞こえる。

段々と煙が晴れていき、レギンスの姿が露わになる。

「っ！？　そ、そんな・・・」

そこに現れたレギンスのＢＪには、汚れひとつ無く、まったくダメ

ージを受けているようには見えなかった。

「いや、お前は良くやった。俺はお前に興味が湧いた。その礼として、俺も見せてやろう・・・砲撃を」

その瞬間、レギンスの膨大な魔力が両拳へと蓄積される。

「・・・弑撃・・・決殺」

『Stinger Strike』

段々と近付いてくるレギンスを視認しているが、もうほとんど魔力を使ってしまうので、その場を動こうにも動けないスバル。そして、魔獣の爪が

「ステインガー・・・ストライク！」

少女へと振り下ろされる。

「ふむ、第1試合はレギンスの勝利か・・・まあ当たり前か」

レオルは訓練場の様子を映したモニターを見ながらそう呟く。
レギンスは、最後の攻撃で気絶したスバルを抱えながらこちらに戻るうとしていた。

「ふむ、次の試合、ティアナ・ランスターとサフィアはすぐに準備に入れ！」

「はい！」

「それじゃあ行くとしましょうか」

レオルに言われ、ティアナとサフィアは訓練場へと向かった。
それと入れ替わる形で、スバルを抱えたレギンスが戻ってくる。

「どうだった？」

「ああ、少しこいつに興味が湧いた」

「・・・そうか」

それだけ言うと、レオルはまたモニターに目を戻し、レギンスはシヤマルのところまでスバルを連れて行った。

その間に、ティアナとサフィアは訓練場へと行き、位置についてい

た。

第15話：模擬戦／交える拳（後書き）

作者「あとがきコーナー！」

レオル「しかし、お前も良く続くよな」

作者「確かに、絶対途中で投げ出すって思ってたよ、俺も」

レオル「これからも頑張っていけ」

作者「ああ、分かってるさ。さてこの辺で感謝コーナー！門倉甲様、毎回ありがとうございます！」

レオル「それで、俺に質問があるんだろ？」

作者「そうそう、これだ」

『オラクルって何を信念に掲げているのですか？』

作者「だってさ」

レオル「信念か・・・『弱きを助け、悪を滅し、自由に生きれ』かな」

作者「それってどういう？」

レオル「いや、騎士団の団員って全員どこかの研究施設やらで研究材料にされてたやつらなんだ。だからこそ分かるんだ、弱い奴の気持が。だからこそその『弱きを助け』」

作者「ああ、それで自分たちのような人をもつ出さないためにもの『悪を滅し』か」

レオル「そうだ。そして研究材料になっている間はずっと施設からでられず、よくても軟禁、最悪食事もまともにもらえないなんて奴もいたから・・・だからこそ『自由に生きれ』だ」

作者「へえ・・・ところで騎士団の平均魔導士ランクってどのくらいだ？」

レオル「そうだな。大抵がレアスキルや魔力量が半端ない等の理由で捕らえられていたからな。普通にSS以上はあるだろう」

作者「す、すごいな」

レオル「それじゃあ俺は帰るぞ」

作者「ああ、お疲れ」

第16話：模擬戦、飛び交う弾幕

ティアナ side

「・・・はあ」

さっきの模擬戦、スバルは頑張った。

けど、さすがに勝てるわけないわよ。

オラクル
神託の盾騎士団の師団長なんて、普通にSS以上の実力の持ち主じゃない。

スバルでもあれぐらいしか粘れなかったんだ。

凡人の私なんて、もっと短いに決まってる。

「・・・そろそろかしら」

私が配置に着いてから5分くらい経った。

BJ装着開始の時間が13:35だったわね。

私は時間を確認するとちょうどその時間になったところだった。
やるだけの事はやるわよ。

「いくわよ、クロスミラージュ」

『Yes sir』

ティアナ side out

「さて、そろそろね。準備をしてちょうだい、ブリューナク」
『OK my queen・Set up』

サファイアは、定位置で時間になるのを確認すると、すぐに耳につけているイヤリング　ブリューナクを起動する。
起動後のブリューナクの形状は、まるでショットガンのようなものだった。

「ブリューナク、カートリッジロード」
『Load cartridge』

ブリューナクがカートリッジをロードしていると、上空からオレンジ色の魔力弾が迫って来ていた。
それは、ティアナがすでに放っていたクロスファイヤーシュートだった。

「あら、早いわね。私も負けてられないわ」

『Spread shoot』

「スプレッド！」

サファイアがブリューナクの銃口に生成した魔力スファイアから複数の魔力弾を放つ。

「拡散！」

『diffuse』

魔力弾同士が着弾する直前にサファイアがそう命じると、サファイアの放った魔力弾が一気に拡散する。

拡散した魔力弾は、クロスファイヤーシュートへ着弾していき、次々に相殺していく。

さらに、残りの拡散した魔力弾は、ティアナがいると思われる方向へと向かって行く。

「さて、どうなるかしら」

『It seems to be happy.（楽しそうですね）』

「ええ、まあね。あの娘には興味があつたからね」

『Is it because it is the same gunfighter?（同じ銃使いだからですか？）』

「そんなところよ・・・っと、やるわね」

サファイアとブリューナクが話していると、彼女が放った魔力弾が次々にティアナによって相殺される。

さらに、ティアナ自身がこちらに迫って来ていた。しかも複数に分かれて。

「幻術ね」

『How do you do?（どうしますか？）』

「そうね、一掃しましょうか」

『OK・Load cartridge』

サファイアはブリューナクの銃口を上空に向けると、そのまま魔力スファイアを打ち上げる。

それを見たティアナは、強力な魔法が放たれると判断し、即座にクロスファイヤーシユートを連発する。

『Satellite blaster』

しかし次の瞬間、突如上空から放たれた砲撃により、幻術のティアナもろとも魔力弾が消し飛んだ。

「なっ!?!」

すると、サファイアの近くから、誰かが驚くような声が聞こえる。サファイアが後ろを見ると、すぐそこまでティアナが迫っていた。

「あら、すごいじゃない。幻術を駆使したとはいえ私の背後をとるなんて」

「・・・ありがとうございます!」

ティアナはすぐに魔力弾を生成し、サファイアに向け放つ。が、それをサファイアは即バリアを張り防ぐ。

「さすがですね」

「ありがと」

そう言葉を交わしたきり、2人は動かなくなった。

「なんだよ、あいつら動かねえぞ。やる気ねえのか？」

ヴィータは、モニターに映っているティアナ達の様子を見て呟いた。

「どっちも相手の出方を覗っているだけだ」

アシュラは2人の雰囲気から、そう察した。

するとヴィータが「わ、わかってらあ！」と言いながら、そっぽを向く。

そのやり取りを見ていた周りの人たちは、軽く笑いそうになった。

「あ、2人が動きました！」

エリオに言われ、皆モニターに目を戻す。

しかし、ティアナとサファイアが同時に魔力弾を放ち、相殺した際の煙で姿が見えなくなっていた。

「くっ、どっどこ…？」

ティアナは、周りを見渡すが、煙のせいでよく見えなかった。

『Freeze shot』

「っ！？ 何！？」

突如聴こえた声に、ティアナはすぐ反応するが、すでに遅かった。

「きゃっ！？」

ティアナは突然足に衝撃を受け、倒れそうになったが倒れなかった。
・・・いや、正確には、倒れそうでも倒れさせてくれなかった。

ティアナは衝撃を受けた箇所を確認すると、その箇所が氷漬けにされていた。

「な、なんで！？」

「あら、私がやったのよ」

段々と晴れてきた煙の奥に人影が見えた。

そこには、ティアナに銃口を向けて魔力スフィアを生成しているサフィアが立っていた。

「私ね、魔力変換資質『凍結』を持ってるのよ」

「凍結！？」

魔力変換資質。

魔法によるプロセスを踏まず、魔力を別のエネルギーに変換する事が出来る能力。

その中で、よくあるのが「炎熱」「電気」だが、稀に「凍結」を持つ者もいる。

その凍結の魔力変換資質をサフィアは持っていた。

「さて、そろそろ終わりにしましょうか」

『All-Ice』

直後、サファイアが大量の魔力をスファイアへと注ぐと、スファイアが一気に膨張した。

「あなた、中々筋が良かったわよ」

「え

」

ティアナは、サファイアに言われたことが信じられなかった。確かに、ティアナは射撃だけを極めようとして、そればかり鍛えてきた。

だけど、まだ人に褒められるほどじゃない。

それはティアナ自身が分かっていることだ。

それでも、サファイアはティアナの中にある素質を見抜いた。だからこそ、サファイアはさっきの様な事を言ったのだ。

「じゃ、また相手してよね・・・『アリス』」

『shot』

瞬間、スファイアから数え切れないほど魔力弾がそのスファイアから放たれる。

その弾幕は、まるで雪崩の如く、ティアナを包んでいった。

「ティアナさん・・・」

「さて、これで2戦目が終了したな。」

レオルはモニターに映っているサフィアたちを見ながらそう呟く。
そこには、サフィアの弾幕をともに受け、氷漬けにされたティアナが映っていた。

サフィアはその氷をすぐに解除すると、倒れそうになったティアナをサフィアは支え、背負う。

「さて、次の2人は準備してくれ」

「あ、はい！」

「ああ、分かった」

レオルに言われ、エリオとアシュラはすぐに訓練場へと向かっている。

「さて、次はどうなるか」

第16話：模擬戦／飛び交う弾幕（後書き）

作者「あとがき、感謝コーナー！」

アリア「あ、あの・・・か、門倉甲様・朱様・・・お、応援・・・
あ、ああありあり、ありがとうございます！」
すぐにどこかに走り去る。

作者「うん、よく頑張った」

レオル「・・・あまり虐めるなよ」

作者「何を言うか！ そんなことするわけない！」

レオル「ならいいg」弄ってるだけだ！」そっちの方が性質悪いわ！」

作者「それより次回予告だが」

レオル「チツ・・・次回はエリオとアシユラの模擬戦だ。みんな、見てくれよ」

作者「この小説をお読みになる方々に、感謝を・・・」

第17話：模擬戦くぶつかり合っ槍

「さて、次はエリオVSアシュラか」

レオルは訓練場で配置についている2人をモニターで見ながら呟く。

「ふむ・・・『アシュラ、一応言うが・・・手を抜くなよ』」

『分かつてる。一々念話してくるな』

『ならいいがな』

そう言い、レオルは念話を切る。

「エリオ、大丈夫かなあ？」

「どうだろうな。聞いた話だと神託オラクルの盾騎士団の団員は全員Sランク以上って話だぜ」

ヴィータの言ったことに、その場にいた六課メンバーの全員が驚いた。

「オーバーSランク!？」

「ほ、ホントに!？」

「ああ、あたしも聞いた話だけだな」

「私も聞いたことがあるな。騎士団長は全員SSランク以上、そして首席総長は測定不能らしい」

「SSランクって・・・それじゃあエリオの相手も!？」

「多分SS以上ってことになるな」

六課メンバーはモニターに映ったアシュラとエリオを見ながら、啞然としていた。

「・・・さて、そろそろ始めるか」

アシュラは時間を確認しながら、そう呟く。

「エリオと言ったな」

「は、はい!」

「・・・先手はやる、こい!」

「え、と・・・はい!」

エリオは戸惑いながらも、返事をするたびにBJを装着、自身の

愛機・ストラーダを起動させ、アシュラに向かい構える。

アシュラもBJのみを展開させるが、自身のデバイスは待機状態のままだった。

「ストラーダ！」

『Explosion』

エリオはストラーダにカートリッジを1発ロードさせると魔法陣を展開し、チャージを始める。

アシュラはジツとエリオの出方を覗うだけで、未だに自身のデバイスを起動させる気配もない。

「はあ！」

『Speerschneiden』

すると、エリオがアシュラへと斬りかかる。

アシュラはそれを容易く避け、エリオは避けられたらすぐにまた斬りかかる。

そしてまた避けられ、そしてまた斬りかかる。

「ふむ、こんなものか。筋は良いがやはり子供か」

そう言いながら、アシュラは一旦エリオと距離をとる。

そして、自身の手首に着けているブレスレットを前に突き出す。

「いくぞ、シヴァー！」

『Set up』

アシュラがデバイス・シヴァを起動させる。

その形状は、まるで神話の神・ポセイドンが持っていたとされるト

リアイナのような形状だった。

「・・・行くぞ！」

『Jawohl』

アシユラは一気にエリオとの差を縮める。

「っ!？」

『Sonic Move』

「逃がさん！」

『Sonic Move』

2人は同時にソニックムーブを発動させると、高速での斬り合い・突き合いが始まる。

隙があれば斬りかかり、狙い目だと思えば突く。

「やるな」

「くっ、速い！」

しかし、時間が経つにつれ、段々と経験の差が出てくる。

エリオはまだ子供の上、戦闘経験が極端に少ない。

そのため、エリオは少しずつだが、アシユラのスピードに追い付けなくなっていた。

「くっ、この！」

それでもエリオは諦めずにアシユラへと斬りかかる。

しかし、それでもやはりエリオの攻撃はアシユラには掠りもしなかった。

「さて、エリオ。そろそろ終わりだ」

アシユラは愛機・シヴァを構える。

その構えは、まるで投擲でもするかのような構えだった。

「シヴァ・・・水撃烈波」

『W a s s e r h a m m e r』

すると、アシユラはエリオに向けシヴァを投げる。

エリオはそれを見て、すぐに回避しようとするが、突然シヴァの周りに水が纏い始めた。

そして、その水量はどんどん膨れ上がり、最後には強力な津波と言っているほど、巨大で強力なものとなった。

「っ!？」

『S o n i c M o v e』

エリオは咄嗟にソニックムーブを発動し、回避しようとする。

しかし、回避しようにもシヴァに纏われた水量が多く、攻撃範囲外に出られない。

結果、エリオはまともにシヴァのウォーターハンマを受けてしまい、気を失う。

第17話：模擬戦くぶつかり合っ槍（後書き）

作者「あとがき、感謝コーナー！」

ユニカ「門倉甲殿、朱殿、毎回ありがたいの。これからもよろしくなのじゃ」

作者「さうて、次回のサズ「それは違うじゃろ！」く、ばれたか」

ユニカ「普通にばれるじゃろ・・・それで次回は何じゃ？」

作者「次回はキャラVSエリアです！」

ユニカ「我の出番はまだかの？」

作者「多分次の次あたりになると思います」

ユニカ「・・・まあいいかの」

作者「・・・（ホッ）」

第18話：模擬戦／竜VS幻獣

スバル side

「……………んう……ここは？」

私が目を開けると、そこには白い天井が広がっていた。

「起きたか」

「え……………ええ！？」

声が出た方を向くと、そこには私に背を向けて座っているレギンスさんがいた。

私は何があつたのかと記憶を辿っていき、模擬戦で負けたということと思い出した。

「あ、私……………」

「まあ気にすんな。負けて当然なんだからな」

「え？」

私は身体を起こし、レギンスさんの方を向く。

「俺ら師団長はお前らで言う魔導士ランクのSSを軽く超えてるかな」

「SSランクを！？」

それを聞いて、私は驚きを隠せなかった。

そんなとき、ふと隣のベッドから音がした。

気になった私は、ゆっくりと仕切りのカーテンを開けてみる。

そこには、ティアがベッドに横になっていて、そのティアの隣には、サフィアさんが椅子に座っていた。

「あら、あなた起きたのね」

「えと、はい・・・」

私はそれを見て、ティアも負けたんだと認識した。すると、レギンスさんが急に椅子から立ち上がる。

「それじゃあ俺は訓練場に戻るが、お前はどつする?」

「あ、私も行きます!」

そう言つて、私はベッドから降りて立ちあがろうとするが、上手く立てずに転んでしまった。

「あ、あれ?」

「まだ模擬戦のダメージが完全に抜けてないんだろ・・・仕方ねえな」

「えっ?」

レギンスさんは私のところまで来ると、私に背を向け座りこむ。

「あ、あの」

「ほら、早く乗れ」

「は、はい!」

私は言われるままにレギンスさんの背中におぶさる。

レギンスさんって意外に良い人だ。

そう思いながら、私とレギンスさんは訓練場へと向かった。

スバル side out

「さて、アリア、キャロ、位置に着いたな」

『はい！』

レオルが確認をとると、2人は元気よく返事をする。

「今回は、2人とも召喚獣を召喚してから模擬戦開始な」

それを聞いた六課メンバーは、先程の魔導士ランクを聞いた時と同じぐらい驚いていた。

「あの子も召喚師!？」

「ってことは、今回は召喚師対決ってことか!？」

フェイトとヴィータはモニターに映ったアリアを見ながら驚きを隠せないでいる。

それは周りの六課メンバーも同じらしく、皆一様に反応が同じだった。

「あの子も召喚師なんだ」

私以外に召喚師を見るのって初めてだ。
でも、1つ不安に思うことがあった。

「あの子、私より年下だね？」

それで大丈夫かなあ、と思っていると、時間になった。

「いくよ、ケリユケイオン」

『Stand by』

「セットアップ！」

私はすぐにケリユケイオンを起動させる。
あ、あの子も私と同型のデバイスなんだ。
そんなことを思いながらも、私はすぐにフリードの真の姿を解放する。

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜
フリードリヒ。竜魂召喚！」

『ギャオオオ！！』

私がフリードを解放していると、あの子も自分の召喚獣を呼び出しているのが見えた。

キヤロ side out

アリア s i d e

「うう」

あ、あの子は優しいんだけど、やっぱり話せないよ。

ああ、そろそろなこと思ってたなら、あの子もうデバイス起動しちゃうてるよ。

わわ、私も早く起動しないよ。

「べ、ベルフォン」

『Please become calm . (冷静になってください)』

「う、うん、分かった」

ベルフォンに言われ、私は深呼吸して落ち着く。

「うん、もう大丈夫。ベルフォン、セットアップ」
『Standby, ready』

私はベルフォンを起動すると、すぐにあの子を呼び出す。

「天地を迸る雷光。我が足となり、地平を目指し駆け抜けよ。幻獣
招来、一角閃雷。来て、コルマール！」

『ヒヒイイイン!!』

私が展開した召喚魔法陣から、一筋の雷光が迸ると、その中から私の
召喚獣で友達の一角獣^{ニゴン}のコルマールが出てくる。

アリア side out

「あの子、なんてもん呼び出してるんや」

「あれって、幻獣種だよね？」

「キャラの竜種も珍しいけど、それ以上に珍しくて、扱いづらい、あの？」

六課メンバーはアリアの召喚したコルマールを凝視していた。

「お、今はアリアが戦っているのか」

「あ、キャラの番だったんだ」

ふと、後ろから声がしたので全員がその方向に目をやると、そこにはレギンスと、レギンスにおぶってもらっているスバルの姿があった。

「スバル、もう大丈夫なの？」

「あ、はい。まだちょっとダメージは残ってますが、大体は」

「そう、無理しないでね」

「はい」

なのはとスバルの会話が終わったのを確認すると、レギンスはその場にスバルを下ろす。

「あ、ありがとうございました」

「気にするな」

そう言い、レギンスはレオルの元に行き、モニターに目をやる。

「幻獣・・・すごい」

キャラはアリアがユニコーンをちゃんと制御していることに驚いていた。

幻獣種は、昔から人里離れた奥地などに生息しており、さらに密猟者などの被害を受け、その数は少なく、警戒心はより一層強くなっているのだ。

その幻獣種を制御しているということは、お互いに信頼していないとできないことだ。

「でも、私も負けません。フリード、ブラストレイ！」

フリードが自身の口に火を溜め、火球を作る。

「ファイヤ！」

『ギャオオオオオ！！』

キャラが命じると、フリードが火球をアリア達へと一気に放つ。
放たれた火炎砲撃は、段々と近付いていつている。

「コルマール、サンダーホーン！」

『ヒヒイイイン！』

すると、コルマールの角が光り輝き、電撃を纏い始める。
ブラストレイが直撃する直前、コルマールの電撃を纏った角をぶつけ、相殺した。

「っ！？ そんな！？」

それを見たキャラとフリードは一瞬、驚いてしまい、隙を作ってしまった。

それを、アリアとコルマールは逃さなかった。

「輝^{ゲイ}き穿つ

」

瞬間、キャラとフリードはアリア達を見失ってしまった。

「ど、どこ！？」

「^{ボルグ}雷光の槍！」

直後、キャラ達の身体を電撃が迸った。

「ごめんね」

『ヒヒイン』

その言葉を聞き、キャロは気を失い、フリードは元の状態へと戻っていた。

第18話：模擬戦／竜VS幻獣（後書き）

作者「あとがき、感謝コーナーです！」

アリア「あの・・・門倉様、ソラト様、あ・・・ありがとうございます！
います！」 速攻でどこかへ消える。

レオル「おい、またか」

作者「気にするな。それよりソラト様には以前戦闘描写の事で指摘
されましたが、今回良くなっているとされました！」

レオル「まあ、今回のでまたダメだって言われそうだな」

作者「ごめ、マジごめん。だからその鎌下ろして」

レオル「・・・チツ」

作者「さて、次回はですね。シグナム VS ビラルゴの戦いを・・・
書くかもです」

レオル「かもって何だよ」

作者「んー、特別編を書くかもねってこと。『一休み、一休み』みたい
ないな」

レオル「一休さんか！」

作者「ま、とりあえず、そのどっちかですね」

レオル「……まあ、とりあえずだ。この小説をお読みになる方々に感謝を」

作者「ホント、感謝感激雨霞です！」

レオル「ちなみになぜ最後の決めがゲイボルグ？」

作者「いや、なんかいい名前ないかなって思ったら、それぐらいし
か思いっかなかったから」

第19話：模擬戦、騎士の戦い

アリアが訓練場からキャロとフリードをコルマールに寄せ戻ってくる。

「さて、誰かキャロを連れて行ってくれ」

「あ、じゃあw」なら我が行こう」「えっ？」

フェイトが名乗り出ようとした時、ユニカが先にキャロを抱える。

「ええかの？」

「え、と、はい、お願いします」

ユニカが一応フェイトに確認をとり、医務室へと運ぶ。

「それじゃあ、次はシグナム二尉とビラルゴだな。2人とも訓練場に行つて」わかった、すぐ行こう！」「了解だ！」・・・最後まで聞けよ」

レオルの言葉を遮ってから2人はダッシュで訓練場へと向かっていく。

それを見た六課メンバーはビラルゴがどのような人物なのかが少し分かった。

「アイツもバトルマニアか」

「あ、あはは・・・」

ヴィータが呆れ顔で呟くと、それを聞いたフェイトが苦笑いする。

「ビラルゴ・ジェンキンス・・・一体どんな戦いをするのか、楽しみだな」

シグナムは近くで待機しているビラルゴを見ながら呟く。
一方、ビラルゴはと言うと、

「シグナムか。俺を楽しませてくれるかな」

そんなことを言いながら、待機状態で自身の右手人差し指にはめてあるデバイス・ミョルニールを軽く撫でる。

ふと、ビラルゴがシグナムの方を見ると、シグナムと目が合う。
それからしばらく、2人は睨み合う。
そして、時間が訪れると、

「レヴァンティン！」

「ミヨルニール！」

『『Anfang』』

2人は同時にデバイスを起動すると、瞬時に鏑迫り合い状態へと入る。

「それがお前のデバイスか！」

ビラルゴの手には、起動状態で大斧型となっているミヨルニールが携えられている。

「ああ、そうだぜ！」

と、2人は鏑迫り合いの状態から一旦距離をとった。

「レヴァンティン！」

『『Explosion』』

シグナムは、レヴァンティンを鞘に収め、カートリッジを1発ロードする。

「ミヨルニール！」

『『Explosion』』

ビラルゴも、カートリッジを1発ロードさせると、ミヨルニールに

電撃を纏わせる。

「飛竜・・・一閃！」

「ボルテック・アックス！」

シグナムが飛竜一閃を放つと、それに合わせるかのようにビラルゴはミヨルニールを頭上に振り上げ、レヴァンティンの連結刃が届きそうなところまで来ると同時に振り下ろし、弾く。するとシグナムは、すぐにビラルゴに接近戦を挑む。

「はあ!!」

シグナムは、斬りかかつては離れ、離れては斬りかかる。所謂、ヒット&アウェイ戦法でビラルゴを攪乱していく。

ビラルゴはと言うと、シグナムが斬りかかってくると、すぐに避けるかミヨルニールで防ぐかして、何とか攻撃をかわしている。

「くっ、キリがないな。なら！」

そう言うと、シグナムはカートリッジをロードし、レヴァンティンに炎を纏わせ、斬りかかる。

「紫電・・・一閃！」

しかし、ビラルゴはその攻撃を正面から受け止めようと、同じようにミヨルニールにカートリッジをロードさせ、電撃を纏わせる。

「雷斧・・・一閃！」

お互いのデバイスがぶつかり合い、最初の様な鏖迫り合いとなる。

「やるな」

「あんたもな」

2人は拮抗した状態のまま軽い笑みを浮かべる。
しかし、その状態も長くは続かなかった。

「くっ！」

「どうした、段々押されてるぜ？」

シグナムは段々とビラルゴに押されていき、今ではかなりしゃがみ込んだ状態で耐えていた。

「そろそろ、終わらせるか！」

「っ！？ レヴァンティン！」

『Explosion』

突如ビラルゴから放たれた殺気に反応し、シグナムは即座に拮抗状態から脱する。

直後、すぐに背後に回り込み、ビラルゴへ斬りかかる。

「ハアアー！！」

「あめえよ」

しかし、シグナムの斬撃は空を切り、その刃は何も斬ることがなかった。

シグナムが横目で自身の背後を見ると、そこにはカートリッジを3発ロードし、ミヨルニールの側面で殴りかかろうとしているビラルゴの姿があった。

「また、戦^やろうぜ……エレクトロ・プレス！」

シグナムは、その攻撃を咄嗟にシールドを張りガードするが、ビルゴの攻撃の威力は半端なく、いとも容易く破られ、シグナムはそのまま地面に叩きつけられる。

「がはっ!？」

シグナムは、気を失いそうになるが、咄嗟のシールドのおかげでギリギリのところで気を保っている。

「なんだ、まだ起き上がるのか」

「まだだ。私はまだやれる！」

そう言い、シグナムはレヴァンティンで斬りかかるが、すでにビルゴを倒せるほどの体力と魔力は残っていなかった。

「はあ、もう眠れ」

ビルゴはそう言いながら、ミヨルニールでシグナムをもう1度ぶっ飛ばす。

「があ!？」

シグナムはふっ飛ばされ、徐々に気を失っていく。
そんな中、ビルゴの言葉だけが、その場に響き、シグナムへと聴こえてきた。

「また今度、戦^やり合おうぜ」

それを聞いた瞬間、シグナムは倒れ込み、完全に気を失う。

第19話：模擬戦／騎士の戦い（後書き）

作者「あとがき、感謝コーナー！」

ユニカ「門倉甲殿、毎回ホントにありがたい。そして前回の戦闘の短さ・・・本当にすまないの」

作者「ホントにすみません。自分でもあれはさすがに短いと思ってました。もし編集する時間があり、自分で良い感じの戦闘シーンを思いつきましたら、加筆修正したいと思います」

ユニカ「さて、次回じゃが、我とあの赤毛の小娘かの？」

作者「ああ・・・・・・・・・・・・・・・・多分な（ボソッ）」

ユニカ「いま多分と言わんかったか？」

作者「ソナワケナイデスヨ」

ユニカ「なぜ片言なのじゃ・・・まあよい。皆の者、次回を楽しみにするのじゃ！」

作者「この小説をお読みになってくれる方々に、感謝感激雨霞！」

第20話：模擬戦、鉄鎚と一角翼竜

「シグナム!？」

現在、模擬戦を終えたビルルゴがシグナムを抱え戻ってきた。そこにはやてが駆け寄り、シグナムの容態を確認する。

「安心しろ、気を失ってるだけだ」

それを聞いたはやては、ホッと安堵の息を漏らす。

ビルルゴはシグナムを抱えたまま、医務室へと向かっていくと、ちようど入れ替わりでユニカが戻ってきた。

「なんじゃ、ちようど終わったのかの」

「ああ、次はあたしとあんたの番だ」

一歩前に出ながら、ユニカを睨むヴィータ。

「ふむ、威勢のいい小娘じゃの」

「あんだと!？」

「軽く捻ってやろうかの」

「上等だ、さつさと行くぞ!」

徴発されたヴィータは怒り心頭のままフィールドに入っていく。それを見て微笑むユニカ。

『主よ、悪いが今日は真の姿を解放させてもらっぞ』

レオルに向け、念話でそう伝えるユニカ。

はあ、と溜息をつきながら、レオルは頭を押さえる。

『・・・加減はしろ』

『分かっておるわ』

ユニカはそう言い、訓練場へと向かっていく。

ヴィータ side

「くそ、何なんだ」

あいつ、人をおちよくりやがって！
ぜってえ、ぶっ飛ばす！

そう思っていると、あの女があたしの前へとやってきた。

「・・・ぜってえ、ぶっ飛ばす！」

「出来るかの？」

「後悔すんなよ!!！」

あたしは自分の愛機・グラーフアイゼンを取り出す。

グ
イ
ー
タ s i d e o u t

「アイゼン!!！」

『A n f a n g』

ヴィータはグラーファイゼンを起動させる。

対するユニカは、未だB Jを装着せずに、ただ立っているだけだった。

「おいどうした！ さっさとB J装着しろよ！」

「・・・すまぬな、今日は本気でいかせてもらう」

「何言つて・・・っ!？」

その時、ヴィータは気付いた。

ユニカの魔力が、どんどん上昇していつていることに。

そして、ユニカの身体が光り輝くと、段々形状が変わってくる。

「な、なんだこれ!？」

『これが、我の真の姿じゃ』

そこには、今までヴィータと対峙していた女性ではなく、黒い一角翼竜が佇んでいた。

「てめえ、竜だったのかよ」

『そうじゃ、これが我の本気。そして・・・』

ユニカが何かを言いかけて、姿を消す。

それにヴィータは即座に反応し、バリアを展開する。

「ぐう!？」

『ほう、私の攻撃を防ぐか』

ヴィータが展開したバリアにユニカの角の先端が直撃する。

バリアに罅が入ったものの、ギリギリのところで耐える。

「くそ、アイゼン！」

『Schwalbefliegen』

ヴィータはユニカが引いたのを確認すると、すぐに反撃に出る。

『ふん、そんな球が当たると思ってた』「オリヤアアアア！」「うおう！？」

ユニカがシュワルベフリーゲンを避けていると、そちらに気を取られしまい、ヴィータが強襲してくるまで気付かなかった。

『おお、危なかったの』

「チィ、このヤロー！」

ヴィータがアイゼンで殴りかかるが、それをユニカは角で軽くあしらう。

そのせいでさらに怒りのボルテージを溜めていくヴィータ。

「この、アイゼン！フォルムツヴァイ！」

『Raketentform』

ヴィータはグラーファイゼンをラケーテンフォルムへと変化させ、攻撃を放つ。

「ラケーテン・・・ハンマアアアアアア！」

ヴィータが全力を込めて放ったラケーテンハンマーは、しかしユニカにとって然程脅威ではなかった。

ヴィータが放った鉄球は今までとは比べ物にならないほどのスピードでユニカへと向かっていく。

「ふん、そのような攻撃で私の防衛を打ち抜けるとしても？」

ユニカはバリアを展開し、シュワルベフリーゲン・マキシマムを防ぐ。

しかし、予想以上の威力でバリアのあちこちにいくつか罅が入った。

「くっ、やるではないか。だろ」「オリヤアアアア」なっ!？」

Raketenhammer Eindringen

「ラケエエエテン、ハンマアアアアアアアアアア――」

————— ! ! ! ! !

ヴィータは、バリアに罅の入ったこの瞬間に、一気に全力で突撃する。

ユニカが張ったバリアは、罅が入っていたこともあり、少しすると突破されてしまった。

『しまっ!？』

「いっけええええええええええ!!!!」

バリアを破壊した勢いのまま、ヴィータはユニカにグラーファイゼンを叩き込む。

その衝撃は、予想以上のもので、ユ二力は一瞬のうちに地面へと激突していた。

「はあ、はあ、はあ……ど、どうだ！」

『ぐふっ！ な、なかなかやるのう。油断して……しもうた、わ』

ゆっくりと、その巨体を起こすユニカ。

しかし、先程の攻撃が予想以上に良い感じに入ってしまった、いつも以上にダメージを受けた。

結果、1発しか攻撃を受けていないものの、ユニカはその場で倒れ、気を失う。

「はあ、はあ、はあ、はあ……や、やったのか。はあ」

ヴィータはユニカを倒したことを確認すると、その場に座りこむ。

勝ったとはいえ、ヴィータの方もかなりダメージを受けている。

しばらくは立てないと認識したヴィータは、その場に寝転び、少しの間休むことにした。

第20話：模擬戦、鉄鎚と一角翼竜（後書き）

作者「一皆さんへの感謝感激を表わすコーナー（あとがき）」

レオル「門倉甲様、いつもありがとうございます」

作者「さて、次回。やっと、やっと模擬戦最終戦！」

レオル「俺と高町一尉とテストロッサ執務官だな」

作者「ま、頑張れよ。せいぜい、その仮面落とさないようにな」

レオル「……分かってるさ」

作者「頼むぞ。模擬戦終わったらその辺の特別編でも書こうかな」

レオル「まあ、どっちでもいいさ」

第21話：模擬戦／星と雷と闇 前編

「つ、疲れた、もうダメ」

あのと、暫くその場で休んだヴィータだったが、

『そいつ連れてさっさと戻ってこい』

と、レオルに殺気を込めて言われたため、ユニカを担いでダッシュで戻ってきた、

「お、おつかれさんやな、ヴィータ」

「あはは・・・」

そんなヴィータの様子を見た六課メンバーは、苦笑する。すると、レオルがなのはとフェイトのところへと来る。

「さて、次は俺と高町一尉にテストロッサ執務官だ」

「はい、頑張ります」

「負けません」

「ふん、意気はよし。それでは行くぞ！」

「はい！」

レオルが歩き始めると、その後ろをなのはとフェイトがついていく。

『Healing』

ユニカの横を通る時、レオルは他の人に気付かれないように、ユニカに回復魔法をかける。

「ゆっくり休め」

小さな声でそう言うレオル。

その顔は、どこか寂しそうな顔をしていた。

訓練場へと移動したレオルたち。

「さあ、始めるか。準備はいいな」

「はい、いつでも」

「バッチリです」

レオルが確認をとると、なのはとフェイトは自身の愛機を取り出して、答える。

「ハッ、上等だ。やるぞ！」

そう言いながら、レオルも自身のデバイスを取り出す。

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

「スカブ」

「セットアップ！」

「スタートアップ」

『Standby, ready』

『Start, up』

3人は同時にBJを装着、デバイスを展開する。

なのはの愛機・レイジングハートはアクセルモードで、フェイトの愛機・バルディッシュはアサルトフォームで、レオルのデバイス・スカブは鈍色に輝く鎌　ハントフォームで起動する。

「レイジングハート」

『Accel Shooter』

「バルディッシュ」

『Haken Form』

なのはとフェイトはBJ展開後、すぐに行動を開始する。

「シュート！」

「ハアアアア!!」

『S o n i c M o v e』

なのははアクセルシューターを放ち後方からの攻撃を、フェイトはソニックムーブでレオルに一気に接近し、近距離での戦闘を仕掛けてきた。

「スカブ」

『Y e s , k i n g』

それにレオルは瞬時に反応し、鎌の刃に纏うように魔力刃を展開する。

フェイトの攻撃を素手で受け止め、アクセルシューターを魔力刃を纏ったスカブで一瞬のうちに斬り落とす。

「「なっ!?!」」

2人はそれに驚きを隠せなかった。

複雑な軌道で操作していたアクセルシューターを、デバイスを一振りするだけで全て防ぎ、さらにそれを片手でやってのけたのだから、さらに驚く。

「わざわざやられに来たのか?」

「っ!?!?!」

フェイトはすぐにレオルから離れ、距離をとる。

なのはがフェイトを見ると、顔色が悪くなっており、冷や汗もかいていた。

「フェイトちゃん、大丈夫?」

「う、うん、大丈夫。あの人の殺氣にあてられただけ」
「殺氣？」

そう、レオルは先程、フェイトに放った言葉に殺氣を込めていた。フェイトが咄嗟に距離をとったのは、それが原因だった。

「さて、次は俺の番だな」
『Hell spear』

レオルは自身の周囲に漆黒のフォトンスフィアを生成する。しかし、その数が異常だった。

「ええ！？」
「す、すごい数！？」

その場に生成されたフォトンスフィアの数、数十個展開されている。

「狩り獲れ、ヘルスピア」
『Fire』

レオルはスカブをなのはたちへと振り下ろすと、同時にフォトンスフィアが発射される。

一斉に放たれたスフィアは、真っ直ぐなのはたちへと向かっていく。

『Protection EX』
『Defensor Plus』

即座にバリアを展開し、攻撃を防ごうとする2人。
直後、バリアに大量のスフィアが衝突する。

バインドを解くのに手こずっていると、すでにチャージを終えた2人が砲撃を放つ。

「・・・混沌の入口」

『Black hole』

しかし、その砲撃を遮るように、突然黒い渦状のものが現れると、なのはとフェイトの放った砲撃をどんどん飲み込んでいく。

「な、なに、あれ？」

なのはがそう呟いているうちに、砲撃は全て黒い渦へと吸収された。すると、同時にレオルの動きを封じていたバインドが破壊される。

「いや、中々危なかったな。相手が俺でなかったら確実に終わっていただろうな」

スカブの刃に大量の魔力を流し込み、巨大な魔力刃を生成させる。

「さあ、ここからが本番だ！」

そう言い、レオルはなのはとフェイトへと向かい、空を駆け抜ける。

第21話：模擬戦／星と雷と闇 前編（後書き）

レオル「なぜ前編だ？」

作者「ごめん、そこは聞かないでくれ」

レオル「・・・・・・・・・・・・・・・・まあいいか」

作者「あ、ありがたい。さて、ここからはいつも通り、あとがき、感謝コーナー！」

レオル「門倉甲様、倉西相馬様、ソラト様、どうもありがとうございます！」

作者「そして倉西相馬様からは展開が急すぎとのご指摘を頂きました」

レオル「どうにかならんのか？」

作者「・・・・・・・・努力はしてみます。でも今回の内容もどういう反応をとられるか・・・」

レオル「・・・まあいいか。あとソラト様からはオリキャラの詳細を教えてくださいとの事だが？」

作者「これは模擬戦が終わったら載せるつもりなので、もう少々お待ち下さい」

レオル「なんだかもうグダグダだな」

作者「言つな、分かつてるから」

第22話：模擬戦、星と雷と闇 後編（前書き）

なんか、書いているとグダグダになってきた・・・
先に謝罪を、すみませんでした。

第22話：模擬戦、星と雷と闇 後編

『A b y s s b l a d e』

「あんたらの魔力・・・全て狩り獲る！」

レオルがスカブの刃に魔力を注ぎ込み、巨大な魔力刃を展開させ、
なのは達へと突っ込む。

『なのは。私が攪乱するから、その間に！』

『分かった！』

念話でそう言ったあと、フェイトはすぐにレオルへと突っ込んでいった。

フェイトとレオルの距離が段々と縮まっていき、最後には0になった。

2人は激しくぶつかり合い、鏑迫り合う。

「くう！」

「チイ！ 埒があかねえ、な！」

「っ！？」

『S o n i c M o v e』

鏑迫り合いの最中、レオルはスカブに展開している魔力刃の形状を変形させ、フェイトを切り裂こうとした。

しかし、フェイトはそれに瞬時に反応し、一瞬のうちにその場から抜け出す。

同時に、フェイトがいた場所の後方から、フェイトが放ったと思われるプラズマランサーが迫っていた。

その攻撃をレオルは魔力刃をさらに変形させ防ぐ。

だが、そのさらに後方に、桜色の魔力光がチャージされていた。

「レイジングハート！」

『Divine Buster』

なのはは先程放ったのとは比べものにならないほどの威力のディバインバスターを放った。

「くそ、スカブ「させない！」はあ、面倒だ」

レオルがなのはの放った砲撃を回避しようとするが、その前にフェイトによってバインドを何重にもかけられてしまう。
しかし、レオルはそれに動じることなく、何かを呟く。

「・・・開闢の出口」

『White hole』

次の瞬間、レオルの目の前に2つの白い渦が現れると、片方からは黄色い魔力光の3つに割れた砲撃が、もう片方からは桜色の直射型の砲撃が放たれる。

「な！？ それは！？」

「なんで！？」

そう、それは先程、レオルに防がれたはずのディバインバスターとトライデントスマッシャーだった。

2つの砲撃は、なのはの放ったディバインバスターと正面から衝突する。

その威力は互角で、互いの放った砲撃は程無くして相殺された。

「あれは、私の放った砲撃？」
「なんであの人が・・・」

先程放たれた砲撃を見た2人はそんな疑問を抱きつつも、レオルへの警戒は解かない。

レオルは砲撃が相殺されたのを見て、軽く悪態を吐く。

「くそ、あいつらの放った砲撃より威力が格段に下がったか。『あいつ』のオリジナルの能力なら吸収した威力以上の出力で返すことができるんだがな」

『仕方ありません。我々は『刀王』には敵わないのですから』
「分かってるさ」

レオルは展開した魔力刃を消しながら、立ちあがる。

「スカブ、フォーム2だ」

『了解、サバイバルフォーム起動』

すると、スカブの形状が鎌からナイフへと変化する。
その見た目は、まるでサバイバルナイフのようだった。

その場を包んでいた煙が晴れ、なのは達がレオルの姿を捕える。
それと同時に、彼のデバイスの変化にも気付く。

「あれは・・・ナイフ？」

「カートリッジシステムもあるけど、マガジンは1つしかセットできないみたいだね」

冷静にレオルのデバイスを分析するフェイト。

なのはとフェイトは、今の彼ならそこまで強大な魔法を放てないと判断した。

実際、なのはたちが彼の残存魔力を感じ取ると、『今のなのはたちと同じぐらいの魔力しか残っていない』

さらに、カートリッジで底上げできるのは1発のみ。

「なのは、残りのカートリッジは？」

「私はあとマガジン1つと4発。フェイトちゃんは？」

「私も同じぐらいだね」

彼女たちは考えた。

彼を倒すための方法を。

しかし、彼がそんな隙を与えるわけもなく、

「スカブ・・・ダブル」

『Double』

「はあ！」

彼はサバイバルフォームのスカブをもう1本生成すると同時に、なのはとフェイトに向け1本ずつ投げつける。

しかし、投げつけられたナイフはそこまでスピードがあるわけでもなく、バリアやシールドを張る必要もなく、軽く避けられた。

「フォース」

『Fourth』

彼は、さらにスカブを2本生成し、投げつける。

先程同様、2人は難なく避けるが、さすがに彼の行動を不審に思う。そのため、彼女たちは先手を打とうと攻撃を仕掛けようとする。

「エイス」

『E i g h t h』

だが、レオルはさらに4本生成すると、先程とは桁違いのスピードで攻撃を仕掛けようとしたフェイトへと投げつける。

「な!？」

『S o n i c M o v e』

そのナイフをソニックムーブで避け、彼の背後へと移動する。しかし、彼はさらに8本のナイフを生成すると、瞬時にフェイトとなのはへと投げつける。

2人はそれをシールドを張り弾く。

『3 2 n d』

それを見るや否や、レオルはさらにスカブを16本生成し、先程までと同じように2人へと投げる。

『P r o t e c t i o n』

『D e f e n s o r』

なのはたちはそれをバリアを張って防ぐ。

彼女たちは彼の先程からの行動に疑問を抱く。

『なのは、どう思う?』

『わからない。けど、きつと何か狙ってる』

2人が念話で話していると、レオルがまたナイフを生成する。

が、今回は4本だけだった。

「・・・さあ、終幕の時だ」

『Load cart ridge』

レオルがカートリッジをロードするのを見て、2人は警戒を強める。すると、2人の下の方から、さらにガシャンという音が聞こえてくる。

「今のつて!？」

「まさか!？」

2人が下を見ると、今までレオルが投げた全てのスカブがカートリッジをロードしていた。

さらに、レオルの持っているスカブが、それぞれ紅・蒼・黄・碧に光り輝く。

それは2人の下のスカブも同様だった。

「なのは!」

「うん! アクセル」少し動くな」っ!？」

なのはが、レオルにアクセルシューターを放とうとした時、レオルが2人にバインドをかける。

2人はそれを解こうとするが、1秒間に数百通りの構築式へと変化するため、全く解ける気配がない。

「エレメントフォース」

『Element force』

レオルは手に持っている4本のスカブをなのはとフェイトの頭上へ

と投げ上げる。

「雷は雷へ、炎は炎へ、風は風へ、氷は氷へ、四属それぞれ道を繋げ」

同時に、全てのスカブに属性が付与される。

紅には炎が、蒼には氷が、黄には雷が、碧には風が、それぞれ付与される。

「切り裂け」

『Blade』

瞬間、地面のスカブから上空のスカブへと氷炎雷風が迸る。

その軌道上にはもちろん、なのはとフェイトがいた。

「「っ!?!」」

2人は今もバインドで固定されており、身動きが取れないため、程無くして、フェイトには炎と風、なのはには氷と雷の属性が身体を突き抜ける。

同時に、彼女たちの魔力が尽き、バインドで固定されたまま、2人は気を失う。

第22話：模擬戦、星と雷と闇 後編（後書き）

1週間ぶりの更新です！

ああ、なんかグダグダだ！！

・・・と、とりあえず、次回をお楽しみに！！

あ、その前に今まで出てきたオリキャラの設定を記載しますか。

キャラ設定／騎士団編

作者「と言つことで、今回で3回目のキャラ設定!」

レオル「今回は俺達騎士団の設定を公開する」

作者「ちなみに今回は彼らのデバイスの設定も一応載せときます」

レオル「とはいっても、デバイスの形態等はまだ判明していないものがあるので、そちらの方は本編で出てきたら変更していきたいと思っっている」

それでは、まずはキャラ設定からどうぞ!

名前：アシユラ・ファープニル

性別：男

年齢：17歳

身長：175cm

体重：70kg

性格：かなりの堅物で、どのような違反も認めない。ただ、周りの誰よりも情に厚い人。

容姿：赤い短髪で、黒い瞳。見た目はそこそこカッコいい。

稀少技能：魔力変換資質「炎熱」「凍結」

デバイス：シヴァ

使用魔法：近代ベルカ式

詳細：神託の盾騎士団^{オラクル}・特務師団の団長。どのような些細なことも、
違反をしているものを見つけるとすぐに注意をする。

また、人情味溢れる人で、そういう話を聞くとすぐに感化される。それなりに容姿はいいのだが、接してみるとギャップがあるため、女性からの人気もあまり無い。ちなみに、炎熱と氷結の魔力変換をあわせて水を発生させることも出来る。

名前：ビラルゴ・ジェンキンス

性別：男

年齢：18歳

身長：182cm

体重：77kg

性格：傍若無人・・・ではないが、自分勝手に行動することがある。総長の命令には絶対従う。

容姿：黒の短髪、グレーの瞳。顔には以前魔獣にやられた傷痕が残っている。

稀少技能：魔力変換資質「電気」

デバイス：ミヨルニール

使用魔法：近代ベルカ式

詳細：神託の盾騎士団・第一師団の団長。オラクル主に現場に出て、敵戦力の殲滅、捕縛などが仕事。

普段はかなり自分勝手に、自身が教練する訓練なんかもサボることがある。

ただ、目上の人への敬意は忘れないため、総長の命令などは必ず言うことを聞く。

ちなみに、フェイトやシグナムに負けず劣らずのバトルマニア。

名前：サフィア・ネイビア

性別：女

年齢：18歳

身長：172cm

体「レディに対して失礼よ!」「ひでぶっ!」

性格：軽く自己中が入っているが人に迷惑をかけることはそこまでのない。こちらも総長には従う。

稀少技能：魔力変換資質「凍結」

デバイス：ブリーナク

使用魔法：ミッド式（カートリッジシステム搭載）

詳細：神託の盾騎士団・第二師団の団長。現場では前線指揮に後方支援や援護射撃などが主な仕事。

ビラルゴ同様、自己中心的で、かなり上から目線。

こちらも目上の人間には敬意を忘れず、総長の命令は必ず聞く。

名前：アリア・リリン

性別：女の子

年齢：10歳

身長：135cm

体「うう・・・聞かないで、ください（上目遣い）」

性格：かなりの人見知りで、誰かに言われないと人前でさえ挨拶できない。

稀少技能：幻獣召喚（神話などで伝わっている生物を召喚できる）

デバイス：ベルフォーン

使用魔法：ミッド式

詳細：神託の盾騎士団・第三師団の団長。現場での人員救助や応急手当、

また後方支援や召喚魔法で召喚した幻獣での敵戦力殲滅など、多彩なことができる。

騎士団で最年少の団員。

ただ、人見知りが激しいため、初対面の人とはまともに会話も出来

ない。

しかし、総長に言われると、オドオドしながらもちゃんと会話をする。

現在は、騎士団の人間ならほとんどの人と話すことが出来る。

また、自分が契約している幻獣たちとは仲が良く、休みの日などは幻獣たちを召喚して

遊んであげたり、身体を洗ったりしている。

名前：レギンス・シンクレア

性別：男

年齢：23歳

身長：188cm

体重：81kg

性格：まさに武人。戦い以外にはあまり興味が無いが、総長への忠誠心は強い。こう見えて子供には優しい。

稀少技能：特になし。

デバイス：ビーストレイジ&スタンフィールド

使用魔法：近代ベルカ式

詳細：神託の盾騎士団・第五師団の団長。
オラクル

彼が教導する場合、確実に1日目は自分VS他全員の模擬戦を行う。ちなみに、今までそれで負けたことは無い。

総長より年上だが、以前彼に助けてもらって以来、彼への忠誠を誓った。

見た目とは違い、子供にはとても優しく、戦場で孤児を拾っては、騎士団が運営している孤児院へと連れて行く。

名前：レオル・K・ヴァンデル

性別：男

年齢：不詳

身長：推定180前後

体重：推定75前後

性格：謎に包まれた人物。いつも敬語で、騎士団の人間以外とは少し距離を置いている。

稀少技能：不明

デバイス：スカブ&シルフィード

使用魔法：ミッド式

詳細：神託の盾騎士団・首席総長。
オラクル

それ以外の詳細は誰もわからず、団長クラスの人間しか彼の詳細を知らない。

作者「ちなみに、この設定は作者の都合によって変わるかもしれませんが、なのでご了承ください！」

レオル「……そんなことでいいのか？」

作者「気にするな。それにしても、お前ってホント、謎だらけだよな」

レオル「まあな。俺の正体に気付いている読者の方もいるだろうが、多分それは半分正解、半分不正解と言ったところだな」

作者「マジで？」

レオル「ああ。読者はある人物と俺を重ねているだろう。それが少し違うのだが……これ以上は言ってしまったらネタバレだな」

作者「あ、そう……。と、とりあえず、次はデバイス設定です。」

どうぞ！」

名前：シヴァ

使用者：アシュラ・ファープニル

種別：アームデバイス

魔法形式：近代ベルカ式

待機状態：紅い菱形のコアをついた黒いブレスレット。

第一形態：トライフォルム（三叉槍）

第二形態：？？？

第三形態：？？？

フルドライブ：？？？

？？？：？？？

名前：ミヨルニール

使用者：ビラルゴ・ジェンキンス

種別：アームデバイス

魔法形式：近代ベルカ式

待機状態：白いコアをついた金色の指輪。

第一形態：アックスフォルム（大斧）

第二形態：？？？

フルドライブ：？？？

オーバードライブ：？？？

？？？：？？？

名前：ブリューナク

使用者：サフィア・ネイビア

種別：インテリジェントデバイス

魔法形式：ミッド式

待機状態：蒼く輝くイヤリング。

第一形態：ハントモード（ショットガン）

第二形態：？？？

フルドライブ：？？？

オーバードライブ：？？？

？？？：？？？

名前：ベルフオーン

使用者：アリア・リリン

種別：ブーストデバイス

魔法形式：ミッド式

待機状態：恩人の写真を入れたロケット。

第一形態：エイドモード（グローブ）

第二形態：？？？

フルドライブ：？？？

？？？：？？？

名前：ビーストレイジ

使用者：レギンス・シンクレア

種別：非人格式アームドデバイス

魔法形式：近代ベルカ式

待機状態：スタンフィールとシンクロしているため、瞬間着装と収納が可能。

第一形態：ビースト・？（獣爪籠手）

第二形態：？？？

第三形態：？？？

フルドライブ：？？？

????:???

名前：スタンフィール

使用者：レギンス・シンクレア

種別：インテリジェントデバイス

魔法形式：近代ベルカ式

待機状態：白い懷中時計

第一形態：ビースト・?（インラインスケート）

第二形態：???

第三形態：???

フルドライブ：???

???:???

名前：スカブ

使用者：レオル・K・ヴァンデル

種別：インテリジェントデバイス

魔法形式：ミッド・ベルカの混合式

待機状態：漆黒のプレスレット

第一形態：ハントフォーム（死神鎌）

第二形態：サバイバルフォーム（サバイバルナイフ）

第三形態：???

フルドライブ：???

オーバードライブ：???

???:???

名前：シルフィード

使用者：レオル・K・ヴァンデル

種別：ユニゾンデバイス

魔法形式：ミッド・ベルカの混合式

詳細：リインフォース？と同じぐらいの大きさで、髪は深緑色のツインテール。瞳の色は髪と同じ深緑色。

騎士団の団員は全員会っているが、レオルが団員以外の人間の前に出るときはいつもユニゾンしているため、出会うことはない。

作者「と、こんな感じですかね？」

シルフィード「私ってそんな感じだったんですねえ」

レオル「シルフィード、勝手に出てくるな」

シルフィード「いいじゃない、減るもんじゃあるまいし」

作者「レオルの喋る機会が減るんじゃないかね？」

シルフィード「ああ、なるほど」

レオル「いや、俺はそんなこと気にはしないのだが・・・まあいいか」

作者「それでは、今回はこれで終わりますか」

レオル「次回はどんな話だ？」

作者「次回は断片的に過去の事を見るユニカの夢とレオルに疑心を抱くシャーリーとはやての事を主に書きたいかと」

レオル「なぜ疑心？」

作者「まあ、それは話を読めばわかるって」

レオル「そうか」

作者「まあ、予告通りの話を書くかは分らんけど（ボソッ」

シルフィード「なんか言いましたか？」

作者「いや、なんでもないよ。それでは次回をお楽しみに！」

第23話：小さく抱く疑心

『俺は・・・俺はどうしたら!!!』

・・・これは、なんじゃ？

『玲央よ、主の願いは叶えてやろう。その代わり、主に

ああ、これは、あの時の・・・

『いいぜ、分かった。あんたの提案をのんでやる!!』

主、ダメじゃ・・・

『しかし、玲央よ。今まで主が助けてきた子供たちはどうする?』

そうじゃ、そうじゃよ、主よ。あやつらはどうなるのじゃ？

『・・・だったら

』

『ふむ、確かにその方法なら大丈夫じゃが・・・良いのか?』

主よ、それじゃと我が!

『悪い、ユニカ。俺の我俣を聞いてくれ』

主・・・主がそう言うのであれば、我は従うしかありません。

『それでは玲央よ。頼んだぞ』

』

『ああ……、ユニカ』

ああ、主……主……

「主!!」

ユニカが目を覚ますと、見覚えのない場所だった。

「わ、我は一体？」

「おう、やっと起きたか」

すぐ近くから声をかけられ、ユニカが目を向けるとそこにはビラルゴがイスに座ってユニカを見ていた。

「ビラルゴか」

「ああ、総長……に言われてな。様子を見てろってな」
「そうじゃったか」

そう言うと、ユニカは喋らなくなった。
暫くして、ビラルゴはゆっくりとイスから立ち上がる。

「あとな、『刀王』から伝言だ。『あまり無理するな』だよ」
「……そうか」

「じゃあな、俺は行く」

ビラルゴはそう言って部屋から出ていく。
ユニカはベッドから降り、窓の外を眺める。
ちょうど夕日が沈もうとしているところだった。

「我は……負けたんじゃったな」

そう呟きながら、どこか悲しみの表情を浮かべるユニカ。
だが、そんな彼女に声をかける者は、この場にはいない。

「ん、これってやつぱり、あれかなあ？」

「どないしたんや、シャーリー」

今日の模擬戦のデータを見ながら唸っているシャーリーを見かけ、はやてが声をかける。

「あ、八神部隊長。あの、この人なんです」

そう言いながら、シャーリーは1人の画像をモニターに映し出す。

「これって・・・レオルさんやん。どないしたんや？」

そこには、デバイスを構えたレオルの姿が映し出されていた。すると、シャーリーが「これを見てください」と言いながら、もう1つ画像を表示する。

表示された画像には、黒いローブで全身を包んでいる人物が表示される。

しかし、はやてはその人物の持っているデバイスを見て、驚く。

「これって、レオルさんのデバイスと同じじゃないか!？」

「そうなんですよ。私も模擬戦の時にどこかで見たことあると思って調べてみたら、ある事件の犯人と思われる人物のデバイスと同型でした」

そう言いながら、シャーリーはある事件の詳細が書かれたデータを表示する。

そこには、その事件名が大きく表示されていた。

「『連続研究施設破壊事件』なあ」

シャーリーとはやては、レオルに対し小さな疑心を抱いた。そんな中、ある任務が六課と騎士団に依頼される。

『第97管理外世界・現地惑星名称『地球』への出張任務』

第23話：小さく抱く疑心（後書き）

作者「はい、早速感謝コーナー！」

??「ソラト様、どうもありがとうございます！」

作者「・・・・・・誰？」

??「本編ではすでに出てるはずなんだけどな」

作者「あゝ・・・・・・ああ、お前か」

??「分かったのか？」

作者「大変だよな、お前も。今までどこにいた？」

??「んつと・・・・宇宙空間の最端近くにある星で、ある探し物をしてた」

作者「・・・・そうか、まあ頑張れ」

??「あ、俺、これから今までいた星とは真逆の座標にある星まで行かなきゃならないから。それじゃあな」

作者「お、おう、頑張れよな、ホントに」

??「ああ、次来るのは多分本編にちゃんと出たらだろっけどな」

作者「そうだな、それまでにはちゃんと終わらせとけよ」

??「・・・頑張るさ。それより次回は？」

作者「まあ、最後に出た通り、地球への出張任務です。ただSSの内容を覚えてないので、ほとんど騎士団視点になるかもです」

??「それじゃあ、次回を楽しみにしてくれ。さて、俺も頑張っていくか」

第24話：出張任務〜海鳴市編（前書き）

今回、地球へのお出張任務では六課メンバーは全く出ません。
全て騎士団視点になりますので、ご了承ください。

第24話：出張任務〜海鳴市編

現在、ビラルゴ、ユニカ、サファイア、レギンスは今、地球のとあるファミレスである人物と待ち合わせをしている。

「そう言えば、総長とアリア、アシュラはどこに行ったのよ」

「あゝ、どこだったかなあ。確かメモに書いてあったと思ったんだがな」

そう言いながら、ビラルゴは胸ポケットに入れてあったメモを取り出し、数ページめくる。

「ああ、えつとな、『しりつおおとりりょうちんがくえん私立鳳繚蘭学園』つてところに行ってるらしい」

「学園つて、そんなところ行ってどうすんのよ？」

「我が聞いた話じゃと、誰かに協力してもらってある物を作っておるらしいんじゃない」

「ある物つてな」 「やあ、お待たせ」 ああ、来ましたか。お待ちしております」

ふと、彼らのテーブルに1人の男性が近くまで来ていた。

男性を見た彼らは、すぐに姿勢をただし、敬礼をする。

その男性は、騎士団メンバーが身体を鍛える際にとてもお世話になった人物で、体術だけでなら総長以外の騎士団メンバーは誰も彼には勝てないだろう。

「こちらにおかけください、士郎さん」

そう、そこに現れたのは紛れもなく、高町士郎、その人だった。

「それにしても、珍しいですね。士郎さんから依頼なんて」
「ああ、実はこれなんだが」

そう言いながら、士郎は2種類の宝石を取り出す。

「これは・・・凄まじい魔力が秘められておるのう」
「これ、どうしたんですか？」
「実は・・・」

士郎はどのような経緯でこれを手に入れたかを話し始める。
以前、海外のある組織からの依頼で、強盗団を壊滅させた時にその場にあつた物らしい。

その宝石は、以前から「呪われた宝石」や「死神を呼ぶ石」等と呼ばれている。

そして、組織もその宝石が紛れ込んでいるとは知らなかったらしく、その処分に困っていたので、受け取ったらしい。

「君らには、この宝石を処分してほしいんだ」
「分かりました。私たちにお任せください」

そう言いながら、サファイアはその宝石を解析していく。
ピラルゴとレギンスは宝石の周囲にのみ極小の結界を張り、ユニカは自身の稀少技能である『フィールドセーフ地形維持』を使用して、宝石に内蔵されている魔力が暴走しても地形が変化しないようにした。

「・・・これは」
「どうかしたのかえ？」

サファイアは解析結果を見て驚く。

「これ、周囲の人から徐々に魔力を吸い取ってるわ」

「ああ、なるほどな。今までこの宝石を所持して死んでいった奴は、こいつに魔力全てを吸い取られたってわけか」

「でしょうね。すぐに封印したいんだけど、生憎アリアは総長と一緒にここにはいないし」

「・・・とりあえず、連絡しとくか」

レギンスはポケットからケータイ（地球へと来た時用）を取り出し、レオルへと連絡を入れる。

「・・・あ、総長、レギンスです。今士郎さんと会って、ロストロギア級の宝石を預かりました。詳細はメールで送りますので、すぐにアリアを連れて戻って来ませんか？・・・はい、じゃあ『いつもの』場所ですね。了解です。そちらの用事は・・・終わりましたか。はい、はい・・・それでは、今から1時間後に集合ということ。はい、失礼します」

レギンスは話を終えると、ケータイをポケットに戻す。

「どうじゃった？」

「『いつもの』場所に、1時間後集合だよ」

「そう、それじゃあ士郎さん。これは私たちがお預かりします」

「ああ、よろしく頼むよ」

「それでは、失礼します！」

「失礼します！」

サフィアたちは周りに迷惑がかからないように軽く敬礼をすると、ファミレスから出ていく。

ファミレスから出ていく彼らを見送りながら、士郎は呟く。

「彼らも、以前より強くなったな。まだ私の方が強いが」

彼の手には、1枚の紙が握られていた。

「くそ、まだ士郎さんには勝てないか」
「なんじゃ、また何かやっておったのか？」

悔しそうな顔をするビルゴを見て、ユニカが軽く呆れた表情を浮かべる。

「ファミレスで食ったものの支払い伝票、奪われた」

「なんだ、そんなこと」

「俺とビラルゴ2人がかりでもダメだったんだ」

「お主らも強くなつてはおるが、体術では未だに士郎殿には勝てぬか」

解説すると、ファミレスを出て行こうとした時、ビラルゴとレギンスは素早い動作で伝票を取ろうとしたが、士郎に全てを防がれ、逆に伝票を奪われたというわけだ。

「はあ、ここは諦めて奢ってもらいましょう」

「それしかないのう」

「くそ、次は勝つてやる！」

「俺は次は負けん」

ビラルゴとレギンスはそう心に誓い、レオル達との待ち合わせの場所へと向かう。

第24話：出張任務〜海鳴市編（後書き）

今回はあとがき無し、次回予告のみ！

次回、『出張任務〜鳳繚蘭学園編』をお楽しみに！

マックス「おう、俺も出るから待ってるよ！」

くるり「28号、うるさい」

マックス「そりゃないぜ、マミー！」

恵「ちなみにあきらちゃん姿で出るのですよ！」

マックス「そりゃもつとないぜ、ダディー！」

作者「安心しろ、冗談だから」

マックス「冗談なのかよ！」

第25話：出張任務／鳳繚蘭学園編

海鳴市で、ビルルゴ達が士郎と待ち合わせをしている時、レオル、アシユラ、アリアの3人はある巨大な施設へと来ていた。

私立鳳繚蘭学園。

あらゆる方面に対し、才能が秀でている者を集めた全寮制の学校で、本土とは隔離・独立した島に存在し、全体が学園都市となっている。そのため、入学するためには特殊な推薦状が必要で、さらに身辺調査を含めた高度な試験を受けなければならない。

ただ、それに合格さえすれば、在籍中の学費や研究などの経費は一切免除という、かなり優遇される。

そして、レオル達は今、その学園のとある寮の前へとやって来ていた。

繚蘭会専用女子寮。

そこで、ある少女と待ち合わせをしているのだ。

「しかし総長、士郎さんからの依頼も珍しいですが、彼女からの依頼も珍しいですね」

「ああ、そうだな。あいつが俺らに依頼するなんて、余程の事だ」

「・・・・・・（コクコク）」

そんな話をしていると、寮の中から誰かが出てくる。

寮の出入り口から、少女が2人と1つの浮遊物体がレオル達に近付いてくる。

「おゝ、待たせたな！」

「お待たせしてすみませんです！」

「待たせた」

「久しぶりだな、マックス、九条、早かw」「いつも言ってますが、ぐみちゃんって呼んでください!」・・・ぐみちゃん」

現れた少女のうち、水色のツインテールの少女は九条くるり。

機械工学を専門とした研究者兼技術者という天才少女。

ちなみに彼女の髪飾りは浮遊するビーム砲台として機能する。

もう一人の藍色の髪の少女は早河恵。

見た目とは裏腹に、数学系にめっぽう強い、プログラミングの天才。通称は、ぐみちゃん。

そして、彼女たちと一緒に来た浮遊物体はマックスと言うロボット。その機体はくるりが開発し、人格プログラムはめぐm「ぐみちゃんです!」・・・ぐみちゃんが設定した。

ちなみに、マックスは自身のピカピカボディを気に入っているが、ロボットなどと言われると怒る。

「呼びだしてすまない」

「気にするな。俺達神託の盾騎士団と鳳繚蘭学園は協力関係なんだからな。それでどうした?」

「少し困ったことになった」

そう言うと、くるりは歩き始める。

レオル達はそのあとをついて行く。

「で、詳細は?」

「エレクトリックエナジー1895号・フライアの設定中にそこから提供してもらったデータを手違いで削除してしまった。バックアップも無い」

「データ・・・ああ、あの演算式か」

「そう。その再入力を頼みたい」

「報酬は？」

「フライアの試運転が上手くいき、完成したのちに1度だけ無償での貸出し、でどう？」

「了解した」

そんな話をしながら、暫く歩いて行くと、学園の校舎へと着いた。さらにくるりは後者の中へと入り、どんどん校舎の奥へと進んでいく。

そして、ある教室の入口で立ち止まり、扉を開ける。

すると、中に金髪の青年がこっちを見ながら大声をあげる。

「やあ！ みんな元気かな！？」

「ひゃう！？」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「生徒会長じゃん！」

「あ、会長！ こんなところで何してるんですか？」

そう、彼こそがこの学園の現生徒会長・皇奏龍だ。

まあ見た目がそうは見えないのだが。

「とりあえず、バカイチヨウの事はほっとく」

「そうだな、さっさと始めるか。アシュラ、手伝ってくれ」

「了解だ」

「ちょ、俺の扱い酷くないですか！？」

「兄さん、ちよつと黙ってて！」

「はい、すみません」

奏龍の隣で今にもかかと落としをしそうな金髪の少女は、奏龍の妹

で繚蘭会会長・皇天音。

ちなみに奏龍との仲はあまり良くない。

「それでくるり、その人たちが前言ってた人？」

「そう」

天音の問いに頷きながら一言言う。

そんなやり取りを傍目に、レオルとアシユラはどんどんデータを入力していく。

ちなみにアリアはずっとレオルにしがみついたままだ。

「あとどのくらいかかる？」

「そうだな、2人でやってるから後5、6分くらいだな」

「そう、分かった」

そう言うと、くるりは学園専用の通信端末でメールを打ち始める。

この学園では最先端の機器が多いので、電磁波を発する携帯電話の使用を禁止している。

くるりはメールを打ち終え、送信するとすぐに視線をこちらに戻す。そんな時だった。

教室の扉が開き、1人の青年がこちらに近づいてくる。

「あれ。蛭、どうかしたの？」

蛭と呼ばれた青年は、生徒会副会長の八重野蛭。

アホな会長を制しつつ、生徒会の業務の半分をこなす、生徒会のトップと言っても過言ではない人物だ。

「外部から連絡が入ってな。多分九条の客人だと思うのだが」

「すまない、もしかすると俺かもしれん」

作業を続けながらも答えるレオル。

それを確認した蛍が、レオルの元まで歩いてくる。

「生徒会室の固定電話で待たせてある。あとのぐらいだ？」

「あゝ、もうチヨイ……。よし、これで大丈夫だ。前回のものより数段良くしておいた」

「感謝する」

気が付くと、何時の間にかるりもレオルの元へと来ていた。そしてくるりの掌には、小型のチップの様なものがあつた。

「これ、約束のチップ」

「おう、ありがとな」

レオルはくるりからチップを受け取ると、すぐに蛍へと向き直る。

「さて、俺は生徒会室の場所を知らないのだな。できれば案内を頼みたい」

「分かった。俺について来てくれ」

「あ、じゃあ俺も戻ろっかな」

「だったらぐみも戻ります！」

「アリア、アシュラ、2人は学園の入口で待っていてくれ」

「了解しました」

「り、了解です！」

「私はフライアの調整をしないとイケないから」

「あ、私も繚蘭会の書類片付けないと！」

「おう、みんな頑張れよ！」

レオルはアリアとアシュラにそう言い、蛍の案内で生徒会室へと向

かう。

「たっ だいまー！」

「ただいま戻りました！」

「今、戻った」

「失礼する」

案内された部屋へと入る。

すると、机で作業をしていた少女がイスから立ち上がり、こちらを向く。

容姿端麗という言葉が最も似合いそうな彼女は白鷺菜百合。生徒会のもう1人の副会長で生徒会の残り半分の業務を処理する人物。

「あら、おかえりなさい。レオルさんもいらっしやい」

「ああ、久しいな」

「何だ、白鷺さんは彼の事、知っていたのか？」

「ええ、以前に一度だけね」

「悪いが今回は急いでいてな。電話はこれでいいのか？」

「ああ、それだ。保留にしている」

レオルは固定電話の受話器を取り、保留ボタンを押す。

「悪い、遅くなった。レオルだ……。そうか、分かった。なら『いつもの』場所に集合だ……。こっちはもう終わった。それじゃあ今から1時間後ぐらい集合してくれ。それじゃあ」

レオルは受話器を戻すと、生徒会の面々に向き直る。

「すまない、これからすぐに海鳴の方へ戻らなくてはならなくなっ
た」

「そーですかー。また来てくださいね！　くるりんと一緒にお待ち
しております！」

「ああ、それでは失礼する」

他の生徒会メンバーにも軽く礼をすると、すぐに部屋から出る。

『アシユラ、アリア、ビラルゴ達の方から連絡が入った。すぐに海鳴市の方へと戻るぞ！』

『了解です！』

レオルは学園の入口で2人と合流すると、すぐに認識阻害魔法を発動し、その状態で転移魔法を展開し、その場から姿を消す。

第25話：出張任務〜鳳繚蘭学園編（後書き）

次回、『出張任務〜いつもの』場所編』をお楽しみに。

第26話：出張任務『いつもの』場所編

Ⅱ第115管理外世界『ドークス』Ⅱ

ここは次元空間の最端に存在する管理外世界・ドークス。

その世界のある森の中に、1人の青年が魔獣2体に風竜3体と戦闘を繰り広げていた。

「くそ！ 竜がうぜえ！！ 早えし、硬えし！！」

『だったら、これでどう！ 天を駆ける瞬足なる風を、『バーニア』！』

青年の持っている刀型デバイスがそう唱えると同時に、青年の身体を包むように円形の光が発生する。

瞬間、青年のスピードが急激に速くなり、1体の風竜の背後へと回り込む。

同時に、彼は刀を鞘に戻し、右腕に炎を纏う。

「喰らえ！ 火竜の鉄拳！！」

『ぎゃああああおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！』

青年の攻撃をまともに受けた風竜は、一瞬気を失ったものの、それでもなお、青年に立ち向かう。

「だから硬いんだっての！！」

『ならこっちは！ 天を切り裂く剛腕なる力を、『アームズ』！』
「サンキュ！ いくぜえ！！」

青年を包む光が、円形から錐状へと変化する。すると、彼は鞘に戻した刀へと手をやる。

その状態は、まごうことなき居合いの型だった。しかし、魔獣と風竜たちはそんなことお構いなしに、攻撃を仕掛けようと青年に襲いかかる。

それを見た青年の顔は、驚きではなく不敵な笑みを浮かべていた。

「飛んで火にいる夏の虫ってな！　喰らいな！！」

その瞬間、彼の前にいくつか光が反射するようにチラつく。すると、青年へと向かっていた魔獣たちが勢いはそのまま、彼の横を通り過ぎる。

魔獣たちはそのまま地面へと激突すると、その身体がいくつかに裁断される。

「・・・零閃編隊・十機」

青年はそう呟くと、立ちあがり、周囲を確認する。

『マスター、西南西の方角600mの地点に』
『の反応を確認しました』

「了解、回収に行く」

次の瞬間には、彼の姿はその場から消えていた。

「よし、これで『アイツ』に頼まれたことは終了したつと」
『そうですね。これでやっとSTSの原作介入ができますよ』
「おい、それ言うなよ」

青年の姿は、先程の場所からそう離れてはいない、大木の上にあつた。

『とりあえずマスター、1度戻った方が良いと思います』
「そうだな。そう言えば、今はアイツらが来てるんだっけか？」
『そうですよ。私も妹に会いたいです』
「俺も、久しぶりに『相棒』に会いたいし、すぐ戻るか」
『はい！　じゃあ頑張って次元ワープ転移で行きますよ！』

デバイスがそう言うと同時に、ミッドチルダ式の魔法陣を周囲に複数展開する。

「座標特定、第97管理外世界『地球』次元ワープ起動」

『了解。次元ワープ起動、オールグリーン。転移開始まで、5、4、3、2、1、レディ』

「次元ワープ、開始！」

すると、彼の周りに展開されていた魔法陣が彼を次々に包みこんでいく。

しばらくすると、彼を包み込んでいた魔法陣が剥がれ落ちていく。しかし、剥がれ落ちていった魔法陣の中に、彼の姿は無かった。

Ⅱ 第97管理外世界『地球』Ⅱ

「とりあえず、全員揃ったな」

海鳴市のある一室。

そこに、騎士団メンバーが全員揃っていた。

「総長、これが士郎さんから預かった宝石です」

そう言いながらサファイアは紅と蒼の2種類の宝石を取り出す。

「これは……」

「解析の結果、周囲の生物・静物、ありとあらゆる魔力を持っているものから徐々に魔力を吸い取っていくみたいです」

「吸い取る量は我々の様な魔導士にとってはそこまで危険ではありませんが、一般人などには1、2週間くらいで全ての魔力を吸い取られ、死に至ります」

「士郎さんは所持してから6日目でしたから、ちょっと危なかったな」

目の前のテーブルに置かれた2つの宝石を見ながら、レオルはふと疑問を呟く。

「……吸い取った魔力は、どうなってるんだ？」

「……えっ？」

「……」

レオルの呟かれた疑問を聞いたアリア以外のメンバーは、なぜそのようなことを聞くのかと首を傾げる。

そこに居たのは、なのは達の前から姿を暗まし、今まで姿を現さなかった巫玲央とそのデバイス・シルフの2人だった。

「懐かしいところ悪いが、お前らが話してたのはこれだろうな」

玲央は、ポケットから碧に輝く宝石を取り出し、テーブルの2つの宝石と並べて置く。

その宝石を見た瞬間、騎士団メンバーは驚愕した。

「な、なに、この魔力量!？」

「魔力を封印されとるみたいじゃから、管理局なんかには気付かれんじやろうが・・・これほどの魔力はありえんのう」

「刀王、これは一体？」

ピラルゴがその宝石を指差しながら玲央の方を向く。

「それな、地球に転移してきたときに、変な奴らに絡まれてな。そんな中の1人が持ってたから、強d・・・ゲフンゲフン、拝借してきた。まあ返さねえが」

「あはは、まあそれはこの際置いときましょう。こちらの碧色の方はもう封印してあるのですね」

「ああ、暴走したらまずいからな。そっちの紅と蒼のやつはまだなんだよな？　だったら、蒼い方貸してくれ。紅い方はアリア、できるね？」

玲央はアリアの頭を撫でながら微笑みかけると、アリアは顔を真っ赤にしながらコクコクと頷く。

その光景を見ていたピラルゴ達は、少し呆れていた。

「これで封印完了だなっ」と

と、何時の間にか封印が完了していた。

アリアの方も封印を終えており、トテトテと玲央の元へと来ていた。

「はい、お疲れアリア。今まで大丈夫だったか？」

「うん。騎士団のみんな、優しいし、六課の人も良い人」

玲央は「そうか」と言いながら立ちあがると、レオルの方へと向く。

「刀王よ、もう大丈夫なのか？」

「アイツに頼まれたことはさつき終わったからな」

「なら、騎士団へとお戻りに？」

「ああ、そうなるな」

「なら、この仮面はどうする？」

そう言いながら、レオルは自身の顔に装着されている仮面を触れる。

「すまない。俺が戻るから当分は着けたままだな」

「了解した」

玲央は、レオルから視線を外し、他の騎士団メンバーを一通り見回す。

「さて、これからすぐに騎士団隊舎に戻って準備するぞ。みんな手伝ってくれ！」

「『イエス・マイ・キング』了解です、我が王よ！」「」「」「」

玲央はすぐに転移魔法を展開し、その場にいる騎士団メンバー全員と一緒に隊舎へと転移する。

第26話：出張任務『いつもの』場所編（後書き）

玲央「やっと帰ってきたぞ、俺!!」

作者「わり、俺眠いから後頼む」

玲央「任せとけ！今日の俺はテンション高いぜ!!」

作者「……とりあえず、次回『ホテルアグスタを駆ける疾風』をお楽しみに、ふわぁ……ねみい」

玲央「うわぁ、マジ久々の出番だよ。俺今日はどうすっかな。マジでテンションおかしいよ!!」

作者「……………じゃ、お休み」

玲央「おう、さっさと寝ろ!!」

第27話：ホテルアグスタを駆ける疾風

現在、騎士団メンバーと六課メンバーは今、ホテル・アグスタの警護任務の為、ヘリで移動している。

「と言うわけやから、みんな気を付けてえな！」

「……はい！」「……」

「騎士団の皆さんもよろしくお願いします」

「ああ、任せてくれ」

「あゝ、やつと暴れられるわ！」

「最近の訓練ぐらいいしか戦闘してないから腕がなるぜえ！」

「……ハッ！ ぶっ潰してやる！」

「アリア、頑張る！」

「皆、気合いが入っておるの」

「ビラルゴとレギンスは分かるけど、サフィアまで暴れる気満々かよ」

サフィア・ビラルゴ・レギンスの3人はすでにガジェットが出現すること前提で少し興奮気味になっていた。

それを見たアシュラは少し呆れてしまう。

「ちなみに言っておくが、俺ら騎士団メンバーは全員外の警護だからな」

「そうなんですか？」

「ああ、だから中の方は任せた」

「お任せください」

その後、3つのケースに気付いたキャラコがシャマルに何なのかを聞いた。

「隊長達のお仕事着」

なんだか気分がルンルンなシャルだった。

『そう言えば『刀王』はどうしてるんだ？』

『主は今、『あの方』とお会いになっておるところじゃ』

『だったら、その後合流ってことね』

『だろうな』

念話で玲央の事を話しながら、ヘリの外を眺める騎士団メンバー。
そんな中、アリアだけが他のメンバーと違う眼差しで外の景色を眺めていた。

「（早くお兄ちゃんに会いたいなあ・・・）」

「神界」

現在、玲央はシルフと一緒に神にあるものを届けに来ていた。

『・・・間違いない、これで全て回収できたな』

「なら、もういいか？」

『そうだな、もう大丈夫だろう』

それを聞き、玲央とシルフはホッと一息吐く。

「良かったですね、マスター」

「まあ、そうだな」

安心した顔をしながら、玲央はシルフの頭を撫でる。

ちなみに、現在のシルフは人間形態です。

そんな2人を見ていた神・ゼウスは、やり辛い気持ちになりながらも、玲央に話しかける。

『それより、急がなくて良いのか？』

「ん？ ああ、そろそろ行くか」

「そうですね、マスター！」

『なら、わしが近くまで転送してやろう』

それを聞いた玲央とシルフは、驚いていた。

「・・・今度は何だ？」

「何？ また何か頼み事ですか？」

『・・・・・・普通に親切で言っておったのだが』

そう言いながら、少し涙目になるゼウスだった。

・・・もちろん、その後で玲央とシルフはゼウスにアグスタ近くの森に転送してもらった。

ティアナ s i d e

「くっ！」

私は凡人だ。

六課の他の人たちに比べて、私は非力でこれと言って秀でたものも無い。

兄さんに教わったシャープショットと幻術はそれなりに出来るけど、やっぱりまだまだだ。

だから、私は頑張らないといけない！

『クラールヴィントのセンサーにも反応。だけど、この魔力反応って！？』

『お、大きい・・・』

シャルル先生とシャーリーさんの通信の内容が聞こえてくる。

それと同時に、エリオとキャロと合流して防衛ラインをと通信が入る。

「スターズF、了解！ 行くわよ、スバル！」

「うん！」

私とスバルは、すぐにその場を駆けだす。

ティアナ s i d e o u t

『防衛ライン、もう少し持ち堪えててね。』

「はい！」

シャルはフォワードメンバー4人にそう言うと、スバルが返事をする。

『ヴィータ副隊長がすぐ戻ってくるから』

シャルがセンサーでヴィータの位置を確認しながら通信で伝えると、ティアナが意見する。

「守ってばっかじゃ息詰まります。ちゃんと全機落としてみせます！」

それを聞いたシャーリーが心配するようなことを言っていたが、ティアナはそれを聞かずに他のメンバーに指示を出す。

「エリオ、センターに下がって！私とスバルのツートップで行く！」

「は、はい！」

「スバル！クロスシフトA、行くわよ！」

「おう！」

それと同時にティアナが駆けだす。

するとスバルがウイングロードを伸ばし移動して行く。

ガジェットたちはスバルの姿を認識すると、すぐにスバルを追いかける。

ティアナはガジェットたちがスバルを追うのを確認すると、カートリッジを4発ロードする。

「ティアナ！ 4発ロードなんて無茶だよ！ それじゃあティアナもクロスミラージュも！！」

「撃てます！」

『Yes』

心配するシャーリーを気にせず、ティアナは周囲に魔力弾を生成していく。

それをモニターで見ていたサファイアが少し焦る。

「あの娘何やってんのよ！ 自分の力量ぐらいちゃんと分かってるでしょうに！」

そう考えているのは、他の騎士団メンバーも同じだった。

レギンスは目の前のガジェット？型を破壊しながらも、この後起きるかもしれないことを危惧していた。

「チィ！ まずくないか、あいつ」

そう言うが、目の前のガジェットの数が多く、中々ティアナの方へと行くことができない。

サファイアも同じ状況の為、現在は目前のガジェット破壊にだけ集中している。

「クロスファイアアアアアアアアアアア、シュウウウウウウ
ト!!」

勢いよく放たれる魔力弾。

魔力弾に貫かれ、次々に破壊されていくガジェット。

「この調子なら、何とかなる！」

そう思ったティアナは、調子に乗って次々に魔力弾を放っていく。

その直後だった。

「えっ？」

「えっ?」

スバルが間の抜けた様な声を上げる。

視線の先には、スバル目掛けて向かってくるオレンジ色の魔力弾。咄嗟の事で何が起きたか分からず、スバルはボーっと見ていただけだった。

「スバル!？」

魔力弾とスバル距離が残り5 mにまで縮まったのを見た、その場の全メンバーはもうダメだと思った。

その瞬間、

「零閃！」

突如、スバルの背後から声が聞こえたと思ったら、魔力弾が2つに割れ、爆散した。

突然現れた人物に混乱するスバルだが、その男は気にせずスバルに声をかける。

「大丈夫か？」

「あ、はい！」

「そうか、ならいい」

そう言うと、男は地上で今も暴れているガジェットの群れへと向かっていった。

「ティアナ、てめえ何やってんだ！！」

少し遅れてヴィータがその場にやって来て、怒声を発する。それに続くように、サフィアとレギンスもその場にやってくる。

「刀王が来たから良かったけど、確実に直撃コースだったわよ」
「無茶した上にそんなんじゃ、ダメじゃねえか」

ヴィータとは対照的に、優しく咎めるサフィアとレギンス。不意に、スバルはサフィアたちに尋ねる。

「あの、さっきの人って・・・」

「えっ？ ああ、みんなは会ったの初めてだっけ？」

サフィアたちは眼下でガジェットたちをどんどん切り落としていく彼を見る。

「彼は、私たち騎士団の真の主導者。『刀王』巫玲央よ」

「オークション会場」

「彼は、私たち騎士団の真の主導者。『刀王』巫玲央よ」

突如、姿を現した玲央を見たのは・フェイト・はやては驚きを隠せない。

「「玲央（くん）！？」」

それは、他の守護騎士たちも同じで、以前より成長してはいるが、昔何度か見たときの面影が少し残っていた為、すぐに彼だと信じる事ができた。

その後、全てのガジェットを破壊したのち、六課メンバーは現場検証を、騎士団メンバーはアグスタ周辺の再警護を行っている。

隊長達はすぐにでも玲央を問い詰めたいと思っていたが、現場検証を行わないといけないのと、その現場の場所が玲央のいる場所とアグスタを挟んで逆側だと言うことから、仕方なく諦めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「えと、ティア、気にしないで！」

現在、スバルとティアナは現場検証ではなく、周辺警備をしていた。

「えっと、ティア、向こう終わったって」

「・・・・あんたはあっちに行きなさいよ。私はここを警備してるから」

ティアナはスバルの方を向かず、そう言い放つ。

「あのね、ティア」

「いいから行って」

それでも何かを言おうとするスバルだが、ティアナは先程と同じように背を向けたまま言う。

「ティア、全然悪くないよ。私がもっとちゃんとして行けって言っ

んでしょ!!」「っ!？」

ついにはスバルに怒鳴りつけるティアナ。

スバルはそう言われ、二言ぐらい言ってから他のメンバーの方へと走っていく。

「うつ、くうつ！ ひつく、私は・・・私は！」

スバルが走っていった後、ティアナは近くの柱に手をつき、静かに涙を流す。

「・・・・・・」

「やっぱり心配？」

「・・・まあな」

そんなティアナを茂みの奥から見ているレギンスとサファイア。

2人はティアナが今回の事をきっかけに、再度失敗しないかを危惧していた。

その時の2人は知らなかった。

これから数日後、ティアナがさらに失敗を犯すとは。

第27話：ホテルアグスタを駆ける疾風（後書き）

作者「毎度おなじみ……ではないか。とりあえず、感謝コーナー！」

シルフ「ソラト様、どうもありがとうございます！」

作者「今回はシルフか」

シルフ「あたりまえじゃないですか！ 私だって久しぶりの出番だったんですよ！ 本当なら今回だってもっと出番出して欲しいくらいですよ！」

作者「分かった、分かったから落ち着け」

シルフ「これが落ち着けるわけじゃないじゃないですか！ これから数時間は私の話に付き合ってもらいますからね！」

作者「……とりあえず、先に。次回『心の闇』をお楽しみに」

シルフ「それじゃあ、レッツゴー！！！」

作者「分かった！ 今行くから急かすな！」

第28話：心の闇／敵意

「機動六課・ミーティングルーム」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えつと」

現在、六課のミーティングルームには巫玲央と騎士団メンバーを六課前線メンバー全員が取り囲むように座っていた。

「私たちの事、覚えてるよね？」

「・・・・・・・・ドチラサマデシタツケ？」

「とぼける気？ だったら」

そう言いながら、なのは・フェイト・はやてはデバイスを取り出し、起動すると、玲央にその切先を向ける。

「ご、ごめ！？ 覚えてる！ 覚えてるよ！！」

それを聞くと、3人は笑顔でデバイスを戻す。

・・・・・・・・・・・・・・・・目は笑ってないが。

「それで、俺は何で呼ばれた」「そんなん決まっとるやん」・・・何だ？」

「玲央が今まで、どこで、何をしてきたのか・・・教えてくれる？」

玲央は「やつぱさそうなるよな」と言う感じの表情を浮かべる。

軽く溜息を吐くと、玲央は真剣な・・・否、威嚇する様な瞳でその場にいる全員を殺気を込めて睨み付ける。

『『『『つ?!?!?』』』』

その瞬間、六課メンバー全員が息をのむ。

「悪いが、今は話す気にならない。じゃあな」

そう言い、部屋を出ていこうとする玲央。

だが、玲央を阻むように鉄鎚が振り下ろされた。

玲央はそれを難なく受け止め、弾き返す。

「チッ!」

「・・・ヴィータか」

玲央が目を向けると、ヴィータが騎士甲冑を纏って愛機・グラーフ
アイゼンを構えていた。

その後ろでは、シグナムがレヴァンティンを構え、玲央に敵意を向
け、立っていた。

「貴様・・・どう言うつもりだ」

「どう言うつもりも」

瞬間、玲央の姿がその場から消えた。

そして

「　　こういつつもりだが?」

シグナムとヴィータの首筋にシルフ・モード『ツルギ』で取り出し
た二振りの刀を突き付けていた。

「「なっ!？」」

その場にいた他のメンバーもそれには驚いていた。
突き付けられた刃は、すでにシグナムとヴィータの首を薄く切っており、薄らと赤い血が流れていた。

「これ以上追求するなら・・・再起不能にするが、いいか？」

その言葉を聞き、2人は背筋が凍りつくような気持ちになり、すぐに武装を解く。

それを確認した後、玲央もシルフを待機状態へと戻す。

「じゃあな」

それだけ言うと、玲央はすぐに部屋から出ていく。

その姿を見た、なのは達3人は、悲しみと、苦しみと、怒りの感情が心の中で湧き上がって、混ざり合っていく。
そして、3人はこう思った。

もう、昔の彼ではないのだと・・・

「えっと・・・みんなごめんね。刀王、過去の事をあまり他人に話したくないのよね」

「なにかあったのでしょうか？」

サフィアの言葉に、エリオがそう問うと、レギンスが「まあ、そんな感じだ」と軽く呟く。

「悪いが、俺達も刀王が言う気ねえなら話さねえ」

「我も同じじゃ」

「……………（コクコク）」

そう言いながら、アシュラ・ユニカ・アリアは部屋から出ていく。ドアが閉じると同時に、廊下を走る音が響く。

部屋の外からは「アリア、ちょ、走るなよ!」とか「我を差し置いて主に甘えるつもりじゃな!？」とか聞こえてくる。

それを耳にした騎士団メンバーは苦笑するが、六課メンバー、特になのは達3人はそれどころではなかった。

玲央から放たれたのは殺気、それはつまり……………完全なる拒絶。それはつまり……………

「（私たち…………）」

「（玲央に…………）」

「（嫌われたんかなあ…………）」

彼女たちはそう思うと、気分が暗く、重くなる。

彼女たちの記憶には、笑顔で自分たちに接する玲央の記憶しかなかったから、それはより一層深まっていく。

「・・・・・・・・」

『マスター、いいのですか？』

「・・・・・・・・」

『マスター？』

部屋から出ていった後、玲央は休憩室で仮眠をとるため、横になっていた。

まあ、横になってるだけで寝てはないが。

「・・・・・・・・良いんだ。これ以上、アイツらが俺らと関わる必要はない」

『・・・・・・・・マスター』

そう言うと、シルフはデバイスモードから人間モードへと変化する。そして、すぐに玲央の右腕にしがみつく。

「どうした？」

「何でもないですよ」

「・・・・・・・・そうか」

そんなとき、突如休憩室のドアが開くと、「お兄ちゃん！」という声が響き渡る。

「アリアk「お兄ちゃん！」って!？」

開いたドアの向こうにいたアリアは、そこから一直線に玲央へと飛び付く。

その後ろから、ユニカとアシュラが追いかけてきた。

「あ、アリア・・・お主、存外走るのが速いの」

「と言うか、刀王の事に対してはいつも以上の力を発揮するよな」

2人は肩で息をしている。

どうやら、それほどアリアは速かったらしい。

「~~~~~」

当のアリアはというと、玲央の左腕に抱きついて、頬擦りしていた。他の人が見たら、きつと思うだろう。

『あ、アリアのイメージが崩れていく』と。

「・・・はあ、仕方ないか。『アシュラ、ユニカ、これから少し寝る。見張りを頼む』」

『『心得た』』

念話の後、アシュラとユニカは見張りをするために部屋から出る。

玲央は左右の腕に抱きついていているシルフとアリアを見る。

その顔は、とても安心しきった顔で眠っていた。

「・・・もう、傷付けるわけにはいかない・・・か」

そう呟くと、玲央の意識は闇へと沈んでいく。

第28話：心の闇、敵意（後書き）

次回『心の闇、過去の失態』、御期待下さい。

玲央「最近、感想がなくて軽く涙目な作者でした、と
作者「……………言っなよ」

玲央「で、次回の『過去の失態』って……俺のか？」

作者「それしかないだろう？」

玲央「……早くないか？」

作者「まあ、そうなんだけど……なんか気分で？」

玲央「おま……まあいい」

作者「とりあえず、次回を御期待下さい」

第29話：心の闇／過去の失態

「6年前・管理外世界『ネグレド』」

玲央 side

「・・・なんだ、この世界は」
『酷い・・・』

俺は今、とある管理外世界へと来ている。

目の前に広がるのは、とてもこの世のものとは思えない光景だった。
泣き叫ぶ子供たち。

それを傍目に遊び狂う大人たち。

そこかしこで人目も憚らずに快楽を求め、中には子供を身籠っていてもお構いなしと言った者もいる。

そして子供たちもそんな大人たちに影響されて・・・
正直言つて・・・

「・・・反吐が出る」

『マスター・・・』

「・・・とりあえず、例の施設へと行く」

『はい』

俺は待機状態のシルフをいつでも起動できるように手に持ち、歩き出す。

暫く歩き、森の中を抜けていったところに、この世界には似付かない建物へと辿り着く。
さらに、建物の周囲には警備兵やガードロボと思わしきものが常時厳戒態勢で不審人物が近付かないように警戒している。

「とりあえず、あれを使うか」

そう言いながら、俺は聖王の財宝を展開し、1つの指輪を取り出す。
皇帝ゲルギラの指輪。

指に嵌めると自分以外の時間が止まると言うロストログア級の魔法具。

この魔法具が出ているマンガが気になる方は『魔法行商人ロマ』で

検索を！

「……つと、そんなことはどうでもいい。

俺は指輪を人差し指に嵌める。

その瞬間、周囲の全ての時間が止まる。

舞っていた落ち葉も、空を飛んでいた鳥も、警戒していた警備兵も、全てピタリと行動を止める。

『マスター、施設の内部構造の解析が終わりました』

シルフはモニターを表示させながら、ある部屋を表示する。

表示された部屋には『Slave laboratory』と書かれていた。

『Slave laboratory』、つまり……………」

「……『奴隷実験室』か」

俺はすぐにでも目の前で行動停止している警備兵たちを殺したくなる衝動をどうにか押し殺す。

まあ、どの道殺すんだけどな。

俺はモニターを消して、聖王の財宝からある宝具を取り出す。騎士王の代名詞とも言われる聖剣を。

「……いくぞ！」

瞬間、聖剣に大量の魔力を流し込む。

そして、その聖剣の名を叫びながら、魔力を解放し

「約束された
エクス

」

施設へと振り下ろす。

「
勝利の剣！！！！！」
カリバー

振り下ろされた剣より、金色に輝く光が放たれる。
光は、真直ぐと施設へと向かい、そして破壊

「約束された勝利の剣！！！！」
エクスカリバー

しようとしたその時、突如として黒い極光が、金色の光
を阻む。

黒と金の光は、互いに相殺していき、そして消滅した。

「っ！？ 一体何が！？」

「ハッ！ テメエが気にするようなことじゃねえよ！」

どこからか言葉が発せられたかと思うと同時に、俺へと剣が振り下
ろされる。

それに瞬時に反応し、俺はエクスカリバーでその剣戟を防ぐ。
そして、俺は防いだ剣を見て、驚いた。

「な、なぜその剣を持っている！！」

「言っただろ？」

そこには、灰色のローブに身を包んだ男がいた。

「テメエが……」

そしてその手には、

「気にするようなことじゃねえってな！！」

漆黒の如く黒々と輝くエクスカリバーが握られていた。

「ぐっ!？」

ローブの男が放った剣戟で少し後ずさってしまった。

「お前は何者だ!？」

「そうだな・・・カルシファーとでも名乗っておくか」
「カルシファー・・・だと!？」

その名を聞いて、俺は驚いてしまう。

「(どう言うことだ、アイツが言っていた時期にはまだかなり期間があるはずなのに)」

「不思議そうな顔だな。まあ無理もねえか、実際だと後数年してから行動しだすはずの奴が目の前にいるんだからな」

「な!？ どうしてそのことを!？」

灰色のローブの男は、木の上へと飛び移りながら、黒いエクスカリバーを消す。

「気にすんな、唯の小手調べだ。今後『俺ら』の脅威になる奴がどんなのかと思ってな」

男の言ったことを聞いて、俺はさらに驚く。

「っ!？ 待て! 『俺ら』だと!？」

「おっと、悪いがここまでだ。俺は帰らせてもらっ」

「ま、待て」

「

「だがその前に」

玲央が逃げようとする男を追うため、駆けだそうとした瞬間、その男が玲央の懐に入り込んで何かを抜き取ってから、また距離を置く。

「あんたの大切なものを壊して、心が壊れる様を見せてくれ」
「な、何を言って」

何を言ってるんだ、と言おうとしたが、すぐに気付く。

男の手に、緑色のボールペンが握られていることに。

その男は不敵で不気味な笑みを浮かべながら、そのボールペンを両手で持つ。

『ま、マスター！』

「シルフ!?」

「さあ、良い感じに壊れてくれよ!!」

その瞬間、男の手に握られていたシルフは、バキッという音をたて、2つへと分かれてしまった。

それを見て、俺の意識は途絶えてしまう。

玲央 side out

「さて、どうなるかな」

男は左右の手に握っている、元は1つの物体を玲央の足元へと投げつける。

『ま・・@∶#\$\$&%\$&』

既に言葉を発することができないらしく、機械的で耳障りな音しか発しなくなった。

玲央はゆつくりとそれを拾い上げると、

『ヴァアアアアアアアアアアアアアアアアアオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオ』

人とは思えないような雄叫びをあげる。

男はそれを見て、その笑みを一層不気味なものへと変える。

「良いねえ、その壊れっぷり！　今まで会った『転生者』の中で一番の壊れっぷりだぜ！！」

男は木の上で狂ったように笑いながら、雄叫びをあげる玲央を見ている。

しかし、笑っていられるのもそれまでだった。

「ハハハハ・・・は？」

地面に立っていたはずの玲央の姿が何時の間にか消えてた。さらに、それに気付いた瞬間、男の右腕が宙を舞っていた。

「ぐおおおおおお！！ ま、マジかよ！？」

男は斬られた腕の傷から噴き出る血を魔力で止血する。
すると、男は左手に先程戻した黒いエクスカリバーを再び取り出す。
同時に、頭上から放たれる斬撃を防ぐ。

「ぐおう！？」

しかし、その斬撃に男は耐えきれずに跪いてしまう。
そんな男の事を気にすることなく、斬撃は次々に男へと襲いかかる。

「チィ！ 埒があかねえぜ！！」

『ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！』
「何イ！？」

斬撃を防いでる中、男の目前に玲央が姿を現す。

玲央の手には斬刀『鈍』が握られており、刀身は鞘に納められていた。

つまり、いつでも居合い抜きできる状態と言うわけだ。

『ヴァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！』

「!!」

男が身構えるよりも前に、玲央は斬撃を放つ。

零閃編隊・二十機。

元は『刀語』で斬刀『鈍』の所持者である宇練銀閣が使用する技・零閃。

光速に限りなく近い居合いで、宇練銀閣は最大でも十機までしか放つことができなかった。

それを玲央は倍の斬撃を男へと放つ。

「ぐおおおおおおおおおおお!!!!!!」

男は最初の数撃は防げたものの、それ以降の斬撃は掠り、いくつかはまともに受けてしまった。

「くそ、今日のところは見逃してやるぜ!!」

男はそう言いながら、切り落とされた腕を拾い、その場から姿を消す。

『ヴオオオ!!!!!!!!!!』

しかし、玲央の暴走は未だに止まることはなく、その怒りの矛先は目の前の施設へと移る。

玲央は次々に斬撃を放ち、施設の機器を次々に破壊していく。そして、ある部屋の前まで来る。

そこは、玲央が一番初めに確認していた部屋だった。

『ヴァアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!』

玲央はその部屋の扉を、斬撃で吹き飛ばす。
ゆつくりと、玲央はその部屋の中に入ると、そこには幼い少女が裸
の姿で磔にされていた。

玲央はそつと少女へと近付く。

と、そこで玲央は暴走状態であるにも関わらず、あることに気付く。
その少女は、すでに息をしていなかった。

それを見て、玲央はさらに激情し、憤怒し、狂乱し、それらは暴走
に拍車をかける。

「……………んん、はあ」

玲央は目を覚ますと、小さく溜息を吐く。

「……………忌わしき過去は拭えない……てか？」

玲央は自嘲気味にそう言う。

「んみゅう……マスター……すう」

「ん……お兄ちゃん……」

と、そこで玲央は両サイドからシルフとアリアに抱きつかれていることを思い出す。

「……………仕方ない。起きるまで待つてやるか」

そつ呟きながら、玲央は2人の頭を軽く撫でる。

それから2時間が経って、やっと2人は目を覚ましたらしい。

第29話：心の闇／過去の失態（後書き）

次回『心の闇／武力による対話』、御期待下さい。

第30話：心の闇、武力による対話

「・・・・・・・・・・」

現在、玲央は六課隊舎の屋上で夜空をボーッと眺めている。
そんな玲央の後ろに、1つの人影が近付いてくる。

「大丈夫か？」

「・・・・相棒か」

玲央の背後から缶コーヒーを渡しながら、レオルは声をかける。
渡された缶コーヒーのプルタブを開け、一口飲む。

「・・・・ティアナの事か？」

「・・・・ああ」

レオルは「やっぱりな」と呟きながら、玲央の隣に座りこむ。

「最近のあいつは、無茶の度が過ぎてる」

「・・・・ティアナの過去は聞いたのか？」

玲央の問いに、レオルは軽く頷く。

「高町一尉から、先程な。だからと言って許されるものでもないと思っけどな」

「まあな。だが、あいつが無茶するのは、なのはの教導のせいでもあるんだろうな」

それを聞き、レオルは「ああ」と言葉を漏らす。

「確かに、高町一尉の教導は基礎訓練が殆どだ。それにこの間のアグスタでの失敗。あいつが焦るには十分な要素だな」

玲央は缶コーヒーを飲み干すと、缶を握りつぶす。

「あいつが何のために基礎ばかりをやっているのか、話さないからな。話していれば、多少は無茶しなくなると思うんだが・・・」
「だな・・・」

レオルも自分のコーヒーを飲み干すと、立ちあがる。

「それじゃあ、俺はそろそろ戻る。まだ少しだけ書類が残っているからな」

「ああ、悪いな。そっちに任せつきりで」

「気にするな。俺はお前で、お前は俺なんだからな。それに皆がいるからな」

「・・・そうだな」

「じゃあな」

そう言うと、レオルは屋上の出入り口へと向かう。
と、途中で歩を止め、玲央へと向き直る。

「ああ、そう言えば、明日の朝にフォワード達の模擬戦があるらしいからな」

「っ!?!?・・・了解だ」

それだけ伝えると、レオルは軽く手を振り、屋上から出ていく。

「・・・そうか、明日か」

星空を見ながら、玲央は呟く。

翌日、早朝。

訓練場の外で、ライティングFにヴィータ、フェイトと騎士団メンバー（玲央含み）がスターズFとなのはの模擬戦の様子を見ていた。

そして、ティアナがクロスファイヤーを放った時、ライティングF以外の全員が気付いた。

「なんか、キレがないな」

「そうよね。コントロールは良いんだけど」

ヴィータの呟きに同意するようにサフィアが言う。

「……なんかあるのか？」

「どうだろうな」

レギンスとビルルゴが嫌な予感を感じながらも、模擬戦の成り行きを見守る。

「ティアナが、砲撃!？」

と、フェイトの驚きにその場の全員がフェイトの視線の先を見る。そこには砲撃魔法を放とうとしているティアナの姿がある。だが、騎士団の面々はすぐに気付く。

「あれは……幻術か？」

「でしょうね」

「え、えと、だったらティアナさんは一体どこに？」

「……（あの野郎）」

その瞬間、玲央が一気に殺気を解放する。

同時に、その殺気にあてられた他のその場にいた面々は冷や汗を流したり、腰を抜かすなどの反応を起こす。

「……刀王、どうかしたのですか？」

恐る恐る、玲央に尋ねるアシュラだったが、その顔を見て一瞬息を飲んだ。

それを気にせず、なのははさらに追い打ちをかけるように魔力弾を放とうとする。

が、それは突如放たれた殺気によって遮られた。

「てめえら・・・何してんだ？」

「「っ！?!?」」

なのはとティアナのちょうど中間に、何時の間にか姿を現した玲央。彼から放たれる殺気にあてられ、なのはとティアナは腰を抜かし、その場に座り込む。

「れ、玲央・・・くん？」

「気易く俺の名を呼ぶな」

「ひっ!?!?」

玲央はさらに殺気を込め、言葉を放つと、なのははそれを受け、軽く脅える。

「あ、あの・・・」

「てめえらに発言権は無え！ 発言するのは俺が質問した時だけだ

!?!?」

「ひう!?!?!?」

ティアナも玲央の殺気を込められた言葉に気を失いそうになる。2人を見据えながら、玲央は少しずつ話し始める。

「てめえら、どうして仲間を傷つける」

「「・・・・・・・・」」

「・・・・・・・・答えねえか。ならいい、言うな。とりあえず1人ずつ、説教だ」

そう言うと、玲央はまず、なのはへと近付く。

「まずなのは。てめえは何故、自分の教導が基礎ばかりなのかを話さない？」

「そ、それは……」

なのはは玲央から顔を逸らし、俯く。

「……てめえ、変わったな」

「え？」

玲央から出た言葉に、不意になのははキョトンとする。

「昔は自分が『話さなきゃ分からない』とか言ってたくせに、今では肝心の事を話さない。これじゃあ昔のフェイトや守護騎士たちと同じじゃねえか」

「そ、そうだけど……」

「そうだけど、じゃねえ!!」

「は、はい!」

「いいか! 確かに無茶するのはダメだ! だからと言って何も言わずに、いきなりぶちのめすのはやめろ!! 分かったか!!」

「は、はい!!」

玲央はなのはの説教を終えると、すぐにティアナの方へと近付く。

「……」

「てめえは、とりあえず無茶しすぎだ」

「……それは、分かってます」

「ほう、それは本気で言ってるのか？」

ティアナはまた玲央の殺気を受けると、全身から冷や汗を流す。

「てめえの兄貴の事は知っているから、無茶するのも分かる」

「っ！？ どうして！？」

ティアナはどうして兄の事を知っているのか問うが、玲央は気にせず、そのまま話を続ける。

「だがな、お前が誤射した時は、無茶してでも倒さなきゃいけない場面だったのか？ 今回の模擬戦でもそうだ。あの場面、スバルを囲にしてまでも、仲間を危険に晒してまでも、勝たなきゃいけない場面だったのか？」

「っ！？！？」

「努力はするなどは言わないし、俺はなのはほど無茶をするなどとも言う気はない。だが、場面を考えろ。その場その場で臨機応変に対応しろ」

「それに」と言いながら、玲央は空を見上げる。

「お前は自分に才能がないと言っているが、幻術使える時点でかなり才能あると思うぞ。それに射撃の方も、サフィアがお前の事褒めてたしな」

それを聞いたティアナは「えっ？」と信じられない表情を浮かべていたが、それを気にせず、ティアナを肩に担ぐ。

「ええ！？ ちょ！？」

「よっと」

すると、今度はなのはの方へと行き、こちらも肩に担ぐ。

「ふえええええ！？」

「口閉じとけよ」

「え？」

2人は何故と疑問に思うが、すぐに分かった。

玲央は2人を担いだまま、瞬時に観戦していたメンバーの元へと移動する。

「そらよつと」

移動が終わると、玲央はすぐに2人を降ろす。

そして、玲央ははやてと連絡するためにモニターを表示する。

すると、表示されたモニターにはやての顔が表示される。

「ん、どないしたん？」

「八神二佐、頼みたいことがある」

「なんや？」

「高町一尉とティアナ二等陸士を明日の朝まで出動待機から外してくれ」

それを聞いた他の面々は、かなり驚いていた。

ただ唯一、レオルだけはなんとなく分かっていたと言った感じだった。

「……理由は？」

「……神託オラクルの盾騎士団統括指導者としてのお願いとして聞いてくれないか？」

「……なんか理由があるんやろね。分かったわ、明日の

朝まで、ティアナ・ランスター二等陸士、高町なのは一等空尉兩名は明日の朝まで出勤待機から外れること。ええな？』

「……はい」

2人は不服そうながらも、ゆつくりと頷く。

その2人に近付き、玲央は言う。

「これから、2人でじっくり話し合え。あとなのは、お前は自分の過去をフワード陣に教えるよ。いいな？」

「う、はい」

渋々ながらもなのはは頷く。

それを聞いて、玲央は軽く頭を撫でると、レオルの方へと向かう。

「相棒、あいつらに聞かれたら、教えてやれ」

「……いいのか？」

「ああ。ただ、『聞かれたら』だからな」

「了解だ」

それを聞くと、玲央はその場から立ち去る。

第30話：心の闇／武力による対話（後書き）

作者「お久しぶりの感謝コーナー!!」

玲央「テンション高いな、おい」

作者「えんぐいさん、どうもありがとうございます!!」

玲央「さて、今回は・・・あの話か」

作者「そう、お前ことを色々話す時が来たのさ」

玲央「本当なら、あいつらを巻き込みたくは無かったんだけどな」

作者「まあ、頑張れ」

玲央「・・・・・・はあ」

作者「それでは次回『心の闇／明かされる過去』にご期待下さい」

玲央「あれ、今回のサブタイと話の内容、あんま関係ない気が？」

作者「えつと・・・き、気にするな！」

第31話：心の闇、明かされる過去

あの後、なのは、フェイト、守護騎士にフォワード達、それに騎士団長たちは全員、ミーティングルームへと来ていた。

そこで、なのははフォワードや騎士団長たちに、自身の見に過去、何があつたのかを話した。

それを聞いたフォワードと騎士団長たちは、驚きを隠せなかった。

そして、ティアナはすぐに今までのなのはの教導の意味を理解する。

「私の教導、地味だから強くなってるか分かり辛いよね」

「そ、そんなこと!」

なのはの言葉にティアナは否定しようとする。

そんな時だった。

隊舎内にアラートが鳴り響く。

「どうした?」

玲央はすぐにロングアーチへと通信を繋げる。

モニターが表示され、そこに映っていたはやてが現状を説明する。

『今なあ、海上をガジェット?型の十機編隊が13ほど飛びまわつとつてな』

「ふむ、付近にレリックや誤認されそうなロストログアの反応は?」

『ありません』

玲央の問いに、モニターの奥から答えるシャーリー。

玲央は少し考えると、はやてに伝える。

「考えられるのはガジェット？型を改良した為の起動テストと、こちらの戦力調査ってところだな。だったら俺が出よう」

『ええんか？』

「ああ、大丈夫だ。向こうがこちらの戦力を知りたいなら教えてやるさ。半分だけな」

そう言いながら、玲央はミーティングルームから出て、ヘリポートへと向かう。

そんな彼の後姿を見送りながら、不意にエリオが騎士団メンバーに質問する。

「そう言えば、巫さんはどうしてあの時、あれほどまでの殺気を放っていたのですか？」

あの時とは、今日の昼に行った模擬戦の事だと、その場にいる面々は理解する。

「……良いだろう。俺が話してやる」

すると、レオルが1歩前に出て、話し始める。

「玲央がどうして殺気を出していたか……それは、お前たちが仲間を傷つけたからだ」

それを聞いた六課メンバーは、納得と同時に疑問に思う。確かに仲間を傷つけるのはやってはいけないことだ。

しかし、それでもあれほど殺気を放つことではないはずだ。その疑問に気付いてか気付かずか、そのことを説明する。

「玲央は昔、幼馴染の少女とある約束をした。『僕が君を守る』と

言う、子供の、他愛もない約束だ。だが、彼はその約束をずっと守り、少女の方もそんな彼が好きだった。そんなある日、ある事件が起きた」

ゴクツと、誰かが息を飲む。

「彼女はある有名な家の令嬢で、そのせいで学校の帰りに誘拐された。その日、彼は他の用事で一緒にはいなかった為、それを聞いた時には半日は過ぎていた。玲央はそれでも彼女を探して、ある廃墟で彼女を見つけた………酷い姿でな」

レオルの話聞き、六課メンバーはこんな話になるとは思っていなかったのか、かなり衝撃を受けていた。

しかし、そんなことはお構いなしに、レオルは話を続ける。

「その後、彼女を攫った誘拐犯は逮捕された。しかし、彼女はその日以降、男性恐怖症になった。誰一人例外なく、な」

その言葉の意味を理解し、さらに表情が暗くなる面々。

「ああ、君らが気にするようなことは無い。最後に彼女を危険から助けて、彼女とも仲直りをしてから死んだのだから」

それを聞き、ほとんどのメンバーがホツとする中、シグナムだけが怪訝な表情を浮かべる。

「まで、今『死んだ』と言ったか？」

「ああ、玲央は彼女と仲直りしてから『死んだ』が？」

シグナムの問いにさらっと答えるレオル。

それを聞いて、六課メンバーは意味不明だと言わんばかりの表情を浮かべ始めた。

「ちょ、ちよつと待って!? 死んだってどういうこと!?!」

フェイトは掴み掛る勢いでレオルに聞く。

レオルはそれに動じることなく、今までと同じ様に、淡々と答える。

「ああ、あいつは一度死んでから、こちらの世界へと『転生』してきた。いわば『転生者』だな」

「て、転生者って、どうして!?!」

「いや、だって神の手違いで死んだだけだしな」

それを聞いた瞬間、六課メンバーは全員ポカンとしていた。

「……えつと……冗談?」

「こんな場面で言うと思うか?」

「で、ですが、その……ちよつと信じられないと言うか、ねえ」

「『同じく』」

フォワード達にもそう言われたレオルは、予想していたのか、ある映像をモニターに表示する。

「あの、これは?」

「……俺たち騎士団が近い未来に敵対する相手との戦闘シーン。そして、玲央が仲間が傷付くのを嫌う2つ目の理由だ」

そう言われ、六課の面々は映像の流れているモニターへと視線を戻す。

そこには、玲央が見たことも無い剣で、金色の衝撃波を放っている

場面だった。

衝擊波がどこかの施設に直撃する直前、別の黒い衝撃波が発生し、玲央の放った衝撃波を相殺する。

直後、どこからともなく灰色のローブを纏った謎の人物が現れた。瞬間、その場のメンバー全員が1歩後ずさる。

ただの映像だと言うのに、その人物から異様な気を感じた。

カルシファーが何かを話している。

しかし、今の六課メンバーにはその話の意味を理解できなかった。すると、カルシファーが玲央の懐に入っただかと思うと、すぐに距離を置く。

彼の手には、玲央のデバイスであるシルフが握られており、次の瞬間には、2つに折られてしまう。

刹那

「ヴアアアアアアアアアアアアアアアアアオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオ」

玲央が人と思えないような雄叫びを上げる。

その様子を見たカルシファアが、玲央に向けて不気味な笑みを浮かべながら言う。

『良いねえ、その壊れっぷり！　今まで会った『転生者』の中で一番の壊れっぷりだぜ！！』

それを聞いたなのは達は驚くが、次に映し出された映像を見てさらに驚愕する。

今まで不気味な笑みを浮かべていたカルシファーだったが、玲央の姿が消えた次の瞬間、彼の腕が切り落とされる。

さらに玲央は次々に斬撃を繰り出し、カルシファーも黒い剣を取り出し、何とか防いでいく。

それを見た玲央は、キョトンとする。

「えっと、何が？」

「あの、お昼の事・・・」

「模擬戦の時の事・・・すみませ「謝るな」あう！？」

玲央はティアナがまた謝ろうとしていたので、軽く小突く。

何故叩かれたか分からず、少し涙目になりながら上目遣いに玲央の表情を見る。

と、同時に、玲央がティアナとなのはの頭を撫で始める。

「えっ！？ ええ！？」

「あ、あの、何を！？」

いきなり撫でられて、驚いたなのはとティアナが玲央の顔を見る。
玲央のその表情は、とても優しいものになっていた。

「もう謝るなよ。俺の過去を知って、本当に悪いと思ったんなら、これから気を付けてくれ。そうすれば、俺は何も言わない」

そう言いながら、玲央はなのはとティアナを抱き寄せる。

「「あ、あう・・・／／／／／／／／」」

2人の顔が見る見るうちに真赤に染まっていく。

「「「・・・」」」

と、それを見て、ある3人から黒いオーラが噴き出る。
それを感じてか、他のメンバーは数歩後ずさる。

なのはとティアナはそれに気付いてはいたが、玲央が離してくれないので、離れるに離れられない。

当の玲央は、冷や汗をダラダラと流し、少し焦っていた。

「……………シルフ、転移を『うん、無理』……………」

シルフに転移を頼んでみたものの、即拒否された。

その間にも、3つの黒いオーラは玲央たちに近付いてくる。

……………

……………

……………

……………

……………

その日、六課隊舎に3つの悲鳴が轟いたとか轟かなかったとか……………

第31話：心の闇、明かされる過去（後書き）

次回、『休日、暗躍する闇』を御期待下さい。

第32話：休日、玲央の実力（前書き）

前回の予告で「休日、暗躍する闇」と予告しましたが、突然の思いつきと作者の身勝手により、今回は別の話を執筆させていただきました。

そのところ、ご了承くださいm（ー）m

第32話：休日、玲央の実力

「ふああ。フォワード達は偉いわねえ、早朝から訓練なんて」
「おいおい、サフィア。それは俺の訓練を受けたくないと言いたいのか？」

玲央の過去が明かされた翌日、騎士団メンバー（玲央含み）は訓練場でフォワード達の訓練を見ている。

「そ、そんなことはありませんよ、刀王」
「と言うか、刀王のは訓練とは言わないけどな（ボソツ）」

レギンスが小声でそう言ったのを、玲央は聞き逃さなかった。

「そうか、今日1番始めに墜とされたいのはレギンスか。そうかそうか」

「と、刀王！？ あ、謝りますからそれだけは！？」

「ははは、レギンス」

「な、なんででしょう！」

「俺が……許すと思うか？」

「……」

その一言で、レギンスは黙ってしまう。

他のメンバーはと言うと、そんなレギンスを見て苦笑する。

「さて、フォワードたちの訓練が終わったみたいだな」

視線を戻すと、フォワード達はなのは、フェイト、ヴィータの3人から第二段階クリアの見極めテストの合格を告げられていた。

「さて、みんな覚悟できてるか？」

「……は、はい……」

「……ほどほどに頼む、玲央」

「いんや、久しぶりだから思いつきやらせてもらっ！」

「……はぁ」

レオル達は深い溜息を吐く。

玲央はそれに気付かず、なのはたちの方に近付き、声をかける。

「もういいか？」

「あ、うん。ちょうど終わったところから」

そう言いながら、なのはは玲央の近くに来る。

「あれ、騎士団の方たち揃ってどうしたんですか？」

「ああ、この訓練場を借りて、軽く模擬戦しようと思ってな」

それを聞いたフォワード達は、少し驚く。

そんな4人を見た玲央は、1つ提案する。

「なんだったら、見ていくか？」

「玲央くん、いいの？」

「減るもんじゃなし、別にいいぞ。フォワードも勉強になるかもだしな」

「……お、お願いします！」

なのは、フェイト、ヴィータとフォワードたちを、訓練場の外に出たのを確認すると、全員BJを展開する。

「よし、それじゃあ制限時間は5分で、俺にどんな方法でもいいから1撃でも当てれば俺の負け、そっちは全員が撃墜または捕縛されたら負けってことで良いな？」

「「「「「はい！」「」「」「」」」」」

「よし、それじゃあ・・・・・・・・」

そこで沈黙が場を包む。

その場に段々と緊張が張り詰めていき・・・・

カン！

どこかでそんな音がした。
同時に

「スタート!!」

模擬戦が開始する。

「ブリューナク!」

『Spread shoot』

開始と同時に、サフィアは複数の魔力スフィアを生成し、展開する。
さらに、レギンス、アシユラ、ビラルゴが一斉に玲央へと突っ込む。

「最初から飛ばす! スタンフィール! ビースト?!」

『Beast?』

レギンスはスタンフィールとビーストレイジの段階を上げる。
すると、ビーストレイジの方はそこまで変化はしなかったが、スタンフィールの方がインラインスケート状態から、獣の足の様な形状へと変化する。

その下にホイールが着いたままだが。

「シヴァ、ルナフォルム!」

『Luna form』

駆けながらもアシユラは三叉槍状態のシヴァの形態を変化させる。
元の三叉槍状態の刃の付根部分に、左右に1枚ずつ三日月型の刃が出現する。

「ムーンセイバー、射出!」

『Launching（発射）』

同時に、アシュラは出現した三日月型の刃　　ムーンセイバーを射出する。

「ミヨルニール！」

「スタンフィール！」

「シヴァ！」

「「カートリッジロード！」「」「」

『Explosion』』

『Load cartridge』

3人が同時にカートリッジをロードすると、一気に玲央との距離を縮める。

さらに、3人の後ろから何時の間にかサファイアが放っていた無数の弾幕が、玲央に向かって迫っていた。

ゲート・オブ・バビロム　パーツ・クリエイト
「聖王の財宝、部分生成」

玲央は向かってくる攻撃を目の前にしながら聖王の財宝を展開し、彼は頭上に4つの艦船砲口が出現する。

同時に、方向に魔力がチャージされ、一斉に放たれる。

「カルバリン砲、つてえ！！」

放たれた砲撃は、玲央へと向かっていた3人と弾幕へと向かう。アシュラとビラルゴは即座に放たれた砲撃を回避するため、横に飛ぶが、レギンスは突如現れたバインドにより、回避できなくなり、直撃する。

さらにその砲撃

カルバリン砲は、威力を弱めることなく、

サファイアへと直進していく。

「ブリューナク!!」

『ALL-ICE』

サファイアは、現状での最大魔法を放とうとする。

「アリス!」

『shot』

放たれたる無限の弾幕。

弾幕は向かい来る砲撃へと向かう。

魔力の総量は同等で五分五分。

しかし、やはり『砲弾』と『銃弾』、『砲撃』と『銃撃』。

銃撃が砲撃に敵うはずもなく、多少は威力が落ちたものの、軌道が変化することも無くそのままサファイアへと直撃する。

その後、砲撃は周囲のビルを複数破壊して、漸く治まる。

砲撃が治まった跡には、レギンスとサファイアが横たわっていた。

「まずは2人」

玲央が2人を見下ろしながらそう言っていると、背後から一筋のレーザーが放たれる。

「おわつと」

レーザーを玲央は難なく避ける。

そしてレーザーの放たれた方向を見やると、角と手と足だけの解放

ファースト・リリース

第一解放しているユニカの姿があった。

「シルフ、モード『鎚』
『了解』」

玲央がシルフを鎚にモードチェンジするのに気付き、ユニカが玲央に突っ込む。

ユニカの突進を玲央はシルフで防ぐと、ユニカの背後から、レオルが現れ、攻撃を仕掛ける。

「スカブ！ ヘルスピア！」
『Fire』

姿を現した瞬間に、レオルは玲央に向けヘルスピアを放つ。
しかし、その攻撃は玲央に直撃する直前に、突如現れた鎖によって防がれる。

「チッ！ エルキドゥ 天の鎖か！」
「捕えろ！」

レオルは悪態吐きながら即座にその場を離脱しようとするが、玲央の天の鎖によって捕縛される。

同時に、玲央は今まで鰐迫っていたユニカをビルへと吹き飛ばす。

「さて、試しにあれをやってみるか」

そう言いながら、玲央は両手に白と黒の夫婦剣 干将・莫耶を
投影する。

と、そこに背後からビラルゴがミョルニールを力の限り振り下ろす。
さらに右方向からはアシュラがシヴァで斬りかかる。

「・・・陽断 空蝉」

ビラルゴとアシュラの攻撃が直撃する直前、玲央の身体が光り輝き、その場から姿を消す。

「っ！？」

突然、その場から玲央が消えたことに驚くビラルゴとアシュラ。2人が玲央の姿を探そうと、辺りを見回そうとした、その時。

「がっ！」

「なっ！？」

突如、ビラルゴに『何か』が直撃する。

そして、その直撃した『何か』をこれまた突如現れた玲央が両手に持ち、振り下ろす。

「・・・鶴翼三連」

攻撃を受けたビラルゴは、そのまま地面へと落下する。

何が起きたか分からなかったアシュラだが、すぐにシヴァを構える。しかし

「ロールアウト 工程完了。バレット 全投影、クリア 待機」

シヴァが構えるよりも前に、玲央は自身の頭上に十数本の様々な刀剣を投影し、その空間に固定していた。

「あ、これ無理だ」

そんな呟きがアシュラから聞こえてくるが、玲央は一切気にするこ

とはない。

「フリーズアウト停止解凍、ソードバレルフルオープン全投影連続層写！！」

玲央の詠唱と共に、投影された刀剣が一斉にアシユラへと飛来し、直撃、ビラルゴ同様落下していく。

ちなみに直撃とは言っても、投影された刀剣はアシユラには刺さらず、あくまで魔力ダメージを与えるだけだ。

「さて、後

」

後、1人。そう言おうとした時だった。

先程、ユニカを吹き飛ばしたビルの辺りから火柱が昇る。

玲央が視線を向けると、そこには炎を纏ったユニカが第二解放状態セカンド・リリース（第一解放＋翼）で飛んでいた。

「あゝ主よ。我がこのぐらいの攻撃でやられるとお思いか？」

「いや、まさか。これぐらいは耐えてくれねえとな」

玲央がユニカとそんな話をしていると、周囲から幾つかの生体反応を察知する。

直後、察知した生体反応が一斉に玲央に飛びかかる。

「みんな、お願い！」

その内の1体に、アリアが乗っていた。

飛びかかって来ていた生体反応の元を、玲央は無駄なく回避し、その姿を視認する。

その数、アリアが乗っているペガサス合わせ4体。

1体は翼と上半身にライオンの下半身を持つグリフォン（ちなみに

名前はベンジャミン)。

1体は伝説では有名なハルピュイア、所謂ハーピーだ(名前はツクヨミ)。

1体はその身を炎に包んで優雅に飛んでいる、彼の有名なフェニックス(名前はホウオウ)。

ちなみにアリアが乗っているペガサスの名前はハイド。

ちなみにちなみに、幻獣全員の命名はアリアと玲央がやっています。

「わお、みんな久しぶりだな。だけど今は本気でやるぜ」

それに答えるように、幻獣たちは一斉に鳴く。

同時に、ユニカと幻獣たちが一斉に襲い掛かる。

玲央はそれを見ながら、唱える。

「光の王が無数の時を編み」

すると、ミッドでもベルカでもない魔法陣が展開される。

「ライト・キャンサー」

展開された魔法陣から勢いよく網状の光が放たれ、幻獣やユニカたちを捕縛する。

「ふう、これにて一見落着か？」

「まだ！」

玲央が一息吐こうとした時、彼の背後からアリアがペガサスに乗ったまま魔力弾を幾つか放つ。

しかし、その魔力弾を玲央は新たに1本天の鎖を生成し、防ぐ。

その刹那、アリアとペガサスを一緒に天の鎖で捕縛する。

「今度こそ、終わりだな」

そこで模擬戦が玲央の圧倒的勝利で終了する。

「す、凄すぎだよ」

「か、勝てる気しない」

「アイツ、やっぱ化け物だろ？」

「・・・私でもあいつとは戦いたくないな」

上記は、今回の模擬戦を見た隊長陣が口にした感想である。
ちなみにフォワード陣は苦笑するしかなかったとか。

「それじゃあ、みんな今回の模擬戦の反省文をレポート5～30枚
以上で提出しろよ。いいな？」

「「「「「「「は、はい」（う、うむ）「「「「「「」

「それじゃあ・・・そうだな、今日ぐらいは休ませるか」

玲央の言葉に、師団長達は「えっ？」と言う表情を浮かべる。

「と言うわけで、レポートは明日から1週間後までに提出してくれ。
今日は昼から休暇ってことで良いぞ」

それを聞き、皆の顔が綻ぶ。

「んじゃ、あんま羽根伸ばし過ぎんなよ」

「「「「「「はい！（了解）「「「「「「」

「うん、それじゃあ解散」

その言葉と同時に、皆がその場から移動を始める。

移動しながら、皆、貴重な休日はどう過ごそうか考えているようだ。
まさか、あんな事件が起こるとも知らずに……

第32話：休日、玲央の実力（後書き）

次回こそ、『休日、暗躍する闇』を執筆します！
御期待下さい！

第33話：休日、暗躍する闇

「あゝ、疲れたなあ」

「お疲れ様、玲央くん」

玲央は模擬戦の後、シャワーを浴びてから食堂に来ていた。ちなみに騎士団長たちは、既に休日を満喫している。

アシユラは自室で録り溜めしていた最近人気の人情ドラマを一気に見ている。

ビラルゴは首都クラナガンへと色々と買いに行っている。

サフィアはスバルとティアナと一緒に出かけている。ちなみにバイクは自前のを使っている。

アリアは近くの森林公園へ行き、幻獣たちを1体ずつ喚び出し、毛繕いやマッサージをしてあげている。

レギンスは騎士団経営の孤児院へと行き、子供たちと遊んでいる。

レオルは特にスカブとシルフィードの点検をしている。

と、玲央が特に何も考えずに昼食を食べていると、映像モニターに1人の男性の姿が映る。

その男の名は

「レジアス・ゲイズ中将か」

玲央が男の名を呟くが、周りの誰も気付かずに会話を続けていた。さらにモニターを見ていると、レジアス中將から映像が外れ、彼の背後に座っていた三提督へと変わる。

それを見て、ヴィータが親しげに彼らの事を話しているので、シグナムが補足説明をした。

「いやいや、レオーネは地味に人使い荒いし、ラルゴはラルゴで無理難題吹っ掛けてくるから疲れる。唯一の救いはミゼットがたまに愚痴を聞いてくれるってところだけだな」

玲央の言葉に、その場の全員が固まって玲央の方を見ていた。

「ん？ どうした？」

「えつと……玲央って、三提督と知り合いなの？」

フェイトが恐る恐ると玲央に尋ねると、あっけらかんとした態度で玲央は答える。

「ああ、うちのお得意さんだけど？」

[illegible]

その場の全員が驚愕の声を上げる。

「~~~~っ!? ちょ、うるさい!」

「だ、だって三提督の事を親しげに話すから！」

「親しげにつて、實際親しいのだが？」

その言葉に啞然とする全員だった。

「?????」

「……あゝ、暇だなあ」

暗い、暗い闇の中。

全てを包む闇の中。

そこに、5つの人影が蠢いていた。

その人影の1つ　カルシファーが欠伸をしながらそう言う。

「暇って、カルシファーさん。あなたは以前戦っているんだから良いじゃないですか」

「うるせえよ、ベルゼビュート。お前も他の転生者殺してんじゃねえかよ」

カルシファアは彼の近くの人影　ベルゼビュートは軽く反論するが、カルシファアはそれを無視する。

「それより、マーモンとアスモディアはどこ行ったんだ？」

「あ、サタン（さん）」

そんな2人の後ろから尋ねてくる人影　サタンは、どこかイラついていた。

「あゝ、あの2人は例のドクターの協力に行ってたっけか？」

「マジか？」

「マジっすよ」

「・・・・・・チッ」

サタンはイラつきながら2人に背を向けると、近くのソファアに横になる。

「あれ、そう言えばベルフェゴルドさんも協力してくれて言われてませんでしたっけ？」

「俺？・・・・・・あゝ・・・・・・メンドイ」

「いや行けよ」

サタンが横になったのとは別のソファで横になっていた人影　ベルフェゴルドは、一度起き上がりカルシファアとベルゼビュートに視線を向けると、すぐまた寝た。

「あゝ、ダメだな。この状態のこいつは起こせねえ」

「だったら私が行ってこようか？」

と、ベルフェゴルドの横になっているソファの後ろから、ヒョコッと顔を出す人影　レヴィアタン。

彼女の言葉に、カルシファーは何かを言い澀んでいた。

それを察したのか、レヴィアタンは「アハハ」と明るい声を上げ、カルシファーに言う。

「私は大丈夫だって。『あの人』はもう、私の敵なんだから」
「・・・・・・・・まあ、お前が良いなら良いけどな」

「それに・・・・」とレヴィアタンはその空間から出ようとしながら
呟く。

「私がこうなったのも、『彼』のせいなんだから」
そう言い、レヴィアタンはその空間から出ていく。

「都市部上空」

「どう、マーモン。対象は発見できた？」

「ちよつと待つて下さいよ。この都市の地下水路ってかなり複雑で調べるのにかなり時間が掛かるんですよ」

そう言いながら、マーモンと呼ばれた少年はモニターに表示されているマップを次々に変えていく。

そんな少年を、隣で艶っぽい表情で見ているの女性　アスモディアは、つまらなそうに周りを見ている。

と、突如2人の背後に空間の裂目が現れ、中から1人の女性が出てくる。

「あら、どうしたのよ。レヴィアタン」

そこに現れたのは、先程、暗い空間から抜け出したレヴィアタンだった。

「ベルフェゴールドがあのだクターの協力が面倒だつて言うから、代わりに来たの」

「あゝ、そうなんだ。オッケー、じゃあちよつと待つてね」

そう言いながら、アスモディアは隣のマーモンの様子を伺う。
すると、丁度終わったのかマーモンが大きく息を吐きながら背伸びをする。

「あ、見つかった？」

アスモディアの問いに、マーモンは言いづらそうにしながらも話し始める。

「えつとですね、見つけるには見つけたんですよ。はい」

「じゃあ速くこちらで確保して、さっさとあの変態ドクターのところに連れて行かないと」

「いや、それが………もう既に保護されちゃってるんですよ、相手に」

「あ………そゆことね」

それを聞き、アスモディアは額に手を当て「あちゃー」と言う表情を浮かべる。

「それで、どうするのよ？」

「………そうね、こっちで取り返す？」

「そうですね………ああ、でもまずは向こうが何かするみたいですよ？ ほら」

そう言いながら、マーモンはモニターに2人の女性を表示する。

「あ、彼女たちって確か」

「ナンバーズ、だっけ？」

「はい。どうやら砲撃を放ってへりを墜とすみたいです。僕らはそこで対象を確保しましょう」

「了解」

彼女たちはそう言うと、その場から眼下での出来事を暫くの間、傍観することにした。

第33話：休日、暗躍する闇（後書き）

今回の『魔法少女リリカルなのは』風を纏う最強』は

サファイア「ティアナ、行くわよ！」

アリア「行くよ、ハイド、ベンジャミン、ツクヨミ」

レギンス「お前たちは一体？」

アシュラ「危ねえ！！」

レオル「がつ！？」

なのは「な、なんで？」

マーモン「僕らの事は知らなくていいよ。機動六課の人は」

アスモディア「うふふ、君可愛いね……食べちゃいたいくらい」

レヴィアタン「久しぶりだね」

玲央「何で……何でここにいるんだよ……！」

『第34話：休日、邂逅、そして再開』

風は止み、仮面が剥がれ、謎が増える。

注：今回の次回予告でのセリフが次回の話で使われるとは限りませんのでご了承ください（え？

作者「こんな下の方で申し訳ないですが、感謝コーナーです！」

玲央「ソラト様、どうもありがとうございます」

作者「ちなみに現在の玲央なら管理局なんか1、2週間ぐらいで壊滅させられるかと」

玲央「騎士団全員だと1〜5日ぐらいでだな。なんてったってレアスキル持ちとかが集まってんだからな」

作者「それでは次回をお楽しみに！」

第34話：休日へ邂逅、そして再開

「ティアナ、行くわよ！」

「ええ！」

現在、フォワードとサフィアは先程保護した少女が持っていたと思われるもう1つのレリックを搜索している。

そして現在、彼女たちは同じくレリックを搜索していると思われるガジェットと戦っている。

「クロス！」

「ブリザード！」

「「シュート！！」」

サフィアとティアナが大量の魔力弾を生成し、一気に放つ。

放たれた魔力弾はガジェットたちへと直撃すると、次の瞬間には氷漬けにされていた。

「凄い！ ティアいつの間に！？」

「私の時間がある時に、凍結の魔力変換技能の練習させてたのよ」

スバルがティアナとサフィアの元に来ながら聞くと、サフィアが答える。

「そうなんですか？」

「ええ。まあ、まだサフィと一緒にじゃないと制御が難しいんだけどね」

「それでも凄いです！」

そんな話をしながらも、5人は歩を進める。
と、そんな時、突如水路の壁が爆発する。

5人は新たなガジェットが来たと思い構える。

しかし、煙が晴れてきて、影がゆらりと動いたかと思うと、その人物の顔が浮かび上がる。

「ギン姉！」

「ギンガさん！」

スバルとティアナがその女性　ギンガ・ナカジマへと駆け寄る。

ギンガはスバルたちと軽く挨拶をすると、サフィアの方を向き、敬礼をする。

「陸士108部隊、スバル・ナカジマ陸曹です！神託の盾騎士団オラクルからの協力の方ですね！」

「ええ、神託の盾騎士団オラクル、第二師団団長のサフィア・ネイビアよ。よろしく」

サフィアとギンガが軽く握手をする。

その後、6人はお互いの今までの情報を交換しながら水路を進んでいく。

「はやて、俺達も出るぞ」

玲央がそう言いながら外に出ようとする。

「どうかしたんか？」

「いや、なんか嫌な予感がするだけだ。行くぞ、アシユラ、レオル」
「了解！」

玲央ははやての問いに簡潔に答えると、すぐに現場へと向かう。

「ごめん、私はちょっと行ってくるね」

「あれ、どうしたんですか、レヴィアタンさん？」

「うん、ちょっと昔の知り合いに会ってくる」

そう言うと、レヴィアタンはマーモンとアスモディアの前から姿を消す。

「昔の知り合い？　．．．．あぁ、あの子か」

「知ってるんですか、アスモディアさん」

「まあね」と言うと、それっきり黙るアスモディア。

マーモンもあまり聞かない方がいいと思い、同じく黙る。

眼下で起きている事件を眺めながら．．．

「行くよ、ハイド、ベンジャミン、ツクヨミ」

幻獣たちがアリアに応えながら、一斉に飛び上がる。
すると、アリアはすぐに玲央達と合流する。

「アリア、すぐにフォワードとサフィアの応援に行ってくれ！」

「うん！ ベルフォーン、モード2！」

アリアがベルフォーンをモード2へと移行すると同時に、幻獣たち
に変化が生じる。

ヘガサス

グリフォン

ハルピュイア

ハイドは雷を纏い、ベンジャミンは炎を纏い、ツクヨミは風を纏う。
要するに、幻獣たちに属性付加がされたのだ。

ちなみに、始めにキヤロと模擬戦した時にも最後の方はモード2だ
ったりする。

「じゃあ、行ってきます！」

アリアは力強く敬礼すると、すぐにフォワードとサフィアの元へと向かう。

「ねえ、マーモン。私暇なんだけどお
「そんなこと言われましても……と言つかやめてくださいよ
！ 場所を弁えてください！」

レヴィアタンがどこかに行った後、アスモディアはマーモンと色々話していたが、それに飽きたらしく、妖艶な声を出しながらマーモンに迫っている。

「良いじゃない。私たち以外、誰もいないんだから」

「で、でも！」

「もう良いわよ。襲っちゃうから」

「や、やめ」

「お前たち、何者だ？」

2人がそんなことをやっていると、突然尋ねられる。

2人は声をかけた人物へと視線を向けると、そこにはビラルゴとレギンスが2人を睨みながら浮いていた。

先程声をかけたのは、どうやらビラルゴのようだった。

「もう、マーモンのせいで邪魔が入っちゃったじゃない」

「それ僕のせいですか！？」

「もう1度だけ言うぞ？」

レギンスが殺気を放ちながら、もう一度だけ問う。

「お前たちは一体？」

「私たち？ ん、そうねえ」

「僕の名前はマーモン、そしてこちらの女性はアスモディア。僕たちはある組織の一員、ただそれだけです」

しかし、レギンスの放った殺気にも全く動じることなく、マーモンとアスモディアは普通に話す。

そんな2人も、レギンスに負けず劣らずの殺気を放っている。

『こいつら、ヤバいな』

『みたいだ。刀王の言っていた人物かもしれんな』

そんな念話をしながらも、絶対にマーモンとアスモディアから目を離すことは無かった。

玲央達は、アリアの姿が見えなくなるまで、ずっとその後ろ姿を見

ていた。

「よし、俺達も」

「急いで行くぞ!」、玲央がそう言おうとした、その時だった。突如、彼らに上空から謎の物体が飛来する。

「危ねえ!」

アシユラがすぐに反応して、その飛来する物体を防ごうとする。が、その物体はアシユラをすり抜け、彼の後ろのレオルの顔面へと直撃する。

「がつ!?!」

まともにダメージを受けたレオルは、後方へと吹っ飛ばされる。そこに、何時の間にかやって来ていたなのはがレオルを受け止める。その後ろには、フェイトも一緒だった。

「だ、大丈夫ですか!?!」

「ああ、すまな」

パキン、とそんな音がその場に響く。

同時に、レオルの顔を覆っていた仮面が二つに割れ落ちる。

初めて明かされるレオルの素顔。

しかし、それを直接見たのはとフェイト、それにモニターで見ていたロングアーチスタッフ全員が驚愕する。

「な、なんで?」

疑問の声を発したのはなのは。

その表情は、信じられないものを見たと言う顔だった。

「ど、どうして？」

次に声を発したのはフェイト。

なのは同様、表情は驚愕の色に染まっていた。

何故、彼女たちが驚いているか。それは

「どうして、レオルさんの顔が・・・」

「どうして、玲央くんと同じなの？」

レオルの顔が、玲央と瓜二つだったからだ。

「ねえ、私そろそろ睨み合うだけってのも飽きたんだけど」
「知りませんよ。ってか僕を弄るのやめてください」

未だにビルゴ、レギンスとマーモン、アスモディアは睨み合っていたが、痺れを切らしたアスモディアがマーモンを軽く弄りだした。そんなやり取りを見ているビルゴとレギンスは、呆れだしていた。と、そんな彼らの元に、1人近付いてくる。

「ジェンキンス、シンクレア、大丈夫か」

そこにやってきたのは、機動六課、ライティング分隊副隊長、シグナムだった。

「シグナムか」

「ああ、それよりあやつらは誰だ？」

ビルゴが2人の事を説明しようとする。

が、それは突如放たれた斬撃によって阻まれる。その斬撃をシグナムはギリギリのところで防ぐ。

「貴様、何のつもりだ？」

シグナムは、すぐに斬撃を放った本人　　マーモンを睨み付ける。しかし、シグナムはすぐに睨むのをやめ、身体をガクガクと震わせ始める。

マーモンを見ると、彼はまるでその場のものを全て凍らせることが

できるのではないかと言うほどの冷たく鋭い殺気の籠った視線でシグナムを睨んでいた。

「僕らの事は知らなくていいよ。機動六課の人は」
「じゃあね、私たちはもう行くから」

アスモディアはそう言いながら手を振ると、マーモンと一緒にその場から姿を消す。

マーモンの視線から解放されたシグナムは、その場に跪くように蹲り、肩で息をする。

「ど、どうして、顔が同じなの？」

なのはは玲央に問うが、玲央はその問いに答えず、真直ぐ上空からゆっくり降りてくる全身コート（フード付）の人物を睨んでいる。

「お前だな、先程の攻撃は」

「そうだよ。私がやったの」

なのはとフェイトは、もう1度玲央に問おうとするが、できなかった。

玲央と上空から降りてきた人物（声から察するに女性）が互いに発している殺気にあてられたからだ。

「・・・お前、何者だ？」

「私？ 私はレヴィアタン」

「お前は一体何なんだ？」

「あらら、声だけじゃ分かんないかな？」

レヴィアタンが微笑みながら言う。

それを聞き、玲央は頭に疑問符を浮かべる。

「お前、それじゃまるで、前にどこかで会ったことあるみたいじゃないか」

「実際、あるんだよ」

「何？」

「私の顔見ても、分らない？」

そう言いながら、レヴィアタンは自身が被っているフードをパサッと取る。

「久しぶりだね」

レヴィアタンは、玲央に向けそう言う。

しかし、そんな言葉は今の玲央の耳に入っていないかった。

玲央は、レヴィアタンの晒された素顔をずっと凝視していた。その表情は、ありえない、信じられないと言った表情だった。

「何で・・・何でここにいるんだよ!!」

玲央は戸惑いながら、レヴィアタンに問う。

何故そんな問いをしたか、それは、

「今は巫玲央って名前何だって？」

「何で、どうして・・・お前がここにいる!？」

そこにいたのが

「どうしてだ・・・」

生前、彼が助けたはずの、そして、彼が愛したはずの、女性だったからだ。

第34話：休日ゝ邂逅、そして再開（後書き）

今回の『魔法少女リリカルなのは』風を纏う最強』は

レヴィアタン「あなた達は黙ってて！」

玲央「俺は、俺は……」

サトシ「ポケモン、ゲットだぜ！」

アリア「ベンジャミン、お願い！」

レオル「話そう。俺と玲央の過去を」

『第35話：玲央とレオル』

吹きつく風は、一体どこからやってきたのか。

作者「と、言うわけで、前回の次回予告の際に出ていたセリフの中で出てこなかったセリフはこちら！」

『アスモディア「うふふ、君可愛いね……食べちゃいたいくらい」』

作者「それでは、皆さん。今回も出ないであろうセリフがあると思いますので、ご了承ください」

第35話：玲央とレオル（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。

先週は実家に帰省したり、夏コミ行ったりで忙しかったので更新する時間がありませんでした。

第35話：玲央とレオル

なのは side

「どうしてだ、ゆり！ 何でお前がここにいるんだ！」

今、玲央くんはあの女の子に向かって叫び、問い詰めている。
その顔は、とても悲しそうで、とても辛そうで・・・

「私ね、君が死んだあと・・・すぐに死んだの」
「な・・・に・・・」

彼女の口から紡がれる言葉。

その言葉を聞き、玲央くんはさらに悲しそうな表情になる。

「うっん、死んだって言うのはちょっと正確じゃないかな。正確には・・・」

彼女は少し間をおいてから、ゆっくりと、その言葉を口から紡ぐ。

「・・・そう、正確には『自殺』したんだよ」
「っ!？」

玲央くんは、とても辛そうに、信じられないという表情をする。

「それでね、その後、私は暗闇の中で目を覚ましたの」

なのは s i d e o u t

ゆり s i d e

『・・・あれ、ここはどこ?』

私が目を覚ますと、そこは真つ暗で、見渡す限りの闇だった。

『どうして、私はこんなところにいるの?』

私は自分で命を絶った。

それは覚えている。

ならなんで、私はこんなところにいる?

なんで私は、生まれ変わらないの?

『私は、生まれ変わって、早く『彼』に会いたいの！』

どうして私は生まれ変われないの！

そんな叫びを上げるけど、その叫びは無情にこの空間に響いていくだけだった。

『生まれ変わりたいか？』

そんな時だった。

私の目の前の闇の空間が揺らめき始める。

いや、正確には私の目の前に黒い炎が揺らめいていた。

どうやらその声は、目の前の黒炎から発せられているみたい。

『……生まれ変わりたい』

『……本当にいいのか？』

『当たり前よ！ 彼と早く出会いたいのだか！』その彼が、君の世界にいらなくても。か？』……え？』

黒炎の揺らめきが大きくなり、一気に巨大になると、そこにある人物の姿が映される。

そこには、私が探していた彼の姿が映っていた。

ただ、気になることは……

『……誰、あの娘たち？』

そう、私の知らない女の子が、彼の近くにいたのだ。

サイドポニーの女の子。

長いブロンドの女の子。

茶髪ショートの子。

それ以外にも何人もの女の子が彼の近くにいる。
しかも最初の3人は、彼の事が・・・

『あの娘たちを消したいか？』

黒い炎が私に問う。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『あの娘たちを消し、あの男を自分のものにしたいか？』

私は、ゆっくりとその黒炎に手をかざす。

『うん、彼は私のもの。それを盗ろうとする人たちは、みんな・・・』

そして、その黒炎を、ギュッと手で握る。

『殺^けしたい』

『承知した。我が力を貸し、彼の者のいる世界へと飛ばそう。我が名は』

次の瞬間、黒炎は私を包み込み、身体の中に浸食するように入り込む。

『レヴィアタン』

ゆり side out

「それで、私はここに来たの」

レヴィアタンは今までの出来事を、簡潔に目の前の彼女たちに話す。そんな話を聞き、玲央は驚愕し、なのは達は衝撃を受けていた。

「じゃ、じゃあ、あなたは玲央くんに会うために……」

「そこまでして、会いたいなんて」

なのはとフェイトはそんな彼女の行動を聞いて、信じられないと呟いく。

そんな2人の言葉を聞いたレヴィアタンは、2人を睨み付けながら、右掌に黒炎を出す。

「あなた達は黙ってて！」

そう言い、レヴィアタンはその黒炎を2人に向け投げつける。

レイジングハートとバルディッシュはすぐに主人を守るために、シールドを張る。

が、黒炎の直撃直後、張られたシールドが黒炎が浸食するようにシールドを焼き消していく。

それを見たなのは達はどうなっているのか訳が分からなく、慌てていた。

それを笑いながら見ていたレヴィアタンは、彼女たちにその笑顔のまま、説明をする。

「私の能力はね、嫉妬エンヴィ・フレイアの黒炎って言って、どんなものでも、対象を焼きつくすまで絶対に消すことができない炎を出すことができるの。まるで嫉妬した相手から全てを奪うようにね」

レヴィアタンは微笑みながら、眼下で慌ててシールドを消している2人を眺めていた。

「それじゃあ、私は帰るよ。今日は顔見せだけだからね」

レヴィアタンは手を振りながら、その場から姿を消す。

「俺は、俺は……」

玲央は、その場にゆっくりと蹲る。

「……ゆり、どうして」

力無く玲央の口から零れた言葉は、レヴィアタンの耳には届かなかった。

あの後、色々あったものの、無事にレリックを確保し、何事も無く保護した少女を搬送することができた。

そして、機動六課隊舎に戻ってきた皆は、今日の出来事を報告していく。

へりを襲撃してきた少女、戦闘機人。

地下水路にて出会った召喚師の少女に、古代ベルカと思われる融合騎。

そして

「この、全身コートの人たち、誰なんやろな？」

「……とりあえず、今分かってるのは彼らの名前だけだね」

フェイトはコンソールを表示し、数回押し、3人の全身コートの男女を表示する。

「マーモン、アスモディア、レヴィアタン」

「この名前、どこかで聞いたことが」

その場の全員がうーんと唸りながら考え込む。

そんな中、冷静な表情のまま、玲央はある言葉をその口から紡ぐ。

「……七つの大罪」

その言葉に、一斉に皆が玲央の方を見る。

「玲央くんは、彼らの事を知ってるんやね？」

「……まあ、少しな」

「教えてくれんか？」

玲央は無言のまま目を瞑り、少し間を置いてからゆっくりと閉じた瞳を開く。

「世界の咎人、悪の根源、悪魔の力を得し者たち。それが彼らだ」

それだけ言うと、玲央はゆっくりと歩き出し、部屋から出ていく。そんな彼の後姿には、これ以上何も聞くなと言っているようだった。彼が出ていって少し経ち、はやてはもう1つの案件をレオルへと尋ねる。

「それでレオルさん。うちもモニターで見ていたんで、どう言う訳

か話してもらえんな？」

はやてのその言葉に、フォワード+ヴィータ、シグナムは首を傾げる。

レオルは軽く溜息を吐き、自身の顔を覆っている仮面を外す。彼の晒された素顔を見た、先程首を傾げたメンバーの顔は驚きの表情へと変わる。

「・・・どういうことや？」

「・・・少し長くなるが、いいか？」

レオルが聞くと、全員が同時に頷く。

「そうか・・・」

レオルは自身の目の前に置いてあるお茶を一口飲む。そして、すぐに真剣な表情へと変わる。

「話そう。俺と玲央の過去を」

「数年前」

「………何用じゃ、巫玲央」

「ゼウス、あんたに頼みがあるんだ！」

玲央はノイを通じて、ゼウスのいる場所まで連れてきてもらった。

ちなみに彼らの後ろには、事情を聞いたユニカがいる。

「何じゃ？」

「シルフを……シルフを助けてくれ！」

そう言いながら、玲央は真つ二つに折られたシルフを突き出す。

「その者は、お主のデバイスじゃったな」

「ああ！ 俺でも直せると思ったけど、アイツ……カルシファーの奴はあの一瞬のうちに、内部構造をも粉々にしてやがった！」

「ふむ、つまり主では直せない。だから儂の元へと来たのじゃな」

玲央は力強く頷く。

「俺は……俺はどうしたら!!」

玲央は悲痛な表情でシルフの残骸を抱きしめる。
そんな彼を見ていたゼウスは、あることを思いつく。

『玲央よ、主の願いは叶えてやろう。その代わり、主に頼みたいことがある』

「な、なんだ!？」

ゼウスの言葉を聞き、玲央は慌てて目の前の最高神に問う。

『実は、主の今いる世界に我ら神が創製した道具があるのじゃが、それを回収してほしいのじゃ』

「それは一体、なんだ？」

ほんの少し、本当にほんの少しだが落ち着いてきた玲央は、何とか冷静にゼウスの話を聞く姿勢をとることができた。

『うむ、そちらの世界では『デバインズ神々の聖具』と言われている、所謂口ストロギアじゃ』

「それを回収すると・・・危険性は？」

『物によるの。比較的簡単に回収できるものもあれば、死の危険を伴うものもある。まあ今の主は寿命以外では死なんからの』

ゼウスの依頼の内容を聞いた玲央は、自身の手握られているシルフを見る。

その後、彼は決意する。

「いいぜ、分かった。あんたの提案をのんでやる!」

玲央の言葉に、彼の後ろにいるユニカは何か言いたげな顔をしてい

だが、そんな顔をするだけであつて何も言いはしなかった。
しかし、すぐにその依頼を受けた玲央に、ゼウスはあることを尋ねる。

『しかし、玲央よ。今まで主が助けてきた子供たちはどうする？』

そう、彼は今まで違法研究施設から助け出した子供たちをある場所で育てている。

その子供たちは、今は玲央を頼りにしている。
それをどうするのか、ゼウスは尋ねてくる。

「・・・だったら、これを使う」

そう言いながら、玲央は聖王の財宝であるものを生成する。
ゲート・オブ・バビロム

『それはなんじゃ？』

玲央は今、鉢植えに植えられた1つのサボテンを手に持っている。

「これは、ゴズリットの葉針という魔法具。こいつの棘を抜くと」

そう言いながら、玲央はゆっくりと棘を1本抜く。

その棘を、玲央は自身の前に投げると、少ししてからその棘が巨大化し、人の形を形成する。

すると、その人形は、見る見るうちに玲央と瓜二つになっていく。
ひとがた

「こいつには、俺の今までの記憶が引き継がれている。さらに、俺のもらった能力も弱化してはいるが多少は使えるみたいだ」

それを聞き、ゼウスは顎に手を当てる。

『ふむ、確かにその方法なら大丈夫じゃが・・・良いのか?』

「ああ、俺自身があいつらに会えないのは辛い、仕方ないさ」

「主!」

さすがに痺れを切らしたのか、ユニカが玲央に何かを言おうとする。しかし、それは当の玲央に阻まれた。

「悪い、ユニカ。俺の我俣を聞いてくれ」

「あ、主……………」

それ以降、ユニカは黙り込む。

「それに、信頼のおける奴らには伝えておくさ」

そう言いながら、玲央は大きく伸びをする。

「さて、それじゃあシルフを頼む」

そう言いながら、玲央はゼウスにシルフを渡す。

『ああ、任せておくのじゃ』

ゼウスは預かったシルフを、すぐに近くにいた使いの神に渡す。

「それじゃあ、俺も行くかな」

それを見たゼウスは、最後に玲央の元へと行き、再度言つ。

『それでは玲央よ。頼んだぞ』

「ああ……それじゃあ頼んだぞ、ユニカ」

「あ、ああ！ 任せるのじゃ！」

ユニカの返事を聞いた玲央は、その場から出ていこうとするが、その直前で1度立ち止まり、玲央はユニカの方を向く。

「そうだ。そいつの名前な。さすがに俺と同じじゃあ不味いからな」

そう言いながら、玲央はユニカに1つのメモ用紙を渡す。そこにはびつしりと名前の候補が書かれていた。

「そん中から好きなの選んでくれ、じゃあな」

そう言われ、ユニカはメモ用紙に書かれた名前を見る。ふと、ユニカは1つの名前を見つけ、そっと呟く。

「レオル・K・ヴァンデル……」

「と、まあこれが俺の出自。俺と玲央の関係だ」

要約するに、レオルは玲央がゼウス（六課メンバーに説明する際は
ある人と言うことにしておいた）の依頼を完了するまでの代わりと
言うこと。

と、あることにスバルが気付く。

「あれ、でもレオルさんと玲央さんって、髪の色とか微妙に違いま
すよね？」

「ああ、その理由はこれだ」

レオルがそう言うと同時に、彼の身体が一瞬輝く。

光が治まった後、六課メンバーが目を開くと、そこには玲央と同じ
髪の色をしたレオルと、その肩にリインと同じぐらいの大きさの少
女が座っていた。

「それって、ユニゾンデバイス？」

「ああ、シルフィードだ」

「よろしくね！」

シルフィードはピッと手を挙げ挨拶をする。

すると、さっきまではやての所にいたリインが何時の間にかシルフ

イードの目の前にまで来ていた。

「初めましてです！ リインフォース？空曹長と言います！」

「え、ええ、初めまして。シルフィードよ。よろしくね」

「よろしくですう！」

何故だかリインはテンションが高くなっていて。

予想だが、初めて自分以外のユニゾンデバイスを見たためだろう。

「それにしても」

不意に、なのはがレオルの顔を見ながら言う。

「本当に玲央くんに似てるよね」

「あゝ、よく言われる。性格は少し違ってもな」

「どんな風に？」

「俺は真面目すぎだと言われるな」

レオルのその言葉に、その場の皆が「あゝ・・・」と声を漏らす。それを聞いたレオルが少し落ち込みそうになるが、何とか堪える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ゆり」

機動六課隊舎の屋上。

玲央はあの後、部屋から出てすぐにここへ来ていた。

夜空に煌く輝かしい星。

そんな星を見上げながら、玲央はレヴィアタンの・・・・大好きだった女の子の名を呟く。

「・・・・・・・・やるしか、無いのか？」

誰に問うでもなく、玲央は虚空を見つめたまま呟く。

その瞳に、迷いの色を映したまま。

そして、そんな彼の姿を遥か上空から見る人物が1人。

『・・・・・・・・ああ、彼への報告はまた今度にした方がいいですね』

その人物は、玲央を見ながらそう呟く。

「ポケモン、ゲットだぜ！」

そんな時、彼の懐からそんな音声が聞こえてきた。
すると彼は懐から徐に携帯電話を取り出す。

『はい、もしもし』

『わしじゃ』

『ああ、ゼウス様ですか。どうかしましたか？』

『うむ、こちらかもそちらの様子を見ておるのでな。もう戻って来て良いぞ』

『了解です。すぐに戻ります』

そう言い、彼は通話を切る。

『さてと、次に会うときまでには元気になっていてくださいよ、玲央くん』

そう言いながら、彼はその場から消えていった。

第35話：玲央とレオル（後書き）

次回・・・・・・・・・・いや、もうこれやめよう。

玲央「2回で終わりかよ!？」

作者「うん、まあ気にすんな」

玲央「うぜえ！」

作者「まあとりあえず、次回は・・・どうしようか？」

玲央「知らねえよ」

作者「ん・・・・・・・・よし、次回『決意』を御期待下さい」

玲央「今までので一番短いな」

作者「気にすんな」

玲央「そう言えば、最近他に書くことと思ってる小説があるとか聞いたんだが」

作者「あゝ、とあるシリーズを書きたいなあと思ってるだけ。まだどう言うストーリーにするか決めてないから」

玲央「書くなら大まかなストーリー決めてから書いてくれよ。この作品みたいにならないように」

作者「……………それ、言っなよ」

ていた。

玲央は食堂を出た後、訓練場へと来ていた。

玲央はコンソールを操作し、訓練場の設定を入力し、場を形成していく。

「フィールドは廃墟、敵戦力はガジェット？型が300、？型が100、？型も100。攻撃精度はSS、威力はS、移動速度はS+」

設定を終え、玲央は訓練場の中央へとやってくる。

彼の周囲には、ガジェットたちが配置されており、既に攻撃する準

備もできており、開始の合図を待っているようだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

暫くの間、その場を静寂が包み込む。

カンッ

何かの音がした次の瞬間、ガジェットから一斉に攻撃が放たれる。同時に攻撃が直撃した場所が爆散する。その直後

「氷狼乱牙！」

十数機のガジェットが一斉に斬られ、直後に凍結する。さらに周囲のガジェット十数機が上空へと斬り上げられ、同時に3つに裁断される。

そして、上空で裁断されたガジェットたちが地面に落下したと同時に、玲央はさらに攻撃を放つ。

「双牙斬！」

上空からガジェットへと斬り下ろし真つ二つにした直後、別のガジェットを斬り上げ、こちらも二つにする。

さらに玲央は現在手にしている炎の力を凝縮した剣　フラムファングを消し、即座に同じ手に蒼い長銃　サーペンタインを生成する。

刹那、ガジェット数機が上空へ打ち上げられる。

「リフターファイア！」

玲央は、打ち上げられたガジェット数機へ凄まじい連射を行う。
その連射は、まるでガジェットたちを上空へ磔にするほど凄まじかった。

しかし、他のガジェットたちもそれを黙って見ているわけではない。
今もなお、玲央へと攻撃を放っているし、AMFも最大出力にしている。

だが、そんな中でも玲央はその攻撃を避け、AMFをもともせず
に攻撃を放つ。

そんな中で、玲央はあることを考えている。
それはもちろん・・・先日、玲央の前に現れたレヴィアタンのこ
とだ。

どうして彼女は自分の前に、敵として現れたのか。

そもそも、どうして彼女は死んだのか。

答えは分かっている、考えられずにはいられない。

そう、考えてないと、思ってしまうんだ。

彼女が・・・自分のせいで自殺して、自分のせいでこの世界にきて、
自分のせいで
悪魔に魂を売った。

玲央は昨夜から考えに考えた。

自分はこれからどうしたらいいのか。

自分は彼女がまた現れたら、どう対応したらいいのか。

自分は・・・彼女を殺せるのか。

「・・・・・・・・・・」

気付けば、玲央の周りにはガジェットの残骸が無数に散らばっていた。

さらに、空を見上げれば、何時の間にか日が沈みかけていた。

「……………俺がやるしか……………ないんだよな」

玲央はそう呟くと、決意する。

彼女は自分の手で倒す。否。

彼女は、自分の手で悪魔から救い出す！

彼は、そう決意し、訓練場から出ていく。

と、そこで玲央は気がつく。

訓練場の外で、啞然とした表情でこちらを見ているフォワード4人
+なのは、フェイト、ヴィータたちに。

「……………あつ」

そこでさらに気付く玲央。

彼らがここにいる理由に。

居て当たり前だ。午後の訓練をしに来たのだから。

だが、そこには玲央と言う先客がいて、物凄い数のガジェットを出して訓練をしていたのだから。

いや、これはも最早訓練ではなく、ただ単にストレス発散させているだけと言っても良いかもしれない状況だった。

しかも、当の玲央は汗一つ流さず、息も乱さずに次々にガジェットを破壊しているのだ。

そんな彼を止めることが出来ようか。

答えは……………まあ、今の状況だ。

「あ……………どうすっかな」

そんなことを呟きながら、玲央は訓練場の外にいる7人の元へと向

かう。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

先程より数分前。

玲央がガジェットを全て撃破した時まで時間が戻る。

フォワード達となのは、フェイト、ヴィータは数時間前から訓練場でガジェットたちを次々に破壊していく玲央の姿を見ていた。しかも、玲央は全く疲れた様子が見られない。

「玲央、ホントに凄い」

「……アイツ、マジで何なんだよ」

「す、凄すぎです」

「あ……あり得ないわ」

「巫さん、凄いです！」

「凄いね、フリード」

「キョクル」

上から順にフェイト、ヴィータ、スバル、ティアナ、エリオ、キョロ、フリード。

それぞれが思ったことを無意識に口から零す中、なのはだけ、次々にガジェットを破壊していく玲央の姿に見惚れていた。すると、そんななのはの様子にフェイトが気付く。

「なのは、どうしたの？ 顔赤いよ？」

「ふええ！？ な、なんでもないよ！」

「そ、そう？ なら良いけど」

フェイトに聞かれ、なのははすぐに勢いよく首を横に振る。そんなやり取りをしていると、訓練場に形成されていたフィールドが消え、玲央がなのは達の元へとやってきた。

「悪いな、午後ずっと使ってしまった」

「あゝ、まあ気にすんな。こっちもすげえもん見れたしな」

そう答えるはヴィータ。

実際、その場にいる全員が凄いとしか言いようがなかった。

「フォワード4人も悪いな、訓練できなくて」

玲央がそう言うのと、4人はそれぞれ反応する。
その中で、エリオだけ玲央に近付いてくる。

「あの、巫さん！ 先程、槍を使っていたみたいですが」

「あ、ああ、少しなら槍術も出来るしな」

すると、エリオが玲央にズズイとさらに近付く。

「僕にその槍術を教えてください！」

エリオは目を輝かせながら、玲央にお願いする。

玲央がどうしたものかと思っていると、ティアナも近付いてくる。

「そう言えば、銃も使っていたみたいですが？」

「ま、まあ、そっちも使えるさ」「私にも教えてください！」「ちょ、お前ら」

2人の勢いに、タジタジになる玲央。

玲央は救いを求めるように、なのは、フェイト、ヴィータの方を見る。

が、なのはなぜか顔を赤く染め俯くし、フェイトは「お願い出来るかな？」とか言ってくるし、ヴィータは「良いんじゃないか？」とか無責任なこと言うし。

逃げ場がなくなった玲央は、観念した。

「あー！ 分かったよ！ 時間がある時なら訓練してやるよー！」

「「「「あ、ありがとうございます！」「「「「」

と、お願いしてきたのはティアナとエリオだけだったのに、なぜか返事はフォワード4人がする。

玲央は冷や汗をかきながら、フェイトとヴィータを見ると微笑ましいものを見るような瞳でこちらを見ている。
そこで、玲央はしかたないと諦めた。

なのは s i d e

なんだろう。

さっきの、ガジェットを次々に撃破していく玲央くんを見てから、私変だ。

彼の姿から目が外せない。

どうだろう？

私がそんなことを思っていると、彼がこちらにやってきた。

うう、何で顔が赤くなるんだろう？

自分でも分かるぐらい顔が紅潮していく。

周りのみんなは玲央ちゃんと話していて気付いてないみたい。

あ、玲央くんがこっち見た。

うう、何でまた赤くなるの？

不意に俯いちゃったよ。

・・・これって、もしかして。

・・・これが本当の

なのは side out

あの後、玲央ははやてに呼び出された。
理由はもちろん、訓練場でのことだ。
玲央ははやてに色々言われたものの、これからフォワード達の訓練を手伝うと言うことでチャラにしてもらった。

そして、玲央が出ていった後の部隊長室で、隊長陣は昼食の時の玲央と、今の玲央の雰囲気の違いについて話している。

「玲央くん、いつもの雰囲気に戻ったね」

「ええ、巫も覚悟を決めたでしょう」

「私もそう思う。多分訓練場でガジェットを倒している時に何か思っただのかも」

「あたしも同感だ。なのはもそうだろう？」

それぞれがそう言うていく中、ヴィータがなのはに話を振るが、一向に返事が来ない。

皆がなのはの顔を見ると、顔を紅潮させ、ぼくとしていた。

「なのは、ホントに大丈夫？」

「・・・・・・」

「おい、なのは？」

「ふええ！？ な、何、ヴィータちゃん！？」

「何じゃねえよ。お前ホントにおかしいぞ」

「そ、そうかな？」

なのはは顔を紅潮させたまま、両手を頬に当てる。

「ご、ごめん、私先に戻るね」

「あ、なのはちゃ」

はやてが何かを言いかけるが、その前になのはは部屋を出ていく。その様子を見て、その場の皆が心配する。

いつもの彼女の様子とはかけ離れているからだ。

その場の皆が、どうしたのだろうかと心配になるが、もう時間も遅いので、その日は解散した。

第36話：決意（後書き）

作者「それでは次k「ちよつと待てい！」チイ、来たか」

玲央「おいゴラア、テメエ、なんだこの展k「それでは次回『誰が
パパ・・・つて俺え！？』をお楽しみに」つてちよつと待てえ！
なんだそのタイトルは！ どう考えても俺に被害g「それでは皆
さん、さよゝならゝ」つてだから待てええええええええええええ
ええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
」

第37話：誰がパパ・・・って俺え！？

「スバル、拳の突き出しが遅い。後2、6秒早くしろ」
「は、はい！」

「ティアナ、魔力弾のチャージが遅い。せめて0、5秒で終わらせろ」

「ちょ、そんな無茶な！？」

「無茶でもなんでもやれ！」

「っ！？ わかりました！！」

「エリオ、槍での斬り上げから斬り下ろしまでが1、3秒遅い」
「が、頑張ります！」

「キヤロ、初歩的な補助魔法の発動は無詠唱で出来るようになれ」
「り、了解です！」

現在、フォワード4人はレオルによって絶賛特訓中。
早朝からずっと訓練をして、かれこれ10時間。
ちなみに休憩は朝食と昼食の時だけで、それ以外はずっと訓練漬けだ。

「よし、集合。これより今日の訓練での成果を見るために模擬戦をする。つつても、そこまで期待はしてないが」

フォワードに集合をかけながら、そんなことを言う。

「んじゃ、最後の模擬戦だが、相手はこいつだ」

そう言いながら、玲央は聖王の財宝から1体の人形を取り出す。
その人形は、手と足が4本あり、その手にはそれぞれに刀が握られていた。

「こいつは微刀『釵』と言う人形だ。ちなみに強いぞ。こいつの攻撃を10分耐えるか、1撃を入れれば今日の訓練終了。撃墜されたり、10分以内に1撃を入れることができれば……フッフ」
「フッフ！?!?!?」

不敵な笑みを浮かべながら微笑む玲央。
その笑顔を見たフォワード達は、絶対に1撃入れてやると、心に誓った。

そんな訓練を始めて数日が経った。

「リフターファイア！」

「ティアナ、発動までのチャージを後コンマ3秒早く」
「わかりました！」

「連牙弾！」

「スバル、今のより4 / 5発多く撃てるようにしろ」
「はい！」

「氷煌牙！」

「エリオ、魔力変換に時間を掛け過ぎだ。もっと凍結の変換技能を訓練しろ」

「わ、わかりました！」

「リザレクション！」

「キャロ、これぐらいの魔法の発動をあと1 / 1秒早く発動できるようにしろ」

「は、はい！」

「烈破掌！」

「ギンガ、スバルよりは良いが後1 / 2秒早く、2 / 3発多く撃てるようにしろ」

「わ、分かりました！」

フォワード達は、今でも玲央の厳しい訓練を受けている。

ギンガはと言うと、2 / 3日ほど前にこちらに Outreach してきていた。そんな5人から少し離れたところに、なのは、フェイト、ヴィータ、

シグナムの4人がいる。

何をしているかって？ そんなのもちろん決まっています。

「エクスプロード！」

「なのは、炎熱の変換技能にもっと磨きを掛ける。最低でも今のよりあと5、3秒は早く発動できるように」

「わ、分かったよ！」

「インディグネーション！」

「フェイトは元々の変換資質があるから大分いいが、それでも後3、8秒は発動時間を短縮しろ」

「う、うん！」

「爆・魔神剣！」

「ヴィータ、発動までの時間は申し分ないが威力が今出したものより1、7倍ぐらいになるようにしろ。まあ元々違う武器の技だから仕方ないが」

「ぐ、やってやらあ！」

「その意気だ」

「陽炎！」

「シグナム、お前は……特に無いな。次の技の習得に移行するか」

「頼む」

「OK、了解」

と、フォワード達と同じく、玲央の厳しい訓練を受けています。ちなみに、一番訓練で成長速度が速いのはティアナとシグナムで、逆は……強いて言えばなのは。

「はい、今日の訓練終了。とりあえず集合な」
「「「「「「「「「は…………はい…………」
「」

玲央に言われ、力無くよろよろと集合する。

「みんな、少しは俺の教えた技や魔法が使えるようになって来てるから、明日から3人特別講師って感じの人を連れてくる」

「「「「「「「「特別講師？」「「「「「「」

「ああ、つつても、1人はここにいるほとんどの奴は知ってるがな」

その言葉に、皆疑問符を頭の上に浮かべたが、その疑問を聞く前に、可愛らしい声が聞こえてきた。

「なのはママ〜！ フェイトママ〜！」
「ん？」

玲央はなのはとフェイトの呼ぶ声が聞こえてきた方に視線を向ける。すると、そこには先日、街でエリオとキャロが保護した子供 ヴイヴィオがこちらに走って来ていた。しかし

「あうっ！」

見事なまでにこけた。

それを見て、フェイトはすぐに駆け寄ろうとする。

「ヴィヴィオ！」

「大丈夫！ 綺麗にこけたし、地面も柔らかいから怪我してないよ」

しかし、そんなフェイトの行動をなのはが手で制する。

「うう」

「ヴィヴィオ、大丈夫だから一人で立ってみよ」

なのははそう言うが、ヴィヴィオは今にも泣きそうな顔になる。
そんな様子を見て、フェイトが痺れを切らし駆け寄ろうとした時。

「大丈夫か？ ほら、よつと」

玲央がヴィヴィオに近寄り、立たせてあげる。

「うう・・・誰？」

「ん？ 俺か？ 俺は巫玲央て言うんだ。よろしくね」

玲央はヴィヴィオの服に付いた砂などを落としながら、そう答える。
一通り砂を落とし終えたと思い、玲央が立ち上がると、ヴィヴィオ
がこちらの顔を見ているのに気付く。

「どうかしたか？」

玲央がヴィヴィオに尋ねる。

しかし、次にヴィヴィオの口から出た単語に、その場のみんなが驚愕する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・パパ？」

「ブッ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ええ！？」「」「」「」「」「」

ヴィヴィオの言葉に、玲央は一瞬吹き出す。

さらに、なのはは一気に顔を紅潮させ、フェイトは少しトリップする。

「ヴィ、ヴィヴィオ？ 俺はパパなんかじゃ「ダメ？」ああもう良いよ、パパで！」

「わあい！ パパ〜！」

そう言いながら、ヴィヴィオが抱きついてくる。

そんなヴィヴィオの頭を撫でながら、玲央は後ろで笑いを堪えているのはとフェイト、ギンガにエリキャラコンビ以外の4人に向けて言う。

「ああ、明日の訓練はある4人だけ厳しくなるかもなあ」

「「「「「なっ！？」」「」」」」

「まあ、覚悟しておけよ？」

そう言い、ヴィヴィオと一緒に隊舎に戻っていく玲央。

そのあとを、なのはが顔を紅潮させたまま追いかけ、さらにトリップから戻ってきたフェイトがそれを追う。

「「「「「.....」「」」」」」

「あの、えっと.....僕とキャラ口は先に戻ってますね」

「えと.....失礼します！」

「あ、私も戻りますんで。スバルとティアナも早く戻るのよ」

律儀にも、呆然としている4人に一言声を掛けてから戻る3人。

そんな4人が意識を回復し、隊舎に戻ったのはそれから30分後のことだった。

ちなみに、玲央が隊舎に戻った時、はやてが凄い勢いで「うちもヴ

「イヴイオのママになつたるわ!」とか言っていたが、玲央が1発拳骨を御見舞いして阻止したとか。

第37話：誰がパパ……って俺え！？（後書き）

作者「ふう、疲れた」

玲央「何にだよ」

作者「あ、パパさんともです」

玲央「うるせえよ！ 誰のせいだよ！」

作者「いや、昨日昼から映画を見てきたんだよ、3本」

玲央「無視かよ！」

作者「とりあえず怪談レストラン、colorful、きな子の順で見てきた」

玲央「どれも昨日公開したやつかよ」

作者「ああ、でも結構良かったよ。特にcolorfulが！」

玲央「……もういいから。次回は？」

作者「つれないなあ。えっと、今回は『えっ？ あの人魔法使えないでしょ？』だ」

玲央「…………誰を出す気だ？」

作者「それは次回のお楽しみだ！」

玲央「・・・・・・はあ」

第38話：えっ？ あの人魔法使えないでしょ？

翌日、早朝。

玲央の訓練を受けている全メンバーが訓練場に集合している。
4名ほど、少し顔色が悪いが。

「てい、ティア。どうしよう」

「だ、大丈夫よ、スバル。なな何とかなるわよ」

「ヴィータ、私は生きていられるだろうか？」

「大丈夫だ、シグナム。逝く時はあたしも一緒だ」

とまあ、それぞれこれから起きるであろうことに、軽く・・・それなりに恐怖を感じている。

「お、みんなちゃんと集まってるな」

そんな中、玲央が訓練場の前にゆつくりと歩いてくる。

その様子を見た先程の4人は、他の人が見て分かるほど震えだす。

「それじゃあ、昨日言っておいた特別講師を紹介する。まず1人目」

玲央が呼ぶと、突如、玲央の隣の大気が揺らぐ。
すると、そこから灰色の髪 of 青年が現れた。

「紹介する。こいつは神託の盾騎士団第三師団の団員でサポート員
のハウル・ファープニルだ」

「ハウル・ファープニルです！ よろしく願いますです！」

ハウルは訓練メンバー全員に敬礼をする。
そこで、エリオがあることに気付く。

「あれ、ファーブニルって確か・・・」

「ああ、エリオは気付いたか。こいつは特務師団長のアシユラの弟だ」

「あ、やっぱりそうなんですな」

エリオ以外の人は、それに驚きを隠せない。
それはそうだろう。何せ

「まあ分からないのも仕方ありません。兄と自分は全く似てないと親にまで言われますから」

笑いながらエリオ以外のメンバーにそう言うハウル。
すると玲央が、ハウルを自分の横に来るよう手で促す。

「ハウルは、ティアナとキャロの2人についてもらう。こいつの得意分野は後方支援と幻術魔法だ。ティアナは他のメンバーと比べて物覚えが良いから、俺が教えられる技や魔法は大体教え終えたからな。キャロと一緒にこっちで幻術を教えてもらえ」

「はい！」

「キャロも、サポートだけでなく多少は他に魔法が使えた方がいいと思ってな。お前も幻術を多少は使えるようになっておけよ」

「はい！」

「うん、2人とも良い返事だ。さて、2人目だ」

玲央がそう言うと、上空から誰かが飛来してきた。

「我が名はエルリオット・シュナイゼンバーグ。特務師団内殲滅隊

隊長を任されている。よろしく頼む」

上空から飛来してきた藍色の長髪を靡かせた青年　エルリオット・・・長いからエルで良い「勝手に人の名を縮めるでない！」いや、勝手にナレーションに突っ込むなよ。

「知らんわ！」

「おい、どうした？」

「む、すまぬ。なんでもない」

「・・・まあいいか。とりあえず、こいつに教わるのは、なのはとフエイト、シグナムにヴィータの4人だ」

「私たちが？」

フエイトが玲央に尋ねる。

すると、答えたのはエルの方だった。

「そうだ。我と我が愛機であるビートテイザーがお前たち4人をシゴ・・・もとい訓練することになった」

「玲央、今不吉な言葉が聞こえたんだけど？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・気のせいだ」

間を開けてからの玲央の返答にフエイトが何か言っているが、それを無視して残りのメンバーに向き合う。

「さて、最後の1人だが・・・ちよつと遅れてるんだよな」

「どうかしたのか？」

「あゝ、いや、ちよつと転送に時間が掛かってるだけだと思うが」

「転送、ですか？」

スバルが疑問を頭に浮かべる。

それに気付いたのか、玲央はその疑問に答える。

「今から来る人は、毎日教えられる訳じゃないんだ。遠くの次元世界からこっちに来てるからな。っと、来たかな」

玲央の言葉と同時に1人の男性がこちらに歩いて来ていた。

段々近付いてくる人影を見て、1番始めに声を上げ驚いたのは、なのはだった。

「え、嘘!？」

その驚愕の声に、他のメンバーも目を凝らしてその男性の姿を見る。そして、エリオ、キャロ、ギンガ以外のメンバーが一斉に驚く。

「「「「「なっ!？」「「「「「

先程の3人は、一体どうしてみんなが驚いているのか分からなかった。

しかし、その疑問は、なのはの口から零れ出た言葉で、明らかとなった。

「お………お父さん!？」

「おお、なのは。久しぶり」

そう、そこに現れたのは紛れもない、高町士郎、その人なのだ。

「士郎さん、本当に御足労お掛けしました」

「いや、気にしないでいいよ。玲央くんからの直々のお願いだ。聞かないわけにはいかないよ」

そう言いながら、玲央の隣までやってくる士郎。
未だ啞然としているメンバーに向かい、士郎は自己紹介をする。

「初めまして、の人は少ないね。高町士郎です。そこにいる高町なのは父で、神託の盾騎士団^{オラクル}の特別研修訓練士をやっている。今日は君たちに実践経験を積ませてくれと頼まれてね」

「と、言うわけで、スバル、ギンガ、エリオの3名は、今日から暫くの間は士郎さんとの模擬戦を何回、何十回、何百回としてもらう。ちなみに模擬戦と言ってもほぼ実践に近いから、油断していると簡単に伸されるぞ」

そんな話をしていると、なのはが玲央の元へと近付いてきて、小声で尋ねる。

「（どうしてお父さんを連れてきたの!?）」

「（や、悪いとは思ったけどさ。士郎さんも言ったろ、騎士団の特別研修訓練士って。もう何年も前からあの人には騎士団に入団した新人がある程度体力とか付けさせる為に、道場で訓練してもらってたんだよ。まあそのことは士郎さんたちには口止めしていたから、お前が知らないのは仕方ないけど）」

それを聞き、また驚愕するなのはだったが、玲央が一度手を叩き、皆の意識をこちらに向けさせる。

「まあ、士郎さんの事で聞きたいことはあるだろうが、とりあえず訓練に入る。じゃあ、ハウル、エル、手筈通りに頼む」

「了解です！」

「心得た！」

そう言うと、2人は自分の訓練するメンバーを連れて別の場所に移

動する。

と言っても、訓練スペースの両端に移動しただけだが。

「よし、それじゃあまずスバル！」

「は、はい！」

「まずはスバルと土郎さんで模擬戦だ」

と、玲央がこれからの模擬戦のローテーションを説明していく。
簡単に説明すると以下の通りだ

スバル

エリオ

ギンガ

チーム

休憩：10分

最初に戻る

と言った感じだ。

「じゃあスバルと土郎さんは配置について、デバイスを起動させてくれ」

そこで、まだ移動しているのか、なのはから通信が入る。

『そう言えば、お父さんって魔法使えないんじゃないの？』

その言葉に、玲央は不敵な笑みを浮かべながら答える。

「ま、見てれば分かるさ」

なのはがまだ何か言いたげだったが、玲央はそう言い通信を切る。

「それじゃあスバル、配置についてくれ」

「あ、分かりました」

そう言うと、スバルは訓練場の配置につく。

「さて、士郎さん」

「何だい、玲央くん」

一度目を瞑り、その瞳をゆっくり開きながら、また不敵な笑みを浮かべると、士郎に告げる。

「全力で、ぶちのめしてやってください」

「ああ、任せてくれ」

そう言いながら、士郎も配置につく為、訓練場へと向かう。

「あの、よろしく願いします!」

「ああ、こちらこそよろしく頼むよ」

スバルと士郎は軽く挨拶をすると、スバルは自分の相棒　マツハ
キャリバーを起動させる。

それを見て、士郎は自身の懷から白と黒の勾玉を取り出す。

「八景^{やかげ}、燈輪^{ひのわ}、頼む」

『『御意』』

同時に、士郎もデバイスを起動する。

起動した士郎のデバイス　八景と燈輪は、形状こそは小太刀とい
う点で同じだが、色が正反対だ。

八景は闇の様な黒一色で、燈輪は逆の白一色。

ちなみに、B Jは起動前に来ている服にそれ同様の強度を持たせる
だけで、特に装着するものは無い。

『準備が済んだみたいなので、模擬戦を開始します』

士郎がデバイスを起動し終えたのを確認した玲央が、通信で伝えて
くる。

「はい!」

「いつでも!」

『それでは、レディ……………』

「……………」

その場の空気が張り詰める。

緊張がその場を支配しているような、そんな感じの空気になると、そこに一陣の風が吹く。同時に

『ゴ—!』

「はあ—!」

スバルと土郎の模擬戦が始まった。

第38話：えっ？ あの人魔法使えないでしょ？（後書き）

玲央「何故士郎さんを出すんだ？」

作者「いやゝ．．．勢いで」

玲央「死んどくか？」

作者「存在消しとくか？」

玲央「主人公消してどうする!？」

作者「何とかなるって」

玲央「．．．．．すんません、勘弁してください」

作者「．．．．．（チツ）まあ良いか」

玲央「ちょ、おま、今舌打ちしと「それでは次回『士郎の実力』を御期待下さい!」ってまたこのパターンですか!?!」

玲央「てかマジで、何で士郎さんがデバイス使えるんだよ」

作者「まあその辺は、早ければ次回、それかその次辺りで教えるさ」

第39話：士郎の実力

「はあ!!」

「っ!?! き、きつつ!」

現在、スバルと士郎が模擬戦で戦闘中。
押しているのはもちろん士郎の方だ。

「マツハキヤリバー!」

『Wing Road』

スバルは一旦距離を置こうとして、ウイングロードを張る。が、

「八景、燈輪」

『身体強化、完了』

『魔力、脚部集束完了』

『『神速、発動補助、完了』』

「・・・神速」

スバルがウイングロードで移動しようとするのと同時に、士郎は彼女の前で攻撃の姿勢を取っていた。

「ええ!?!」

なぎつむじ
「雑旋」

士郎は一気にスバルへと突っ込む。
スバルはすぐに後退しようとするが、それも間に合わずに士郎の攻撃を受けそうになる。

『Protection』

しかし、その直前でマツハキヤリバーが防御魔法を発動し、士郎の攻撃を防ぐ。

だがそれも1度だけだった。

最初の斬撃は防いだものの、2撃目で破壊され、3撃、4撃をスバルの腹部へと入れ、スバルは近くのビルへと吹っ飛ばされる。

「がつ！」

一瞬意識が飛びかけるスバルだが、そこは何とか耐える。
すぐにスバルは士郎へと視線を向ける。

「（なのはさんのお父さん、凄く強い。手加減してないのにこの力の差、かあ）」

士郎はスバルを探すが、ビルへの激突したため、周囲を砂埃が舞っていて姿を確認できないでいた。

「（今の私じゃ勝てないかもしれないけど・・・でも、だったら）」

「むっ！」

士郎がスバルを吹っ飛ばしたビルに視線を向け、スバルを探していると、後方からウイングロードが士郎の方へと伸びてきた。一瞬、ほんの一瞬だけ、士郎の意識が其方を向いた、その刹那。

「一撃、必倒！」

それと逆側から、スバルの声が聞こえてくる。

士郎はすぐに視線を声のした方を向く。

が、そこには先程の砂埃が舞っており、スバルの姿を確認できなかった。

その直後だった。

「デイベイイイイイイイン！！！」

「っ！？」

先程伸びてきたウイングロードの方から、スバルが姿を現す。士郎は咄嗟に防御の姿勢を取る。

防壁

八景と燈輪もそれに応えるようにバリアを張り、自分たちの主を守ろうとする。

「バスタアアアアアアアアア——！！！！！！！」

八景と燈輪がバリアを張った直後、スバルが一気にディバインバスターをぶつ放す。

「ぐお！ いねほどは！」

防御壁、出力低下

出力限界値超過。防御、破壊されます。

燈輪の言うとおり、バリアが破壊され、砲撃が士郎に直撃する。最初はその衝撃に耐える士郎だが、耐えきれずに吹っ飛ばされ、地面に激突する。

「はあ、はあ、はあ、はあ……ど、どうなった？」

スバルは士郎が激突したであろう地面を見つめる。

と、砂埃で姿は見えないものの、中で影が揺らぐのが見えた。それを確認し、すぐにスバルは身構えるが、

「がはっ！？」

突如、身体を衝撃が襲う。

すると、士郎がスバルの元まで一瞬のうちにやってきた。

「ふう、さっきのは良かったよ。でも相手がちゃんと倒れているか確認するまでは気を抜いちやダメだよ。今のうちに長距離や超距離からの攻撃だってあるんだから」

スバルは土郎のそんな言葉を聞きながら、気を失う。

「さて、一度戻るかな」

土郎はそう言いながら、スバルを背負うと、玲央達がいる場所まで歩いて行く。

「す、すごい・・・」

模擬戦の様子を見ていたなのはが呟く。

実は、他のメンバーは移動した場所で、士郎の模擬戦をモニターで観戦していた、

上はそれを見たフェイトが口から零した言葉だ。

「うむ、やはり士郎殿は強いな」

「あ、シュナイゼンバーグさんはお父さんの事、知っているんですね」

エル言葉を聞き、なのはがなんとなく聞いてみる。

「ああ、我も入団当初に訓練を受けてな。正直、もう戦いたくはない」

そう言いながら、エルはガクガクと震えだす。

どうやら彼の中では士郎との戦闘は軽くトラウマになっているらしい。

「・・・・・・・・・・」

「・・・おい、シグナム。今はやめとけよ」

「な、何のことだ？」

「・・・・・・・・まあいいか」

士郎の模擬戦を見たせい、シグナムが手をわきわきさせて、今すぐに士郎と戦いたいと言う顔をしていた。

「お疲れ様です、士郎さん。どうでした？」

「ああ、予想以上だったよ」

士郎はスバルを玲央が用意したマットの上に寝かせながら答える。

「多分、残り2人もそうだと思うんで、頑張ってください」

「ああ、もちろんさ」

そんな話をしていると、ギンガが玲央にあることを尋ねてくる。

「あの、聞いた話なんです。士郎さんはリンカーコアがないんですよね？」

「ああ、そうだよ」

「ならどうして魔法が？」

ギンガの問いに士郎さんが答えると、すぐにエリオが次の問いをする。

すると、その問いに答えたのは士郎ではなく、玲央だった。

「士郎さんのデバイスはな、空气中に漂っている微小の魔力素を常時周囲から吸収し、デバイス内に蓄積しているんだ。必要があれば、他の魔導士が自分の意思で魔力を与えることもできる。ま、この原理はあるロストログアを模倣したものだがな」

「ろ、ロストログアを模倣って・・・」

「凄いですね」

「あ、ちなみに、士郎さんのデバイスとは別に、そのデバイスへ魔力を送るだけの、いわば送信専用の端末があるんだが、それはいつも俺が持つてるんで、士郎さんが魔力切れで戦えなくなるってことは無いからな」

それを聞き、ギンガとエリオは「あはは・・・」と渴いた笑いをする。

ちなみに、今のデバイスの説明は、他のメンバーにもモニターを通して伝えていた。

「じゃあ次はエリオだな。先に配置に行つててくれ」

「は、はい！」

エリオは玲央に言われ、走つて訓練場に向かう。

エリオが走つていったのを確認すると、玲央は士郎に向き合う。

「士郎さん。なるべく気絶させないでください」

「いや、すまない。先程は本当に僕も油断してしまつてね。今後、気をつけるよ」

士郎は爽やかな笑顔を浮かべながら、訓練場へと向かっていった。

あれから、数時間が経ち、エリオ、ギンガも士郎と模擬戦をするものの、スバル同様に撃墜される。
さらに、スバルが目覚ましてチームで戦闘をするものの、士郎は難なく3人を撃墜する。

そして現在、すでにそのローテが4 / 5巡し、昼食の時間となった。

「よし、一旦集合かけるか」

玲央がそう言うと、通信でハウルとエルをこちらに来るよう伝える。数分後、ハウルとエルが他のメンバーを連れて戻ってくる。ただ、それぞれメンバーの様子が全く違った。

ハウルが連れているティアナとキャロだが、何やら顔が蒼褪めていた。

また、2人は各々「Gは・・・Gはやめて・・・」だの「ぞわぞわっ」としてて・・・もう嫌です」とか呟いていた。

エルが連れているなのは、フェイト、シグナム、ヴィータの4人は、見て分かるほどボロボロになっていた。

どうやらエルにコッテリとシゴかれたようだ。

ちなみにスバル、エリオ、ギンガの3人はと言うと、見た目はそこまででもないが、キツチリと疲れてはいるみたく、頂垂れていた。

「それじゃあ、昼食合わせて1時間の休憩後、またここに集合つてことで」

『『『』』』は、はい・・・・『『『』』』

あれからまたもや数日後。
六課メンバーはかなり強くなっていた。

まずはハウルに教わっているティアナとキャロ。
ティアナは既に幻術に実体を持たせることができる（まあ、用は影分身が使える）レベルにまで幻術の制度が上がった。
キャロはほとんどの補助魔法を詠唱せずに使用することが出来るようになった。さらにこの訓練で回復魔法と幻術魔法を幾つか使うことが出来るようになった。

次にエルが訓練している4人。
なのはは、デイベインバスターやスターライトブレイカーと言った砲撃魔法の威力を以前の数倍へと強化することが出来た。
フェイトは、ソニックムーブでの移動が段違いに速くなっている。
シグナムはシュランゲフォルムのレヴァンティンの高速操作に磨きをかけ、ヴィータはグラーファイゼンでの攻撃の威力が全体的に上昇した。

そして、士郎のところの3人。

こちらはずっと実践に近い模擬戦を行っていたためか、3人全員のステータスが全体的に強化された。
さらに、第六感、いうなれば勘が鋭くなった。

さらに、この訓練を受けた全員に言えることだが、全員の魔力量が訓練前と比べ大幅に上昇した。

・・・えっ？ 部隊長であるはやてやシャマルにザフィーラは良いのかって？

どうやらそれは気にする必要ないみたいだ。なぜなら

「ちょ、マジで勘弁してえな！」

「安心しろ、鍛えるだけだから」

「そ、そうは見えんが？」

「うん、気のせいだ」

「わ、私は医務室にもどりたんだけどなあ」

「うん、却下」

「で、ですよねえ」

なのは達が特別講師からの訓練を受け始めた次の日から、玲央の地獄の特訓を受けていたようだ。

ちなみに上のは初日の会話である。

こちらもなのは達同様、かなり強化されている。

そしてそんな中、ついにあの日の前日となった。

そう・・・原作では地上本部が墜ちたとされた、あの日だ。

「・・・さて、六課の準備は万全だ。どう出る、スカリエッティ。」

それに・・・七大罪共」

曇り空を見上げながら、玲央は呟く。

さらに隣に表示しているモニターには、ある映像が流れていた。

そこに映っていたのは地上本部。そして、そこに映っているキャスターは、そこで行われる行事を、こう言った。

公開意見陳述会と・・・・・・・・

第39話：士郎の実力（後書き）

玲央「ちょ、士郎さん強くな？ てか魔力実質無尽蔵って強くな？」

作者「次回『その日、機d『墜とさせはしねえ！』 いや、うるさいよ』を御期待下さい！」

玲央「もう無視かよ……………疲れた」

第40話：その日、機d『墜とさせはしねえ！』いや、うるさいよ

現在時刻、9月12日 AM3:30

現在六課メンバーは公開意見陳述会の会場の警備へと来ている。

騎士団メンバーのうち、玲央、アシュラ、サフィア、レギンス、アリアの5人も警備要請を受けて六課メンバーと同様に会場の警備をしている。

他のメンバーは全員六課でお留守番だ。

そしてここは会場近くのヘリポート。

「……昔の話さ。そうだろ、ストームレイダー」
『I think so』

ヴァイスが星空を見上げながら、呟き、それに答えるストームレイダー。

と、不意にヴァイスは声を掛けられる。

「あんた、まだあの時の事根に持つてるわけ？」

「んだよ、サフィカ」

「そうよ。それで？ どうなのよ？」

ヴァイスの隣まで来て、ヘリに背を預ける。

「……言つたろ、昔の話さ」

「結局は吹っ切れてないんじゃない」

「……」

それっきり黙り込むヴァイス。

そんな姿を見たサフィは、深い溜息を吐く。

「あゝあ、何でこんなに腑抜けちゃったのかしら。以前、私と付き合っていた頃のヴァイスはどこ行っただのかしら？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

サフィアのちょっとした挑発にも何の反応も示すことは無かった。

「・・・・・・・・ああ、もういいわよ。私は警備に戻るから」

そう言つて、サフィアはその場を去る。

1人残されたヴァイスは、また星空を見上げる。

「・・・・・・・・昔の・・・・・・・・事さね」

星空を見上げながら、ヴァイスは辛そうな表情をしながら呟く。

時間は過ぎ、既に日暮れ。

公開意見陳述会は何事も無く進み、そのまま終わるかに見えた。しかし、スカリエッティはそうさせてくれなかったようだ。

会場周辺に突如召喚されるガジェットたち。

さらに、その直後に地上本部へと放たれる砲撃。

それと同時にガジェットが地上本部の障壁に纏わりつくように囲む。

そして、フォワード4人はなのは達にデバイスを届けるために内部へ。

ヴィータは地上本部へ近付く未確認の航空魔導士の迎撃へと向かうとする。

と、そこで玲央が他の3人に指示を出す。

「ならサフィアはフォワードと、レギンスはヴィータと共に行け。アシュラは俺と共に、先程から航空魔導士を撃墜している奴のここへ行くぞ」

「了解!」

玲央の指示を受け、サフィアとレギンスはすぐにその場を離れる。ちなみにアリアは現在、ギンガと行動を共にしている。

すると、玲央は通信モニターを表示し、騎士団長全員に繋げる。

「良いか皆、よく聞け。今回の騒ぎに乗じて、この間話した7人

七大罪の奴らが来ると思う。もしそれらしき人物と出会ったら・

・ ・ ・ 迷わずあの機能を使え！」

[illegible]

「よし、騎士団長、魔力・デバイス、両リミッター解除！」

玲央がモニターに表示されたスイッチを押すと同時に、騎士団長たちの魔力とデバイスのリミッターが解除される。

それを確認すると、玲央は団長達に向け言う。

「それじゃあ行くぞ。ミッション……スタート！」

そう宣言すると、玲央とアシュラは上空へと飛び立つ。

現在、フォワード＋サファイアの5人は、なのはたちにデバイスを渡すために移動している。

先頭はスバル、次にティアナ、エリオ、キャロ、そして最後にサファイアという順番で移動していた。

「っ！？ マツハキャリバー！」

『Protection』

その途中、突如スバルが障壁を展開する。

直後、展開した障壁にどこからか放たれた攻撃が直撃する。

すると今度は前方から、スバル目掛けて赤い短髪の戦闘機人ノ
ーヴェが飛び蹴りを放つ。

スバルはそれに気付くものの、咄嗟の事でその攻撃をまともに

「ふっ！」

「なっ！？」

喰らわなかった。

スバルはノーヴェの放った蹴りを瞬時に回避し、すぐにノーヴェの腹部に拳を叩き込む。

「っりゃあー！」

「がっ！」

スバルの拳をまともに受けたノーヴェは吹っ飛ばされ、少し離れた場所にいたもう一人の戦闘機人 ウエンディへと激突する。

「ちょ、ノーヴェ、なにやってるっすか！」

「う、うるせえよ。少し油断しただけだって！」

すぐに2人は立ち上がる。が、

「はい、そのまま動かないでね」

その時には、既にティアナとサファイアが魔力スフィアを数え切れな
いほど展開していた。

「ありゃゝ、こりやもうダメっすかね？」

「あたしはあきらめねえ！」

そう言い、ノーヴェはスバルに向かっていく。

ノーヴェは蹴りや魔力弾を使い、攻撃を仕掛けていくが、スバルは
それを器用に避けたり受け流したりしている。

「この！　なんで当たんねんだよ！？」

ノーヴェは何度も攻撃を仕掛けるが、やはり防がれるか避けられる。
と、ここでノーヴェが大勢を崩す。

スバルはそれを見逃さなかった。

「烈鋼・重牙弾！」

「ぐあああああ！！！」

スバルは魔力で強化した拳を何発もノーヴェに撃ち込む。

攻撃をともに受けたノーヴェは、その場に倒れ込む。

「さて、あなたはどうする？ 大人しく投降する？ それとも、あの娘の様に抵抗する？」

サフィアはノーヴェの方に視線を向けながらそう言う。

「いや、あたしはそこまでバカじゃないっすよ。痛い思いもしたくないし」

そう言い、両手を上げて降参のポーズをするウエンディ。

それを確認すると、サフィアは玲央に予め貰っていた魔力スフィアをノーヴェとウエンディへと投げる。

すると、魔力スフィアはバインドへと変化し、2人を拘束した。

「このバインドは解こうとしても無駄みたいだから。1秒間に数億単位で術式が変更されてるとかって言ってたし」

笑顔でそう告げるサフィアだが、フォワード4人はそんなバインドを携帯できる魔力スフィアで創ることが出来る玲央はどんだけだと再度思った。

「IS発動、ランブルデトネーター」

現在、こちらではギンガ、アリアの2人は、銀髪で右目を眼帯で覆い隠した戦闘機人　チンクと戦闘を行っていた。

「ドナテロ、お願い！」

チンクが投げたスローイングダガー『ステインガー』を投げ、自身のISで爆破させる。

しかし、その衝撃をアリアの召喚した玄武ドナテロが防ぐ。

そして、すぐにギンガがチンクの懐へと入り込み、攻撃を仕掛ける。

「魔陣・昇雷拳！」

「ぐっ！？」

チンクはギンガの拳撃を防ぐが、直後、上空から墜ちてきた雷をまともに受けそうになる。

「やっかいだな」

チンクは悪態吐きながら、他の誰かを呼ぼうとするが、ノーヴェとウエンディは既に投降しており、他のメンバーはここから距離が離れているため、こちらに来ることが出来なかった。

「コルマール！ 輝^{ガイ}き穿つ

！！」

「っ！？ しまつ！？」

チンクが一瞬気を逸らしたのを、アリアは見逃さなかった。

「
雷^{ボルグ}光の槍！！」

アリアの攻撃を受け、身体を電撃が迸るチンク。

「ぐう！ まだ、まだだ」

しかし、それに耐えながらもチンクはアリアとギンガへの攻撃の意思を見せる。

「絶破烈氷撃！」

「なっ！？」

だが、ギンガはすぐにチンクへと攻撃を仕掛ける。

ギンガは攻撃対象のチンクを大気中の水分と一緒に凍結させ、さらにそれを打ち碎いた。

「ぐ、ああ！」

チンクはその攻撃を最後に、その場に膝から倒れ込んだ。

すると、アリアも玲央から預かっていた携帯型バインドをチンクに付け、確保した。

「あゝ、逃げられたか」

「刀王、頼みますよ」

現在、玲央とアシユラは先程まで航空魔導士と戦闘をしていたと思われる戦闘機人2体を追っていたが、見失ってしまった。

「まあ、その内見つかるさ」

「それなら良いですが」

そんな話をしていると、上空から一筋の閃光が、玲央とアシュラを狙い撃つ。

「っ!? I am the bone of my sword
(体は剣で出来ている)・・・ロー・アイアス熾天覆う七つの円環」

玲央は咄嗟に投影した花弁の盾で自分たちを襲ってきた閃光を防ぐ。しかし、思ったよりも威力があつたのか、花弁が次々に破壊されていく。

降り注いできた閃光は、熾天覆う七つの円環の花弁を5枚まで破壊したところで止む。

同時に、上空から2人の人影が降りてくる。

「数日ぶりだね、玲央」

「・・・ゆり」

その内の1人は、レヴィアタンゆりだった。

「レヴィアタン、そっちは頼んだ。俺はあっちの男の方を相手する」

そう言い、もう1人の方はアシュラの方へと向き合う。

「あんた、名前は？」

「・・・七大罪『憤怒を司る者』、サタンだ」

その瞬間、サタンはアシュラへと攻撃を放つ。

「シヴァ!」

『Blaze form』

シヴァの第3形態であるブレイズフォームへと変化する。
とは言っても、実際にはルナフォームに炎を纏うだけだが。
サタンの放った攻撃を、アシユラは難なく防ぐ。
それを見たサタンが「ほう」と感心するような声を上げる。

「ムーンセイバー、フレイムエッジ、射出！」

アシユラがそう言うと、シヴァから三日月型の刃と炎で模られた刃が射出される。

「シヴァ、クロスエッジ！」

放たれた刃がサタンへと向かうが、それを紙一重で回避し、即座にアシユラへと突進してくる。

「喰らえ、獄炎刃！」

サタンはアシユラに突っ込みながら、自身の手で蒼炎を出し、刀の形状へと変化させる。

「はあ！」

「ぐう！？」

サタンの斬撃を、アシユラはシヴァで防ぐ。
何とか耐え、鎧迫り合う。

「くっ、押されてる！？」

「どつするっ？」

「こうするさ！」

「っ！？」

アシユラの言葉と同時に、サタンは一気に距離を置く。

すると、先程までサタンがいた場所を、シヴァのムーンセイバーとフレイムエッジが通過する。

「危なかったな」

アシユラの攻撃を見て、サタンは呟く。

手にした蒼炎の刃を、強く握りなおし、再度アシユラに突っ込む。

「アシユラ、そっちは任せた！」

「了解！」

そう言うと、玲央はゆりに向かう。

「・・・ゆり」

「どうしたの？ 早く殺り合おうよ！」

すると、ゆりは嫉妬の黒炎で炎弾を生成し、玲央に向け放つ。

「っ！？ シルフ！」

『分かってますって！』

玲央はすぐにバリアを展開し、炎弾を防ぐ。

「あら、防がれちゃった」

そう言いクスクスと笑うゆり。

そんな彼女を見ながら、玲央は呟く。

「……………さよならだ、ゆり」

「え？ 何言つて」

瞬間、玲央の魔力が上昇し、ゆりの魔力値を大幅に上回った。
それに驚くゆりと、アシユラと戦いながらもそれに驚くサタン。

「I am the bone of my sword」《体は剣
で出来ている》

そして、玲央は詠唱を始める。
ゆりとの決着をつける為の場を創るために。

第40話：その日、機d『墜とさせはしねえ！』いや、うるさいよ（後書き）

次回『その日、機動r』後篇です』ちょ、だから！・・・もういいよ』を御期待下さい

第41話：その日、機動r『後篇です』ちょ、だから！・・・もういいよ

場所は変わり、こちらは機動六課隊舎前。

現在、ここでは戦闘機人2人　オットーとデイドをシャルとザフィーラが迎え撃っていた。

「IS発動、レイストーム」

「クラールヴィント！　防いで！」

オットーが放った攻撃を全て防ぐシャル。

さらに、周囲のガジェットの攻撃を掻い潜りながら、ザフィーラがオットーに攻撃を仕掛ける。

それを防ごうと、デイドがザフィーラを撃ち落とそうとする。

しかし、それは新たに現れたシールドによって防がれる。

「なっ！？」

「おおおおおおお！！！」

「「がつ！？」」

攻撃を防がれたデイドは、逆にザフィーラの攻撃を受けて吹っ飛ばされ、その先にいたオットーも巻き込まれる。

「くっ、この」

「残念だけど、ここまでよ」

そう言いながら、シャルは2人に玲央から受け取った携帯バインドで2人を拘束する。

「・・・あ奴らは大丈夫であろうか？」

ザフィーラはそう呟きながら、六課隊舎の上空を見上げる。
その視線の先には、6つの人影がぶつかり合っていた。

「え！？ 私の出番これで終わり！？」

「も、もう少しぐらい出させては貰えぬのか！？」

はいそこ、メタ発言しないでね。

「ハハ、はあ、はあ、はあ」

「んだよ、あいつの創った組織の団長って聞いたから、楽しめると思ったんだが・・・ダメだな」

「面倒だから帰って良いか？」

「ちょ、何言ってるすか、ベルフェゴルドさん！ 騎士団の団長達を殺せてサタンさんに言われてるじゃないですか！」

「え、メンドイ」

「なあ、マーモン。俺も帰って良いか？」

「ベルフェゴルドさん、もっとシャキツとしてください！ カルシファーさんもダメって言ったじゃないですか！」

現在、六課上空でレオル、ユニカ、ビラルゴの3人は突如現れたカルシファー、ベルフェゴルド、マーモンの3人と戦っていた。しかし、レオル達は現在、苦戦を強いられていた。

「くそ、やるしかないか！」

「みたいです」

「じゃな」

そう言いながら、3人は各々目の前にいる相手を見据える。

レオルはカルシファーを。

ビラルゴはベルフェゴルドを。

ユニカはマーモンを。

それに気付き、相手も同じく見返す。

ここからは、1組ずつ戦闘をお贈り致します。

「何？ 俺の相手はあの転生者の劣化コピーってわけ？」

「・・・確かに俺は玲央より劣る。しかし、それがあんたに勝てない道理にはならん」

レオルとカルシファアは同時にお互いを睨み、殺気を放つ。

「おもしれえ、かかって来い」

「ああ、俺の本気を見せてやる！ スカブ、オーバードライブ！」

すると、一気にレオルの魔力が上昇する。

それに一瞬、カルシファーは驚く。

しかし、スカブから発せられたある単語を聞き、さらに驚くことになる。

『Akashic Records Link complete .
It is possible to inspect it t
o the second hierarchy (アカシックレコ
ード、接続完了。第二階層まで閲覧可能です)』

「それだけで十分！」

次の瞬間、レオルがその場から姿を消す。

それに気付き、カルシファーは辺りを見渡すが、どこにも見当たらなかった。

まさか逃げたか？ と、カルシファーが思った瞬間

ザシュッ

「があー!!」

カルシファーの太腿に何かが突き刺さる。

カルシファーが刺された場所を見ているが、そこには何も刺さっていない。

しかし、彼にはまだ、その部位に何かが刺さっている様に感じた。

カルシファーはレオルが不可視の武器を使用したのかと思い、傷口の周囲を手で探るが何もなかった。

と言うことか、周囲を警戒しながらもレオルの攻撃がどんな攻撃

なのかを考察する。

が、その考察は、新たに生じた衝撃により中断された。

ザザザザザッ！！！

「ぐああああああ！！！！！！」

カルシファーはその衝撃に思考が途切れ、意識を失い、地上へと自由落下しようとする。

「地面に落ちる前に、命を落とせ」

だが、カルシファーの身体は地上へ落下せずに、スカブの刃に貫かれた。

直後、カルシファーの身体がビクンと跳ねるが、それっきり動かなかった。

「あゝ、ダリイけどあんた倒せば終わりっぽいから、やりますか」
「簡単にはやられん！ ミヨルニール、オーバードライブ！」

魔力を解放するビラルゴを見て、多少焦る。

「やべえな。こりやまた面倒だ……マジ帰りてえ」
「逃がさねえよ」

ベルフェゴルドが呟いていると、何時の間にかビラルゴが目の前に立っていた。
さらに、彼のデバイスであるミヨルニールの形状が、双頭斧へと変化していた。

「チィ！！」
スロウス・ライブ
「怠惰の時間」

ベルフェゴルドが自身の能力を使用し、ビラルゴの攻撃を防ごうとする。

スロウス・ライブ
「怠惰の時間」

ベルフェゴルドに作用する力を全て無効・無力化する能力。

要するに、どんな攻撃でも意味をなさなくなる、某不幸少年の右手に宿る能力と似たような能力。

しかし

ズバッ！！

「な、なん、だと！？」

ビラルゴの攻撃は、ベルフェゴルドの身体を切り裂いた。

「悪いが、貴様の事は既に見ておいて攻略済みだ」

「な・・・に・・・！！？」

ベルフェゴルドの表情は、驚きに染まっていた。

しかし、ビラルゴは容赦なく、ベルフェゴルドの止めを刺す。

「
じゃあな」

ビラルゴは、別れの言葉と共に、ベルフェゴルドの身体へと、その刃を振り下ろす。

「僕はあまり戦闘向きではないんですが」

「悪いが、我は逃がす気は毛頭ないからの」

そう言いながら、ユニカは魔力を解放し、サード・リリース第三解放へと形態変化する。

サード・リリース第三解放形態のユニカは、顔以外の全てが竜鱗で覆われている。

「凄いですね。さすがは樹竜『ユグドラシル』と言ったところでしょうか？」

「……………何故その名を知っておる？」

「さあ、何故でしょうか？」

「答えぬなら」

ユニカは一瞬でマーモンとの距離を縮める。

驚き、すぐに回避をしようとする。

「消えよ」

しかし、その前にユニカが閃光を放ち、マーモンは回避する暇もなく、閃光に包まれ、塵一つ残さずにその場から消し飛んだ。

「……………我が真名は、他のものに知られるわけにはいかぬのだ」

「あんたは、強いのか？」

アシュラが目の前に佇むサタンに問う。

すると、サタンはニヤリと微笑む。

「ああ、俺がこの組織のリーダーだ」

それを聞いたアシュラも、サタンと同様の笑みを浮かべる。

「そうか・・・なら」

刹那、アシユラがシヴァをフルドライブまで解放し、斬りかかる。シヴァのフルドライブ、サークルフォームは槍ではなく薙刀だ。サタンはアシユラの斬撃を蒼炎の刃で防ぐ。

「多少は強いってことだな？」

「まあ、一応な」

その瞬間、2人は目にも止まらぬ速さで、斬り合いを始める。

一薙、二撃、三斬、四突。

彼らの刃は既に数十も斬り交わし、どちらも体力を消費していく。

「くそ、やっぱりアカシックレコードでも第一階層だけじゃ無理か」

『It is natural. Being able to inspect now is a forecast of the behavior of the fellow. (当たり前だ。今閲覧できるのは、奴の行動の予測ぐらいだ。)』

「凄いな。まさかアカシックレコードを見ることが出来るとは」

「まあな。だけど第一階層の閲覧を出来るようになるための訓練は辛^{シムキ}かった」

そう言いながら、アシユラは少し涙目になる。

「まあ、心中察するが・・・そろそろ終わらせよう」

「・・・そうだな」

サタンとアシユラは今までで最高威力の攻撃を放とうとする。

「我が能力、憤怒の蒼炎イラ・ブレイズは自分自身の怒りと言う感情を貯め、蒼炎へと変換することが出来る能力。俺が今まで貯めた怒りを、今この場で全て炎へ変換しよう！」

サタンは自分の頭上に巨大な炎球を発生させる。

対するアシユラは、自身の前に巨大な水球を生成する。

「極炎・蒼陽あおひ」

「水塊・流滝るろう」

互いの最大の攻撃。

2人の間に、緊張が走る。

そんなとき、2人の間を一陣の風が吹き抜ける。

「うおおおおおおおおおおおーーーーー」

その刹那、2人の攻撃がぶつかり合う。

炎球は水球によって消火され、水球は炎球によって蒸発していく。次第に炎球も水球も消えていき、そして・・・・爆散した。

「ぐうう！！！！」

アシユラとサタンは発生した爆風に吹き飛ばされる。

「なるほど、相打ちか」

「みたいだな。どうする、まだやるか？」

アシュラがサタンに尋ねる。

ただ、内心では少し冷や汗をかいていた。

フルドライブでも倒せないとなると、あとは『あの』システムしかない。

だが、それを今使ってしまったら、後が無くなってしまう。

だから、出来ればここでは使いたくない。

しかし、サタンは全力と言ったものの、未だに隠し玉がある様に思えた。

だから、アシュラは焦っていた。

すると、予想外にもサタンは首を横に振る。

「いや、やめておこう。こちらの仲間がすでに3人もやられたみたいでな。体制を立て直してからまた来るとしよう」

サタンはそう言いながら、空間に創りだした歪みへと入っていく。その直前、サタンは「ああ」とあることを思い出したかの様に、アシュラに告げる。

「君らの仲間のギンガ・ナカジマとヴィヴィオ・・・タイプゼロ・ファーストと聖王の器はDr・スカリエツティのところへ届けたから」

「なんだって!？」

サタンはそれだけを告げ、その歪みの中へ消えていった。

「I am the bone of my sword《体は剣
で出来ている》」

玲央は、彼女と、ゆりと決着をつけるため、彼女を『救い出す為』
に、詠唱を続ける。

ゆりは、彼のこの詠唱が何なのかを知らない。

困惑顔になりながら、どうしたらいいのか分からないゆり。

それを見て、玲央は安心する。

ああ、彼女の根幹だけはまだ、以前のままだと。

「Steel is my body, and fire is my blood《血潮は鉄で、心は硝子》」

そんなことを思いながらも、玲央は詠唱を続ける。

さすがに、ゆりもこのままではまずいと思い、炎弾を幾つか放つ。

しかし、玲央はそれを見事にかわす。

「I have created over a thousand blades《幾たびの戦場を越えて不敗》」

さらに炎弾を増やし、さらに速度も速める。

しかし、それでも玲央には当たらない。

ゆりは焦る。

どう考えても、自分の攻撃を避けることが出来る筈はない。

そう、ゆりは思う。

「Unknown to Death・Nor known to Life《ただの一度も敗走はなく、ただの一度も理解されない》」

だが、現に今、彼は自分の攻撃を避けている。

ゆりは、さらに困惑している。

どうして、どうして。

しかし、考えても考えても、どんなに考えても分からなかった。

「Have withstood pain to create many weapons」彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う」

だから、ゆりは玲央の顔を見つめる。

彼の顔は、とても真剣で、凜々しく、それでいて、どこか悲しそうだった。

彼のアんな表情は見たことない。

そう思うが、前に1度だけ見たことがあるのを思い出す。

そう、あれは………ゆりが彼を拒絶した時だ。

「Yet, those hands will never hold anything」故に、生涯に意味はなく」

それを思い出した時、今の彼の想いが分かってしまった。

「そ、んな………」

彼は、彼自身に怒っているんだ。

自分のせいで、ゆりが酷い目にあっただと。

自分のせいで、ゆりが自殺したんだと。

そう、思ったから……

「So as I pray, 《その体は、》」

彼は、私を倒そうと……

私を、悪魔から『助ける為』に……

「Unlimited blade works 《きつと剣で出来ていた》」

玲央は、自分の手を汚すんだ。

レヴィアタン side

あの子の事は覚えてない。

彼が何かの詠唱を終え、その後、私は……。

「ゆり」

どこからか、優しい声が私を呼ぶ。

だけど、私の視界は全く見えない。

でも、今の声が誰のかぐらいいは分かる。

「玲央？」

「ゆり、お休み」

ああ、やっぱり彼は優しい。

私が疲れてるって思っで、そう言っでくれるんだね。

分かったよ、玲央。

少しだけ、寝るね。

じゃあ、ね……おや……すみ……

レヴィアタン side out

玲央は今、ゆりの身体を抱きながら、涙を流す。

「ゆり・・・ごめ、ん、な」

流れる涙はゆりの顔を伝い、地面へと落ちる。

そんな中、彼の元にある通信が入る。

『刀王！ 大変です！ アリアが、アリアがやられて、ギンガが攫われました！！』

『刀王！ 六課もやられました！ それに、こちらもヴィヴィオが攫われてしまいました！！』

報告してくるのはハウルとエル。

モニターに表示されるは、人工呼吸器を付け、集中治療室のベッドで寝かされているアリアと、無残な姿になった六課隊舎だった。

それを見て、玲央は悲しい気持ちをすぐに切り替える。

玲央はゆりをその場に寝かせ、他の騎士団員に彼女の死体をお願いしようとする。

そんな時だった。

彼女の死体が、ゆらりと起き上がる。

「ゆり!？」

玲央は一体何が起きたのかと思った。

彼女は死んだはずだ。

先程、ちゃんと脈がないことも確認した。

なのになぜ、彼女は動いているのか。

玲央がそんなことを考えていると、彼女が言葉を発する。

否、彼女の『身体を借りた』何かが、言葉を発する。

『ふん、やはりあれぐらいの嫉妬ではダメか』

その言葉の意味を、その場にいる騎士団員は理解できない。

しかし、玲央は分かった。

ゆりをこちらの世界へと送り込んだのが、こいつだと。

「お前かあああああああああ！！！！」

玲央はすぐにバーサーカー^{ヘラクレス}の斧剣を投影し、目の前の相手に斬りかかる。

しかし

『邪魔だ』

玲央の攻撃が届く前に、斧剣は消滅する。

さらに、玲央は突然自身の身体を襲う衝撃に耐えきれずに、吹っ飛ばされる。

『貴様の様なものに倒されるわけがなかつ。何せ、我は七大罪の嫉妬、そのものなのだからな』

それを聞き、玲央は驚くものの、もう一度投影し、斬りかかる。

『だから無意味だと言っのが分からんのか』

七大罪の嫉妬は、斬りかかってくる玲央をさらに強い衝撃でふっ飛ばす。

吹っ飛ばされた玲央は、近くの壁に激突し、気を失いかける。

『我らは貴様の知っている言葉で言い現すなら……『原初』と同等だ』

玲央は嫉妬の言葉を聞き、驚いているが、先程のダメージで意識を保てなくなり、その場に倒れ込む。

『貴様らがアカシックレコードを閲覧できても、第二階層では我らの情報など見れぬ。せいぜい、決戦の時まで精進しろ』

そう言い、嫉妬はその場から消え、同時に残された団員達は、目の前に倒れている玲央を担ぎ、救護班の元へと運ぶ。

第41話：その日、機動r『後篇です』ちょ、だから！・・・もういいよ（後

次回『新たな決意、真の覚悟』をお楽しみに。

第42話：新たな決意、真の覚悟

地上本部・六課襲撃事件から、数日が経っていた。

機動六課は、隊舎が破壊されたため、本部を廃棄寸前のアースラへと移している。

六課メンバー（ロングアーチ含む）はゲンヤから、スバルとギンガ、それに2人の母のクイントの事を聞いたあと、アースラの会議室で今後の方針をはやてから聞かされた。

ちなみに、騎士団メンバーでこの場にいるのはアシユラとサフィア、レギンスの3人だけだった。

他のメンバーはというと……………

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

現在、玲央は騎士団で経営している病院へと来ていた。

彼は今、集中治療室で眠っている4人をぼんやりと眺める。

そこには、アリア、レオル、ビラルゴ、ユニカが人工呼吸器や延命装置みたいな機器をその身に繋がれていた。

「・・・・・・・・俺は・・・・どうして・・・・・・・・」

事件のあと、アリアのデバイスのベルフォーンの記録を映像化し、確認すると、そこにはギンガを肩に担いでその場を去るアスモディアの姿が映っていた。

さらに、他の3人のデバイスの記録も確認した結果、3人とも、玲央のところに現れた嫉妬の様なものにやられていた。

「・・・・・・・・『原初』・・・・・・・・『大いなる元』・・・・・・・・つまり、それは・・・・・・・・『起源』」

起源　あらゆる存在が持つ、原初の始まりの際に与えられた方向付け、または絶対命令の事を指す。

そんな物を相手にする事が自分には出来るのだろうか？

自分は、そんな奴から皆を守れるのだろうか？

玲央はそんなことを思ってしまう。

自分は守れなかった。

その結果が、目の前の現実だ。

「・・・・・・・・みんな、すまない」

玲央は、未だ目を覚まさない4人に向け謝る。

そして、彼は決意する。

「・・・はあ」

現在、なのははアースラの休憩室でコーヒーを飲んでいる。
攫われたヴィヴィオの事は心配だけど、絶対に助けに行くと決めてから数時間。
いつになったら出撃出来るのと思い、痺れを切らしそうになったので、ここで気持ちを落ち着かせているのだ。

「ヴィヴィオ、絶対に助けるから」

誰にでも言うわけではなく、呟く。
そして、また一口、コーヒーを飲もうとした時だった。
休憩室のドアが開き、誰かが入ってきた。
なのははコーヒーを飲みながら、入口に視線をやる。

「ああ、なのは。いたのか」

休憩室に入ってきたのは玲央だった。

ドクン

「（あれ？）」

と、なのは玲央の顔を見て、胸が高鳴るのに気付く。

「どうかしたか？」

「ふえ？ あ、ううん、なんでもない」

「そ、そうか」

そう言うと、玲央は自販機でコーヒー（微糖）を買い、なのはの向かいのイスに座る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

どこか気まずい雰囲気が場を包み込む。
そんな雰囲気の中、なのはの胸はさらに高鳴っていた。

「（はう、な、なんか変な感じだよ）」

顔も紅潮し、耳まで赤くなっている。

「おい、大丈夫か？ 顔真赤だぞ？」

「あ、うん、大丈夫」

なのはが玲央の方を向くと、彼の顔が目と鼻の先にあった。

「「あっ」」

その瞬間、誰かが狙ったのかの様に、玲央が足を滑らせる。

「「うお！？」」

「「きゃ！？」」

玲央はなのはを巻き込みながら、床に倒れ込む。

「イタタ・・・わ、りい・・・」

「う、ううん、大丈夫、夫・・・」

現在の状況を簡単に説明すると・・・

なのはが玲央を押し倒しているような状態になっている。
なので、さっきよりかなり気まずさが増している。

「あゝ・・・そろそろどいてくれないか？」

玲央がなのはに向かい言うが、なのははどこかボーっとしていた。

「えっと・・・なのは、さん？」

「・・・玲央くん」

「な、何でしょう？」

段々と接近する互いの顔。

そして

「
大好きです」

互いの唇が触れあった。

なのは side

彼の顔を間近で見てたら、なんだかとっても頭がボーっとしてきた。

やっぱり、私は彼が好きだ。

昔も好きだったけど、それは最近気付いた。

昔の好きは、LOVEじゃなくてLIKEに近いものなんだ。

昔は彼の姿がカッコよくて、きっと憧れてたんだと思う。

でも今は、彼の事が大好きだから。

他の誰にも、君を渡したくない。

だから私は

「大好きです」

君に、ファーストキスを捧げます。

なのは
side
out

なのはにキスをされ、玲央は思考が停止する。

何起きた？

一体どうなった？

なんで俺は、なのはとキスしてる？

様々な疑問が、玲央の頭を駆け巡る。

「っぷは」

暫くして、漸く解放される玲央の唇。

なのはと玲央はお互いに顔を紅潮させる。

「なのは・・・どうして？」

「だって・・・・・・・・・・」

玲央はなのはを抱き起こし、先程の事を聞く。

「だって、なんだよ」

「・・・・・・・・もん」

「え？ 何？」

「我慢できなかったんだもん！！」

そう言い、玲央に抱きつくのは。

「最近、気付いたの。玲央ちゃんと話してると嬉しいって。一緒にいるだけで、楽しいって！」

玲央はなのは言うことを、黙って聞き続ける。

「玲央くんが訓練場で凄い数のガジェットを次々に倒してるのを見て、カッコいいなって思っで、それでもっと好きになって、大好きになって・・・他の、誰にも玲央くんを渡したくないって、思ったの！！ だから、だから！！」

「・・・・・・・・そっか」

ちょっと涙目になってきたなのはを抱きしめ、頭を撫でる。

「ありがとな、俺をそんなにまでも想ってくれて」

「玲央、くん」

なのはは少し不安になる。

やっぱり彼は自分の事は何とも思っていなかったのか、と。

しかし、玲央は優しい笑顔をなのはに向ける。

「こんな俺でもいいなら、よろしくな」

「~~~~っ！ 玲央くん！！」

なのは嬉しくて、もう一度キスをする。

「えへへへ／＼／＼／」

その後、少ししてから2人は休憩室から出る。
2人の顔は、傍から見ても分かるほどに紅潮している。
すると、玲央が真面目な表情でなのはを見る。

「なあ、なのは」

「何？」

「……絶対、ヴィヴィオを助けてくれ」

「……うん、助けるよ。絶対に」

なのはは拳をギュツと握りながら、決意する。

どんなことがあっても、ヴィヴィオを助け出すと。

「頼むな。俺は、七大罪の奴らをどうにかしないといけないからな」

「玲央くんも頑張ってるね」

「ああ、当たり前だ。俺の彼女が応援してくれてるんだから」

玲央は微笑みながら言うと、なのはがさらに顔を紅潮させる。

「もう！ 玲央くん！／＼／＼」

「ハハハ、悪い悪い。それじゃ、そろそろ寝るか」

「そうだね。それじゃあね」

そう言いながら、なのはは別れ際に玲央の頬にキスをする。

玲央は驚き、なのはを見るが、その時にはすでに手を振りながら部屋に戻っていくところだった。

それを確認した玲央も、すぐに部屋に戻る。

玲央は部屋に戻り、部屋の中央付近にあるソファーに腰掛ける。

「……いるんだろ？ ノイ」
「おや、分かりましたか？」

玲央が背後に声を掛けるが、その場所には特に誰もいるようには見えなかった。
しかし、よく眼を凝らして見ると、その空間が多少だが揺らいでいた。

「お久しぶりですね、半年ぶりぐらいでしょうか？」
「ああ、そうだな。そのぐらいだ」
「それで、自分に何か用ですか？」
「実は……俺にかかっている能力リミッターを全て解除してくれ」

玲央はノイにそう言うと、ノイはすぐに頷く。

『実は、今日はそれを解除しようと思って来てたんです』
「どう言うことだ？」

玲央が尋ねると、ノイは目を瞑りながら話し始める。

『先日、七大罪が現れたのはゼウス様から聞きました。奴らは確実に聖王のゆりかご起動時に何か行動を起こす気です。それを阻止するには、あなたが全ての能力を使用できるような状態じゃないといけないとゼウス様たちは結論を出し、私が使いとしてここに来たのです』

「なら話が早い。すぐにやってくれ」
『わかりました』

そう言うと、ノイは何かを唱え始める。

すると、玲央とノイの間に4つの錠が現れる。

その内の2つは既に解錠されているが、残り2つは錠がされたままだった。

その2つの錠に、ノイは鍵を差し込み、解錠する。

『はい、これで能力リミッターは解除です』

「ああ、サンキュな」

『いえ、それでは自分はこれで戻ります』

一度お辞儀をしてから、ノイはその場からゆっくりと消えていった。

「本当に、ありがとな。ノイ」

玲央はそう言うと、ベッドに横になる。

「……決戦は、明日……か」

そう呟くと、玲央はゆっくりと眠りについた。

第42話：新たな決意、真の覚悟（後書き）

次回『最終決戦 襲い来る七つの大罪』を御期待下さい。

第43話：最終決戦 襲い来る七つの大罪（前書き）

今回、結構グダグダになったと自分では思っています。
ので、あまり期待はしないでください。

第43話：最終決戦 襲い来る七つの大罪

現在、アースラ艦内に聖王のゆりかごの浮上の映像が流れている。同時に、地上本部へ向かう戦闘機人の映像も流れた。

その戦闘機人とはギンガであり、六課メンバーは驚いていた。

さらに、市街地の別の場所には召喚師 ルーテシア・アルピーノと騎士 ゼスト・グランガイツの姿があった。

ゆりかご内部の映像も流れ、そこにはヴィヴィオの苦しんでいる姿が映っていた。

それを見た六課メンバーはすぐにアースラから出動。

フォワードメンバーは市街地のギンガとルーテシアを止めに。

フェイトはスカリエッツィの基地にシスターシャッハと突入に。

シグナムはゼストに話を聞くために。

なのはとヴィータ、はやてはゆりかごの周囲に展開するガジェット
の殲滅と内部への突入に。

それぞれが行動を開始しようとしている。

そんな中、玲央、サフィア、アシュラ、レギンス、ハウル、エルの
6人はというと……

「良いか、俺達は六課の援護をしつつ、この騒ぎに乗じて現れると
思われる七大罪の7体を倒す。あいづらはもう人じゃない。思想思
念の塊のようなものだと思え！」

「……了解！」「……」

そして、騎士団メンバーは以下の通りに行動することになった。

サフィア & ハウル フォワードに同行

アシュラ& a m p ;エル フェイトに同行

レギンス シグナムに同行

玲央 単独行動

「それでは、神託^{オラクル}の盾騎士団。これより、六課協力での最終任務へと向かう。行くぞ!!」

「『『『『『^{イエス・マイキング}我が王の為に!!』』』』」

玲央は騎士団メンバーにはどこかに現れると説明したが、実際は奴らがどこに来るか分かっていた。

『ふん。騎士団の奴らも現れたか』

『さらに『刀王』と名高い巫玲央も出ている』

『我ら七大罪も、本気で掛からねばならぬか』

『ならば、やることは1つ』

『そうよねえ。あの巫玲央1人を全員で潰せばいいのよね』

『面倒だが、あのような奴を消す為なら手を貸す』

『あんな野郎が生きてるだけで怒り狂いそうだぜえ!!』

この場に浮かぶ七色の炎。

その炎が一気に燃え上がったと思ったら。

次の瞬間には、その場から消えていた。

消える前に、ある言葉を残して。

『『『『『『三王の眠る墓にて、新たな王に眠りを!』』』』』』

』

「さて、俺はそろそろ行かせてもらっ
「あ、待って！」

玲央はそう言いながら部屋を出ていこうとすると、後ろからなのは
に呼び止められた。

「ん？ どうかしたのか？」
「えっと、ね」

なのは玲央の前までやってくると、なぜかモジモジし始めた。
どうしたのだろうと周りのみんなが思っていると、なのはが顔を紅
く染めながら、自身の顔を玲央の顔へと近付け

「ん！」
「っ!？」
『『『なっ!？』』』

キスをした。

それを見た六課・騎士団両メンバーは啞然とし、玲央はなのは同様
顔を紅潮させながらもその行為を受け入れる。
少して、どちらからともなく顔を離していく。

「えへへ／／／ 頑張ってね！」

「・・・なのはも、ヴィヴィオの事頼んだぞ」
「うん、ちゃんと助けるよ！」

そんな感じに桃色空間を周囲に一通り放ち終わると、玲央は部屋から出ていく。

その瞬間、フェイトとはやては一気になのはへと詰め寄る。

「ちょ、ちょっとなのは！ どどどどう言うこと!？」

「いいいつの間にあんな関係になったんや!？」

「えつと、あの、えへへ／＼／＼」

凄じ剣幕で迫る2人だったが、なのははそれを気にすることなく照れる。

その後、時間が迫り、仕方なく質問を中断したフェイトとはやて、それに質問を受けながらも終始照れたままだったなのはとそれを傍から見ていたヴィータの4人はそれぞれの目的の場所へと向かう。

場所は変わり、こちらは市街地。
フォワード陣は今、ギンガとルーテシアの2人と戦闘をしていた。
ちなみに組み合わせは、

ギンガ・ナカジマ

｝VS｝

スバル・ナカジマ
ティアナ・ランスター

＝&mp;＝

ルーテシア・アルピーノ

｝VS｝

エリオ・モンディアル
キャロ・ル・ルシエ

となっている。

ちなみにサフィアは両方の援護を後方から行っている。
と言っても、スバルとティアナは連携を上手く使いギンガに応戦しているの、手を貸すことは無いが。

「スバル！ クロスシフトMA、やるわよ！」
「オッケー！！」

そう言うと、スバルがギンガに攻撃を仕掛ける。

ギンガがスバルの攻撃を防ごうとすると、左右背後からさらにスバルが数人攻撃を仕掛けてくる。

ギンガは攻撃を防ぐのを途中でやめ、全員にカウンターを繰り出す。しかし、その攻撃は全て空を切る。

「っ！？」

そう、その場にいたスバルは全員幻術だったのだ

ギンガはすぐに体制を立て直そうとするが、その隙を2人が見逃すはずはなかった。

「クロスファイヤーシュート！！」

ティアナはすぐに周囲に展開していた魔力弾をギンガに向け放つ。

それに気付き、ギンガは防御魔法で魔力弾を防ごうとするが、次の瞬間、魔力弾の弾数が一気に倍加した。

さらに、魔力弾は上下左右の4組に分かれ、ギンガを取り囲むように接近する。

ギンガは防御魔法の展開を中断し、魔力弾を器用に回避していく。あと少しで弾幕を抜けられ、攻撃を仕掛けられると言ったところで、異変は起きた。

突如ギンガの身体にいくつもの衝撃が降りかかってきたのだ。

その衝撃を受けたギンガは、後方へと吹っ飛び、地面へと叩きつけられた。

「ふう。ミラージュシューター、上手くいったわね」

そう、先程ギンガが受けた衝撃とは、ティアナが幻術とクロスファイヤーシュートを組み合わせた射撃魔法 ミラージュシューターと言う魔法だ。

幻術で魔力弾を増やしたように見せ、実弾は周囲と同化させ不可視にすると言ふもの。

さつきギンガが避けた魔力弾は全て幻術で、実弾はその弾幕の抜けた先に待機させ、と言う感じだ。

「スバル！ 今よ！」

ギンガが行動を起こす前に魔力ダメージでKOさせようと、ティアナが待機していたスバルに向け合図をする。

それを聞き、今まで幻術で姿を消していたスバルが姿を現し、左拳に魔力をチャージしながら突っ込む。

ギンガはふらふらと起き上がり、反撃の態勢を取る。

しかし、その前にスバルは懐に入る。

「一撃、必倒！！　　デИБァイイイイン！！！」

スバルが、左拳にチャージした魔力スフィアをギングの腹部へと突き出し、一気に増幅させる。

それを見たギンガは、驚愕するが、そんな暇をスバルは与えなかった。

「バスタアアアアアアアアアアア——！！！！！！」

増幅した魔力を、スバルは一気に解放つ。

放たれた砲撃は、周囲の様々なものを巻き込みながらギンガを吹っ飛ばす。

ギンガはその砲撃を受け、魔力ダメージが限界に来たのか、その場で気を失い倒れ込む。

スバルとティアナはギンガの元へ行き、彼女の状態を確認する。ギンガには特に以上が見られず、特に危惧することも無いようで安心する2人だった。

すると、エリオとキャロの方もルーテシアとの戦闘が終了したのか、エリオがルーテシアをおぶってスバルたちの元へとやってくる。

「2人とも、お疲れ」

「そっちも終わったのね」

「はい！」

「4人とも、ホント強くなったよね。もう私でも勝てないかも」

フォワード4人とサフィアが、救護班のへりを待ちながらわいわい話している。

と、不意にデバイスたちが警告音を発する。

「これは、敵の接近!？」

「え、一体だれ!？」

その場の皆が一斉に警戒態勢に入る。

その刹那、上空から数十もの魔力弾が彼女たちに襲い来る。

『Protection』

それにすぐ気付いたスバルが、頭上に防御魔法を展開し、魔力弾を防ぐ。

「くう、1発1発が重い！」

スバルが言った通り、その魔力弾はかなり魔力が込められており、当たるとバリアに罅を入れていった。

しかし、スバルはその魔力弾全てをギリギリのところで防ぎきる。その後、どこから魔力弾が放たれたのか周囲を確認するフォワードとサフィア。

すると、道の向こうから誰かが歩いて来ていた。皆が警戒態勢を取る中、ティアナだけは違った。

「ティア？」

心配になって声を掛けるスバル。

しかしティアナは驚愕の表情を浮かべるだけで、一向に構えない。

「う．．うそ．．．だって、死んだ、のに」

ティアナは歩いてくる青年を見て、そんなことを呟いた。

「はあ、俺ってホントは出る筈じゃなかったんだけどなあ．．．まあ、これも俺を救ってくれた博士の頼みだし、仕方ないか」

『I think so』

青年はデバイスと会話しながら、ゆっくりとフォワードとサフィアの前までやってきた。

その姿を見て、ティアナは確信する。

「．．．．．兄、さん」

「．．．ええ！？」「」

「お、ティアナ、久しぶりだな。わりいけど、ここでちょっと倒されてくれ」

そう言いながら、青年　ティード・ランスターは自身の剣銃型デバイスを構え、魔力スフィアを生成していた。

所変わって、ここは聖王教会から西北西へ十数キロ進んだ森の中。そこに、玲央は来ていた。

「……いるんだろ？」

玲央が1人、呟く。

すると、彼の周囲の大気が揺らぎ、七色の炎が現れる。

『いつ気付いた？』

『最初からだ？』

『は！ 生意気だなあ、おい！！』

その内の、蒼い炎が炎弾を放ち、玲央へ攻撃する。

しかし、その攻撃は玲央に当たる前にかき消される。

それが合図となり、戦闘が開始する。

「シルフ、ユニゾンいくぞ！」

『はい、マスター』

そう言うと、シルフはデバイスモードからユニゾンモードへと姿が変わる。

「「ユニゾン・イン！」」

玲央はすぐにシルフとユニゾンをする。

それを七大罪の炎たちは静観するだけだった。

「・・・攻撃してこないのか？」

そんな彼らの様子を怪訝に思った玲央が問う。

『いやなに、既に私たちは攻撃をしているさ』

「何・・・っ！？ しまったな」

そう言いながら、玲央は周囲の炎を睨み付ける。

その炎は、玲央と七大罪を包み込むように場を形成していく。

「チィ、熱で俺の体力を消耗させる気か」

「それだけではない。もちろん我らも」

」

七大罪の内の紅い炎が消える。

「攻撃させてもらっさ」

「っ!？」

そう思った次の瞬間には、玲央の目の前にまで来て、玲央へ炎弾を放っていた。

第43話：最終決戦 襲い来る七つの大罪（後書き）

作者「久方ぶり〜の〜、感謝コ〜ナ〜！」

玲央「なんか変なイントネーションだな」

作者「気にするな」

玲央「まあいいけど。えっと、烈火様、感想ありがとうございます」

作者「と言つか期待してるとまで言われたことに感動したんですが」

玲央「この作品を面白い……大丈夫ですか？」

作者「ちょ、おま、それはこの作品を読んでくださっている方々に失礼だぞ……！」

玲央「でも今回は自身がないんだろ？」

作者「うぐ」

玲央「だから前書きの欄にあんなこと書いたんだろ？」

作者「うぐぐ………それでは次回！『最終決戦 Broth
er』をそれなりにご期待下さい！」

玲央「まあこんなダメ作者の駄文ですが、皆さん読んでやってください」

作者「・・・・・・・・俺、泣いていい？」

玲央「地獄だな」

作者「酷っ!？」

「兄さん！ どうして、どうして戦わないといけないの！！」

その叫びは、兄と戦いたくない。

そう言った感情が込められていた。

すると、ティーダはゆっくりと口を開き、話し始める。

「俺はな、ジェイル博士に助けられたんだ」

「えっ？」

「俺は確かにあの任務の時に死んださ。でもその後、博士のおかげで生き返ることが出来た」

「それは、でも・・・」

「確かに俺だつてティアナとは戦いたくないさ。だけど、これは俺の恩人のお願いなんだ。だから、悪い」

ティーダは一言謝ると、先程迎撃用に生成した魔力スフィアを集束させ、2つだけにする。

それを見て、ティアナは決意する。

兄さんを止めてみせる、と。

「クロスミラージュ、あれ試すわよ」

『Yes , s i r 』

そう言うと、ティアナはティーダに向かい走り出す。

「何をする気か知らないけど、やらせないよ。流れ星！」
ミィティア

ティーダは生成したスフィアの中の1つをティアナに向け放つ。

放たれたスフィアは、ティアナに向かい真直ぐに、名の通り流星と言つ名が合うほど、速く進んでいく。

しかし、ティアナはティードが放ったスフィアを紙一重でかわし、さらにティードへと突っ込む。

「さっきのを避けたのは凄いけど、これはどうかな？」

ティードはそう言うと、残り1つのスフィアにさらに魔力を込めると、その色が次第に濃いオレンジから朱・蒼・碧の三色入り乱れた色へと変化する。

「コメント
彗星！」

放たれた魔力弾はティアナへ向かわずに、上空へと撃ちあがる。それを見たサフィアは、すぐにフォワードたちに言う。

「みんな！ 今すぐにバリアを張って！ それも二重や三重に！！」

スバル、エリオ、キャロはサフィアに言われた通り、すぐにバリアを展開する。

しかしティアナはそのままティードへと向かい突っ込み続けていた。

「「ティア！！」」

「「ティアナさん！！」」

4人はティアの名前を呼ぶが、それは突如上空から飛来してきた魔力弾により掻き消された。

スバル、エリオ、キャロの3人はすぐに空を見上げる。

見上げた空からは、サフィアの使う上級魔法『ALL・ICE』に匹敵するほどの魔力弾が降り注いで来ていた。

さらに、魔力弾は3色に分かれており、着弾すると色によって属性効果が発生していた。

朱は炎で燃え上がり、蒼は氷で凍てつき、碧は風で切り刻まれていた。

しかし、ティアナはそんな魔力弾が降り注ぐ中を、巧みに魔力弾を避けながらさらに進んでいた。

どうして避けることが出来ているのかティーダには分からなかったが、サファイアには見えていた。

ティアナは全ての魔力弾を避けているのではなく、避けられそうにない魔力弾は移動中に生成したミラージュシューターで1発1発相殺し、進んでいた。

上空からの魔力弾が全て降り注ぎ終わったところには、ティアナはティーダの懷まで来ていた。

「くっ！」

ティーダは距離を取ろうと思い、バックステップで離れようとする。

「はあ！！！」

しかし、その前にティアナが魔力弾でティーダの身体を上空へと撃ち上げた。

ティーダは上空で体制を立て直そうと、身体を捻ってティアナへと向き直る。

だが、その時にはすでにティアナがティーダを狙っていた。

「リフターファイア！！！」

ティアナが魔力弾を一気に放ち、ティーダの身体に撃ち込む。凄い衝撃で、ティーダの身体が空中に礫にされたと思われるほどだ

つた。

それほどの衝撃だったが、ティードは未だに意識を保っていた。ティアナの放った魔力弾の衝撃が無くなり、ティードは地面へと落下し始めた。

ティードは着地後にすぐに攻撃を仕掛けようと、魔力スフィアを生

しかし、それをティアナが許すはずも無かった。

「ファントム！」

ティードがスフィアの生成を始めた時にはすでにティアナが砲撃を放つ準備が出来ていた。

「ブレイザアアアアアアアアアア——！！！！！」

ティアナが放った砲撃は、落下途中のティードへと真直ぐ向かい、直撃した。

直撃した砲撃の威力がかなりのもので、ティードは元いた位置から数十メートル離れた位置まで吹っ飛ばされる。

「兄さん！！」

砲撃を放った後、ティアナは地面に倒れているティーダの元へと走ってくる。

それを見たティードは、ティアナに優しい笑顔で微笑む。

「はは、まさか俺が負けちゃうとはな。さすが、俺の妹だ」

「兄さん！ 兄さん！ 良かった、良かったよお」

ティアナは泣きながらティードに抱きつく。

そんなティアナの頭を、ティーダは優しく撫でる。

「ティアナ、お前はもう立派な魔導士だ。俺が認めるよ」

「ううん、私なんてまだまだ。兄さんの足元にも及ばない」

「ははは、そんなこと言われてもな、実際に負けちゃったし」

ティーダは苦笑しながらも、ティアナの頭をずっと撫でている。
ティアナもそれには嫌な顔をせずに、受け入れていた。

そんな2人の様子を、他の4人は少し離れた位置から見ていた。

「なんだろ。私たちって空気？」

「まあいいじゃない。折角の再会なんだし」

「ですね。今はそつとしておきましょう」

「ティアナさん、本当に嬉しそう」

2人の様子を優しく見守る4人。

それから数分後にヘリがやってくると、ティアナとティーダの2人は4人の事を思い出し、顔を赤くしていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

『どうした？ 刀王と呼ばれているものがもう音を上げるのか？』

「ま、まだまだあー!!」

玲央はその手に宝具を生成するが、生成精度がいつもより格段に低く、真名解放をした途端に木端微塵に砕け散るという状態だった。そのせいで、現在彼は双刀『鎚』を使い戦っている。

しかし、七大罪の炎たちは玲央の攻撃を軽々と避ける。

現在、玲央と七大罪たちは、七大罪が発動した結界の中で戦っている。

結界の名は『^{フロミネンス}炎熱地獄』。

その名の通り、結界内は燃え盛り、かなりの熱気で、常人なら10分と持たずに熱中症で倒れているだろう。

玲央はそんな中で既に30分も戦闘を行っていた。

何故玲央がそれほどの時間を戦うことが出来ているのか。

それは、シルフとユニゾンしたためである。

シルフとユニゾンをしたことで、玲央は風を操ることが出来、その能力を使い周囲の熱気を出来る限り冷やしている。

だが、冷やされた空気は周囲の熱気にすぐに熱せられてしまい、すぐに元の温度まで戻ってしまう。

なので、現在玲央は周囲の空気の冷却を常時発動している。

「くっ!?!」

『マスター!?!』

と、そんな中、玲央がしゃがみ込む。

さすがに体力が消耗されてきており、倒れそうになる。
しかしすぐに立ちあがろうとする。

『隙が出来たな』

「っ!?!」

しかし、そんな隙を七大罪が見逃すはずがなかった。

立ちあがろうとしている玲央目掛けて、七色の炎弾が放たれる。

玲央はすぐにバリアを張ろうとするが、この戦いで溜まっていった疲労がピークに達したのか、一瞬だけ気を失う。

玲央はすぐに気が付くが、その時は既に遅かった。

七色の炎弾は既に玲央の目の前にまで来ており、玲央が気付いたと同時に直撃した。

「があ!?!!」

直撃した炎弾は玲央を包みながら燃え上がる。

玲央は、直撃した炎弾の衝撃と、その熱にやられ倒れてしまう。

第44話：最終決戦 Brother（後書き）

次回『最終決戦 起源覚醒』を御期待下さい。

第45話：最終決戦 起源覚醒（前書き）

今回出てくる起源や起源覚醒等は、自分で考えたものがあるので、元のものとは違つかもしれませんのでご了承ください。

第45話：最終決戦 起源覚醒

・・・ここは、どこだ？

ここは貴様の精神世界のさらに奥、精神と起源の狭間と言ったところだ

っ！？ お前は一体誰だ？

俺は起源のさらに大元、原初を生み出したものと言った方が分かるか？

そんな存在、いるのか！？

実際にこうやって話しているんだから、いるんだろ？

いや、自分の存在に対して疑問系で。

まあ気にすんな。それより本題に入るけどいいか？

あ、ああ、良いけど。

それじゃあ遠慮なく。ここはさっき言った通り精神と起源の狭間で、つまりは今、お前は起源へと半覚醒しているところだ

半覚醒？

ああ。外界からの衝撃でその状態になる奴は多いな。それでも数は指で数えるほどだけだな

それで、俺はこれからどうなるんだ？

あゝ、選択肢は2つだな

どんなのだ？

1つは本覚醒する。本覚醒するのはそこまで難しいことじゃない。けど、覚醒後のリスクが多いのが難点だな

例えばどんなリスクがあるんだ？

そうだな、そいつの起源によって変わるけど、大抵の奴は常人より感覚が鋭くなって精神が崩壊しそうになったり、強力な殺人衝動に襲われたり、周りの物を無性に破壊したくなったりと、こんな感じになってしまうことが多いな

・・・ちなみにもう1つは？

もう1つは、今ここで死ぬ

・・・マジ？

大マジだ。この状態になった人間は何事も無かったかのように目を覚ますことは出来ない。本覚醒するか、この狭間の世界で精神が死ぬか。どっちかしかない

・・・そうか。

まあお前もいきなりこんなこと言われて困るだろ。多少は考える

「その必要はない」・・・それはどうしてだ？

俺には、早く目を覚まして守らなくちゃいけない人たちがたくさんいるんだ。

だから俺は、こんなところで立ち止まっていられない！

だから俺は、1つ目の選択肢を選択する！

・・・フッフ、フハハハハ、アハハハハハハハ！！
やは
り君は面白い！ だったら教えてやるよ、お前の起源を！

頼む！ 教えてくれ！！

君の起源、それは

『さて、これで刀王と呼ばれた巫玲央は始末した。後は』
『そうだ。後は機動六課の奴らと地上本部の人間を全員焼き尽くさないとな』

現在、七大罪の炎たちはこれからの事について話し合っていた。

1人は地上本部を塵一つ残さずに燃やしつくしたいと。

1人は機動六課の人間が炎で焼かれ、苦しんでいる姿を見て楽しいたいと。

各々がそれぞれ意見を出し合っていた。

「楽しそうだな、テメエら」

そんな時、彼らの会議に誰かが乱入してくる。

七大罪の炎たちは、乱入者の方へと視線を向ける。

そして、その乱入者の姿を見た炎たちは、驚愕の声を上げる。

『『『『『『つ！？ き、貴様、何故！？』』』』』』

「さあ、なんでだろうな？」

そんな、この場に合いそうにないセリフを吐くのは、今現在、ミッドチルダで知らない人間がいないであろう人物 巫玲央が飛んでいた。

『はん、どうせもう体はボロボロなんだ。何をしようと「黙れ、消えろ」なっ!?!』

「封」

七大罪の内の碧炎　強欲が玲央に向け新たな炎弾を放とうとするが、玲央は一瞬のうちに強欲の後ろに回り込み、手を翳すと何かを呟く。

次の瞬間、強欲の碧炎が激しく揺らぎ始める。

『が……かは……』

『ど、どうしたのだ、強欲よ!?!』

他の七大罪が声を掛けるが、強欲はそれには答えず、ずっと苦しんだままだった。

すると、強欲の炎が大きく爆ぜると同時に、炎が消し飛び、強欲の炎が消え去った。

『な、何事だ!?!』

『強欲が消えただと!?!　一体何が!?!』

「ツギハ、キサマラノ、バンダ」

『『『『『『つ!?!?!?!?!』』』』』』

混乱している七大罪たちに、玲央は言い放った。

その言葉には、既に人間味も、感情も籠っていないかった。

「メンドウダ。キサマラハ、ドウジニ、ケシテヤル」

それと同時に、玲央は残りの大罪の前から姿を消す。

大罪たちはさらに困惑し、玲央の姿を探そうとする。

フウ

しかし、それは後ろから突如聞こえてきた声により阻まれた。

「キサマラナド、タタカウニ、アタイシナイ。スグニ、キエサレ。クズドモガ」

[illegible]

玲央が冷たい視線と感情の籠っていない言葉を大罪たちに放つと同じ時に、大罪の炎が全て弾け飛ぶ。

「ククククク、クハハハハハ、アーッハッハッハッハッハッ
ハッハッハッハ！！！」

その様子をジツと見つめていた玲央は、不気味な笑みを浮かべながら、大声で笑い始めた。

「ア—ッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ
ハッハ　　がぁ!!」

不意に、不気味な笑い声を上げていた玲央が苦しみ始める。

「ぐつ、がはっ！ あぐう！！ く、くそ、正気を、保つ、のが、こゝま、で、厳しいと、は」

玲央は苦しみながら、地面へと着地する。

その際、バランスを崩してしまい、地面に倒れこんでしまった。

「ぐあ！ く、くそお！ 俺は、まだ、倒れるわけには、いかないんだ！！」

玲央は、すぐに倒れた体を起こし、転移魔法を発動する。それも、普通の転移魔法ではなく、特殊なもの。

「はあ、はあ、あ、あの七大罪たちの正体が、起源覚醒によって見ることが出来たアカシックレコードの残りの階層にあった通りなら、絶対に、はやてたちには知られてはいけない！」

そう言いながら、玲央は転移魔法の光に包まれる。

「あいつらは、昔の、あのや

」

玲央は言葉を言いきる前に、その場から転移していった。

第45話：最終決戦 起源覚醒（後書き）

次回『最終決戦 闇の再来』を御期待下さい。

第46話：最終決戦 闇の再来（前書き）

やばい、マジグダグダかもしれません。

どどっしり（汗）

第46話：最終決戦 闇の再来

「はあ、やはりサブマテリアルではダメでしたね」

闇の中、響き渡る声。

「だから言ってるじゃんか。最初から僕らが出ていけばいいって！」

「黙らんか、
よ」

さらに響く2つの声。

「うぐ、でも！」

「あなたが真っ先に出ていけばバカにされるのがオチです」

「あー！ 今僕をバカって言っただな」

「元々バカであろう？」

「う、うわあああああー！！！！ん！！！！ 2人が虐める
！！！！」

「・・・何だろう。全く緊張感がないのだが。」

「とりあえず、私たちの目的は大量の魔力を集めることです」

「そのために、こんな時代にまで時空転移をせねばならんとはな」

「仕方ありません。あの時代のあの場所では魔力を収拾できず、さらに移動はできない」

「あの時はどうしようも無かったから困ったな」

「うう・・・と言うか、僕らが時空転移できたのは偶然「それを言うでない」え、でも事実「そんなことだからあなたはバカだと言われるのです」う、ごめん・・・と言うか僕の事バカって言うてる君たちだけだよな!!」

「さて、そんなことは置いておきましょう」

「さり気に酷くない!？」

「我らも出ていくとするか」

「無視!？ 無視する僕の事!？」

「では行くとしましょう」

その声の持ち主は、そう言いながら転移魔法を発動する。

「まずは私と のオリジナルのところへ行きましょうか」

「そうするか」

「だから僕の事はむ 」

そう言いながら、3人はその闇の中から転移していく。

場所は変わり、こちらアースラ艦内。

現在の状況はというと、原作で言う最終話のスバルとティアナがなのはとはやてたちを救い出したところだ。

「聖王のゆりかご、大幅に速度を減速！ これなら時間に合います！」

『とりあえずは現状維持やね。次元航行艦隊が到着すれば終わりやから、みんなあと少し、頑張ろうな！』

『はい！！』

そんなやり取りをしている時、ロングアーチの方で、ある異常が観測された。

「っ！？ 八神部隊長！ 気を付けてください！ 隊長達のいる空域に膨大な魔力反応が接近しています！！ 推定SSランク！！」

「な、なんやて！？」

「っ！？ 八神部隊長！ 気を付けてください！ 隊長達のいる空域に膨大な魔力反応が接近しています！！ 推定SSランク！！」

「な、なんやて!？」

ロングアーチからの報告を聞き、その場にいる六課メンバー（なのは、はやて、スバル、ティアナ、リン？、シャル、ヴィータ、ザフィーラ、ヴィヴィオ）と航空魔導士たちは自分たちの上空
ゆりかごのさらに上を見上げる。

すると、そこに3つの魔法陣が展開される。

それを見たその場の全員が、同時に悪寒を感じた。
少して、その転移魔法から3つの人影が現れる。

「ふむ、多少位置がずれてしまいましたね」

そう言いながら、突如現れた3人のうちの1人 栗色ショートで
なのはのBJを黒くした感じのBJに身を包んだ少女が呟く。

「そうは言っても眼下のオリジナルの姿が確認できた。それにな
りの数の塵芥がいるな。すぐにでも魔力を奪うとするか」

次に言葉を発したのははやてのBJを黒くした感じのBJを着てい
る少女が、手に持ったデバイスらしきものを魔導士たちに向ける。

「ちょ、僕の話聞く気なし!? もういいよ! そこらへんの魔導
士にでも八つ当たりしてやる!」

最後の、フェイトの幼いころの姿を黒いガイ蒼に変えた姿の少女が
言いながらバルディッシュに似たデバイスを構える。

「な、なんやあれ!？」

「昔の私とフェイトちゃん、はやてちゃんにそっくり」

なのはとはやて、他の魔導士たちも驚いていたが、彼女たちは容赦しなかった。

「それでは行きましょう。パイロシューター」

「我も行くか。エルシニアダガー!」

「僕もやってやる! 電刃衝!」

少女たちは周囲の魔導士に向け攻撃を仕掛ける。

航空魔導士がその攻撃で次々に墜ちていく中、六課メンバーはその攻撃をギリギリのところで防ぐ。

「なるほど、やはり私たちのオリジナルだけの事がありますね」

そう言うと、3人が六課メンバーの元へと近寄る。

「あなたたちは誰ですか？」

その3人に向け、なのははレイジングハートを構えながら尋ねる。

「我らは子烏どもの因縁の相手とでも言うべきかの」

「とりあえず名乗らせてもらいましょうか」

そう言い、子供の頃のなのはに似た少女から名乗り始める。

「私は『理』を司るマテリアル、星光の殲滅者と言います」

「僕は『力』を司るマテリアル、雷刃の襲撃者だよ!」

「我は『王』を司るマテリアル、闇統べる王だ」

一通り名乗り終わると同時に、闇統べる王が攻撃を放ってきた。それをレイジングハートがバリアを張り防ぐ。しかし、防ぎきると同時に割れ散った。

「くっ、あなたたちは何が目的なんですか!？」

今にも倒れそうになりながらも、なのはは3人に尋ねる。しかし、なのは達の魔力は既にほとんど尽きかけており、次に攻撃が放たれた時は対処のしようがなかった。

「私たちの目的、それは……闇の書の闇の復活です」

「……なっ!？」

なのは、はやて、シャマル、ヴィータ、ザフィーラは驚きを隠せなかった。

それもそうだ。約10年前に破壊されたはずの闇の書の闇。

その名が今になって出てきたことに、かなり驚愕していた。

そんな中、3人が攻撃しようとデバイスを六課メンバーへと向けた時、3人と六課メンバーの丁度中間の位置に突如魔法陣が展開された。

「……っ!?!？」

その場の全員が警戒していると、そこから六課メンバーの見知った青年が転移してきた。

第46話：最終決戦 闇の再来（後書き）

作者「とりあえず、次回か次々回辺りで最終決戦は終わります」

玲央「やつとか、それでその後はどうするんだ？」

作者「そうだな数話ちよこちよこ書いて……」

玲央「…………書いて、なんだよ」

作者「……………最終回？」

玲央「……………」

作者「……………」

玲央「……………悪い、耳がおかしくなったらしい。もう一度言ってくれ」

作者「いや、だから最終k「OK、分かった。悪いのはお前の頭か」ちよ、なんでそうなる!？」

玲央「最終回つて、vividとかForceとかは書かないのか？ もしくはオリジナルストーリーとか？」

作者「あゝ、予定は無いな。と言うか最近は次回作どうするかしか考えてないし」

玲央「この話のストーリーを先に考えろよ」

作者「いや、俺ってさ、感覚で書いてるからさあ」

玲央「……………それってまさか」

作者「おう、バックアップなんてありやしない。投稿の際にミスってしまつたら即終了ですね」

玲央「……………」

作者「まあ最終回前には幾つか番外編を書きたいとは思ってるしね」

玲央「……………」

作者「……………次回『最終決戦 決着』。サブタイのあとに？とか？とかがつくかもしれません、御期待下さい」

第47話：最終決戦 決着

「貴様ら、どうしてこの時代にいる？ 闇の書の闇・・・防衛プロ
グラムの残滓が何故こんなところにいるんだ？」

玲央はマテリアルの少女たちを睨みつけながら、尋ねる。

「さて、何故でしょうか」

星光の殲滅者は玲央の睨みを気にすることなく、普通に答える。
もう1度、同じ問いをしようと玲央が口を開こうとした時、3人の
少女の中のおバカな娘が大声で話す。

「僕たちだつて来たくて来たんじゃないやい！　なんか知らないけ
ど何時の間にか未来に飛ばされたんだよ！！　どうしてくれるんだ、
お前！！」

「へえ、そうなのか。情報提供ありがとう」

玲央の言葉を聞き、雷刃の襲撃者は「あ、しまった！」と慌て、さ
らに星光の殲滅者と闇統べる王はそれぞれのデバイスを雷刃の襲撃
者へと向けていた。

「折角私が話さないでいたのに・・・覚悟は良いですね？」

「雷刃よ、貴様、ここで塵芥へと化すか？」

「こ、ごめんなさい！　本当にごめんなさい！！　だから許して！
！　もう何も言わないから！！！！」

雷刃の襲撃者は必死に他の2人に土下座で謝る。

それも1回や2回ではなく、10、20、30、それ以上は確実にやっていた。

それを見ていた周りの魔導士は、彼女に少し同情した。

「・・・もういいか？」

「ああ、すみません。お待たせしました」

「うう、ぐす・・・はあ」

「ふん」

マテリアルたちは玲央の方に向き直り、それぞれデバイスを構える。そして

「「「っ！」「」」

「はあ！！」

3対1の戦闘が開始した。

「ブラストファイヤー！」

星光の殲滅者（マテリアルS）がなのはのデイベインバスターと酷似した砲撃を玲央へと放ってくる。

「光翼斬！！」

さらに背後からは雷刃の襲撃者（マテリアルL）がフェイトのハーケンセイバーに似た攻撃を放つ。

「チー！ 異次元の穴！」
ディメンジョン・ホール

2人の攻撃を玲央は射線上に出現させた渦に吸収させる。

ディメンジョン・ホール
異次元の穴。

玲央が転生前に貰っていた能力の1つ。

相手の攻撃を吸収し、好きなタイミングで吸収した攻撃を1/5倍で放つことが出来る。

・・・え？ 今更出すな？

いや、レオルが前に似たようなのを使ってたっしょ？

あれはこの能力の劣化版でさあ、まあ他の玲央の能力は使えないんだけど。

・・・とりあえず、話を戻すか。

「そら！ 返してやるよ！」

そう言いながら、玲央は先程と同じ渦を出現させると、そこから先程吸収した2人の攻撃を放つ。

しかも、威力は吸収する前より強くなっていた。

「なっ！？ ぐう！？」

2人はすぐにバリアを展開するが、瞬時に破壊され、それぞれの攻撃が直撃する。

玲央は追撃をしようと、攻撃を放とうとする。が、

「喰らえ、ミヨルニル！！」

闇統べる王（マテリアルD）が、上空から巨大な雷を放ってくる。

玲央はすぐにその攻撃を回避しようとするが、雷の軌道が突如変わり、玲央へと直撃した。

「ぐあああああ！！！！」

直撃した雷が体中を駆け巡り、玲央は気を失いかけるが、なんとか保つ。

しかし、マテリアル3人は既に、決着をつけようとしていた。

「集え、明星。^{あかほし} 全てを焼き消す焰となれ！」

「砕け散れ！ 雷刃滅殺！」

「絶望に足掻け、塵芥」

3人それぞれが大技を放とうとしている。

玲央がそれに気付いた時には、すでに遅かった。

「ルシフェリオンブレイカー！！」

「極光斬！！」

「エクス、カリバー！！」

3人が攻撃を放つ。

玲央は避けようとするが、彼の背後にはゆりかご戦で魔力を使い果たしたなのは達がいた。

その瞬間、玲央は精神と起源の狭間での会話を思い出した。

『まさか、俺の起源がそれだったとはな』

『ふむ、やはり面白い奴だ。自らの起源を聞いて、未だに正気を保っているとは』

『・・・そうなのか？』

『大抵の奴は気が狂うか、精神が崩壊するかだな』

『・・・マジ？』

『大マジだ。まあお前の場合は起源があれだからな』

『……まあ、それ聞いて思い当たる節があつたしな』

『まあその話はここまでだ。そろそろ行け』

『ああ、世話に……はなつて無いが、まあありがとな』

『いやいや、こつちも面白かつたしな』

『ああ、じゃあな』

『また、会うことがあれば』

『そんな時はよろしく頼む』

『おう、わかつてるさ。あばよ』

『守護』の起源覚醒者。

「・・・・・・・・」

玲央は迫りくる攻撃を見つめるだけで、なにも行動を起こそうとしない。

「玲央くん!!」

彼の背後にいるのはが、心配し声を掛ける。
その瞬間。

「・・・・シルフ、プロテクション展開」
『了解です』

攻撃が直撃する直前、玲央はバリアを展開する。

展開したバリアは1枚。
誰もがすぐに破壊され、やられると思った。

しかし、

「ぐ、破れない？」

「このお！ 壊れるおおお！！！」

「何故だ！？ 何故破棄できぬ！？」

全員の予想に反し、3人の攻撃を防いでいる。
しかも、罅一つ入っていない。

3人が攻撃を放ち終えても、なお健在のバリア。
それを解き、玲央は再度3人を睨み付ける。

「起源覚醒した俺の障壁、簡単に壊せるわけがないだろうが」

そう言いながら、玲央は自身の手に1本の剣を顕現する。

「な、なんだその剣は！？」

「凄い魔力を秘めていますね」

「何何何何！？！？」

マテリアルはその剣を見て驚き慌てている。
驚いているのは六課メンバーも同様で、

『あ、あの剣、すごいです！ SSS級ロストロギアより遥かに上
を行っています！！』

「ああ、こっちでも分かるわ」

「レリックなんか比じゃないね」

などと口々にしていた。

「喰らえ！」

玲央は瞬時に雷刃の襲撃者の背後へと移動し、攻撃を放つ。

「^{エクス}約束された

「しま」

「勝利の剣……！」

「あああああ——！！！！！！！！」

剣より放たれた光は、雷刃の襲撃者の身体を包み、その場から消し去った。

「やりますね」

「次はお前だけだね」

「つ！？」

星光の殲滅者は背後から声の聞こえた瞬間にその方向に障壁を3重に展開する。

だが、玲央が放つ攻撃は、先程とは違った。

「エヌマ天地乖離す」

「なっ！？」

「
エリシュ
開闢の星！！！！」
」

放たれた攻撃は、張られた障壁を容易く破壊し、星光の殲滅者へと

直撃する。

しかし、それでも完全には消すことが出来なかった。
それを確認した玲央は、すぐに追撃を放つ。

「秘剣・つばめ返し!!」

星光の殲滅者はすぐに一撃目を避ける。

それを予測したかのように二撃目が迫るが、障壁を張り防ぐ。
だが、さらに背後からの三撃目を防ぐことが出来ず、まともに受けてしまい、星光の殲滅者は光の粒子と化し消滅した。

決して同じ剣から放たれることのない攻撃。
それを、玲央はなぜか同一の剣から放った。

「な、なんだその剣は!？」

残された闇統べる王は自身のデバイス エルシニアクロイツを玲央に向けながら問う。

「これは、俺の・・・俺自身の宝具。全ての刀剣の原典。その名は・・・」

玲央は、その手に握る剣を、振りかざす。

闇統べる王は、魔力弾を無数に生成し、玲央に向け放つが、彼の障壁が硬くまったく攻撃を通さない。

「闇を照らす陽光、開闢より無敗の剣。我乞うは、過去の闇を消し去る光」

玲央が詠唱していくのと比例し、段々と輝きを増していく剣。

第47話：最終決戦 決着（後書き）

作者「やっべ、ggdggdじゃねえか？」

玲央「知らんわ。元からこんな駄文に期待する人なんていないわ」

作者「酷えよ！ お前、こんな性格「だっただけど何か」……主人公の性格、間違えたかな？」

玲央「次回作の主人公は気を付けろよ」

作者「あゝ……ちょい無理かも」

玲央「何でだ？」

作者「次回作もなのはなんだけどさ、主人公は原作に興味無しで、介入せずにそのまま中学生になったってところから話を始めるつもりだから」

玲央「あゝ……それはなんとも」

作者「とりあえずはそんな感じで次回作は始まりますよってことで」

玲央「てかまた転生者ものかよ」

作者「それはまあ、ねえ」

玲央「まあ頑張れ」

作者「ああ、それじゃあ次回予告。今回はよろしく」

玲央「了解。次回『事件が終わり・・・』を御期待下さい」

作者「あ、その前に番外編書くかも」

玲央「おい！（怒）」

作者「ああ、ちなみに次回作に別次元からの訪問者ってことで君を出す予定だから」

玲央「マジっすか!？」

作者「気が向いた時に番外編か何かで」

玲央「だろうと思ったけどさあ!!」

番外編：新たな仮面戦士との遭遇（前書き）

玲央「今回は作者が暴走して良く分からないものを書いている。なので内容はあまり期待しない方がいい」

作者「酷えな。否定出来んが」

玲央「それでは、ご覧ください」

「っ！？ シルフ、場所の特定を！」

『やってます！ ここから北西に約600m行ったビルからです！』

「OK、シルフ、セットアップ！」

『了解！』

玲央はシルフを鎚モードでセットアップし、音のした場所へと走り出す。

「確かここだったよな？」

『はい、その筈です』

「……と言つか、咄嗟に身を隠したけどさ、隠す意味あった？」
『さあ？』

どうでもいいような会話を玲央とシルフがしていると、先程現れた怪物が青年へと襲いかかるうとしていた。

「なっ！？ 危ない！！」

玲央は叫び、攻撃を放とうとするが、間に合わないと思った。

だが、青年は先程赤い腕に渡された3枚のメダルを腹部に装着した何かへと填め、斜めに傾けた。

さらに、腰に着けている円形のものをそのメダルを沿ってスライドさせるように当てていく

「タカ、トラ、バツタ」

「変身！」

「タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ！」

妙な音楽が鳴り響いたかと思うと、あの青年の姿が変わっていた。

「……もしかして、あれがこの世界の仮面ライダーか？」

『どうして疑問系なのですか？』

「いや、俺あんな仮面ライダー知らないし」

『でも、貰った資料にはマスターの世界で仮面ライダーとして人気のある番組だつて……あ』

「……なんだよ、あつて？」

『すみません、資料の日付を見たのですが』

「なんだ？」

『マスターがこちらにきた後で放送が始まった仮面ライダーのようです』

「あゝ、それじゃあ俺知ってるわけないわな」

などと言うどうでもいい話をしていると、青年もとい仮面ライダーが腕のクローで怪物を切り裂きまくっていた。

それと同時に、切り裂かれた部位から銀色に輝くメダルが周辺へ撒き散る。

「あの怪物、このメダルで出来てるのか」

玲央は足元に転がってきたメダルを拾い、眺める。

「ちょ、その人、危ない！！」

「へっ？」

玲央は間拔けな声を上げながらメダルから視線を戻すと、目の前には玲央目掛けて突進してくる怪物がいた。
どうやら標的を玲央へと変更したようだ。

「はあ、あんまり関わっちゃいけないんだが」

そう言いながら、玲央は突進してきた怪物の腕を切り落とす。

「・・・・・・へ？」

青年は先程玲央が上げたような間拔けな声を上げる。

「おい、仮面ライダー」

「あ、え、な、何すか？」

「とりあえず情報が欲しい。お前の名前とその仮面ライダーの名前、後あの怪物の通称とかバツクにいる奴とかを教える」

「は？ え、な、ええ？？」

「まあ後でいい。とりあえずは、目の敵を倒してからだ」

そう言うのと、玲央はシルフを鎚から鈍へと形態を変える。

「な、なんだその刀！？」

「行くぞ……零閃編隊・十機！」

青年もとい仮面ライダーが驚いているのを無視し、玲央は斬撃を放つ。

放たれた斬撃は、容赦無く怪物を切り刻み、細切れにされる。

同時に、怪物の身体がメダルへと戻り、周囲に散らばる。

「あ、あんた一体何者だ？」

「俺か？ 俺は」

玲央はシルフを待機状態へと戻し、胸ポケットへと入れながら、答える。

「通りすがりの魔導士さ」

こうして、玲央と仮面ライダーオーズは出遭った

番外編：新たな仮面戦士との遭遇（後書き）

作者「勢いで書いてしまった。やってしまったとは思った」

玲央「何やってんだか」

作者「でも後悔はしてない！」

玲央「いや、なんとなく分かっていたけどさ」

作者「ちなみにオーズが出るのは今回だけです。もう2度と出ませ
ん」

玲央「……いや、もう突っ込まねえ」

作者「さて、あと2、3話で最終回かな？」

玲央「待て待て待てえ！！ 早えよ！ 何でそんなに早いんだよ！
！？」

作者「では、次の話もお楽しみに」

玲央「無視すんな！！ 絶対勝利の開闢星剣！！」
エリシュ・カリバー

作者「ふ、作者絶対守護領域！」

玲央「ちょ、それ卑怯！！」

作者「知るか！ 作者権限をフルに使っただけだ！！」

玲央「それ横暴だ!!!」

作者「それでは、さらばだ!」

玲央「おい、逃げるな!!」

番外編：VS騎士王& a m p・無銘の弓兵（前書き）

作者「やつちやった」

玲央「キシヨイ」

作者「酷え」

玲央「とりあえず 付けるな」

作者「まあそんなことはさて置き」

玲央「おい（怒」

作者「またやってしまったよ。勢いで書いてしまったよ」

玲央「だったら少しは反省しろ」

作者「だが後悔はしていない!!」

玲央「いや、前回同様分かってはいたさ」

作者「それでは、皆さんご覧ください」

玲央「無視か！」

番外編：VS騎士王& a m p・無銘の弓兵

これは、巫玲央がゼウスからの依頼で様々な世界を旅をしていた中の1つの話。

「貴様、何者だ？」

「どうしてここにいる」

「あゝ……」

現在、玲央は目前で不可視の剣を構える騎士王と夫婦剣を構える無銘の弓兵と対峙している。

何故こうなったか、簡潔に説明すると以下の通りになる。

次元転移を使用し、こちらの世界へ潜入。

何やら強大な魔力が感じられたので気付かれないように接近。

霊体化していた弓兵に気付かず、うっかり庭に入ってしまった。

そして現状。

まあそんな感じですよ。

「（しっかし、油断したな。まさかなのは世界の別の次元にF a t eの世界があるとは）」

「答えないのなら問答無用で倒させてもらいます!」

「私も手伝おう!」

と、今までの状況を整理していると、騎士王　セイバーと無銘の弓兵　アーチャーが突っ込んできた。

「はぁ・・・面倒だ」

そう言いながら、玲央はシルフを起動させ、両手に鎚と鉋の状態でセトアップさせる。

そして、槌で不可視の剣を、鉋で夫婦剣を受け止める。

「なっ!?!」

「むっ!?!」

「とりあえず言っておく」

玲央は両手に力を込め、相手の剣を薙ぐ。

「そっちが先に攻撃してきたってことは・・・殺られる覚悟があるんだな?」

「「っ!?!?!」」

玲央が言葉と一緒に殺気を放つ。

その殺気に当てられ、一瞬怯むセイバーとアーチャー。

その一瞬を、玲央は見逃さなかった。

その手に持つ刀を、瞬時にシルフを鎚と鉋から鈍へと変える。

「零閃編隊・三十機」

「何！？」

「くっ！？」

放たれた斬撃を見て、驚きを隠せない2人。

セイバーは不可視の剣で、アーチャーは夫婦剣で斬撃を防ぐが、斬撃の速度に追いつかず、数撃ほど受けてしまう。

「ぐあ！！」

「ごふ！！」

2人は受けた斬撃の衝撃で背後の塀へと激突する。

と、そこへ家の中から誰かが出てくる。

「さっきから騒がしいわね。一体何、してん、のよ………つてアーチャー！！」

「なっ！？ セイバー！！」

中から出てきた赤いあく……げふんげふん、遠坂凜と衛宮士郎が自身のサーヴァントの元へと駆け寄る。

「あんた、どこのサーヴァント？」

「あ？ 俺か？ 俺は」

「

玲央はシルフを待機状態へと戻し、胸ポケットへと入れながら、答える。

「通りすがりの魔導士さ」

こうして、巫玲央と衛宮士郎、遠坂凜、セイバー、アーチャーは出遭った。

「しかし、凄いな。あの食欲」
「ああ、それは俺も同感だ」

そう呟きながら、玲央と士郎は眼前で減っていく料理を眺める。

「タイガ、それは私が狙っていた卵焼きです！」
「セイバーちゃん、もう一杯食べたでしょ！ 少しはこっちにも頂

戴！！」

そんな料理の取り合いをするセイバーと藤姉こと、藤村大河。

「とりあえず、私たちは無視して食べてましょう」

「あ、えっと、そうですね」

そんな2人の取り合いの中を上手く掻い潜りながら料理を食べていく凜。

凜の言葉を聞いて、苦笑を浮かべる土郎の後輩、間桐桜。

玲央はそんな光景を、数日間見なければならなかったとか。

玲央が士郎の家に厄介になっている時、どこかでこんな会話がされていたとか、いないとか。

「ゴミが、何用「黙れカス」貴様！俺を英雄王と知って「言ってるが何か？」いい度胸だ。今すぐ消して「消えるのはお前だ、ゴミクズが」貴様あー！！」

「ほらほら、ちゃんと狙えよ。英・雄・王。あ、英雄王つてすればなんか古い方の遊戯王っぽくね？」

「貴様あー！！　ちょこまかと避けるなあー！！！」

「だって攻撃が大体予測できるんだもん」

「気色悪いわあー！！」

「そんなこと知らねえよ、と！」

「ゴミがあー！！」

「ほらよつと」

「ぐは！？　貴様！　俺の頭を殴る「ほらもういつちょ」ぐふう！　貴様「頭に血が昇り過ぎだって、俺が下げてやるよつと」ぐほあー！！　貴様あー！！！！　調子に乗るなあー！！！！！！」

その後、言峰教会の教会内で頭部に複数のたんこぶを作って気絶していた英雄王が、言峰綺礼に見つかったとか、見つからなかったとか。

そして、森の中ではこんな声が響き渡ったとか、渡らなかったとか。

「あゝれゝ、お助けゝ」

「もう、何なの、あいつ。バーサーカー、早くそいつ殺しちゃいなさい!」

「!!!!!!!!!!」

「やめて! 自分はソツチ系じゃないから!」

番外編：VS騎士王&無銘の弓兵（後書き）

玲央「ちょい待て。なんだこれ？」

作者「まあ、あれだ。Fateの世界に来れたってことでテンションがおかしくなって暴れまくってしまったってことで」

玲央「あゝ……もういいや。次回は？」

作者「次はとりあえず本編を書こうかと」

玲央「事件終わった後の事を書くんだよな？」

作者「ああ、そして最後の一波乱ってな」

玲央「……これ以上何がある？」

作者「とりあえず、皆さんのご期待に添えるかは分かりませんが、頑張っ書いていきますのでご期待下さい」

第48話：事件が終わり・・・

あれから数日が経った。

機動六課の隊舎も大体修復が完了している。

フォワード達もみんな事件での負傷も完治しており、今は六課でせっせと書類整理の仕事に追われている。

だが、なのは、ヴィータはゆりかご戦でのダメージがまだ抜けておらず、まだ病院で療養中だ。

そして、一番状態が悪い人物が・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ここは、病院内の集中治療室。

その前で、中を覗き込んでいるなのは。

その表情は、とても悲しそうだった。

その部屋の中のベッドに、色々な機器を取り付けられて、寝かされている青年が1人いた。

「……………玲央くん」

そう、今回の事件で、1番の功労者にして、一番の重傷人、巫玲央が事件の日からずっと意識を失ったままだった。

その後、ヘリで気を失った玲央は、心臓は動いていたものの呼吸をしておらず、すぐにこちらに運ばれた。

さらに、日を追うごとに玲央の体力は低下し、今は人工呼吸器や生命維持装置を付けていないと保ってられない状態だった。

なのははまだちゃんと治りきっていない体で、毎日毎日玲央の様子を見に来ている。

「玲央くん……早く、起きて……………早く……………声を聞かせてよ」

その瞳に、涙を溜めながら、誰に言うでもなく呟くのは。

彼女は願う。彼の笑顔を見せてくれと。

彼女は乞う。彼の声聞かせてくれと。

彼女は祈る。彼の覚醒を。

彼女は、彼女は、彼女は……………

しかし、彼女の願いは、祈りは、叶うことなく、儚く散った。

「・・・・・・・・・・さて、また見たことある様な場所だな」

玲央は目を覚まし、周囲を確認すると、そこは病院ではなく、見渡す限り真っ白な空間だった。

『いやはや、またここにお呼びして、すみません』

「・・・・・・・・ノイカ」

玲央が声のした方へと振り向くと、そこには自身をなのはの世界へと転生させた神の使い　ノイが何時の間にか立っていた。

「どうして俺はここにいるんだ？」

『・・・・・・そうですね、正直に、はっきり言った方がいいですね』

ノイは玲央にそう言いながら近付く。

そして、玲央の前まで来たノイは、真剣な顔で言い放った。

『・・・・・・あなたは、死にました』

「・・・・・・そうか」

『驚かないんですね』

ノイは意外だなと思っていた。

困惑すると思っていたものが、すぐに状況を理解したからだ。

「まあ、あの状態でここに来たってことは大体そうなんだろうなって思ったからな」

『さすがですね』

「まあな。死因の方も予想は付く」

『何ですか？』

「……俺の起源覚醒と、あの宝具 エリシュ・カリバー 絶対勝利の開闢星剣の真名解放。その2つだろ？」

『……………さすがとしか言いようがないですね』

玲央の言った通り、玲央の死因はその2つ。

玲央の起源は『守護』。

その起源に覚醒した玲央は、正気を保つのもかなり体力を使う。さらに起源での『守護』はある1つだけのものを守ると言う絶対命令がある。

それが、『自身の命』。

正気を失ってしまうと、自身を守るために周囲の人間や動物、はたまた植物をも死滅させてしまうほどだ。

そんな狂気を抑え込みながらのあの戦闘。

そのため、想像以上に精神をすり減らしていたらしい。

そして、玲央の宝具 エリシュ・カリバー 『絶対勝利の開闢星剣』。

現存するものはもちろん、神話や御伽噺なんかで語り継がれている中に存在する刀剣類全ての原典。

元々は無銘の剣だったのを、玲央が名を付け、自身の宝具へと変化させた。

能力はどんな刀剣類の能力や真名の解放が可能と言う何ともチートな剣。

だからあの時、エクスカリバー 約束された勝利の剣やエヌマ・エリシュ 天地乖離す開闢の星、さらには秘剣・つばめ返しが発動できたわけだ。

それらの使用だけなら何ともないが、今回はこの剣自身の真名解放までやってしまった。

起源覚醒の狂気の抑制が精神力を削ったなら、こちらは玲央の生命力を削り取っていった。

その為、玲央は生命活動が持続できず、死んでしまった。

「ははは、まあヤバいとは思ってたけど、死ぬとはな」

『まあ、こちらとしては丁度良かったんですが』

「は？ 丁度良い？」

と、ノイは苦笑しながら玲央に告げる。

『実は、玲央くんの元の世界での転生が可能になりました』

「・・・１つ聞いていいか？」

玲央はノイに真剣な表情で問う。

『何ですか？』

「・・・その世界に、ゆりは・・・ゆりの魂はいるのか？」

その問いを口にした玲央の表情からは、懇願の想いが覗えた。生まれ変わっても自分の傍にいてほしい。

無理だと分かっている、そう願ってしまう玲央。

だから、せめて同じ世界にだけはいてほしいと言う、ただただ、純粹な気持ち。

そんな彼の表情を見て、ノイは笑顔で、玲央に告げた。

『大丈夫ですよ、ちゃんといます』

それを聞いた玲央は、心底安心し、その場に倒れ込んだ。

「そっか、良かった」

『あ、それとシルフの事なんですが』

「どうかしたのか？」

玲央が聞くと、ノイがポケットから緑色のボールペンを取り出す。

それは、紛れもなく、玲央の相棒であるシルフだった。
パートナー

『この娘はあの世界ではかなりのイレギュラーなので私たちの元で扱き使わせていただきます』

「ああ、よろしく頼む。シルフは今どうなってるんだ？」

『こちらもちっと状態が悪かったので、AIをスリープモードにして回復に専念させてます』

「そっか、なら安心だ」

そう呟くと、玲央の身体が薄れていっていた。

「ああ、俺はまた生まれ変わるのか」

『そうです。まあ今回の場合は、ちゃんと前世の記憶は消えています
が』

ノイはどこか寂しそうな表情をしたかと思うと、玲央に背を向ける。玲央はノイのその行動を怪訝に思ったが、直後に聞こえてきた音を聞き、理解する。

『・・・・・・・・ぐすつ』

「なんだよ、泣いてんのか？」

『当たり前じゃないですか。私はあなたの事を覚えてはいますが、次会うときに君は記憶はなくて、私の事忘れてるんですから』

「・・・・・・・・そうだな」

玲央は、自分では気付いてないが、彼自身もその瞳に涙を溜めている。

「確かに俺は記憶を無くすし、もしかしたら会うことも無いかもしれない。だから」

玲央は涙を流しながら、表情を笑顔にしながら、ノイに言い放つ。

「その名前で、ずっと見守っていてくれ」

それを聞いたノイは、さらに涙を流す。

それに気付いたのか、気付いてないのかは分からないが、玲央は言葉が続ける。

「お前がその名前を名乗り続けていて、俺と会うことがあれば、も

しかしたら思い出すかも知れないだろ？ そんなことは絶対ないってお前は言つかもしれないけど、俺は信じたい」

『ぐすっ・・・玲央くん』

「ん？ どうした？」

『・・・私に、名前をくれて、ありがとう』

「おう、気にするな。と言つか元はお前の偽名だけだな」

『はは、そうでしたね』

そう話していると、何時の間にか2人は笑いあっていた。

しかし、その間にも玲央の身体はどんどん薄くなっていく。

「じゃあ、俺行くわ」

『はい、お元気で』

2人は笑顔で握手をする。

そして

『玲央くん、私はいつでも、君を見守っているから』

れた。

1人の青年の輪廻から外れた旅に、終焉が訪

ジェイル・スカリエツィ事件が解決してから約半年が過ぎ、六課

の試験運用期間の終了日。

六課全メンバーはある場所にきていた。

そこはとある墓地。

部隊長の手には、お墓参り用の花束が1つ。

そして、ある墓石の前で、全員が歩みを止める。

「久しぶりやね、玲央くん」

その墓石には『REO・KAN NAGI』と表記されていた。

その墓の上に、はやては六課メンバーを代表して花束を手向ける。

「そっちはどんな調子？ 元気かな？」

フェイトは努めて明るい表情で言うが、まだ玲央の事が吹っ切れていないようだ。

それは他のメンバーも同じらしく、皆どこか表情が暗い。

そんな中でも一番暗い表情の人物が1人。

「……………玲央くん」

高町なのは、その人だ。

「そんならみんな、巫玲央神託の盾騎士団主導者に黙祷オラクル！」

それと同時に、皆が玲央へと黙祷を捧げる。

その間、彼女はこの半年間の事を思い出していた。

彼女はこの半年間、ほとんど笑顔をみせることが無かった。

自分の最愛の人の死が、信じられず、最初の頃は毎日毎晩枕を涙で濡らしていた。

1ヶ月が過ぎた頃、さすがに見かねたフェイトとはやてがなのはと話し合い、仕事と訓練の間だけはちゃんとするようになった。

それでも、それ以外の時間は暗い表情で、すぐに泣きそうになっていた。

「ほんなら、戻ろうか」

と、なのはがこの半年の事を思い出していると、どうやら皆が玲央への黙祷が終わったらしく、皆が墓地から出ていこうとしていた。

それを見たなのはも、みんなについて行こうとするが、フェイトとはやてがそれを制止する。

「なのははもうちょっとここにいていいよ」

「あっちのほうはうち等が何とかしとくからな」

そう言うと、フェイトとはやてはすぐにその場を離れる。

それを見たなのはは、2人に感謝した。

今の状態で六課に戻ると、また泣き出してしまいそうだったからだ。

だから2人は、ここで泣いてすっきりしてから戻って来いと、そう

いう意味でここにいろと、そう言ったのだ。

それから、なのはは玲央の墓の前で号泣した。
久しぶりの感情の決壊。

今まで溜めに溜めた感情をここぞとばかり、なのはは吐きだした。

何十分経っただろう。もしかしたら何時間かも知れない。
それぐらい、なのはは泣いていた。

「……じゃあね、玲央くん」

なのはは自分のハンカチで涙を拭い、玲央の墓に背を向け、歩き出そうとする。

その時、その墓地に突風が吹き、なのはの持っていたハンカチが飛ばされる。

飛ばされたハンカチは玲央の墓の上に舞い落ち、なのははハンカチの前まで行き、屈んでハンカチを拾う。

すると、拾ったハンカチの下に、何かがあるのになのはは気がついた。

なのははそれを拾い上げる。

「……これって」

それは、何の変哲もない、真っ白い封筒だった。

第48話：事件が終わり・・・（後書き）

作者「さて、そろそろクライマックスです！」

ノイ『今回は私なんですネ』

作者「玲央くんは既にあの世に行きましたから」

ノイ『まあストーリー上はですが』

作者「なんか淡白だね」

ノイ『気のせいですよ』

作者「そうか？ まあいいけど」

ノイ『それで、次回は？』

作者「いよいよ最終回です！」

ノイ『皆さんがドン引きするラストをお願いしますよ！』

作者「誰がそんなラスト書くか！」

ノイ『それでは次回『ずっと守るよ』を御期待下さい』

作者「無視すんなよ！！」

最終話…ずっと守るよ

なのはは玲央の墓の上にあった封筒を拾い上げる。

白い封筒。口は開いており、中には便箋が1枚入っているだけ。

誰のだろう。なのははそう思うよりも先に、なんだか読まないといけない気になって来ていた。

ゆっくりと、封筒から便箋を取り出し、広げる。

そこには、こう書かれていた。

なのはへ

誰か分かる？　って書いても分かんないよな。巫玲央だよ。

これをなのはが読んでるってことは、俺はもう死んでしまったんだな。

でも安心してくれ。死んだと言っても元の世界・・・俺がなのは達の

世界に転生する前にいた世界、そっちの方で生まれ変わるらしいから。

だから、安心してくれ・・・つつても、無理かもなあ。もしかしたら俺の事思っただけ泣きまくってるかもしれないなあ。もしそうなら・・・

本当に悪いと思う。だけど、これだけは覚えていてくれ。

俺、巫玲央は、高町なのはが大好きだ。なのはの笑い声が大好きだ。なのはの笑顔が大好きだ。だから、俺は俺が死んだからって悲しむより

俺の事を思い出して、笑っていてほしい。

これが最後になるけど、なのはと出会えて、なのはと一緒に戦えて、なのはと・・・両想いになれて、本当に良かった。

なのは・・・貴女が今後将来、ずっと幸せであるよう、俺は願う。

元気でな、なのは。

巫玲央より

「・・・・・・・・玲央くん」

それは、玲央からの、最初で最後の手紙。

なのは手紙を読むと、また涙を流す。

しかし、その表情には悲しみは無く、とても嬉しそうな、そんな表情が覗えた。

「玲央くん・・・・・・・・ありがとう。そして

」

ずっと、大好きだよ！

ここは、とある草原。

そこに、2組の家族がピクニックに来ていた。

その家族には、それぞれ男の子と女の子の子供がいた。

「2人とも、遠くまで行っちゃダメだからね！」

「「はぁい！」」

男の子と女の子は、それぞれの親から少し離れた位置で遊んでいた。

すると、女の子が、不意にこんなことを言う。

「なんだか、くんって王子様みたい」

女の子は顔を赤らめながら、男の子を見つめる。

男の子もいきなりそんなことを言われ、照れてしまう。

男の子は、一度頷くと、女の子の方を向きなおる。

そよかせ
微風が吹く中、男の子が意を決するかのように言い放つ。

「僕が王子様なら、僕が・・・僕が、ずっと　ちゃんのこと

」

守ってあげるよ！

この男の子と女の子の物語がどうなるかは分からない。

だが、きっと信じていれば、彼らには幸せが待っている。

そう、信じていたい。

『魔法少女リリカルなのは〜風を纏う最強〜』 〓 完 〓

最終話：ずっと守るよ（後書き）

作者「と、言うわけで、『魔法少女リリカルなのは』風を纏う最強
」これにて終了です！！」

玲央「皆さん、本当にありがとうございました！！」

ノイ『いやはや、書き始めた時はどうなることかと思いましたが、
本当に完結できて良かったです』

作者「ホント、完結できて良かったよ！」

玲央「そっぴゃあ、最終的にPVとかユニークとかってどのくらい
になったのさ？」

ノイ『えっと……以下のようになってます』

PV：540 / 684 アクセス

ユニーク：58 / 768 人

作者「……ごめ、ちょっと予想以上だったわ」

玲央「最初はこんなに見てもらえるとは思ってもみなかったからな」

ノイ『あと、最終的なお気に入り登録数が286件と』

作者「本当に、皆さまには感謝してもしきれません！！」

玲央「実際、執筆当初はここまでお気に入りに登録してもらえとは思ってなかったからな」

ノイ『そう言えば、今回は特別ゲストがいるとかって話ですが』

玲央「特別ゲスト？」

??「俺の事か」

玲央「……えつと、誰？」

作者「次回作での主人公、柊春人くんです！」

春人「俺がここに来る必要性がないと思うんだが」

玲央「ってか、もう名前出すのかよ」

作者「まあどうせすぐ分かることだし、なんとなくね」

ノイ『大まかなストーリーは決めてるんですか？』

作者「いや、全く！」

春人「……殺すよ？」

作者「すみませんでした！」

玲央「てか普通に殺すって……あいつ、そんなキャラだったのか」

作者「ま、まあとりあえずだ！」

玲央「スルーか、まあいいけど」

作者「今まで頑張っただけなのは皆さまのお陰です！」

春人「感想少ないけどな」

玲央「ちょ、おま！」

ノイ「次回作も頑張りますので応援してやってください」

作者「そして、最後ぐらい感想くださいと言う気持ちも合ったり無かったり」

玲央「最後の最後で言いやがったよ」

ノイ「最近言わなくなったからもう諦めたのかと思っていたのですが」

作者「いいだろ！ 最後くらい言っても!!」

春人「………やっぱり殺しとくか？」

作者「ごめ！ マジ悪かったからその手に持ったサバイバルナイフを仕舞ってくれ！」

春人「……チツ」

作者「舌打ち！？ それぐらいで舌打ちする!?!」

春人「・・・さっさと読者に感謝しろや。さもなくば（チャキツ）」

作者「皆さま今までお読みくださって本当にありがとうございます！
皆さまには感謝してもしきれません！！」

春人「最初の方に同じようなことを言っただからやっぱり殺す」

作者「ちょ、マジごめん！！ 許して！ お願いだから許して！！」

玲央「何やってんだか、あの2人」

ノイ「私たちが締めちやいますか」

玲央「だな、それじゃあ！」

玲央・ノイ「今までご愛読ありがとうございました！ ダメ作者の次回作もそれなりにご期待下さい！ 駄文でも1度は目を通してもらえると助かります！」

作者「ちょ！？ お前ら助けるよ！！ しかもなんか失礼なこと言ってる、し！？」

春人「チツ、外したか。次は当ててやる」

作者「やめて！？ 俺でもナイフが刺さると死んじやうから！！」

玲央・ノイ「と、とりあえず、皆さん、ありがとうございました！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8770/>

魔法少女リリカルなのは～風を纏う最強～

2010年10月12日21時40分発行